THE CENTRAL REVIEW

中央公論

十一月號

第廿九年第十二號　第三百十一號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

永平寺貫長 森田悟由禪師題辭

總持寺貫長 石川素童禪師題辭

前北京大學堂教授 小鹿青雲先生譯並註

最新刊

和譯詳註 碧巖集

▼中村不折畫伯 口繪及裝幀

菊判總クロース極美本
紙數八百二十餘頁
全一册
正價貳圓五十錢
小包料、内地十二錢
臺、樺、朝、清四十錢

禪門第一の書

玄奥の妙致、絶倫の文章、古來禪門第一の書として江湖に喧傳せらるゝ碧巖集の和譯詳註にして、**卷末に附するに原文の全部**を以てす。著者亦斯道の碩學也。これ煩鎖なる講義に非ず、一知半解の和譯に非ず、通讀の間、玄旨釋然、恐らく手の舞ひ足の踐む所を知らざらん。敢て一讀をすゝむ。
眞理は直覺に在り頓悟に存す、默會すべき而已破顔微笑する耳、言語文字の末に在るに非ず、此種の圓頓は禪に於て其極致に達せり。本書碧巖集は即ち頓悟文學の妙諦にして求道の士の必讀を要するもの。

版元 東京神田區雉子町 **玄黃社** 電話本局二〇九番 振替東京七九九五 ◎全國書店賣捌

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

一 當會社の保險料は低廉にして且つ利益金の百分の五十以上を五箇年目毎に契約者に分配す

一 當會社の保險料拂込方法は保險證劵訂正の煩を要せず其變更契約者の隨意とす

一 當會社は拂濟保險の便法を設けあり

古河家經營

博愛生命

社長 男爵 中島久萬吉
專務取締役 小原元美
專務取締役 鈴木市之助
常任監查役 安達仁造

本店 東京市日本橋區本町四丁目十五、十六番地
電話長本局一八五六、五一五〇、二三八七番
振替貯金口座東京一七一七番
支店 大阪市東區本町一ノ一三(電長本局二三一一番)

一 當會社は低利なる金融機關の設あり

一 當會社は被保險者の年齡範圍最も廣く滿九年七箇月以上滿六十年六箇月迄契約す

一 當會社の保險金支拂は最も迅速なり是れ保險契約の目的を遂行せんが爲なり

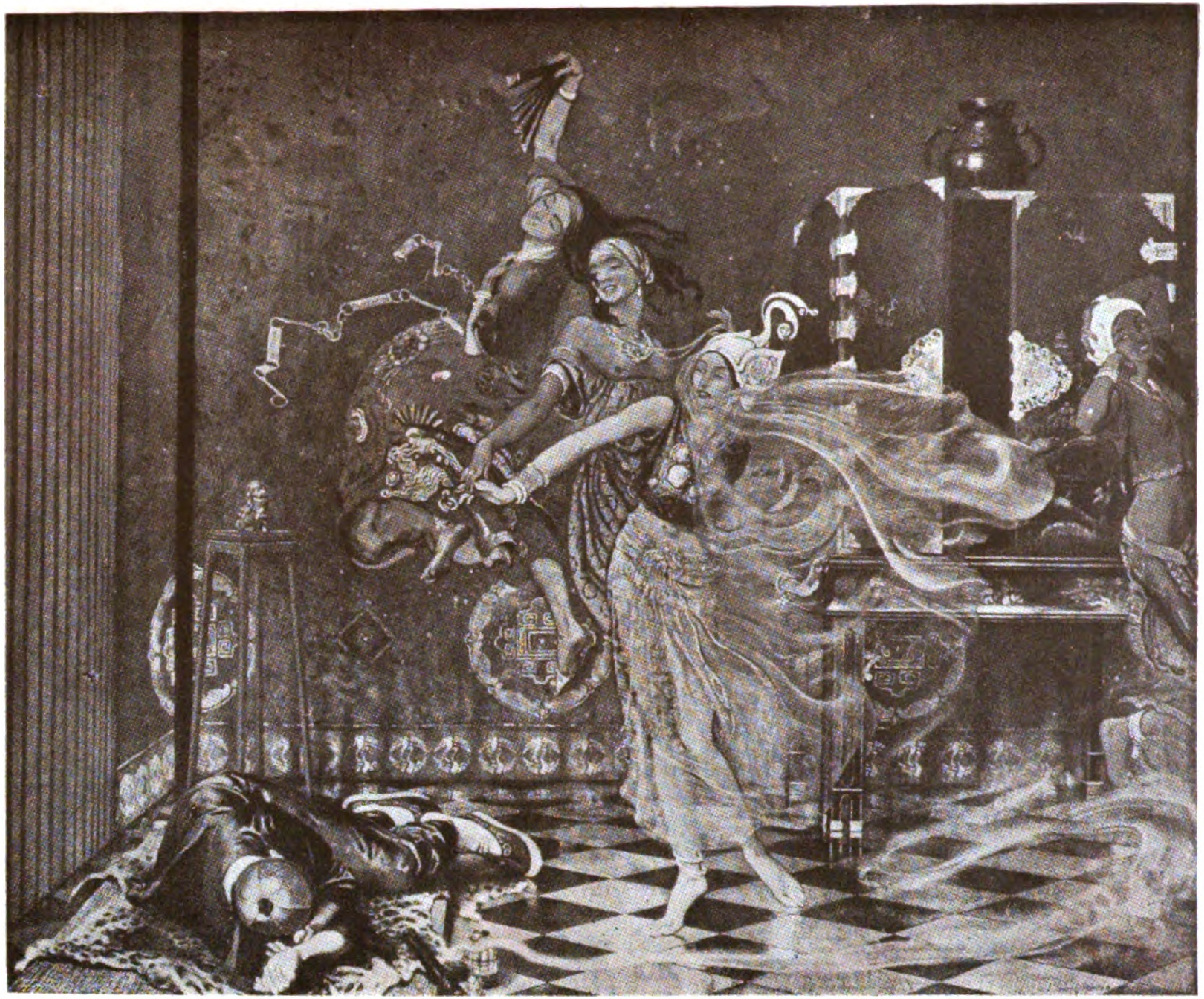
信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絕す



中央公論第廿九年十一月號目次



J. YOUNG HUNTER



The Dream

中央公論



十一月號
第二十九年第十二號
第三百十一號

戰局の發展と大義名分

(一)

歐洲大亂の勃發して以來已に三閱月に垂んとし、其戰局は東西兩方面を合算すれば一千哩に亘れる歐洲の戰線より、更に擴大して阿弗利加、極東、南太平洋の各方面に及び、兵を動かすこと總て一千萬人既に死傷者を出すこと恐らく百萬を下らざるべく、財を費やすこと亦た六十億圓の巨額に上れるならん、然れども今や僅かに戰機酣ならんとするに際す、一たび想を戰局の前途に致さんか何人も望洋の感なき能はざるべく、殆んど豫測に堪へざるものあらん、但し今後の戰局には尚ほ幾多の變化あるべきも終局の必ず英佛露の勝に歸すべきは戰局發展の形勢に顧み益々疑を狹むの餘地なし。

白耳義の勇敢なる抵抗は獨軍の作戰に一大違算を生したるも、巨砲の威力空しからずリエジュ遂に陷落しブルッセル亦た降り、八月三十日の戰勝の後ち獨軍大擧して佛境に殺到し、英佛軍は未だ一週間を出でざるに第一第二の防禦線をも撤退し、僅に巴里堅城の擁護の下に第三線に踏止まるを得たり、即ち聯合軍は大要塞ヴェルヅンとアルゴーヌ森林の天險より弓狀をなし巴里に達し、中間セーヌ河を背にしマルヌ河を距てて獨軍と對陣し、勝誇れる敵の右軍は我左翼の轉回運動を企て一擧にして我主力を破滅せんことを期せり、此時に於ける聯合軍の危きこと累卵も啻ならざりしが、此より先き東普魯西に侵入せし露軍は頻りに獨軍に勝ち、進んでケーニスベルヒの堅城を圍みインスベルヒを拔き東普一半將さに露軍の有に歸せんとせしかば、獨帝は八月二十七日を以て約二軍團の兵を北佛より東普に移せり、此れが爲め此方面の獨軍は漸く頹勢を挽回するを得たりしが、他の一方墺境方面に於て露軍は漸く其動員の成るを得て頻りに墺軍を追擊し、進んでガリシヤを殉へ九月三日レムベルヒの堅城を拔けり、更に一擧にしてガリシヤに於ける墺軍を全滅すべき勢なりしを以て獨帝は更に八軍團の兵を東送して墺軍を援けしめんとせり、然れども是れが爲めガリシヤ方面の獨墺軍をば機會に後れしが爲め多く利すること能はざりしのみならず、對佛戰に於て九仭の功已に成り最後の一簣を要するに際し五十萬の大兵を割減したるは實に絕大の失策ならずや、聯合軍側に於ては此形勢を偵察し竊に敵の虛に乘ぜんとする準備中なるに際し、敵の右翼は功名に焦り約一週間每日の追擊に疲勞せる兵を以て聯合軍の左翼を回轉せんとせしかば、巴里要塞の掩護の下に潛伏して新銳を養へる佛の一支軍は好機至れりと爲して敵の側面に突出し

之を猛襲したりしかば流石の獨軍も遂に算を亂して敗走せり、茲に於て我聯合軍は全線に亘り進擊を試み到る處敵は其陣地を棄て退却し始めたり、然れども敵はさるもの、ローズバッハの役に佛の五萬人がフリドッリヒ大王の旗下二千人に攻擊され貪奔獸走して巴里に遁れ歸りし如きの醜態あるべき樣なし、一尺を棄れば一寸を守り、動もすれば攻擊に出てゝ我軍を惱まし、退却に次ぐに退却を以てするも十月中旬の狀況を以てすれば未だ佛國境に退かず、聯合軍はヴェルヅンよりアルラスに到る殆んど一直線西北方に向へる陣地を占め敵を國境に壓迫しつゝあり、我軍の左翼は頻りに敵の右翼を包圍せんと試みるも、敵は盛に其右翼に增兵して容易に我が術中に陷らず、兩軍今や全線に亘り殆んど半要塞戰の觀を呈し、互に持久して頻りに露獨境に於ける戰局の變を待つものゝ如し、アンウェルプの陷落は最も同情すべく尊敬すべき白耳義に取り無上の苦痛なる耳ならず、聯合軍は其左翼の延長に對する一大掩護を失ひ英國は益々敵の飛航船に脅せるべきの危險を加へ、剩へアンヴェルプを攻擊せし敵の十五萬人は多くは或は其の對佛右翼に差向けらるゝならんか、然れども加奈多及印度の援軍已に現場に到着し、葡國亦た援軍を送らんとする形勢に在るを以て聯合軍の兵數亦た次第に增加すべし、即ち彼我兩軍各約二百萬を以て戰線約百八十哩の間に對峙するものにして、唯一の憂は獨軍巨砲の偉大なる威力に在り、即ち白の堅塞を粉碎せし十六吋（四十二珊）砲のヴェルヅン方面に使用さるゝにも至らば流石の堅固なる此要塞も敵は陷落せざるを得ざるべきか。

佛國方面の戰局斯の如きを以て大局の轉化は一にポーランドに於ける露對獨墺の決戰に待たざるべか

らず、此方面即ちトルンよりワルシヤウの前面を經てクラカウに達する一曲線に於て獨は墺の殘軍十軍團を合して約二十七乃至三十軍團を擁して攻擊的守勢を取り、露は之に對し約三十乃至四十軍團を以て亦た攻勢に出てんとするに似たり、クラカウの堅城果して露軍の爲めに拔かるゝにも至らば獨は自然に在佛軍の一大部分を東送するの必要あるべく、此時始めて聯合軍は久しく期待せる好機に接するを得べし、然れども獨亦た大軍を以てワルシヤウを攻擊せんとするものゝ如く、人をして一喜一憂應接に堪へざらしむ、露軍にして萬一にも一大決戰に敗るゝか如きこともあらば、日本援軍を乞ふの論遂に露佛に囂々たるに至らんか。

此際戰局の觀察上大に考量すべきは伊太利及諸小邦の向背如何の問題に在り、蓋し多くは英佛露に同情し、獨り土耳古のみ獨逸に味方するの意思あらんも大局の勝敗尙ほ一層明白なるに至るまては孰れも其中立の態度を棄てざるべく、アンヴルプの陷落は未だ以て獨の最終の勝を卜するに至らず、唯たポーランド方面の決戰如何に對し孰れの國も凝視怠らざるべし。

眼を轉して東洋方面を觀れば我征討軍は海陸軍協力して膠州灣を封鎖包圍し、更に英軍の協力を待ち最後の攻擊を加ふる近きにあるべし、獨逸籠城軍如何に防禦に努むるも素より囊中の小鼠に異ならず、開城か陷落か其擇ぶ所に任するも、命數の定まる所動かす可らず、我　皇上博愛仁慈總攻擊に先ち非戰鬪員の退出を促すの恩命あり、ワルデツク總督たるもの須らく感奮して無益の殺生を避くるの道を講すべきなり、而して我第一艦隊の一部がマルシヤル群嶋中の首嶋ヤルートを占領し、其他各方面に狂暴なる獨

艦隊を追撃し以て世界各國の爲め通商の自由安全を把持せんと努力するは必ずや大に列國の感謝に値するものあるを疑はず。

（二）

斯くて戰局の發展は歐洲に於ても極東に於ても大義名分の明かなる聯合軍の勝利に歸せんとし殆んと疑なからんとするは正義人道の尙ほ全く地球上に廢れざるを證明するものにして、亦た以て聊か人意を强ふするに足れり、抑も今次大亂の勃發するや世界人類の道德觀念は爲めに一大震衝を受けしは爭はれぬ事實なり、陸に六百餘萬の常備軍を養ひ海上に數百千の艨艟を浮べて戰備の競爭に餘念なかりし列國が一朝均勢を失して兵火相見ゆるあらんことは素より怪むべきに非ざれども、歐洲列國は一方軍備の競爭を爲すと同時に他の一面平和運動の競爭を爲すの趣きあり、所謂平和主義者の運動近年頗る勢力を加へ來れる耳ならず、軍備制限の議已に責任ある政治家の考慮に上り國際的仲裁條約亦た各方面に歡迎せらるゝあり、更に列强は文明の先達、人道の支持者を以て任し常に他の小邦弱國に指導訓諭をなすを事とせり、故に些々たる塞爾比の問題より列國が遂に其憤怒怨恨を制する能はず相競うて動員令を發し宣戰を布告し約一千萬人の所謂文明國民は殆んと猛獸の咆哮して相反噬するが如くなるを觀るに於て世界の人類たるもの豈に愕然として正義人道の地に墜ちしを歎息せさるを得んや、即ち人類の道德觀感情は今次の開戰の爲めに一大痛衝を受けざるを得ざりしなり、然るに各方面戰局の發展に對し靜かに其經過の跡を察するに大義名分の正を持する露佛英は着々戰に勝ち、大義名分の正からざる獨墺は戰頗る利あ

らず其最後の敗亡者たらんこと疑を容れざるもの蓋し必ずしも偶然ならず、此間一條の天理自ら貫通し人事を制裁するあるが故に非ずや、此條理を無視し唯だ自己の鐵血の强大に依賴し他を憚らざるものを暴横と云ふ、暴横者は天人共に容れず終に覆滅の運命を免ること能はず、個人に於て然り、國家に於て然り、今次の歐州大戰爭は此敎訓を最も明かに吾人の面前に掲示するに非ずや。

墺匈政府が伯林政府と協議の上塞爾比の獨立を撲滅すべき壓迫を加ふるや、露西亞は同種同宗の塞國を見殺すに忍ひずして回答の延期を求めしも聽かれず止むを得ずして動員令を下せしが、ウイエナ及び伯林に於ては直に之を以て開戰の威嚇と見做して反對に宣戰の布告を爲せり、是より先き英佛伊は誠意調停に盡す處あり露國亦た三國の進言を諒とせしも遂に獨の聽く所とならずして全般の開戰を見るに至れるものにして、露國は塞國の獨立を支持するを以て開戰の理由とし英國は白耳義の中立を支持し、國際條約の神聖と總ての小邦の獨立を擁護するを理由とし、佛國は攻守同盟の理に依りて干戈を執りて立てり、即ち協商三國に在りて大義名分最も正だしく、獨墺は如何に强辨するも塞國を撲滅し以て巴爾幹開拓に對する唯一の障礙を一擧に芟除せんと欲圖し、宣戰を突發し機先を制して以て列强を威壓せんと試みしは蔽ふ可らず、獨墺が小邦の獨立又は中立を侵害したるは實際には塞爾比と白耳義に止まれるも、一たび此二國に對する横暴を默許するに於て瑞西、丁抹、諾威、瑞典其他の諸小邦何の日にか復た同運命に係からざるを保つ可らず、重大なる國際條約の侵害一たび不問に附せられん乎、地球また國際公法なきなり、國際公法なき地球は正義人道なきなり、是れ則ち絶大の犧牲を覺悟して英、露、佛の

開戰したる所以にして、三國政府が其開戰の目的たるカイゼルの橫暴を膺懲し再び列國の危害たるを得ざらしむるまでは萬難を排して戰爭を繼續すべしと協定せるもの誠に止むことを得ざるなり、而して三國の人民が孰れも擧國一致の態度に出て、殊に白耳義の如き殆んど國家滅亡せるに關はらず上下君臣一致し尙ほ屈せず戰鬪に從事するもの、一に大義名分正くして絕大の犧牲を拂ふの價値あるが爲めに非ずや、之に反し墺匈國に於ては戰敗頻りに至り、人心益動搖して國家解體の兆あり、獨逸亦た社會黨の反噬、聯邦の離反漸く其萠芽を示さんとするもの、大義名分の人心を支持すべきものなきが故に非ずや。

《三》

往昔は孔子、子路に告げて曰く必ずや名を正さん乎、名正しからざれば言順ならず言順ならざれば事成らずと、孟子曰く孔子春秋を成りて亂臣賊子懼ると、古聖の敎實に人を欺かざるなり、但だ大義名分は形式に拘泥す可らず必ずや實質と相伴ふべきを要す、然らざれば遂に世界に勝利を占むること能はざるなり、周の武王、殷の紂を伐たんとするや、大に兵を孟津に觀し文王の木主を爲りて之を車に載せ武王自ら太子發と稱す、曰く先祖の有德を以て臣小子先づ功を受け遂に師を興すと、是時諸侯期せずして會するもの八百有餘、諸侯皆曰く紂伐つべしと、然れども周王は曰く汝等未だ天命を知らず不可なりと乃ち師を還へせり、蓋し此時八百諸侯會するも尙ほ紂に從ふものあり天意の未だ定まらざるを見て討伐を中止せしなるべし、越へて二年紂の昏亂暴虐益々甚だしく王子比干を殺し箕子を囚へ、太師疵、少師彊其樂器を抱きて周に奔るに至りて、武王曰く紂に重罪あり以て伐たざる可らずと、是に於て諸侯の兵大

擧して商の牧野に會す、武王先づ師尙父(太公望)をして百夫と共に紂に開戰を告知せしめ、大軍を率ゐて帝紂の師に向へば紂師衆しと雖も皆な鬪志なく武器を倒まして武王の入るを待つ、是即ち天意始めて定まり大義名分の正を得たるものなり、孔子の言を借りて云へば名正だしく言順にして事成るものに非ずや、伯夷叔齊が武王を途に擁し馬を叩き苦諫し、父死して葬らず爰に干戈に及ぶ孝と謂ふ可けんや、臣を以て君を弑す仁と謂ふ可けんやと云ひしもの誠に正言ならずとせざるも是れ實質を缺ける形式の論のみ、其心事を諒とし其淸節を仰ぐも其行爲は未だ中正を得たりと謂ふべからず、眞の大義名分は武王の行爲に於て之を見るべし。

フリトリツヒ大王の七年戰爭に於ける之を形式上に論すれば大義名分を判定すること甚だ容易ならず、之より先き大王はシレシヤを横暴にも墺國より奪取したるが爲め各國より危險人物と認められ、爲めに墺露の兩女帝及佛王路易十五世の間に普國分割の密約の成立したるを知り、大王は開戰の告知もなく突如として兵を中立國のサクソニーに出だして之を征服し進んで墺領に入りしものにして、形式の論より見れば殆んど烏の雌雄を知るに苦む、然れども列國關係の實質より觀察すれば大義名分の普國側に在りしこと知るに難からず、是時に當り普魯西は大撰擧侯の遺風に浴し政府も人民も各國中にて最も眞面目にして最も强健なりき、之に反し他の列國を觀れば露は宮庭腐敗し人民愚昧なり、墺國は人民守舊因循迷信に耽溺し、只た女帝マリヤテレザの氣高き人格を珍とすべきのみ、而して佛國に至りては淫靡輕佻皮相の文明に誇るも、政道紊亂し綱紀地を拂へり、即ち普國を以て此等諸邦に比較すれば歐州文明

の發展上自ら重大の任務を負へること多辯を待たずして明なり、斯の如く天命維れ新たなる普魯西を分割し之を亡さんせしは列國の甚だしき心得違ひと云ふべく、フリードリッヒ大王が能く寡兵を以て大兵を挫き屢々大勝を博し、七年の久しき君臣ともに絶大の困扼に遭ふて屈せず遂に名譽の終局を見るを得たもの、普王の天才に負ふ所大なりと雖も亦た大義名分の正を把持したるの賜たらずんばあらず、當時の普國と今日の獨逸は表面上頗る境遇を同ふするが如きも、形勢全く相異するものは彼は大義名分に立ち是は大義名分に離れたるの一點にあり、フリードリッヒ大王は始めより勝つべき運命を有せしも、今のカイゼル始めより負くるべき運命の下に在り、天定りて人に勝つとは蓋し之の謂なるか。

大帝那破翁の如き其の前半期の活動に於ては大義名分の正を持せり、即ち一八九六年那翁廿八歳の一青年將校の身を以て伊太利征討軍の總司令長官の任に當り佛蘭西共和國の爲め光華燦爛たる常勝的戰役を開展せしに始まり、大佛蘭西皇帝として普魯西を征服し、露墺を敗り、露帝アレキサンドル一世とチルシットの盟約を締結するまて、實に十一年間、此れ那翁が大體に大義名分に則とり行動せし時代なりと謂ふべし、吾人が所謂大義名分とは佛國が大革の命主張たる自由平等友愛の精神を頑迷固陋なる各隣邦に注入すべき使命を果さんとするを指すものにして、列强が那翁活動の影響を受けて如何に改進向上の途に就きしかを思へば那翁の出てし亦た偶然ならざりしを知ること難からず、然れどもチルシット盟約以後ウォトルルー大敗に至るまでの八年間には那翁は着々大義名分に背きて行動せり、即ち英國を經濟的に打破せんとして歐洲諸國と英との交通貿易を嚴禁せしが如き、西班牙、葡萄牙兩國の主權を强奪

せしが如き、露國征伐の師を起せしか如き、エルバ島より脱出して再び歐洲を大騷亂の巷に化せしめしが如き、一として大義名分の之を擁護するものなく、孰れも那翁が自個尊信の餘り飽くなきの野心に驅られ、全歐洲を擧げて犧牲に供せしもの、其遂に内外の人心に離反され、歐洲より逐放せらるゝに至れる眞に自業自得と評する外あらず、之に反し列國聯合軍の東西より佛國を襲ひ、那翁の退位を强ゐ、遂に之を聖ヘレナ島に流竄せし、殊に西班牙、普魯西等の國民的勃興の那翁の大業を破るに與りて大に力ありしが如き、眞に後世の稱歎を買ふに値ひす、

七十年の役佛國が普魯西の率ゆる獨逸軍の爲め大敗を招きしは亦た最も明かに其偶然ならざるを見るべし、此より先き佛國主權のナポレオン三世の有に歸すること既に二十二年、此間彼れは巧みに佛國人心を操つり、或は大博覽會を開催して世界平和の曙光を晴めかし、或はクリミヤ及び北伊太利の戰役を勃發し佛人の虛榮心を喜ばせ、國民耳目の轉換に巧妙を極めたるも内政の腐敗言語に絶し、一切の政道毫も信義の人心を繫ぐべきものあらず、外交上着々比公に致されたるの結果、國内人心を轉換するの必要上普國との開戰を敢てせしも帳簿報告の紙面上にのみ整頓せる陸軍は素より實戰に堪ゆべくもあらず、況んや普國は一般に興國の氣象に富める耳ならず、君主に維廉一世あり首相に比公、陸相にローン、參謀總長にモルトケありしをや、明君賢相時を得て相際會する古今斯の如きは稀なり、滿潮の勢を以て佛境に殺倒せし獨逸軍は未だ一箇月を出でざるに佛の各軍を封鎖し或は破滅し、セダンの戰にナポレオン帝を俘虜とし、進んで巴里を圍み四ヶ月の後には路易十四世の榮華の紀念たるウエルサーイ宮の大廣間な

る『鏡の間』に於て獨逸帝國創立の壯大なる式を擧げたり、此間の事蹟たるや眞に古今の偉觀、獨逸民族は永久以て誇となすに足れり、是れ一に天運人事能く相包合し大義名分の正を得たるが故に外ならず、而して現今の佛獨を見れば正さに七十年當時と位置を顚倒せるものと謂ふべく、佛は前年の獨逸ほどの强さを示さず、獨は當年の佛國の如き腐敗紊亂なしと雖も、勢の傾く處頗る相髣髴たるものあるは運命の數奇亦た人を弄する甚たしと謂つべし。

（四）

近くは日清戰爭、北清事變、日露の役を回顧すれば我邦の態度主張毎に大義名分の正さに居れるは吾人が回顧し竊に滿足を禁じ能はざる所なり、殊に日露戰役に關し一言せんに、此時露國政府は所謂極東經營に熱中し、淸朝の末路到底外來の强壓に抵抗すること能はざるを看破し、島國たる日本は假令大に勃興せりと雖も數に於て大露國に敵す可らずと侮どり、宣言を無視し條約を反古として以て南滿州の占領を企劃し、進んで北朝鮮を威壓せり、我邦は露國の食言を指示し其南滿撤退を求むるも容られず、多大の讓步を覺悟して北朝鮮に於て勢力圏の分割を定めんとして協商を試みたるも露國の態度は毫も交讓の誠意あるを示さず、數月に亘れる交涉の末勢の馳する處遂に止むことを得ずして我より最後通牒を發するに至れるものにして、當時小村外相が帝國議會に於て發表せし報告に因て交涉の顚末を察すれば我の公明正大の態度に對しては何人も一點の非議ある可らず、而して當時露國の極東經營は賢明なる官僚の計劃に出づるに非ず、寧ろ一種宮中派と稱する權勢家の司どる所に屬し、此等の有司はアレキシーフ總

晉を首とし、又彼等は某太公の左右と種々の利益關係ありとさへ世評に上りし程にて、全般の計畫及方針は健全なる政府有司の本意に出でしにあらず又た一般國民の希望に非ざりしや察するに難からず、恐らくは所謂極東經營の實際上の眞相は皇帝にも知られず、況んや言論の極端に壓迫されし專制政治の下にある人民が極東經營に對する國論を發揮し得べき筈のことなきをや、即ち前年の極東政策は露國君民の眞に與知せし處にあらずして、寧ろ政界の一部に占據し高貴の方面の一部と提契し私腹を肥さんとせし一種山師輩の計略に外ならずと云ふを至當とせん、然れば斯の如き特殊の事情の下に日露開戰を見るに至れるが故に我邦は始より露國民を敵とせず、寧ろ多大の同情を有せり、同時に露國側に於ても爾來國會の開設を見るに至り、聰明なるニコラス二世の寛宏穩正なる統治の下全然戰敗の瘡痍を癒やすを得たる耳ならず、上下協和し今次の大局に處するを得たる所以のもの實に極東戰敗の影響に負ふ處少しとせず、最近我邦の對獨宣戰と共に乍ち多年の猜疑を一掃し日露の間一天晴朗また一片の妖雲を止めず同盟も啻ならざる親善を見るに至れるもの豈偶然なりとせんや、即ち日露開戰に於ける我邦の公明正大なる態度を回顧する毎に吾人は帝國の名譽の爲め頗る快心の感なきを得ざるなり、但し茲に一言辨じ置んと欲するは平和克復後帝國の滿州政策なりとす。

抑も帝國政府が露國の滿州を占領に對して抗議をなすや、我主張の骨子は朝鮮の保全に在り、即ち露國の滿州占領は彼れが撤兵の約束に反する耳ならず、實に朝鮮の獨立保全を威嚇するものにして、是れ帝國の忍ぶ能はざる所なりと云ふに在り、然るにポルトモス媾和の結果として帝國は遼東の租借滿州鐵道の

權利を全然露國より繼承し、條約以外の兵力占領の一事のみは露國に倣はずと雖も、其他は總て露國に取つて代はりしの觀ありて、形式上我が平生の主張と多少の矛盾あるが如くに見ゆ、是れ世間一部の論者間に夙に猜疑非難を喚起するを免れ能はざりし所以なり、彼等曰く日本は平素支那保全を標榜しながら金州半島の租借を露より繼承し却て支那分割の端を開けりと、此の議論は多く支那論客間に行はれたり米國一派の實業家間には滿州鐵道を中立として外資を注入して大に滿洲の開發を計り、事實上極東の天地に一の中立地帶を拓かんとの夢想を抱くものあり、米國政府の一旦提議せし南滿鐵道中立案の如き即ち一派策士の計畫の一端を示したるもののみ、吾人を以て之を觀れば滿州中立案の如きは決して滿州を列國競爭域外に安置する所以に非ず、斯の如くすれば滿洲は却て列國經濟上の大競爭地と化すべく、遂に支那に於ける平和破壞の一禍源たるに至るべきは想像に餘あり。

茲に帝國の對滿政策を明にせんとするに當り吾人は日清戰爭の際に遡りて大觀するを要す、馬關條約に就て見れば清國鴨綠江の安平河口より鳳凰城、海城を經て營口に達する一線以南即ち遼東半島全部を帝國に割讓すべく締約したるものにして、我伊藤陸奥兩全權が此要求を最後まで固執して動かざりしは蓋し戰勝の結果當然の要求を爲すと云ふの外、極東の平和を維持する爲めに之を必要止むことを得すと思惟せしに由れり、即ち當時の清國は戰敗の爲め傳統的に之を强大視せし列國の信用を墜落し是より益々外來の蠶食的侵入甚しからんとするに對し之を自ら防禦して領土を保全するの實力なき耳ならず、清廷自らの態度に詐瞞狡獪を極め條約の神聖を解せず信義の重んずべきを知らず、到底斯の如き政府には

極東平和の保持を託すべからざるなり、此れ帝國が進んで根據を大陸に求めて年々歳々危機に近づかんとす極東の警備に任ぜんとする覺悟を定めたる所以なり、豈に徒らに領土擴張を希望せんや帝國の地歩を保ち極東の平和を把持せんとするに於て勢誠に然らざるを得ざりしなり、當時遼東の割讓は一旦之を還附すべく餘儀せられしも、當初一念は十年渝はらず、遂に今日の狀態を生ずるに至りしなり、蓋し今や清朝廢れて民國代つて成り袁氏政を總統して着々革正を行はんとするが如きも、數千載の積弊は一朝にして芟除すべからず、且第三革命を劃策する有志は所在に潜伏して民國の基礎尙ほ頗る薄弱なるものあり、試みに問はん若しも今日帝國が滿州より撤退し好意的に全然之を支那民國統治の下に置かんか、北京政府は果して能く南滿一帶の秩序を保つを得べきか、殊に他より之に侵入せんとする勢力に對して能く之を防遏し得べきや否、我日本帝國は自國及び極東の必要上自ら起ちて警備の任に當らんとするものにして、之を以て國家としての天職なりと認むるものなり、此れ即ち我國が滿鐵中立の提議に耳を傾けず、斷乎として露國より讓與せる權利に依り滿州に割據せんと欲する所以なり、滿州は支那の本土に非ず、我邦の南滿一方に割據するは毫も支那保全の本義に違はず、寧ろ帝國の監視するが爲め始めて保全の實を擧ぐることを得んとするに非ずや。

吾人が前段に帝國の對滿政策を論ずるは玆に青島の處分に關し最後の一言を爲さんが爲めの準備に外ならず、今や我征討軍は海陸兩面より青島を包圍し其陷落殆んど旦夕に迫り山東鐵道は既に我軍の占領に歸せり、其最後の處分に關して最も愼重の考慮を要するは論を待たざるが、吾人は此間に於て帝國が

大義名分を把持し毫も遺憾なからんことを呉々も冀はずんばあらず、別語之を云はば帝國平生の主張は支那保全に在り獨逸は支那の腹心たる山東に割據して分割の端緒を開けり、一方之を逐ふて直に自ら取つて代らんとするが如きは彼を尤めて却て其尤めに倣ふもの、大義名分に於て容すべからず、我が宣戰の　大詔に明なる如く青島租借地を支那政府に引渡し山東鐵道亦之を支那國有に歸し、山東省内より獨逸の政治的割據の痕を一掃すべし、卽ち今次の開戰に對する大義名分を明にせんと欲せば今云へる主張を貫徹するより外途あるべからず、若しも大義名分を解せざる聵々者流の言に聽き、青島還附は獨逸が無事に之を我に引渡したる場合に限る已に兵力を以て之を奪へる後に於ては事態自ら變ずと云ふが如きは實に奇怪至極に非ずや、斯の如き三百代言的の議論は國家の恥辱なり、吾人は同胞中一人にても之を口外するものあるを恥ぢとするものなり、但し山東省に於ける獨逸の租借及び利權を支那に還附せんとするに際し、我邦は之に必要する一二の條件を附加するはまた必要止むべからざる事たり、卽ち青島の支那開市場として將來の繁榮を保障すべき組織を立つべく、此に關しては支那政府は日英政府の提議を採用すべきこと、次に山東鐵道に關しては之を支那國有に編入すべきと同時に帝國は英國が津浦線南段に於けるが如く出資者と爲り其經營に參加すること、更に帝國政府は支那が將來山東省若しくは其他支那本土を保全し得ず再び獨逸もしくは其他の國の割據に放任するが如き場合には自衛上必要の行動をことあるべきを聲明すべきなり、思ふに我當局者に於て必ず此方針に違ふこと無かるべきも、萬一の誤措なからんが爲め玆に入念の注意を加へ置くものなり、若夫れ山東省以外海洋の方面に付ては我海軍の行動に依

り占領したる嶋嶼に對しては之を永久に我有にするも可なり又戰後他の處分法に附するも可なり、要は帝國が大局の利害に顧みて其處分法を定むべく、孰れに決しても毫も大義名分に關する所あらず、但だ開戰前後より今日に至る我政府の某々國に對する交渉に關しては頗る理解に苦しむものあり、何故に我邦は毫も事件に關係なき某中立國より事毎に制肘せらるべき關係に陷りしや、是れ交渉の開始と共に第一着に膝を屈したるの結果に非ざるなき乎、蓋し交渉顚末の詳細未だ發表せられざるに當り深く立入り之を痛論するは稍々早計に似たるを以て、吾人は之を他日の機會に保留すべく、兎に角既往は逐ふ可らず、吾人は我邦今後の態度方針に於て大義名分を把持して誤らず、文明國と稱しながら國際條約を無視し正義人道を蹂躙して憚らざる某國學者政治家輩をして覩て以て慚死するに至らしめんことを希望するものなり。

增師問題延期すべし

大正元年の秋に突發したる二師團增設問題は我政界の最も厄介なる問題なり、當時西園寺内閣は之に阻はれて斃れ、桂公宮中より出て政局に立ち乍らにして非立憲攻擊の爲めに斃れしも亦た間接に增師の祟りに由れりと謂ふべき理由なきに非ず、爾來山本内閣を經て現内閣に及べるも孰れも此問題の爲めには非常の苦惱を覺へたり、大隈内閣は夙に防務會議を設けて增師問題の解決に資せんと計れるが、果し

て幾許の効果ありしか、內閣が直接に陸軍と交渉して屈服するの醜態を免れんが爲め、中間に一種の緩衝器を置きて之に多少の責任を分擔せしめしに過ぎずと云ふものさへあり、若し果して然りとすれば防務會議は遂に國民の希望する如き根本の解決を此厄介なる問題に與へず、內閣は防務會議の取次に由り陸軍の主張を容るゝに終らざる乎、

吾人は非增師論者に非ず、大陸方面の形勢を觀察して增師を必要とする理由あるに於ては是非とも之が決行を主張せざるを得ず、然れども現在の形勢は果して增師の必要ありや、今後の大陸方面に我大兵を動かす場合ありとして唯一の假想敵國は今や我無二の友邦たらんとするに際し何の必要ありて劇かに二師團を增設せんや、少なくとも戰後歐洲の形勢一定するを待つて徐ろに增師問題を議するも亦た遲しとせざるなり、陸軍當局は兵器賣却收入の增加として一千萬圓を算し委任經理に由れる被服費に於て三百八十萬圓剩餘あるを云ふ、吾人は之等の金額を增師費用の一部に充てんよりは寧ろ之を飛行機飛航船の發達又は軍器改良の爲めに投ずるの遙に優れるを思はずんばあらず、

二師團增設を論ずるに當り、吾人が毎に聞くを厭ふは海陸權衡論なり、曰く一方製艦費を決議しながら增師を納れざる不公平なりと、其意宛も一人の小兒に一個の饅頭を與へて他の小兒に之を與へざるは不公平なりと云ふに同じ、陸軍海軍は豈に頑是なき二人の小兒ならんや、蓋し此の海陸權衡論は我邦の特有にして薩長各々海陸軍に割據し互に權力を競爭せし時代の惡むべき遺習なり、陸軍の擴張果して必要ならば之を擴張すべし、新たる製艦の必要あらば國家は其費を惜むべからず、要は實際の必要に論據を

定むべき耳、閥族打破を標榜する政治家論家中にも亦た往々海陸權衡を說くものあるが如きは吾人の頗る奇怪とする處ならずとせず、

之を要するに吾人は增師の反對者に非ずと雖も毫も今の戰時に於て之を着手すべき必要を認めず、寧ろ尙ほ暫く延期し徐に戰後列國の形勢を察し戰爭中の實驗に鑑み、而して後滿足の解決を見るに至らんことを希望す。

山東經略私議

野間五造

(一) 日本と山東省の關係

想ひ起す、時は明治二十八年二月十八日と云ふの日、山東省威海衞竹島村兵營に滯留せる吾々從軍記者に向つて、我征淸第二軍司令部より、實に左の如き案内狀を送られたる事を記憶す、

前略、北洋艦隊全滅、威海衞陷落、我出征第二軍が山東省を領有したる紀念の爲め、來二月十九日東門内關帝廟に於て一大祝賀會開會可仕候間同日午後二時より御來臨有之度御案内に及候

當日は大山第二軍司令官伊東聯合艦隊司令官及佐久間黑木兩師團長を始め陸海軍將校五百餘名一堂に相ひ會し山東省が今回首尾良く我領土と成りたりとの意味に於て一大祝宴を開設した事があつた。

更らに其翌日我々同人數輩は威海衞郊外東洋村背面高地に鎭座する、倭神廟に詣で其祀前に於て、山東省占領に就ての祝盃を擧げ遙かに東海を臨んで萬歲を連呼した事を記憶して居る、此倭神廟なる者は其昔、倭冠と呼ばれたる慓悍なる吾人祖先が八幡船を押し切りて此附近に荒れ廻りたるが爲め、土人は恐怖の餘り此倭神廟なる社祠を各所に建立し常住祈願を籠めた者だと言ひ傳へられてある故に此倭神廟なる者は我勇敢なりし祖先が嘗て山東角の一部を占有して居つたと謂ふ

好紀念物なりとの意味を以て、さてこそ吾々同人此地點を撰んで祝盃を擧げた次第であつた。

斯の如く、日清戰爭當時山東上陸軍が、摩天嶺楊峯嶺等威海衛の背面防禦を陥落せしめた時に於ては、吾々從軍者は山東省が日本の領土と成つたと信じて疑はなかつたのである、恐らく此信念を有して居つた者は吾々丈けでは無く我國民全體が然か信じて居つた者であらうと想はれる、勿論其當時の山東省内の武備と云ふ者は威海衛の防備丈けであつて威海衛さへ落してしまへば、他は無人の境を行く様な者であつたのである、芝罘でも登洲でも乃至濟南省城でも鐵砲一挺無い位の始末で、我山東上陸軍二個師團の主力が威海衛陥落後直ちに内地に向て前進して居たら、旬日ならずして山東省一帶が平定されて居た事は明かである、然し殘念ながら其當時の兵數が今日の如き數量で無つたので、山東方面と山海關方面の兩花道から北京天津の本舞臺を挾撃すると云ふ事が出來無く、止を得ず山東軍を山海關に向ける事に成り、一時第二軍を旅順に引き上げて、他日北京占領後再應山東の措置に取り懸る事に成つて居つたのである。

然るに何故か、平和條約締結の當時に於て、我が政府より申出したる割讓條件の内に山東省が除いて在つた、玆に於て我東京の輿論は中々矢釜敷成り、荒涼茫々たる遼東の平野を取るよりも、却て三千年來賑ふて居る山東省の割讓を要求すべしと云ふ議論が興つて來たが、而し夫れも言ふ丈けで致方無く、馬關方面では山東省問題を顧みずして條約の締結は濟んだ、然し其後、其折角握つた遼東地方も遂に三國干涉の爲めに奪ひ去られ、吾々同胞は千古の怨みを懷て、哭き寢入るの止む無き始末に成り果てゝ居たのである、

其後の日露戰爭當時に於ての山東省は如何であつたかと言ふに、之れ亦た實に言語道斷な始末であつて、山東は始終露西亞軍の策源地の觀を爲して居たのである、一方支那政府他方獨逸政府が露國に好意を表して居つたので、山東省は全く敵方にのみ利用せられ我軍の爲めに常に不利益の働きを成したのであつた、是れ

を實地に味ふた我軍事當局者は、早晩必ず山東省問題を解決せなければならぬ、山東沿岸に我政治上の勢力が普及せぬ以上は其對岸なる關東州は完全に領有する事が出來ぬと云ふ事を深く觀念した樣子であつた、今日餘り世に知られて居らぬ二三の事實に就て話して見よふ。

其當時在芝罘の獨逸領事館は館内の無線電信機を以て旅順(包圍中)と上海との音信の媒介を爲し舊街の獨逸領事館と新街の露國領事館とは殆ど二身同體の觀を爲して居つた。又た獨逸旗を翻せる船を以て物資を四方より膠州灣及び芝罘に集め、支那政府の周旋を以て幾多の支那「ジャンク」に積み代へ、小淸河、登州、芝罘等より夜陰に乘じ之を露軍の居つた安東縣、營口、鳩灣等へ輸出して居つたのである、其當時屢々我海軍巡邏船に逮捕されたのは之等の支那船の事である、然るに其後旅順陷落後に於て我商船が物資を芝罘から大連に運ばんとするや、支那政府は中立地帶を楯にとつて强硬なる抗議を申出し、(恰も今回我軍の山東鐵道占領に干して故障を申立てたるが如く)、其結果我商船は芝罘、登州等より積出す物資を一旦劉公島迄送り英國租借地へ上陸せしめ再び積み下ろして海洋島迄轉送して漸く大連に運び込んだ樣な始末て、僅かに四五時間て行ける者を支那政府の妨害の爲めに遲きは一箇月をも要した程であつた、就中甚だしきに到つては白晝公然露西亞の驅逐艇が芝罘、登州等に出入した事があつて、或時は夫れが爲めに我軍艦秋津州我驅逐艇の白雲、朝霧などが追ふて芝罘に突入した事もあつた、其際此等の情況に憤慨した時の芝罘領事故水野氏の如きは當局に建議して一時山東沿岸の占領を申出した事があつた位で、平和な時は宜しとするも一朝事あるの日に山東省沿岸に我政治上の勢力を普及せしめ置かねば到底完全に關東州を維持する事は出來ぬと言ふ事が判つたのである。

殊に關東州と山東省との間に碁布散在する廟島列島の始末に就ては餘程注意せねばならぬ事て、嘗て北京條約締結の前後吾輩は一種の意見書を當局者に提出し

で置た事があつたが、廟島列島中殊に大黒群島の如きは千八百九十六年の露淸條約にも、千八百九十八年の第二回露淸條約にも何等規定する所無く、殆ど無主の地の如き姿で、支那政府から言へば登州府の管理下だと言ふし、露國の方から言へば渤海の鎖鑰は總て旅順港の管理下にあるので大黒島群島は黃海沿岸の海洋島と同樣、關東租借地內に屬する者だと、双方が長らく爭ふて居つた箇所である、我邦が遺產相續的に關東洲を管理したる以來、未だ今日迄其儘に成つて居ると言ふ事である、

右樣の次第で過去に於ける山東省と我邦との政治上の關係は可なり複雜に成つて居つたのではあるが、何を言ふにも獨逸に對して敬意を拂つて居た我邦としては、無暗に山東に手を出す事も出來ず、獨逸が爲すがまゝに放任して指を啣へて傍觀して居つたのである、然し吾國民中で心有る者は、大寺少將を始め幾多我同胞の血を流して一時占領して居た山東に他日の或る機會を待つて、何んとか解決せねばならぬと想ふて遂に今日に到つて居るのである、

(二)　支那歷史と山東

支那歷史の上に顯れた山東省と言ふ者は、參千年來頗る賑やかな舞臺として顯れて居る、十八省中で古來から歷史を賑はして居る場所は、山東、河南、江蘇、の三省であつて山東最も著名である、堯舜時代天下を分つて九洲と成した內の五箇洲、兗洲、靑洲、豫洲、冀洲 徐洲、は總て山東地方に總括されて居る、(直隸の冀洲江蘇の徐洲も昔山東)今は地圖の上から隱れて居るが中世期に榮えて居つた河北の地と云ふは廣き意味で謂ふ山東省の一部である、若し極端に謂へば支那の歷史は山東省を中心として起つて居ると言つても好ひ位である、神農は始め陳に都し後ち山東の曲阜に移つて居る、(「有九年之水使鯀治之九載弗績」)遂に堯の手を煩し禹の力を假つて漸く治め得た其水利問題は、言ふ迄も無く黃河の事であつて、今日迄懸案として殘つて居る大問題である、(「ゼイムソン」博士の黃河治水の事は後章に說くべし)、舜の耕せし歷山は今の濟南の千佛山の事で、「濟陰魚雷澤」は今の尼山鎭雷澤湖である、周代正史「有呂尙者東海上人」、即ち大公望は今の東萊府下の產である、釣魚臺の舊址は先日我軍が占領した即墨の沽江にある、「武王東至於盟津白魚入舟」、は臨淄縣附近の海濱の事である、大公望が後ちに封ぜられた齊の都は今の靑洲府である、桓公或は管仲と云ふ明君賢相の現れたのも同所である、「范蠡與私徒乘舟江湖浮海出齊。治產至數千萬。齊人聞其賢以爲相」山東省に

む昔しは隨分大金持の出來た所と見える、其後に到りて東洋一の大聖人孔子が曲阜から生れて出た、其所で山東は德敎發祥の靈地と成り、引き續いて幾多の哲人賢者が踵を接して現れて居る、孟子、顏回、公冶長、閔子騫、子路、子思、曾子、等皆山東產の人で有る、孔子の聖廟及靈陵共に今の津浦鐵道曲阜驛を去る里餘の場所に存在して居る、孔夫人七十代の係裔は現に同所の聖公府に居住して居る、丹甍の杏樓や大成殿の威嚴は貳千餘年の昔を談つて居る樣である、孟子の墓も孟母三遷の故蹟も鄒縣に存在して居る、

「策駟馬意氣揚々自得」と御子の晏子が肩で風を切つた所は今の濟南省城内である、「宣王之庶弟封於薛。有子曰文。食客數千人」即ち任俠孟嘗君は今の津浦鐵道利國驛附近に居つたのである、「時齊城惟莒即墨不下。即墨人推田單爲將軍」即ち安平君田單が火手の計を以て七十餘城を取り返したのは今の高密驛附近である、趙の平原君は今の平原鎭出身である、秦の世と成つては山東が多く引き合ひに出されて居る、「秦王政滅五國入臨淄。齊人歌之曰。松邪柏邪住建共者客邪」と云ふ所から始まつて、「始皇東行郡縣上鄒嶧山立石頌功業上泰山立石」、此鄒嶧山は今や獨逸が鋭意採炭に勉めて居た澤山炭坑附近にして、泰山は泰安府の上に聳へて居る高山である、支那上世の歴史で此泰山と云ふ山は頗る著名な者で、其當時の支那人の眼では世界第一の高山と想つて居たらしい、其上此泰山は支那五岳の第一位に置かれある靈山で、魯の隱公莵裘を營んだ隱棲である、近時と雖も淸朝皇帝の即位の節に勅使下降があつて上帝奉告式があつた者である、泰安府より我參里余の路で、山下より山上迄石階が連り恰も我男山八幡宮に詣でる想ひがある、一天門、玉皇廟、冊恩堂などがあつて、天下一の靈地となつて居る、中世の詩人歌曰「不登泰山不知天下之高、登泰山不登日觀不知泰山之高。不觀黃河不知天下深觀黃河不觀龍門不知黃河深」、と謂つて泰山と黃河を對照して居る、支那の文學に於て屢々現れる泰山巨江と云ふ文字は此泰山と黃河を指した者で共に山東に位置して居る山河である、春秋に「河山以東强國六小國十餘」と書てある河山と云ふ字は黃河と泰山の事である、又た良く用ゆる言葉の内に「君を泰山の安に措く」と云ふが如き文字も必竟此泰山の事である。從て「巫山之夢」(說明無用)と云ふ巫山も勿論膠洲附近の巫山の事であるのである。

「始皇遂東遊海上方士齊人徐市等上書」、近頃我軍が上陸したる勞山灣と明治二十八年山東上陸軍が上陸したる、榮城灣との中間に在る山東角の事である、其所から徐福を日本に送り不老不死の仙藥を求めしめた次第で有つて、後始皇が匈奴防備の爲めに萬里の長城を築いたのは、全く此山東角附近に齊の宣王が東海拒防の長城を築ひて四塞の强國と誇つたのを模倣した者である、又始皇の崩御せられた所は今回我軍の最初上陸したる龍口から萊洲に走る沙岡上で、所謂「丘沙平台」の故趾が夫れてある、漢の大祖劉邦は沛の人即ち沛公であつて今の江蘇山東の境なる徐洲府下の產、廣い意味の山東人である、又沛公に縁の有る酈食其は山東高陽里の人である、項羽時代の合戰場は大概山東省内であつた、「與韓信夾

濰水而誅」、とか或は「漢王立信爲齊王」、とか云ふて、今の濰縣停車場より沂洲近傍が修羅の街であつたのであらふ、「張良少時於下邳圯上遇老人」、「異日見濟北穀城山下黃石即我也」、即ち黃石公の故事も山東の事柄で、下邳は現今の沂洲府下邳縣の事で濟北穀城は今の兗洲府下穀亭の事である、

黃巾張角は直隸鉅鹿で生れて山東に育つた人で、此人以來山東が盜賊の根據地と成つて、人民が獰猛に成つて來た樣子である、後世宋代と成つて例の水滸豪傑が山東の草澤から崛起する樣に成たのも其お蔭で有る其内の大將宋公が吟じた反詩の中に「敢笑黃巣非丈夫」、と云ふ文字もある位である、

三國時代にも山東は合戰爭奪の中心點であつた、末期に及んでは其戰鬪範圍が廣く成つて來て、一方四川省の蜀に移り他方江蘇浙江の吳に轉じて居るが、最初の頃は全く山東が爭奪戰の中心であつたのである、此時代の大立物曹操は沛に生れ兗洲城裡で生長して居ると言はゞ立派な山東人である、他の大立物たる劉備は生れこそ直隸涿洲の人だが、祖貫は齊の人である上に江蘇山東の境なる徐洲に於て育ひ立ち後ち徐洲の牧と成り又た轉じて萊洲の牧と成りてから多少江湖に馳名する樣に成つたのである、又三國史劇の主人公の位置に在る諸葛亮孔明は山東琅琊の產で、獨逸が鐵道布設權を有して居つた、沂膠線の基點沂洲府下琅琊庄の學究出身である、有名な梁父吟の碑は今も臨淄炭坑附近に嚴然として在存して居る、勇將孔融は孔子の孫裔で曲阜の人、大史慈は孔融の叔父で勿論山東人である、三國史を繙いた者は皆な知つて居る通り、最初より中頃迄の戰爭は悉く山東地內で行はれて居る、「山東一境盡被曹操所得」、とか「呂布襲濟據大邳」、とか「陶謙祖讓徐洲」、とか、「下邳城背壓兵、白門樓呂布殞命」、とか「濟走歸操而屯沛」、とか「袁紹據兗洲闘河北」、とか「今曹操在山東兵强將盛可宜入朝以輔王室」、とか言ふ事で山東の賑ひは一ト通りで無かつた、

南北朝に成つてからも宋高祖劉裕は彭城の產で、江蘇、安徽、山東の國境に生れた人で濟陰に知たりと云ふので山東出身と云ふ事がわかる、唐の玄宗帝は山東臨淄に生れた人で中年迄同所の郡主であつた、安祿山も永らく東平郡王で河北道を兼ねて居たので、今の德洲停車場附近に居城して居たのである、之れを亡した例の顏眞卿も同じ山東平原の大守であつたのである、

前にも述べた通り山東は張角以來落草豪傑の發淵地であるので、遂に宋末に及んで梁山泊の本舞臺が出る樣に成つた、水滸傳は稗史小說たるに過ぎ無いけれども、其文章其趣向、支那三千年間稀に見る大文字で、殊に其根據は宋の正史から引證されて居るのである「宋江起爲盜以三十六人橫行河朔轉掠十郡官軍莫敢嬰其鋒」、水滸百八人の豪傑は過半山東出身の人で、晁天王は山東曹洲東溪村里正、吳用は同郡學究出身、宋公明は濟寧縣下鄆城押司、即ち今の津浦鐵道北段の一驛である、玉麒麟は河北大名府出身で、其他は押して知る可してある、又た之等豪傑の根據地は申迄でも無く梁山泊で在つて「是山東濟洲管下一個水鄉地名梁山泊方

圓八百餘里中間是宛子城蓼兒洼」、案ずるに其梁山泊は現今の野城驛を西に去る數里の地梁山營が其れであると想はれる、其他水滸傳中に引用されてある地名は過半山東省内の者である、高唐縣、曹洲、青洲府、清風山、黃泥岡、泗水縣、東平、東昌、滄洲縣、景陽鎭、華山、登洲府、など皆現在と同樣の地名である、

右の如く編年史的に山東の歷史地理を調べるのは餘程面白い事であるけれども、餘り長くなるから、筆を玆に擱めるとして、たゞ言ひ殘した山東に密接の關係ある學者の名前丈けを末項に掲ける事にしよふ、孫武、左丘明、李太白、王羲之、蘇東坡、李攀龍、李舜臣、等が夫れである、

(三) 山東人士の位置

支那兵と言へば一概に弱ひ者の樣に言ふけれども、個人として見た支那兵は左程弱ひ者では無い、畢竟夫れを統率する將校が惡いから遂に弱ひ者に成つてしまうのである、支那人間に於て常に誇りとして居る剛猛の兵と云ふのは、十八省中で、齊勇(山東)、鄂勇(湖北湖南)、粤勇、(廣東)の三種を指すのであつて、古來から山東兵は强兵であると言はれて居る、なぜ山東兵が强いかと云ふに其原由は二つある、第一の理由は前に述べた通り慓悍なる草賊即ち通稱山東豪傑と綽名さるゝ者の子孫であるから自然と祖先の慣習に染まつて來て居るのと、第二の理由は山東省民は過半回々教徒であるからで有る、每年回々教の本山「アラビヤ」の「メッカ」に巡禮として出懸ける支那人では、廣東人と山東人が一番多いと云ふ事である、元來回々教の教權は例の「劍を以て天堂を啓け」と云ふ「コーラン」の經典が唯一の本尊であるのだから此宗旨の熱狂なる信者は自然死を懼れ無い氣味が有つて、佛教や道教の信者輩よりは幾分膽力がすわつて居る者が有ると見へる、此力もあづかつて山東人が强いと云ふ理由に成つて居るので有る、然し「モリソン」氏が嘗て言ふた如く將來支那を煩す者は同教徒で有るので、山東人の回教崇拜は決して賞められた者では無いので有る、

淸朝時代に於て皇室の禁衞は勿論滿洲旗軍であつたが、實際中央集權の威力を維持せしめて居つた者は即ち山東の兵力であつたのである、旗軍八色の主力は一方保定に他方山海關方面に備へてあつて、在天津の直隷總督が統搭して居つたのだが、一朝有事の場合に於ては山東巡撫が濟南省城の武力を提けて北京を護衞すると言ふ事に成つて居つた次第である、故に言葉を替へて言ふて見れば滿洲旗兵の主力は常に直隷に有り、漢人兵の主力の中心點は山東に在つた者であると言ふて良いのである、

建國以來滿洲朝廷の怖れて居つたのは漢人の反逆であつたので、康熙乾隆などの賢明な天子は之等に就て頗る苦心した者と見えて、往々政策制度の上に於て漢人の反亂を防遏せんとする跡がありありと現はれて居る、現に其一として視る可きは、山東省に限り總督を措かぬと云ふ一條である、十八省中大概省城には總督の居る者であるが、山東丈けは總督が無くてたゞ巡撫が居るのみである、其巡撫なる者も他省の巡撫とは異りて山東の巡撫は全く直隷總督の候補者であつて、常に其指揮下で動く

様に成つて居つたのである、故に山東巡撫を無事に勤め終れば必ず順序として直隷總督に昇進する事に成つて居つたのである、現に李鴻章の如き端方の如き、袁世凱の如き皆同様の順序を踏んで立身した手合である。

其の上山東には他に一種非常な強味の事がある、其れは外では無い、四百餘州の貢糧、貢銀に就ての運輸線の咽喉を扼して居るからである、此地の利と云ふ者は非常な勢力であつて、今日の如き汽船便や汽車便を利用するに於ても猶ほ山東は要害の地點たるを失はないが、其昔黄河の運送力(運河を含む)と渤海の海運のみを以て京師と四百餘州の兵站線に用ひられ居たる當時は、實に山東省は北京の死命を制して居つたと云ふても過言では無いのである、「齊は座して天下を制す、大江中貫し諸道の餉粟皆是に據る」、と歎稱せられたも宜也と謂ふ可しである、若し一朝事あつて山東人の爲めに中途其資料を占領せらるゝ場合に於ては直隷省は恰も嚢の鼠と成つたも同然亦た如何とも爲る事が出來ぬ破目に陷るのである、故に北京政廳が山東を怖れる事は一と通りでは無つた、

彼の明治三十四年の義和團拳匪の騷擾は支那に取つて近頃に無い大騷動で有つたので有るが、其起りと云ふは山東曹洲府の行者共が泰山神靈の風水に事寄せて起したのが始めである、後に到つて端郡王や載福祥迄が躍り出る事に成つて遂には支那亡國の境迄前進しかけた様な譯であつたが、全く山東省が其反逆の中心點であつた事は爭はれぬ事實である、又過般の第一革命の場合に於て餘り脆く滿洲朝廷が倒れた事に就て、世人は一方ならず驚いた様であるが、夫れには色々理由もあらうが其内で頗る有力なる理由として數ふ可きは、孫山東巡撫が革命黨に擁せられ、速に山東省の獨立を宣言したからである。即ち一方では天下に二ツしか無い(上海と山東)德洲機器局を掠奪し北滿に於ける兵器及彈藥の製造權を握り他方黄河の輸送線を押へ貢餉の全部を占領したので北京方面では如何とも運動する事が出來なくなつて存外早く斃れてしまつたのである、亦第二革命の場合に於ては彼の慓悍な張勳が南京を脱走して直に山東に立て據つたので、革命軍は勿論の事北京の袁氏迄も大に憂慮した様子であつたのは、やはり山東に横臥して地の利を占められたら由々敷き事だと心配して騷いだので有つた、山東省なる者が如何に支那に於て要害の地であるかと言ふ事は之れを見て判るでは無いか、

近頃に到り、支那人物系の集散に就て不可思議千萬な顯象が現れて來て居る。夫れが亦た總て山東省の上に懸つて來て居るから一層不思議である、言ひ換ゆれば現今に於ける支那の大人物の過半か山東省の一隅に吸收されて居ると云ふ珍顯象があるのである、恐らく山東の山河に堯舜以來始めて視た此可笑的の顯象を見て或は呆れ或ひは笑つて居る事であらうと想はれる、此奇顯象と云ふのは何でも無い、青島の租借地へ滿洲朝廷の貴族富豪並に第二革命黨の自稱志士なる者が、無慮百有餘人居候風に居住して居ると言ふ一條である、中には純然と獨逸に歸化した者も有り、他は歸化せざる迄も獨逸國旗の下に已が生命財産を托せんとする事大主義の連中である、今吾輩の地獄帳に留つて居る尙書(大臣)、督撫(總督、巡撫)及其相當官以上の人達の姓名を氣の毒ながら茲に列記して見

やう。

恭親王、徐世昌、盛宣懷、周馥、張人駿、李經芳、李經羲、李經邁、呂海寰、趙爾巽、趙爾豐、陳瀾永、陳夔龍、陸潤庠、鄒嘉來、楊度、徐世光、周學熙、許鼎霖、余則達、李榮駒、胡建樞、升允、其他慶邸、禮邸、の公達等の大官連である。

其外青島附近に不動產を買收して子孫の謀を爲して居る連中には肅親王、(貳千萬圓の大金を德華銀行に預金しあり)、蔭昌あり、靳雲鵬あり、張勳あり、熊希齡あり、朱家寶あり、孫寶琦あり、何も親獨派なりと指さるゝ連中は身は北京に在りと雖も悉く青島に不動產を所有せり、之等の連中は自己の財產を擁護する目的を以て、今回の征獨開戰以來我邦を目して全く仇敵の如く取扱ひ、新聞紙を使嗾して我同胞に向て言ふに忍びざる罵詈を逞ふ成して居る、若し近き未來に於て我征獨軍が青島を占領し、我政令を膠州租借地に布いたる場合には、彼等果して如何なる身の振り方を爲すであろふか、參千年の歷史は勞山の頂より靜かに彼等の行動を瞰めて居る事であらう。

(四) 山東の生產物

山東の生產物は便宜上分つて二種類と成し(第一)を野生物とし(第二)を礦產として左に順次說て見よふ。

世傳ふる所に據れば獨逸が山東省に垂涎し始めたのは、地理學者「リヒトホーヘン」氏の探檢報告が基であつたと言ふ事であつて、同氏は山東省を以て十八省中第一の沃野で天與の寶庫であると斷言して居るソーであるが、吾輩は山東內地へ節を引ひたる事前後參回であるが、山東省を以て膏沃の地とはドーも想はれぬのである、禹が九年の水を治めた以來今日迄山東は每年〳〵水害に依て苦められて居るので、折角の植付けも二三日降雨があると直に黃河流域の氾濫と成つて押し流されてしまうのである、又黃河は「ナイル」や「ユーフレーツ」の樣に、洪水の度びに川上から肥土を送つてくれる事は更らに無く、洪水の度びに田畑は砂礫の河床と變化するので有つて、誠に慘酷千萬な光景を呈する次第である、故に先づ山東の生產を論ぜんとするには須らく黃河治水の狀態を說くのが急務である。

米人の支那通として有名なる「ゼームソン」博士は數年前より黃河治水の案を立て支那の當局は勿論米國の人士に訴へて是非黃河の治水を實行したい、若し新舊黃河(新黃河は山東を流れ舊黃河は江蘇の淮水)の治水を成功したなら山東江蘇兩省の農作物を整へ數千

年來始めて視る大豐饒を得るのみならず、傍ら洪澤湖を始め幾多の湖水が旱燥されて新水道の兩側に約五百平方哩の美田沃野が出來る事と成る其効果やたゞに支那人士の利益のみならず實に人類の幸福を增進するのて有ると言ふのて、資本金參千五百萬弗を以て導淮水利公司と云ふ治水會社を組織し已に十數名の技師が出張して實測に從事したとの事てあるが、若し此事業にして成効する曉には、今日迄洪水の害を受けたる山東の瘦地ゅ明日は非常な豐饒な美田に化する事が出來るてあろふと想はれる。

毎年一回か二回は是非洪水の害を蒙ると云ふ山東省の事てあるから、平地の野生物よりも比較的高地產の植物の方が確實の收穫を得らるゝ樣に成つて居る、從て果實の樣な者は豐かてある、又た山繭の如き蜂蜜の如き、山畑に生ずる小麥落花生及棉花の如きが割合に良く出來るのてある、今重なる產物を左に列記して見よふ。

▲果實　山東の果實中の大宗は棗て在る、內地の山野到る所棗樹ならざるは無しと云ふ有樣で實に棗は山東の地味に適した者と見える、又た支那人が棗を好む事は吾々の想像以外で有つて各種の方法を以て食用として居る、故に山東から他の各省へ毎年輸出する棗は莫大な數量である、日本でも昔漢法醫は藥用として支那產の乾棗は非常に多く用ひた者だソーで在る、李太白勞山の詩に〔我昔東海上勞山湌紫霞親要安期生食棗大如瓜〕、と歌てある程で山東の棗は形も割合に大きく且つ其香と其味は林檎と殆ど區別無き程良く似て居る、若し人ありて其一小片を皿にもり之れは「カリホルニア」產の林檎の切れだと言つたら誰人でも僞まされるであろふと想はれる程良く似て居つて且つ甘味い、山東の梨は有名な者で色々書物にも其名が顯れて居る彼の水滸傳中〔吳用智取生辰綱〕の下りて黃泥岡上に於て豪傑七人が山東名物棗賣の姿に身を扮して現れる一條が有る〔那七人道我等弟兄是濠洲人販棗子〕と叫んで居る、棗の次が葡萄である或る米國人の話しに山東の葡萄は太平洋沿岸の產よりも上等であると云ふのを聽た事がある、實に美味であつて且つ種類が澤山ある、楕圓形のあり、球形のがあり、小珠の樣なのがある、色も亦た靑色あり、紫色あり、赤色のがある、實に葡萄には富んで居る、野生すら斯の如してある少し人工を加へたら一層上等の物が出來るであろふと想はれる、其他梨、柿、林檎、栗、核桃仁、等が山東果物中での名物である、近時は日本、浦潮、上海等へ輸出する額は中々大した者だと云ふ事である。

▲絹紬　柞蠶は萊州府昌邑、福山縣崖子、等が本場であつて山繭は

山東省の山岳には到る所生產するので、其れへ滿洲の柞蠶をも加へて、盛んに絹紬製造をやつて居る、重なる製造場で柞蠶絲廠を有して居る箇所は、前記二個所の外、平原、棲霞、陽信、肥城、等である、從來は重に素紬のみであつたが近年日本で染料を發見してから此絹紬の需要が劇增して來た昨年芝罘からの輸出が八百四十萬圓と云ふ巨額に上つて居る。

▲麥稈　山東省内の山畑では近時小麥の植付けが盛んに成つて小麥の生產に次で麥稈眞田が一種の名物と成つて農民一般の副業と成つて居る、重なる生產個所は青州、兗州、萊州、附近で皆々工藝局とか草帽公司とか名の附いた會社を以て製造に從事して居る、日本の中國產に比しては品質劣等であるけれども價の安いので印度濠洲等へ向くソーである、昨年の芝罘出荷が貳拾八萬擔であつた。

▲牛皮　牛油牛骨は山東の名物である、元來支那人は牛を專ら耕作に使用して居るので、牛畜は神農の靈獸であると言ふて之れを食用とするのを嫌ふのが常習である、然るに例の回々教信者は豕肉を口にせぬ代りに、頻りに牛肉を喰ふのであるから回々教の盛んな場所には牛皮牛骨の產出がある、山東は前にも述べた通り回々の盛んな所で有るから從つて、牛食が盛んで有り牛皮牛骨牛油の生產が出來てくる譯である、此生產品の本場は、曹州、臨淄、等で有つて濟南城内には露西亞人の經營する薩美洋行と云ふ牛會社がある、芝罘では我三井物產の一手で賣買して居る、又た近年生牛が非常に澤山浦潮へ積み出される樣に成つたので、河南地方から故障が起り、支那政府は耕作用靈獸の保護と云ふ意味から、宣統二年六月法律を以て生牛の津出を禁止した、然し牛皮牛油等は相不變盛んな輸出で、昨年芝罘青島等の輸出額は五百萬圓を超へて居つた。

▲落花生　支那人の食物には間接直接必ず之れを用ゆる、燒豆として用ゆるか、製油として調味に用ゆるか、點心の中に入れるか、是非此品を用ひて居る落花生は日本の大根と同じ樣に支那人には日常缺く可らざる野生品である、此落花生即ち花生仁は山東の名產で、宣統二年花生油及花生仁の芝罘輸出五百貳拾萬兩と云ふ事である。

▲棉花　山東に棉の植付けが盛んに成つたのはツイ近頃の事である麥稈と同樣未だ十年を出て居ない、本場は、高唐縣、夏津城、等であつて其製造力の劇增は驚く計りの者である、宣統二年の輸出が三拾萬斤、六萬餘兩の者であつたが翌年宣統三年の輸出は貳百萬斤參拾貳萬兩と成つて居る、何れ本年の如きは百萬圓近くに迄登つて居るであらうと想はれる、我邦紡績業者など多少の注意を拂ふ値ひが有る者と信ぜられる。

次に論ず可きは山東省第二類の生產物たる鑛產の事て有る、支那の鑛產物の本場は、雲南、貴州、の兩省て有るが其次ぎは山東省である、獨逸が山東を占領したのも此鑛產に眼を付けたからである、今日獨逸が政府の力を以て採掘に從事して居る博山炭坑、坊子炭坑の如きも、決して獨逸が發見して始めて着手したのでは無い、山東では堯舜時代から薪材不足の爲めに煤炭

を用ひて鐵材製煉の爲めに焦炭として用ひて居つたので有つて、博山、坊子、唐家庄、は昔から支那人が採堀して居つた所で有る、又た鐵山の如きも支那では昔から大冶、崑倫を第一に推し其次には山東鐵即ち華山鐵坑、金嶺鎮鐵坑を推奬した者である、今各種鑛物の本場所を左に列記して見ようと想ふ。

▲石炭坑　石炭の產地即ち煤床なるものは黃河の河床より起つて泰山の岩脈に到る一帶の地層にあるのであると、其重なる箇所は、濰坑、（華德中興煤礦公司即ち支那獨逸共同經營にして炭質良し）、濰坑、（山東鑛山公司の採堀所として世に謂ふ坊子炭坑である、彫樂園より鐵道の支線を布いて運炭を爲し居れり）、淄坑、（世に謂ふ黌陽炭坑にして大成局之れを管督せり）、博坑、（有名なる博山炭坑にして近時山東鐵道と合併したる大炭坑所なり張店驛より運炭目的の支線あり周村驛にて總て其集散を爲し居れり）、嶧坑、（世に謂ふ滕川炭坑にして支那商義成永の經營せる者にて炭質最上等の者なり併て獨逸が是れを强奪せんとして支那外交部と爭論を惹起したる事あり）、文坑（文萊炭坑は支那商鴻泰號の經營にして獨逸が之れをも奪はんとして爭ひたる事あり）。

其外崇山窪、馬山店、子門村、湖子結、柱河畔、亞陵鎮、大汶口、鳳凰澤、など云ふ炭坑が今日迄世に顯れたる、石炭坑の重なる者であるが、今後我邦が山東省内の炭坑採堀に着手したる曉は果して如何なる結果を來す可きか、恐らく支那に於ける開平炭や萍鄉炭や鴻基炭を凌駕するの效果を收むるに到る可きを信じて疑はざる次第で有る。

▲砂石　博山縣下に產出す、殊に新城鎮產出の皮硝（芒硝）、長山縣產出の石面、（硅石）、截庄に產出する、予石面、（灰石）、は東洋方面に於て稀れに見る硝子原料で此原料を用ひて精製すれば立派な板「ガラス」が出來るソーである、現今博山玻璃公司が出來て、鏡や、「ランプ」や、珥環や、珠瑯などを、製造して販賣して居る、此事業は非常に擴張の餘地が有ると云ふ事である。

▲硫黃　久隆口に產す。

▲水銀　泰安縣下に產す。

▲銅　山東は到る所に銅鑛あり然し未だ一個所も着手したる所はない、萊蕪縣下及び泰安府下に產出する者が恐らく良質なるべしと云ふ事である、日本人が今後山東の礦山業に着手するに到れば、一番に銅坑の開堀から着手されるで有らうと想はれる次第である。

▲錫　嶧縣及濟陽附近で支那人の箇所採堀は各所に在る。

▲鉛　埠山、米家、等にて支那政府が嘗て採集した事が有ると云ふ。

▲寶石　沂洲附近には昔し玉珠を採集した跡があるとの事で今日と雖も釉岩石に類したる軟質の玉は潤澤であるとの事である、近頃西洋人間の噂に據れば瑯琊附近及嶗山附近には金剛石礦があるとの事であるが、或は山東省が東洋の「キンバレー」や「ローデシア」の樣に成る事が有るかも知れぬ、水晶は太澤山が本場で支那商は昔しから賣買して居

る。

▲白金　數年前支那政府は山東省内の仲貿を促し白金採集の會社を起さしめ、保巡撫や勸業道の官吏を督勵して、濟南府下農業の白金坑より頻りに白金の採集をやつて居る、近頃は大に見る可き成績があるよしである。

▲金　金鑛の重なる者は、昌邑、蒜山、九店、古戈庄、茅山、秀宗岱、馬歩嶺、毛山、等が著名な者であつて、支那では昔から山東金の名が有つた位で金礦の採堀は盛んな者であつたと見える、明朝時代は殊に盛んで有つて山東省から南京への貢物中では隨一の者であつたソーである、今も可なり盛んに採集して居る。

右の如く山東省内の生産物は野生產物と鑛山產物とがあるので有るが、其外に於て一種特別な生產物がある、夫れは外からては無い山東特殊の勞働者所謂世に謂ふ「山東苦力」其者て有る。

山東省から出働する勞働者即ち「山東苦力」なる者には二種類ある、即ち（長期）と（短期）の別が有つて、長期の方は亞米利加、日本、南洋、等へ出働きする者てある、短期の方は毎年解氷期から出働し晩秋收穫の終つてから歸郷する者を言ふので、爰に於ては暫らく長期の者は措て置いて、短期の方の者丈けに就て述べて見よふ、十八省中出働人の多いのは山東を以て第一とするので、世に「山東苦力」と云ふ名の出たのは宜也である、概算する所毎年の出働人は約六十萬人位であらうとの事で其半分は浦潮と滿洲、ある、大連、安東縣、營口、から毎年春秋出入する數は貳拾萬を下らぬと云ふ事である、其れが爲めに其季節には大阪に於ける社外船數十艘ワザ〳〵山東沿岸に出向くのである、南滿鐵道はワザ〳〵客引を山東に派して鐵道客を引いて居ると云ふ始末である、現に芝罘には鐵道招待處と云ふ看板の掲げたる所が有つて支那政府の官人が出張して此出働人の事務を執つて居るのである、其外河南、直隸、江蘇、安徽、等の諸省へ出働する者も貳參拾萬は有る譯であつて、山東省の問題を論ずるに當ては此「山東苦力」は決して等閑に附する事の出來ぬ問題である。壹人平均拾圓づゝ持ち還るとしても山東に落ちる金は毎年六百萬圓である、然るに聞く所によれば、出働苦力で多く持ち歸る者は數百金を提て居るのが有

る、少なき者とても特別の事無き限り、（病氣或は賭博により）は大概參五拾圓を懷中に收めて歸るとの事である、山東省も必ずしも貧乏者とのみ蔑む譯には行かぬ次第てある。

（五）　山東と獨逸

▲占領の始末　威迫を以て我遼東半島を還附せしめたる獨逸は、其當時滿洲に垂涎し居たる露國と喋じ合せ、滿洲地方を露國が占有するを默認する報酬として、自己は山東省或は福建省を占領すべきことを密約し、靜かに時の到るを待ちて居たのであつたが、幸哉、千八百九十七年六月獨逸宣教師二名山東兗洲府に於て土匪の爲めに殺戮せらるゝや、機失ふ可らずと成し、直に軍艦を以て山東沿岸二三の地點を占領し、北京政府に向て強硬なる談判を持ち懸け、遂に千八百九十八年三月と云ふに到りて、膠洲灣租借の獨清條約を締結するに到たのである、其條約なる者は第一章に於て膠洲灣租借地の期限（九十九ケ年）面積、（五百四十キロメートル）勢力中立帶、（五十キロメートルの弦線）を定め、第二章に於て、鐵道布設の件（膠洲線並に沂膠線）及附屬地帶、（沿線三十清里の事を規定し、其れと同時に礦山開採權（濰縣、博山、沂洲、蕪縣、）をも締約せり。

▲占領中の設備　獨逸の殖民政略は「カイザロ」の熱心に施設した所であつたが、就中山東省の設備に尤も熱中したのである、千九百八年頃の獨逸殖民經營費に就て見るに、「トーゴーランド」、を始め東西阿弗利加の殖民地並に「カロライン」、「ニウギニア」、等の南洋殖民地の諸經營費全體を加へた者（約我八百九拾萬圓余）よりも山東省一個所の設備費（約我千二百萬圓）の方が遙かに多額で有るのを以て見ても如何に熱心であつたかゞ判かるのである、獨逸が十八個年間山東を占領して居つた間に伯林から運んだ總金額は我貳億萬圓に近い金額である（津浦線に約六千萬圓、山東鐵道に約參千萬圓、諸炭坑に約壹千萬圓、其他市街、兵營、港灣、等の設備並に銀行資金に支出した額が約我壹億圓）。

▲青島の戰前　要塞並に軍港の設備は過日來の戰爭に據て略は明瞭に成つた通り、露國の旅順口設備に劣らぬ丈けの事が出來て居り、商港側の船渠、棧橋、保稅倉庫を始め、市街地の整理、水道、病院、學校、等の設備も中々行屆き、文明國の殖民地として耻しからぬ丈けに成就して居つたのである、殊に治水造林迄に着手して百年の計に取り懸つて居つたのは感心である、殊に茲に擧げつろふ可き件は、（貨幣整理）の一條である、山東省も他の各省と同樣貨幣制度は極端の紊亂で有つて殆と手も着けられぬ始末で有る所へ、獨逸が占領するや、七百五十萬兩の資本を以て德華銀行を創立し、從來「銀棧」「銅元」などから發兌して居た「當十」貨か七八串文の「加色」割引等を上下するに非されは通用せぬ樣な始末で非常な混亂して居つた所へ以つて來て德華銀行は青島に本店を設け獨逸大藏省支店と云ふ姿で「ニッケル」貨五仙拾仙並に「當百」「當千」の洋銀を發行し、遂に山東省内の通貨を獨貨に變換せしめ得

て、遂に邀んで北清一帶の通貨の標準貨と迄謳はるゝに到らんとして居つた形勢であつたが、今回我征獨軍が上陸以來は軍票の使用を勵行して居るそうで有るから、早晩彼の滿洲で露清銀行「留」貨を驅逐して全部我軍票を使用せしめた轍に倣ふて、近々我通貨が山東の法貨と成り、北清貨幣の標準貨と成るであらうと想はれる次第である。

▲海運陸運　元來青島政廳は獨逸の海軍省に直隸せる官府と成つて居るので、海運の事は中々注意が到つて居る、常に軍艦を以て商船の便宜に備へ居るのみならず、漢堡アメリカン汽船會社には莫大なる保護を與へ五種の定期航を青島に結び付けて居るのである（第一）に獨逸本國と青島の直航路、（第二）は青島上海間一週一度、（第三）青島天津間、（第四）青島日本間、（第五）香港青島及仁川間、而て其運賃に到つては他汽船會社に比して頗る低廉なるのみならず、歐洲航路に就ては青島より獨逸漢堡に至る間に於て（歐洲に達するものは）支那の他の各港よりする者と運賃を同額とし、獨逸より青島に到る者は支那各港に到る者より廉とせり、故に發程眞田の如き青島より積荷するも上海廣東等より積荷するも歐洲行の運賃は同額で在る、又た獨逸から我貨物を上海廣東に送る運賃よりも遙か遠路なる青島の方が運賃が低廉に成つて居る斯くの如く迄して青島を保護した者である、尙陸運の事は別に山東の鐵道網と題して左に記述する事とする。

（六）山東の鐵道網

近年清國内地に於て鐵道布設の盛んなる事殆ど想察の外であつて、既に已設の分丈けても約六千哩を超過して居る樣である、工事着手未成の分を加へたら、やがて壹億哩にも近からんとして居る次第で、實に盛大な譯である、其れと言ふも畢竟各國が自己の勢力範圍を擴張せんとする趣旨より、無暗に借款に應募し布設工事を督勵するからである、殊に獨逸は自巳の勢力圏なる山東省内に向て已設未設幾多の權利を獲得して居つて漸時其實行に着手して居る、今左に山東省内に於て、獨逸人及支那本地人に向て許可したる鐵路權の重なる者を擧げて見よふ。

▲膠濟線　已設山東鐵道の一部にて千八百九十八年光緒二十四年獨清條約第二章に據つて特許せられたる者で、濟南省城と膠州灣とを連結する二百五十五哩の線路で、德華膠濟鐵道公司（官立）が五千二百九十萬馬克を費した者である。

▲沂膠線　（未成）此鐵道も膠濟線と同時に條約に依つて與へられたる者であつたが、其後獨逸が津浦鐵道の權利を得んとして、一時此線路布設權を支那に還附し、若し今後五年間に於て清國政府にて布設せざる節は再び獨逸にて布設すべしと云ふ條件付の者であつたが今日迄其の

僅に成つて居る次第である、場所は膠洲から沂洲に達し再び濟南に結び付く百六十餘哩の豫定線である。

▲博山線　(已設)山東鐵道の一部にして張店驛より博山炭坑に到る短い運炭鐵道である。

▲淸濼線　(已設)小淸河驛より濼口に到る四哩計りの運搬鐵道である。

▲小淸線　(已設)山東鐵道の一部支線にして濟南より小淸河に到る二哩餘の運炭鐵道ある。

▲津浦線　(已設)明治四十二年起工大正元年二月に竣成したる支那五大鐵路の一つで北京と南京を連結して居る一名兩京鐵道と云ふのは是である、此鐵道は南段北段の二部に分かれ、北段は天津より山東の韓庄に至る者で獨逸の出資(我六千五百萬圓にして黃河の鐵橋のみに六百五十萬圓を費したり)に懸り南段は山東省韓庄より江蘇を經て安徽の浦口に達し南京に接續する者で、英國の出資(我參千五百萬圓)に懸る者で約七百哩の大鐵道である。

▲烟濰線　(未成)芝罘即ち煙臺と濰縣間百七十哩の豫定線で、明治四十年頃から芝罘や黃縣の縉紳間に企劃された鐵道で、郵傳部の許可は得て居るが、獨逸が靑島の繁榮を芝罘に奪はれる恐れがあると言ふので極力反對して其爲め今日迄其の儘に成つて居る鐵道である。

▲順濟線　(未成)直隷順德府より濟南省城に到る百九十五哩の豫定線にして、獨逸が明治四十一年支那政府より許可を得たる膠濟線支線の一である。

▲正德線　(未成)直隷正定より起つて山東省德洲に到る百三十哩の豫定線であつて、京漢、津浦兩線の接續線で獨逸の獲得權中で有望な線路の一つである。

▲開兗線　(未成)河南省開封府より山東省兗洲に到る二百八十四哩の豫定線で、是れも京漢、汴洛、津浦三線の連絡線であつて、中頃獨逸の注文で兗洲を高密驛に變換したので今では開高線と謂ふのが至當である。

▲嶧台線　(未成)津浦線の嶧縣停車場より棗庄に到る僅か參拾哩の運搬鐵道の豫定線である。

▲開徐線　(半成)是れは江蘇線で直接山東省内の鐵道では無いが山東の國境なる徐洲が基點で將來、京漢、津浦、汴洛、淸徐、四線の連結線で山東省内を賑かす利害線であつて之れは米國の借款で出來るのである。

▲高韓線　(未成)膠濟線の高密驛から津浦線の北段終點韓庄に達する二百十哩の豫定線で、海蘭線の接續線で、將來獨逸が、河南、江蘇、山西の諸省へ勢力を布及せしめんとの希望から特權を與た線路である。

▲台漕線　(未成)大運河の埠頭臺兒庄より起つて漕店に到る約九十哩炭坑鐵道の豫定線である。

▲開濟線　(未成)開封府より濟南に到る線路で、開兗線や開徐線に對する比較線で河南省民此の線路を希望し中央郵傳部は開徐線を希望

と居る由であるが、獨逸に公式の文書を以て、將來參線中何れを布設するに於ても必ず獨逸の借款金に資源を探る可しと云ふ宣告を求めて遂に其れを得て居るのである。

▲沂濰線 (未成)嘗て獨逸より膠沂線布設權を支那に贖回したる當時孫巡撫は直に此の有利有望なる、沂洲濰縣間の鐵道布設を企て山東省内の紳縉と共に實行に着手せんとするや、之れ青島の繁榮を芝罘及龍口に奪ふ者なりとの理由にて獨逸の激烈なる反對を買ひ遂に其儘に泣寢入りと成つて今日に及んで居る次第である。

▲道濟線 (未成)河南省の道口點或は彰德府より濟南省城に達する線で宣統二年獨逸が商密、徐洲間の布設權と共に握有したる權利である。

(七) 龍口開港

▲龍口の過去 龍口と云ふ文字を屢々見る樣に成つたのは、今回我征獨軍の最初の上陸地點で有つたからて有るが、然し是れ迄とも多少北淸の事情に通じて居た者は、龍口港は山東省の沿岸で將來有望な港で有ると言ふて居た次第である、膠洲灣が開港せぬ前迄は山東省の港灣としては勿論芝罘を第一に推すが、其次は此龍口か登洲て有つたのてある、支那「ジンク」船の出入ては芝罘を凌駕する位の場所柄て、勃海灣内唯一の不凍港で有る、龍口は北部が一面登洲角に據つて包まれて居るので、酷寒の節と雖も港内の結氷する事は先づ無いと謂つて宜しい、天津や太沽や山海關に比較して數等の上位に居るのである、滿州との取引の親密な事は山東諸港中第一で有る、其れは何ぜて有るかと云ふに、此龍口の背後に控へて居る黃縣、萊州、濰縣、沙河鎭など云ふ有名の都會から其支店が皆な東三省に散任して居るからてある、營口第一等の巨富西義順は黃縣から出て居る人てある、奉天の大成玉も黃縣の出店てある、遼陽、鐵嶺等に亘つて巨額の取引をする商人は多く山東省萊州府とか濟南とか濰縣とかの人々てあるので、自然龍口と營口、蓋平等との出入が盛んに成つて居る譯てある、近頃我南滿鐵道は同所へ支店を出して居るし、大阪松茂洋行も支店を出して居る、外商ては「バターフイルド」、と「ジアーデン」、とが開店して居る、龍口天津間の定期船は我愛媛縣の共阿汽船會社の共同丸三隻と蓬萊丸、順義公司の圖探號、圖瑞號て、龍口營口間は肇興輪船公司の定期船龍口芝罘間、

龍口大連間は、南滿の委囑船や大阪商船會社の船で、隔日一回位の定期航をして居る、今日の所では港灣の設備は一も無いので、港だか濱邊だか判らぬ位の場所であるが、少數手を懸ければ立派な港と成るのである、今日では港內十六呎から二十呎の水深を以て平均として居る、本年一月八日中華民國政府は豫て列强よりの要求に由り、歸化城、張家灣、等都合七個所の開放を公文を以て發表したが、其七個所の中に龍口の名もあるので、先づ〳〵本年からは龍口の港も公然開港場であると名乘り上げる事の出來る樣に成つた譯である。

▲龍口と芝罘の比較　芝罘の港は全部が北面して居るので、冬季間は每日朔風吹き荒び、爲めに商船の荷役が出來ぬので有る、少しく風が吹けば波が高くて荷役が出來ず碇泊も出來ず止を得ず芝罘島の蔭に隱れて風の凪ぐのを待つて居ると云ふ始末で、海關道の調査表に據ると每年冬季間荷役の出來る日は一個月間僅々五六日に過ぎぬとの事で有る、芝罘が港として價値の少ないのは夫れで判る拾年程前吾輩が同所に居た當時、芝罘張商務局總辦が發頭と成銀百五拾萬兩を據集して、防波堤築造の計畫を建てたが今日未だ實行には着手して居らぬと言ふ事で有る其れに引き換へ龍口は東北面全部が登州角に包まれて居るので東北風全部を防ぎ冬季と雖も決して波濤高からず荷役にも頗る便利な譯である、又た芝罘と云ふ所は背面悉く山岳を帶び福山縣下は丸で山道である、芝罘から山東內地へ行くには馬と馬との間に我邦の山籠の樣な者を吊し、其中へ人を乘せて進むので、恰度蜀の棧道をでも旅行する樣な始末である、其れに引き換へ龍口は背面悉く平地で黃州の岐流小清河と北山東省の高山脈との中貫に位して居るので、背後の山東內地との交通が頗る便宜である、先日我征獨上陸軍が前進した道路の如き洪水さへ無つたなら至極上等の道であつたのである、此大道路に添ふて、黃縣、萊州、沙河、濰縣、と云ふ有名な都會地が併んで居るのであつて、始皇帝東巡道路として參千年來知られて居る所で有る、芝罘に比較して龍口が物資の集散に便で有ると云ふ事は之れで判るであろふと

想ふ、又た芝罘は獨逸が青島の經營を始めてから其繁榮の幾分を奪はれるので、其對抗策として明治四十年頃から頻りと鐵道布設の計畫を爲し、遂に宣統元年に到り孫文山を總辯として煙濰鐵路招股公司を起し六百萬元で芝罘濰縣間の鐵道を布設せんと企てたが、獨逸が極力反對した爲め遂に中止して今日に到つて居る、然るに若し今日に於て、煙濰鐵道を止めて改めて龍口と濰縣間の鐵道を布設するとしたならば、山岳も無く橋梁も少なく、道程も半分であるので、僅々二百萬元位で布設出來ると想はれる次第である。

▲青島と龍口の優劣　獨逸が青島を經營する重なる見込は外國貿易を主位として居つた樣で、支那の沿岸貿易は從位で有つた樣である、青島の左側所謂小港は全く支那「ジャンク」の爲めに設けた港區ではあつたが割合に殷盛では無かつたソーである、又外國貿易と言つても東洋と歐羅巴との干係に重きを置て、浦鹽、大連、朝鮮、等には冷淡なる傾きが有つた、青島輸出入の表を見ても、第一歐洲、第二日本、第三米國と云ふ順序に成つて居る、出入の汽船表を見ると第一獨逸、第二英國、第三日本と云ふ順序に成つて居る、支那「ジャンク」の出入は大沽の五分一、芝罘の半分位であつたと言ふ事である。獨逸の青島政策なる者は一も二も無く保護政策で有つたので、今日青島の繁榮は唯だ一に保護政策のお蔭げであるのである、若し一朝保護政策を改めた場合は如何であらうか、自由競爭の上に於て猶ほ青島が繁榮を繼續して行く事が出來やうか吾輩は非常な疑問で有らうと想ふのである、膠州灣は港としては申分無き良港であるが、位置として地の利を得て居るかドーか、恐らく芝罘よりも、龍口よりも、大沽よりも劣等の位置と想ふのである、膠濟鐵道及津浦鐵道を膠州灣に結び付けて居てさへや丶もすれば貨物も旅客も他の方面即ち天津や芝罘に奪はれんとする傾きがあつたのである、毎年貳千萬馬克以上の保護金を擲て居てさへ此始末であるのに、若し一朝其保護政策を捨てた場合は青島は寂寥たる者と成るであらうと信ずる、今其れに就ての實例を擧げて見やうなら、元來山

東省の中心市場は申迄ても無く濟南省城であつた、此中心點が即ち貨物の集散地であるのであるから、此所を標準として貨物集散の模樣を調べて見るに、山東內地から或は車輛に依り或は馬背に寄り、或は又津浦鐵道に據つて、一度濟南に集中した貨物が、(外國行或は支那の他省行)、何所へ一番多く運ばれるかと言ふと天津方面で有る、貨物の六分通りは天津に向き、又其二三分は芝罘に向き、殘部の僅かが青島方面へ行くのであつたので、獨逸も折角巨額の資を投じた津浦線が糧を敵に與へるが如き結果を來すので大に驚たと言ふ事である、然し其驚きは迂濶千萬な話であつて、正直な貨物の輸送系と言ふ者は距離に正比例を爲すと云ふ判り易い道理が支配して居たのを忘れて居たからで有る、左の表を見れば直ぐ判る。

(自濟南到天津二百十七哩。自濟南到青島二百六十哩)

天津よりも青島の方が四割以上延距離であるのであるから、正直なる貨物の輸送系は常に天津の方を最負する事となる譯である、是に於て獨逸は宣統二年の春に到つて濟南より青島に到る貨物の運賃四割を減額する事にした、之れ取りも直さず自分の布いた津浦線の北段線に向て自分から競爭を始めたと同樣の結果に陷りて社會の物笑ひと爲つた事實が有る、今後若し吾輩の主唱する濰縣から龍口迄の支線が出來たら膠州行の貨物は八分通り濰龍線へ取り込んで仕まう事は容易な事と想はれる其外前章(山東と獨逸の條下海運論)に說いた通り獨逸は漢堡亞米利加會社を保護して青島輸出の貨物に非常な保護をする事に成つて居るのであるから、言はゞ青島港なる者は陸海兩側から金で買ひ立てられて居る觀がある、故に將來其等の保護金を取り上げたら忽ち元の默阿彌と成つて山東角邊の漁村と化し去るてあらうと想はれる次第である、猶ほ其外青島の將來に就て最も恐れるのは、青島は芝罘龍口と異り勃海內に干係が薄く又た滿洲朝鮮へ對して利害少なく、其上沿岸貿易に交涉が淺いのであるから、若し一朝支那方面の沿岸に競爭港が現れたら、青島は直に陷

落して仕舞はなければならぬ運命である、江蘇省の海洲港は支那海に面せる港灣として第一等の地の利を得た箇所である、兼て噂ある海清鐵道や海宿鐵道の將來布設されたる曉は、江蘇全體は勿論、山東、南部、安徽、江西、河南、の貨物は全部此鐵道によつて海洲港へ集中するのである、若し其時が來たとした日には青島の繁榮(外洋系)は全部海洲へ奪はれる始末と成るのである、吾輩が膠州灣を悲觀するのは斯樣な理由からである、莫大な保護金があつてさへ青島の悲觀說は左樣の次第で有るのに、貧乏なる我邦が青島を占領した場合は如何なる方法で經營するで有らうか、兩參年を出でざる中に草原と成つて仕舞はねば良いがと心配して居る次第である、夫れに反し龍口は前に述ぶる如く地の利に於て優勝な地位に立つて居るのであるから、港灣の設備に少々の資財を投ずるのと、背後の鐵道組織を完了せしむるに於ては、吾輩は信ず龍口が北清第一の良港と成り保護金無くても獨立獨步で芝罘天津を凌駕するに到る事は火を睹るよりも明らかであると想ふのである。

▲龍口と龍濰鐵道　前章述べた如く芝罘は港灣として頗る不完全の者で有るのみならず、背面が高地脈に據て取り圍られて居て煙濰線の如きも布設が困難であるから、寧ろ夫れを改めて、濰縣驛から龍口迄の新線を布設したいと想ふので有る今回山東省内に優越權を認めしめた我邦が龍口を政治上勢力範圍下に措くのは勿論龍濰鐵道の布設權をも我が掌裡に收めなければならぬのである、然し迂濶なる吾輩が紙上に於て箇樣な議論をして居る内に實際に於ては我陸軍は巳に軍糧運搬の爲めに龍口から萊洲を經て濰縣に達する我軍の進行道路へ輕便鐵道を布設して居るかも知れぬ、若し幸にも巳に軍用輕便鐵道が布かれて有るとしたならば、營て安奉線に用ひたと同樣の方法を適用して、速やかに本鐵道に直して貰ひ度い者である、此鐵道さへ出來れば、我關東洲と山東は勿論河南、江蘇等とも直接交涉の通ずる樣に成る譯であつて、双互頗る便利な事に成る次第である。

（八）山東に於ける我優越權

本論が中央公論紙上に顯る可き十一月一日頃は已に我征獨軍が膠州灣を占領して居る者と信ずるので有るが、全體今回の我邦の征獨行爲なる者は宣戰の告文にも有るが如く、獨逸が有する東洋の勢力を根柢から驅逐し去り東亞百年の平和を求めよふと言ふの趣旨で有るので、たゞ渺爾たる青島を陷落せしむるを以て滿足すべきでは無いので有る、少なくとも彼れが山東省內に有せる總ての者を一拭し、其無形の權利と、有形の財物たるとに論無く、一應吾人が夫れを相續仕樣ふと謂ふのである（他日支那へ還附するとせざるとは全く別個の問題である）、山東省內に有る獨逸の遺産と謂ふ者は、公然條約に據つて得た者と、條約に據らずして唯だ實力に依つて得た者と（秘密約款をも含む）。二樣の者を保つて居た譯である。又た同じ公然の條約に據て得た者の中にも二種類の別がある。

▲（第一）　は千八百九十八年三月に取り結んだる條約に依つて得た者、即ち青島の租借地（附屬物全部）、膠濟鐵道及附屬の支線（設備の全部）、鑛務公司の管理せる石炭坑事業の全部、（千九百十三年六月此鑛務公司なる者は山東鐵路公司と合併せり、兩公司共獨逸政府の官有なる事）勿論なり、

▲（第二）　は右の條約以後に於て青島政廳が支那中央政府或は山東都督等に對し屢々強請的に讓與せしめたる、鐵道布設權及鑛産坑區である、（前章山東の鑛産、及山東鐵道網條下參照）。鐵道布設中で緊要なりと目せらるゝ者は、開濟線、順濟線、正德線、高韓線（龍濰鐵道に接續の希望を以て濰韓線に改め度し）である、此獨逸遺産中の四線は早晚我邦の手を以て布設せざる可らずと想ふ。

公然條約を以て讓與せられたる特權で無くとも、獨逸が行使して居つた權利で支那政府が之れを默認して居つた者は、之れ又た當然遺産中に算入す可き者である、今實例を擧げて之れを論ずれば、恰も、日露戰爭後我邦は「ポーツマウス」條約の結果によりて、千八百九十六年幷に千八百九十八年の露清條約に據つて、

露西亞が滿洲に於て有して居つた權利を繼承したが、(北京條約)、其れと同時に露西亞が實力を以て(無條約)實行して居つた幾多の權利利益をも相續して居るのである、假令は營口舊鈔關の收入金取上、鴨綠江上流の採木權、間島の鑛山採開、安海線(後ちに安奉線と成る)、撫順炭坑線、南關嶺石材運搬支線、遼河牛船徵稅、之等の權利は一時我邦か相續して後に到り或は支那政府に還附した者あり、或は今日迄繼承して居る者もある次第て、今回我邦が山東省內に於て獨逸の有し居たる權利を繼承するに當ては、條約文の有無にのみ據る可きては無い、實際上に於て獨逸が有して居つた權利は遺產相續として其全部を繼承すべき者てある。近年獨逸は殆ど山東全部を我物顏にして居たから、取調べて見たら非常に澤山な權利利益が彼所此所に落ち散つてあるので有らうと想ふのてある、現に例を擧ぐれば、「支那本地人と雖も青島總督と合意に非ざる以上は山東省內に猥りに鐵道布設權を得る事が出來なかつた」。又た「第三國人には山東省內て絕對に鑛山採堀の權利を與へざるの權利」を持つて居つたらしかつた。

尙ほ吾輩は、獨逸が無條約で有して居つた各種特權の中へ、一種の秘密約款を加へ度いと想ふのてある、此件は今回遺產相續人として立たんとして居る我邦に執つては、頗る大切なる事柄てあると想ふ。

▲秘密借款　過る年楊子江沿岸に於て第二革命の破裂したる當時、獨逸は逸ち早く例の廕昌や、蘄都督、やらの手を經て、陰かに武器や糧餉を袁政府へ寄附し、又た長江の獨逸砲艦を以て革命軍を牽制した事は隱れも無き事實である、亂平ぐや親獨派の機關新聞は無遠慮なる賛詞を以て獨逸を謳歌し、「今次獨逸の好意は實に四百餘洲を累卵の危に救ひ、漢滿社稷を將さに崩壞せんとするに支へたのである、其功勞に對しては山東一省位は割讓しても差支へ無い」と謂ふが如き議論を揭げ一時外交界の話題と成つたと言ふ事である。此一事たゞ一條の滑稽とのみ見る事は出來ぬ、北京にある親獨派の意見は正しく夫れに一致して居るのである。

其後に到り中華民國の代表者と云ふ資格で顏惠慶、袁總統の倅と云ふので袁克定、兩人前後して謝恩使の意味て伯林へ使者に立つた事がある。其時伯林ては非常な款待をした後て「カイザル」は時の當局者をして左の如き意味の事柄を申出したと言ふ事て有る。

獨逸は六國借款の規定に拘束せらるゝ事無く、其以外に於て支那政府の財政を援助すべし、猶ほ今後袁總統に對して反逆的行動を執る者がある時は其與國たると支那内地人たるとに係らず其危害から袁氏を保護すべし、故に其代償として中華民國政府は山東省内に於ける獨逸の行動に付て一層の自由を許可すべし。先づ其例として（第一）山東省内の教育界へ獨逸語を入るゝ事と成し度し（第二）山東省内に於て學堂、病院、教會堂、商事會社、商品陳列所、製造所を創立するの自由を與ふべし（第三）第三國が山東省内に於て不動産に關し、或設備を爲す行動に就ては支那獨逸兩國間の合意に非ざれば許可せざる事と爲すべし、（第四）支那商民が山東省内に於て新たに鐵道を布設し鑛山を開採せんとする場合は青島總督と地方廳と合議に非ざれば許可せざる事と爲すべし、（第五）山東省に關する借款は如何なる種類に係らず他の與國人と契約するを得ず。

右の如き「カイザル」の希望は其後ちに到り、英國の西藏條約、露國の庫倫條約締結と相前後して、（幾分利益均霑の意味で、）遂に獨逸は非公式に申出して一條の秘密條約を結んだと言ふ事である。

吾輩は終りに臨んで、猶ほ重ねて言ふ、我邦今回の征獨事件は決して青島の陷落、膠濟鐵道の占領などを以て滿足するのては無い、東洋平和の爲めに、兼て獨逸が山東省全帶に亘つて振つて居つた横暴の勢力を驅逐し、縱令ひ暫且にせよ、又た永久にせよ、我は正當なる遺産の相續人として彼が保有して居た、有形無形の所有物を繼承するのである、尚ほ此機會にして利用し得らるゝとせは、從來我同胞と淺からぬ關係の有つた山東を通じて、將來に於て河南、山西、安徽、江蘇、

など中央支那平原の利害圏に向て觸れて見たいと想ふのが希望で有る。（終）

經濟學上より 國產獎勵說を駁す

法學博士　堀江歸一

一

三十年程前、吾輩が小學校にて學びたる讀本に青砥藤綱が滑川に一文の銅錢を落したる節、數文の松明を點じて、之を拾ひ取りたりと云ふ談を揭げ、松明に拂ひたる錢は何時までも通用して、天下の通寶たれども、水中に沈みたる銅錢は藤綱に拾ひ上げられざれば、其儘埋沒して、世上の用を爲さゞる可く、藤綱の所業は世間の爲めに、自ら損失して、天下の通寶を生かしたる善行なりとて、之を稱揚したる一章あり。小學校の先生亦其意を敷衍して、貨幣の尊き所以を說明したる爲め、小供心に藤綱を崇拜し、自分も他年同樣の機會に接したるときには、必ず藤綱の所業を學びて、世間の用を爲さんと決心したることありき。貨幣を以て、唯一の富なりとする重金主義の見地より論ずれば、藤綱の如き、誠に稀世の卓見家にして、小學讀本に揭げて、後世に傳ふるに足る可しと雖も、近代の經濟學說に據て判斷せんか、彼は畢竟貨幣以外に富あることを知らざりし僻見家の亞流なるのみ。貨幣の富たるが如く、松明も亦一箇の富なる以上は、貨幣を得る爲めに、之に數倍する富を消耗するの愚なりしや論を俟たず。近年の小學讀本には幸に藤綱に關する記事を見ず、白紙の如き小學兒童の腦裡に重金主義の誤謬を印せざるを得るは、喜ぶ可しと雖も、如何せん經濟學說の知識普及せざる我國の官民間には、藤綱流の僻見者流多くし

て、一方に大正新政に相當す可き政策を施す可きことを揚言しながら、他の一方に於ては、依然として復古的思想を以て、當今の政策を律せんとする者少なからず。

往年日露戰爭の際財政當局者の間に我國金貨準備の將來を憂慮するの餘り、金貨準備を擁護するには內國に於ける金の產出高を增加するを必要とするの說を生じ、內國の金採掘事業を奬勵する爲めに、當業者を保護するの政策行はれたることあり。金貨本位制度を擁護する爲めに、內國に金貨の存在するの必要あるは明白の事實なれども、其金貨たる、必ずしも內國に於て採掘精錬せらるゝを要せず、唯一國は外國に對して有利なる國際貸借の關係を維持し、必要に應じて、外國より金貨を吸收するを得るを以て足れりとす可きのみ。試に英國金貨本位制度の鞏固なる所以を一考せよ。其鞏固なるは、英國が國際貸借上、常に有利なる地位に居るが故にして、英國に金の產出せらるゝが故に非ず、否英國は今日一オンスの金塊すら內國に於て產出する能はざるなり。我國が營利事業として存立する能はざる金採掘事業を保護するに力を致せば、或は多少の金塊を內國に於て採掘するを得べしと雖も、若し此事業保護に要する資金を他の方面に運用し、金以外の富を增殖するの計を講ぜんには、外國より金を吸收して、以て所期の目的を達するに難からざるや知る可きのみ。如何なる犧牲を供ふるも、金を內國に產出するは、國富を增殖する所以、國益を舉ぐる道なりとして、國資を以て收益の乏しき金採掘事業を奬勵するは、即ち藤綱流の僻見にして、彼の日本興業銀行が政府の命令を奉じて、波佐見金鑛に莫大なる資金を融通し、其回收意の如くならずして、銀行の營業に大破綻を招きたるは、偶々以て藤綱一流の經濟思想が我國の經濟社會に災禍を及ぼしたるの一資料とす可きなり。

近時世間に國產奬勵の名を以て喧傳せらるゝ議論の如き、吾輩の見る所を以てすれば、藤綱一流の思想の現出したるものとせざる可からず。朝野官民の有力者

は國產獎勵の目的を達する爲めに、國產獎勵會なる團體を組織するの計畫にして、頃日其趣意書草案なるものを發表したるが、吾輩は之を通讀して我國に復古的經濟思想の跋扈すること依然として甚だしきを嘆せざる能はず。草案の冒頭に曰く「我國の產業は維新以來長足の進歩を爲したるものあるも、未だ以て歐米諸國と比肩するに足らずして、內國產と同種の物品及び內國生產の望ある物品と雖も、尙ほ其供給を彼に待つもの甚だ多きは寔に慨嘆の至りなり」と。我國產業の發達今日の如くにして、一方に內國產と同種の物品の外國より輸入せらるゝは、外國品が內國品と比較して、其品質に於て優良なるか、代價に於て低廉なるか、將た又品質の優良に加ふるに代價の低廉を兼ぬるかの結果にして、又內國生產の望みある物品にして、外國より供給を仰ぐは、畢竟內國に生產に望ありながら、內國の生產を以て、充分に內國の需要に應ずる能はざるの結果に歸せざる可からず。思ふに國產獎勵を目的とする團體の組織せらるゝは、今日を以て嚆矢とす可しと雖も、政府が此趣意を以て、實際の政策を律するや、既に久しきものあり。國產獎勵策の最も强く實現せられたるは、即ち近年の關稅政策にして、往年恢復の緖に就きたる關稅權が再度の條約改正に依て、我國の掌裡に歸するや、政府は內國產業保護の目的を達する手段として、內國產と同種の外國產物若しくは將來內國生產の望ある外國產物に對しては、其原料品たると、半製品たると、將た又既製品たるとを問はず、課するに重率の輸入稅を以てし、殆ど遺漏する所を示さゞりき。近年外國輸入品の代價が內國市場に於て著しく騰貴したるが如き、畢竟重率なる輸入稅が原價に加重せられて、內國消費者に負擔を轉嫁しつゝあるものに外ならず。既に斯く輸入品の代價騰貴したる以上は、內國に代用品の存する限り國民は內國品を消費し、以て輸入品を排斥するに至る可き道理なるに、事實は斯の如く爲らず、外國品の輸入は滔々底止する所なく、年額一億圓に近き輸入超過を見るに至るは何故なりや。此事たる、要するに輸入品は代價騰貴したりと雖も、

其品質優良にして、優に代價の高貴なるを償ふに足るを以てなり。粗惡にして廉價なる物品と優良にして高價なる物品と並び行はれ、國民は其孰れをも需要するを得る場合には、國民は代價高低の程度と品質優劣の程度とを考量し、自己の認めて、以て實價の低廉なるものを取るは當然の道なり。我國に於て今日外國輸入の物品を購ふときには、多くの場合に於て高價を支拂ひ、一方に之に代る內國品は或は外國品に比較して廉價なることあるも國民が尙ほ內國品を好まざるは、表面に於て廉價なるもの、實質に於て必ずしも廉價ならざるの一事に由來するものと云はざる可からず。

二

或は我國に於て前年來關稅率を改正し、外國輸入品に對する稅率を加重するに當り、內國稅に何等の增徵を施さゞりしならんには、關稅率の增課は能く國產獎勵、內國產物偏重の用を爲したるやも未だ知る可からず。然るに我國財政當局者の無謀なる、一方に內國產業保護の目的を以て、輸入稅を增徵しながら、他の一方に於ては內國稅を增徵すること殆ど常軌を逸し、各種の國產は其原料品たるときと、或は其既製品たるときに、常に苛重の租稅を賦課せられ、隨て其當業者は稅金の負擔に當る爲めに、國產の賣價を引上ぐるの手段に出でたり。近年我國の一般物價が大に騰貴したる原因は固より一二に止まらず、財政策の方針宜しきを得ずして、內國の通貨の膨脹しつゝあるが如き、其原因として有力のものたるを失はずと雖も、同時に各種の租稅殊に消費稅が物品の原價に加重せられて、代價を騰貴せしむるの事實を否定す可からず。茲に於てか我國の保護關稅策は輸入稅の增率に依て、外國貨物の輸入を排除するが如くにして、他の一面に於ては、內國消費稅の增徵に依て、內國物品の代價を騰貴せしめ爲めに保護の効果を減殺しつゝあるものと云はざるを得ず。內國物品にして品質粗惡なるも、代價低廉なるの結果、實價に於て結局低廉ならんか國民の需要を博するを得べしと雖も、品質の粗惡なるに加ふるに、內國租稅政策と一般財政策とに於ける過誤に基きて、實

價必ずしも低廉ならざるに於ては、國民が品質と代價とを對照したる後に、實價の高下を判斷し、以て外國品を需要するは當然の數と云はざるを得ず。

國產獎勵論者は此睹易きの理を覺らず、我國民が輸入品を需要するを以て、國民が徒に外國品を尊崇するの性僻に基くものなりとしたり。即ち趣意書草案に曰く「外國と貿易を開きしより國人は輸入品の新奇精巧なるを悅び、爭うて之を用ひ、遂に內國品は外國品に及ばずとの感想を生じ、商品を稱揚するに舶來上等の語を以てし、歐文の標識なき物品は世人の注意を惹くに足らざるに至らしめたり。此風習にして依然今日の如く爲らば、無用の輸入を增加し、內國生產の發達を阻害するは當然の理にして、豈甚だ憂慮す可きに非ずや」と。舊幕時代和蘭の貿易業者が舶來品を搭載し來れる當時又は維新開國の當初、輸入品の種類極めて寡少にして、然も我國民の眼に慣れざりし時には、或は國民は輸入品の新奇精巧なるに眩惑し、其實價如何を考量するに先だち、自己の主觀的價値を付して、之を買入るゝこともありたる可く、其後に於ても斯る風尙の存續するを免かれざりしが如しと雖も、今や內外國の交通の密接にして、內外國民の來往の頻繁なる、比隣も亦啻ならず苟も外國品を購入する資力ある者は多く相當の知識を備へ、內外貨物の品質の優劣、代價の高低を商量し、孰れが實價の低廉なるやを識別して、以て需要の方嚮を決定す可く、單に外國品たるの故を以て其新奇なるに眩惑して、之を買入るゝ者ある可からず。國產獎勵論者は我國民を以て、內外國產物の品質を識別するの能力を供へざること恰も南洋の蠻民と異ならざるものとするか。斯の如きは論者自ら我國民を誣ひ、又我國民教育の効果を蔑するの甚だしきものに非ずや。殊に論者が「無用の輸入」なる文字を揭げたるが如き、彼等の思想の如何に固陋なるやを示すの一端とせざる可からず。社會に產物の生產せらるゝ、必ず之に對する需要の存するが爲めにして、既に需要ありて、之に應ずるの必要あり生產せらるゝ以上は、世上に無用の貨物あることなし。輸入品に就ても亦然

り。論者は外國より輸入せらるゝ貨物中、奢侈的消費に供せらるゝ目的物を以て、無用の輸入品とするものなるか。論者の意の存する所大凡そ此邊に外ならざる可しと雖も、斯の如きは漫に奢侈を憎みて、却て奢侈的消費あるが故に、人の勤勞を刺戟し、勞働の効程を增進するに至らしむるの妙用を閑却したる愚說と云はざる可からず。既に奢侈的消費に屬する外國品の供給は無用の輸入にして排斥す可きものなりとする以上は之に代用せらる可き內國品の生產亦有害にして、排斥の理由の存すること勿論なるに、論者は無用の輸入は之を不可なりとしながら、內國に於て代用品の生產せらるゝこと即ち無用の輸入に代りて、無用の生產の行はるゝことは之を奬勵せんとするものゝ如し。然らば彼等は輸入品に對する代價は外國に支拂はるゝも、內國品に對する代價は內國に支拂はるゝを以て、其貨物が奢侈品なる場合にても必ずしも憂ふるに足らずとするものなるか。「無用の輸入」なる語に對する解釋斯の如くなりとすれば、國產奬勵論者は即ち此數文字の內に、最も露骨に重金主義の僻見を表白しをるものと云はざるを得ず。論者にして既に此信念を有する以上は、何ぞ國產奬勵と云ふが如き假面を掛けずして、彼等の認めて、以て有害なりとし、不利なりとする貨物の輸入を禁遏するの議を唱へざる。心中輸入の禁遏を希望しながら、四圍の情勢に顧慮し、國產奬勵の美名を借して以て隱約の間に目的を遂せんとするが如き、手段拙劣、心事醜陋なりとせざる可からず。

國際貸借又は外國貿易の理論より云はんか、一國は自國の外國に賣る所のものを以て、外國より購ふ所のものを支拂ひ、外國より收む所のものを以て、外國に支拂ふ所のものに充て、斯くて出入、收支共に均衡を保つを得るなり。我國が連年輸入超過の狀態に居るは、一方に政府が多年外債を募集し、外資を輸入し、輸入超過に對する支拂の資金を供しつゝあるの結果にして、政府が外債政策を廢棄せんか、輸入超過の勢は自然に抑制せらるゝのみならず、我國の如き國際貸借の關係上、債務國の地位に居るものに於ては、結局輸出

超過の狀勢を招致し、其超過額に依て、外國に負ふ債務を決濟するに至るや論を俟たず。今日我國の經濟社會に於て憂ふ可きものありとすれば、其は外債政策濫行の一事にして、輸入超過の如き畢竟此政策の餘殃に過ぎざるのみ。國産獎勵論者は單に輸入超過なる外形の事相に驚駭し、而して此事相を惹起すに至れる根本の原因に就ては、何等言及する所あるを見ず。彼等が國産獎勵、內國品偏重の運動に狂奔しつゝある一面に於て、政府が非募債主義を厲行するに誠實ならず、或る機會に於て外債を發行したりとせんか、彼等の運動は水泡に歸し、輸入貿易の旺盛なること依然として舊の如く爲らんのみ。加ふるに國産獎勵論者の運動効を奏し、國民が彼等の言說に惑はされて實價の高貴なる內國貨物を重用するに至らんか、爲めに國民の生活費は膨脹し、製造工業の生産費は加重し、外國市場に於ける我輸出品は競爭上不利の地位に陷り、輸出增進の勢を阻害するに至るやも未だ知る可からず。斯の如くにして國産獎勵論者は能く自家の目的を達して、輸出入均衡の効果を擧げ得たりとするや、吾輩の疑を懷く所なり。

三

粗製濫造は我國産業界に於ける一大缺點なりとせざる可からず。從來我國當局者は此點に就て當業者を戒飭し、製造品の精製を勸奬したること一再に止まらず。國産獎勵會亦此意を承け、趣意書草案に於て「生産者の狀況を察するに、時勢に應じて、進歩改良を圖り、信用を重んじて、粗製濫造を戒むることに於て、未だ遺憾あるを免かれず。是れ生産者の最も其意を致す可き所なりとす」と云へり。然れども假に國産獎勵論者の運動奏効したりとせんか、國民は內國品と云へば品質の粗惡、代價の不廉は之を閑却し、其內國品たるの故を以て、進んで之を需要するに至るものと認めざる可からず。斯くて內國製造業者は能く內國市場を獨占し、他に品質の優良にして、又代價の低廉なる輸入品あるも、毫も其競爭を蒙らざるを得るものとすれば、何ぞ自ら進んで貨物の品質を改良し、其供給を制

限するの必要あらんや。多々益々粗製の貨物を濫造し、以て內國市場を獨占したるの利益を貪るは當然にして、此點に於て躊躇する者ある可からず。此時に當て、百の國產奬勵會ありて、物產の品評展覧を行ひ、或は物產に關する講話を試み、當業者に產物の改良を慫慂するも、彼等營利の念は之を容るゝを許さゞるなり。「競爭は進步の母なり」と云ふは、吾輩が小學校時代に青砥藤綱の經濟學說と共に、小學讀本に於て學び得たる敎訓にして、藤綱の學說は誤謬なるも、此敎訓は今日に於て依然眞理たるの光輝を失はず。國產奬勵論者の如きは、競爭を絶ちて、一方に我國產業の進步を期せんとするものにして、斯の如きは母を失ひて、孤兒を發育せしむるの難きと異ならず。國產奬勵論者は三十年前の小學讀本に於ける有害なる敎訓を記憶し、一方に有益なる敎訓は之を忘却して、以て當世に處せんとするものにして、逆施倒行の譏を免がる可からざるなり。

過日波多野宮內大臣が帝室御料品には自今勉めて內國品を取り、外國輸入品を避く可きの趣旨を述べて、下僚に示したる訓諭は何人の意に出で、又何人の筆に成れるものなるや、之を知らず。或は國產奬勵會と相呼應して、內國產貨物重用の風を盛ならしむる爲めに、宮內省自ら他に範を示さんとして、此擧に出でたるものなる可しと雖も、吾輩は之を以て、無用の配慮とせざる能はず。宮內大臣にして內國品を御料品に充つるの可なると認めたりとすれば、宮相は宜しく自己の職權內に於て之を爲す可し。吾人民間に居る者は斯る頑迷なる宮相あるが爲めに、宮內省が殊更に粗惡なる物品に對して、高價を支拂ふの不經濟なるを指摘し、宮內省に新時代の經濟思想の注入せられざるを嘆ぜんのみ。然も宮相の爲す所此一事に止まらず、下僚に與へたる訓示を世間に發表し、自己の爲す所を範として、國民亦勉めて內國品を消費す可しと云ふが如きは、國民の經濟生活に無用の干渉を加ふるものにして、吾輩は之に從ふ可き理由を見出す能はざるものなり。殊に波多野氏が訓示の冒頭に於て、正貨流出、貿易不均衡

を憂ひ、之を匡正する爲めに、御料品として內國品を需要するに至れりと云ふが如き、訓示をして當今の時弊と相緊聯せしむるの意なる可しと雖も、正貨問題と內國品消費殊に宮內省に於ける內國品消費の問題とは何等密接なる關係を有するに非ず。宮內省が假に一切の輸入品を排斥したりとするも、輸入貿易を抑制し、正貨支拂の高を減却するに幾何の効果あるや、知る可きの數なるのみならず、更に一般國民が宮相の下僚に與へたる訓示を誤解し、殊更に實價の低廉なる外國品を排斥して、其高價なる內國品を需要せんか、正貨問題の解決に不良の影響を及ぼすに至るは、前論に依て明なる可し。吾輩は英國に於て、時のロード、チエンバーレンが經濟上の問題に容喙し、宮內省を中心として、經濟政策を左右せんとしたる如き談を耳にせず。我國財政當局者が正貨問題解決の方策を誤まり、爲めに專心宮中の事務に戮力す可き宮內大臣をして經濟上の問題に干與するに至らしめたるを遺憾とすると共に、宮內大臣が宮內省自ら率先して、內國品を需要すれば、正貨問題の解決に資するを得るが如くに考へ、下僚に示したる訓諭を世間に公にし、世人をして自己の所爲に從はしめんとしたるの擧動をも遺憾とするものなり。

四

今日我國の國民生活に於て、國產奬勵の必要を訴へつゝあるの方面ありとすれば、吾輩は其軍器軍需品供給の一事に外ならざることを擧げざる可からず。從來の如く我國に於ける軍器殊に軍艦製造の能力大ならず、同型同種の軍艦を急速に製造せんとする場合に、其一部又は大部分を外國會社に託するの狀態を以てして、國民は果して有事の日に安んずるを得るか。軍器製造の獨立を期する以上は、同時に其材料の製造、技術者の能力に就ても亦外國に對して獨立することを期せざる可からず、露國は今回の歐洲戰爭に會して、兵器軍需品の供給を我國に仰ぐ爲めに、武官の一行を派遣したりと云ふ。我國の如き亦戰時同樣の處置に出でざる可からざるのみならず、平時に於て外國に供給を

求むるもの少なからず。斯の如くして能く國防計畫を完成したりと稱す可きや否や。今回の歐洲戰爭に於て、交戰諸國が經濟政策上、最も苦慮したるは、戰時に於ける食料品の供給を完全にし、以て其代價の暴騰を抑制するの一事に外ならざりき。獨逸の如き平生農業保護の目的を以て、外國輸入の農産物に重率の輸入税を賦課し來れる國なるに拘はらず、穀物の供給意の如く爲らず、其代價の騰貴を抑制するの必要より、幾多の專制的手段を施したり。英國は其海軍を以て能く獨逸の海軍を壓迫し、開戰と同時に殆ど完全なる程度に於て、海上權を掌中に收めたるが故に、今日に於ては海外より食料品の供給を得ること略ぼ平時と異ならざるが如しと雖も、尙ほ開戰當時保險料の暴騰に困惑したるもの少なからざりき。是等の實驗は歐洲諸國に如何なる教訓を與ふるか。國際間の戰爭の避け難く、而して戰時に於ける物資の供給杜絕して、爲めに國民の生活を壓迫するの大弊害なるに於ては、國家は平時に於て物資の供給を安全ならしむるの計を講ぜざる可からず。内國に於て農産物の增收を得て、以て食料品の供給に就て、自足的狀態に居ること露西亞の如き國は此問題に深き關係を有せずと雖も、他の諸國に於ては國産の增收か、物資の貯藏か、將た又海上權の掌握に基く通路の安全か、三者の一に據て、以て國民をして安んずる所を知らしめざる可からず。斯の如くして歐洲戰後に食料品に關する國産奬勵論の勃興を見るは、之を想像するに難からざるなり。

國産奬勵論者にして條理に基ひて、自家の主張を爲さんか、之を爲すの餘地あること斯の如し。彼等の主張此方面に出でんか、吾輩亦彼等と共に問題の研究に當るを辭せずと雖も、彼等の主張信念共に復古的經濟思想に胚胎し、大正時代の青砥藤綱を以て任ずるに於ては吾輩は全力を擧げて、彼等を攻擊せざるを得ざるなり。國産奬勵論者中、自家の所論を實行する爲めに、國民愛國の衷情に訴へんとする者あり。斯の如くなれば、國産奬勵の事たる、經濟上の問題に非ずして、修身道德の問題たらざる可からず。而して修身道德に重

んず可きは躬行實踐の一事にして、此一事を閑却したる修身道德の談は遂に何等の用を爲さず。國產奬勵論者は口に國產の奬勵せざる可からざるを言ふと共に、自ら國產を重用しつゝありや否や。彼等の日夕乘用する自働車は輸入品に非ざるか、彼等の着用する洋服地は英國產に非ざるか、彼等は獨逸製の玩具、白耳義製の銃砲を兒孫に與へざるか、彼等はシエフヰールド製の洋食器を使用せざるか。吾輩は敢て彼等の斯る輸入品を需要するを難ずる者に非ず、唯彼等平生輸入品を愛好しながら、他に向つては國產奬勵の急を說き、言行一致を缺きて顧みざるの態度を笑ふのみ。往年日露戰爭の起るや、三四の實業家は我國正貨準備を擁護するの一策として、各自の所有する金杯、金時計金指環の類を日本銀行に寄託す可きことを主張して、同志の間を勸誘し、又現に品質不良なる金杯類を日本銀行に持込みて、日銀當局者を苦しめたることありき。然も今日現實に我國正貨準備を擁護せざる可からざる時に臨んで、彼等は何事をも爲さゞるに非ずや。一時の熱情に驅らるゝ者の行動の信ず可からざること大凡そ斯の如し。又一昨年時の山本內閣は輸入超過抑制の一策として、宴會の席上に三鞭酒を飲用することを制止す可しとし、閣員の主催し、又其出席する宴會には、日本酒を以て、主客交歡したることありき。然も斯る兒戲に類する輸入抑制策は三鞭酒の泡と共に消へて、何等の効果を奏さゞるに非ずや。彼の熱情家なるものが自家の感情を以て律したる經濟政策の實用に適せざること幾多の實驗に依て、之を證明ずるに難からず。今、大隈內閣の下に案出せられたる國產奬勵論なるものが金杯準備論、三鞭酒不可飲論と同樣の末路に接するや、論を俟たず。固陋無智の輩が世間を騷がすの罪亦大なりとす可し。吾輩の如き同學の士と共に、經濟學を研究し、國民の經濟思想を啓發するに微力を致すること玆に年あり。然も邦人經濟思想の幼稚なる今日の如く、經濟學說は毫も世人に理解せられず、却て之を無視し、蹂躪する政策の横行を見るに至つては、一方に吾輩の努力の足らざるを嘆ずると同時に、他の一方に於て、

外國同學の人士に對して、深く耻づるの念なき能はざるなり。

時局概觀

島田三郎

端なくも歐洲の天地に、俄然風雲を卷いて有史以來の大戰亂を惹起した。

事の起るは起るの日に起るに非ずして、因て來る所あり。今回事の意外に起れるに就ては、世界の人々をして太しく吃驚せしめたが、審に其由來を繹ぬれば、其原因は極めて遠きにある。單に其直接の原因のみにても、過去二十年以來の事蹟は歷々として幾多見ることが出來るが、是等は總て歷史の方面に讓り、今は多くを言はぬことゝする。殊に之に關しては時局の初より新聞雜誌が逐一報道せるが故に、時事に眼を注ぐ人は、大抵其經歷を知悉し居るべきを以て、多くを言ふの必要はなからうと思ふ。依て此處には主として特に日本に關する事蹟を擧げ、之に對して其影響並に將來の結果に就て論述することゝしよう。先づ此には勝敗に關する假定の要目を擧げ、之に豫想の結果を附言して議論の端を啓かうと思ふ。

現在の戰は、獨墺對露佛英白の聯合軍にして、更に東洋に位する我國が之に參加し、實に古今未だ曾て見ざる大戰である。獨墺敗るゝか、聯合軍勝つか、今や戰鬪正に酣て、其終局の結果は、豫め確言することは出來ぬが、玆に假に獨墺二國が露佛英白の聯合軍に勝ちたる場合と、聯合軍が獨墺兩國を根柢より打破りたる場合とを豫想し、其結果は歐洲大陸に如何なる變化を生ずるであらうか、余は此二箇の假定に就て、其變

化を想說して見やうと思ふ。

先づ獨墺の勝利を得し場合を豫想せんか、佛は二等國、若くは其以下に降り、英は現時の世界的勢力を失ひ、露はバルカン半島に於ける威力を全く失墜するのみならず露領波蘭は折れて獨に入るであらう、白は其中立は勿論、恐らくは事實に於て獨立の地位を保ち難かるべく、又此戰に參加せざるも、地勢に於て唇齒輔車の關係ある和蘭は、獨逸の準領地と化するであらう。斯くして獨は其勢力を北海の濱に及ぼし、對岸の英國は常に其脅威を受くるであらう。墺は獨の勢力に依り戰捷國の側に立つのであるから、其の地置は安全なるべきも、限りなき野心を抱けるカイザルは、表面墺に對して對等の禮を執るとするも、事實に於ては墺を頤使し、墺の名に依てバルカン半島を支配し、墺は勢ひ獨の指揮の下に立つことゝなるは勿論、斯くして獨の直接領土は、露の一角を併せて、東北に膨脹し、更に手を南東に伸べて、多年病床に呻吟しつゝある篤疾の土耳古をして、其麾下に餘喘を保つに過ぎざらしめ、

其餘勢は延て波斯領に及ぶであらう。即ち歐洲大陸は、北は北海の濱より、南は波斯灣に至るまで獨逸帝國の旗風に靡くことゝなり、餘國は遙にカイザルを仰ぎ瞻て、纔に現狀を維持し得るに過ぎぬことゝなるに至らん。歐洲方面の此の如き大變化を受くると共に、他方に於ては、佛の亞弗利加亞細亞の殖民地は勿論、蘭の印度領及南洋の諸島も同樣の變色を地圖の上に呈し、左しもに强大なる英領も、本國既に北海方面より獨に脅かさるゝことゝならば、焉ぞ從來の如く諸殖民地を保つことを得ん。此の如くならば此戰に參加したる我が帝國は如何なる危險に瀕するであらうか、殆ど想像に餘りあるのである。加之此戰爭に全く參加せざりし合衆國も、果して現在の狀態を保ち得るか。大野心家の心理狀態は、權力を得れば得る程野心が增加するものである。多年南米に手を下しつゝあるカイザルは、合衆國のモンロー主義を打破して、米洲に其威力を伸ばすことを躊躇せぬであらう。其際に至り、合衆國獨り晏然たらざるを得ぬのは當然の結果である。斯く將

來の變化を豫想したならば、獨逸の戰捷は悚然として恐れざるを得ぬのである。

之と反對に聯合軍勝ちたりとせんか、先づ墺は其戴く所の舊名族たるハプスボルグ帝家の名殘を留めて、其地位を全く失墜し、其雜然たる集合人種の帝國は、恰も箍を解きたる古き桶の如くに破摧するを免かれず。バルカン半島は、勿論露國の勢力の下に歸し、伊太利に接するアドリア海方面の領土は伊に合併せられ、舊波蘭領は露に入り、匈牙利は獨立するか、否らざれば其内部の人種に依て更に細分せらるべく、若し殘り留る獨逸人種が一團となるも、其領土は極めて小區域となるべきを以て、現時の墺匈國は茲に瓦解するに至らん。

獨逸はウヰルヘルム第一世帝の明識と、文武の名臣ビスマーク及モルトケの努力に依り普魯西に統一せられたが、未だ十分融合しない聯邦的の帝國であるから、一たびカイザルが其勢力を失ひ、威名を墜すに至らば、今日の帝位を有つこと能はずして舊聯邦の姿に立戻るのみに止まらず、其領土の或部分は露に割かれ、佛に奪はれ、白に入ることゝならん。斯くして白耳義、和蘭の獨立は確保せられ、今日まで獨立國として强國の間に齡せられざりしルクセンベルグも其中立を保つて現狀を維持するであらう。

茲に於て歐洲の二大帝國は地圖の上より抹殺せられて、更に大を加ふるは第一に露國であつて、第二は佛國である。其他伊及白も其領土を增すに至るは當然である。英國は歐洲に於ては別に領土を獲得せざるも、海外の獨領は、大部分を占有するに至るであらう。其結果、露佛は歐洲に於ける勢力を加へ、英は無競爭の裡に海外に利益と勢力とを得ることゝならん。此間に於て我が日本帝國は、勿論聯合軍の參加者であるから、獨墺の破るゝことを希望する。是は單に聯合軍の參加者として此結果を希望するばかりでなく、單獨に日本の運命に就て考察しても、聯合軍の勝利を事實の上より切に希望するのは大に故あることである。試に其理由を略論せん。

之に就ては先づ獨帝の人と爲りと、獨逸國民の氣象とを論評する必要がある。現皇帝ウヰルヘルム第二世は、我明治二十二年に即位せられ、本年に至るまで二十六年間、其宿望を成就せんが爲め、斷えざる奮勵と努力とは、實に感ずるに餘ある程であつた。帝は才能に富み、力量勝れたる人にして、又一種の理想を懐ける非凡の人物である。此點から言へば確に一種の人傑と許すべき長所性格を有する人であるが、之と同時に危險の性質を帶びたる大なる野心家である。又二十世紀の進歩的思想と折合はざる一種の迷信を懐ける人物である。迷信とは何ぞ。『ホーヘンツォルレン家の君主は、天の特寵を受けたる家柄である。國民を支配するの權利は、他より受けたる者に非ずして、天の寵命に依て君臨するなり』と。斯く信ずるが故に、此思想を表するの言動をなして、屢ゝ人を驚かしめたことがある。此迷信は、自己の力が伸びれば伸びるだけ大となり、近時に至つては自ら世界を支配する使命を有すと信ずるが如き擧動が時々現はれる。要するに天性の專制君主である。君主神權説は中古の專制君主の信念であつて、是が爲には歐羅巴諸國は夙に君民の間に不安と不幸とを生じ、其結果君主神權説には非常の變化を來し君主神權説を打撃した進歩的思想は歐羅巴に瀰漫し、今日に於て君主神權説は前代の遺物として、何れの國にも認容されぬ。然るにウヰルヘルム二世は依然として此君主神權説に夢囈たる意見を主張せられて居る。而して此誤まれる信仰が、今日までの侵略主義、獨裁主義となつて總ての方面に現はれ來つたのである。又此思想を實現せん爲には、武力を第一の必要條件とするが故に、軍國主義を確持することゝなる。其性質は勢ひ驕慢となり、自ら傲りて他を輕んずる。驕慢の性質は一轉して排他の性質となる。更に其慾望を充す爲には、狡計威力を忌憚なく用ゆるの必要となるから、政策に虚誕多きは免かれぬ數と言はねばならぬ。

天性力量あり、才能ある君主が、大權を擁して最上の位に居り、加ふるに此性質、此氣象を忌憚なく用ゆれば、其餘勢を其近臣及官僚に及ぼして、同一の氣風を在朝の人々に與へ、延て國民一般に普及するのは勢の必然である。獨逸人は皆同一の氣風と云ふのは許評であるが、天性強勁なる獨逸人が、帝の此氣象に感化せらるゝものも亦因縁あることで、現時の獨逸人が殆ど他國民を凌駕して、特別の宿命ある國民であると思ふが如き擧動のあるのは、獨逸人特有の氣象と、帝の感化と、二者の融合せる結果ではあるまいか。此點に於ては獨逸の君民共に、往古の猶太國の君民と餘程類似の點がある。

此性質は過去三十年間、各方面の國際的事件に種々の影響を與へたが、先づ日本に對する主なる事件を擧ぐれば、世人も洽く知る如く、日清戰役後の三國干渉も、是より來つたのである。三國干渉の表面の活動者は露國であるが、露國をして此活動をなさしめたる發意者は獨逸であり、特に獨逸の主權者である。而も其際に於て突如として世界の耳目を聳動せしめたのは彼の所謂黄禍論であつた。是が東洋一般の大不利益となり、特に日本の一大迷惑となり、今日尚各方面に傳喧して、北米合衆國や英領等に於てまで日本を排斥するの因となり、所謂排日熱となつて日本の

當然の權利を阻碍し、日本の自然の發達を妨ぐる源となつて居るのである。

獨逸の日本に與へたる不利益は之に止まらぬ。啻に日本に與へたばかりでなく、實は東洋に幾多の波瀾を生ぜしめたのも、カイザルの野心の影響である。世人の知る如く明治三十年十一月獨逸の舊教宣教師二人、山東省に於て支那人の爲に虐殺せらるゝや、之を口實として膠州灣の一角を占領し、東洋に於ける獨逸の根據地を造つた。此地は獨逸の多年垂涎せる所なるが故、縱令彼の宣教師が虐殺せられずとも、早晩或る機會に於て、略奪せらるべき運命にあつたのである。遠く溯つて考ふるに、我明治二年三年の間に、獨の地質學者リヒトホーヘンが支那の各地を測量し、山東省の有利なる地方なることを知り、其著書に詳說して之を公にして居る。明治二十九年獨の巡洋艦隊長チルピッツ少將は、其艦を膠州灣内に乘入れて詳細に測量し、之を本國政府に報告し、次で獨逸政府はキール港の海軍技師フランチエースを派遣して築港の見込を立てさせた。斯くして山東を取らんとするの志望は愈々確定したのてあつた。恰も其翌年のことである、例の宣教師虐殺事件が起つたので、獨帝は待ち儲けたる機會到來と、欣喜して此憫れむべき宣教師の虐殺を迎へたのが事實である。其際に於ける獨逸の暴戾なる、忌憚なき處置振は、阿弗利加の蠻族に對すると殆ど擇ぶ所はなかつた。然るに此時に於て、世界の列國は默然として一語をも發せず、支那非分割、保全論を繰返して喋々たる合衆國さへも、之を默認したのである。見るべし彼等の支那保全論なる者は、總て是れ自家の利益を土臺とせるものなる事を。一面には又自己の敵とするに不利益なる强國の爲す時には一言の反對も唱へず、其爲すが儘に任すと云ふ所の、彼等の心理狀態も能く見えるのである。斯かる有樣で、東洋諸國は西洋諸國の我儘なる侵略に其運命を委せなければならぬ樣な形勢となつた。左れば彼等の所謂黃禍論は、我儘なる言ひ條で、寧ろ世界は白禍に苦められつゝあると評せねばならぬ。

東洋人の迷惑は、是れだけでは止まらなかつた。獨逸の暴戾は他の方面にも其の反動を釀成し、一層深く且つ痛ましき結果を現はした。即ち其後僅か三年を經て、北京を中心として義和團の擾亂が起つた。是は實に獨逸の暴戾に反動した所の暴擧である。彼の暴動は無智の徒を無識の指揮者が煽動したのであるが、其中には一點諒とすべき理由がある。外國人が力に任せて弱者を凌轢する事實を屢々爲せしが故に、外人攘はざる可らずと云ふ、唯々此單純なる一念よりして彼の擾亂が起り、總ての外國人を掃攘せよと言へるが如き粗暴なる擧に出でたから、北京に居りし各國の人は、悉く危險の運命に陷つたのである。當時日本は人種の異同を問はず、暴は討たざる可からず、亂は鎭めざる可らずとの意見と、且つ國の接近せる便利に依て、多數の軍隊を派遣して此亂を平定し、諸國人を危險の裡より救ふた。此時に於ては日本の勃興を目して黃禍と唱へた所の獨逸も、我邦と步調を共にして團匪の鎭定に向つた、無智蒙昧なる團匪は、總ての外國人を敵としたのであるが、就中怨の府としたのは獨逸人てあつた。其理由は彼れの人種的區別が極めて露骨であつて、

支那の民族を侮辱し、近くは膠州灣を强奪した記憶も新てあつたから、各國人皆殺傷せられたが、中にも公使の殺害せられたのは獨逸公使ケットレルのみであつた。此一事を見ても如何に獨逸を怨むことが深かつたかが分る、又團匪の起れる直接の動機は、獨逸の行動に對する反動に出でたる暴擧であると言はなければならぬ。又一面には獨逸の暴戾の爲に、各國人が危險を受けたのであると云ふことも出來る。

禍は是れのみには止まらぬ。此暴動を鎭めんが爲に、滿洲方面に出兵せる露國は、亂鎭定せる後も依然之を駐屯せしめて引返さぬ。日本は前約に依て兵を撤し、且つ露國に對しても其撤兵を促したが、露國は期に至るも之が實行を肯ぜず、却つて日本を脅かすが如き態度に出で、樽俎折衝を以てしては滿足なる回答を得ざりしに依り、終に露國に對して戰端を開くに至つた。若し團匪の亂無かりせば露國も滿洲に出兵せず、出兵せざれば日露の戰も三十七年に起らなかつたであらう。膠州灣の簒奪無かりせば、團匪の亂も起らなかつたであらう。斯く考て見れば獨逸の東洋に加へたる暴戾が、間接に日露の戰を惹起するの因となつたものと見ることも出來る。尙他に日露の戰を惹起するに至らしめた補助力とも認むべき重大なる一事がある。

今回の戰に於ても見らるゝ如く、露國は久しくスラヴ對チユートンの勢力競爭に勞した其競爭場はバルカン方面であつた。而して露が西方に勞する間は、東方に力を伸ぶることが出來ず、東方に力を用ゆる間は西方の手が弛むから、獨逸が其勢力をバルカンに扶殖し、進んで手を土耳古に加へ、尙波斯にまで勢を張らうとの手段を回らすに當つては、露國をして力を西方に用ひしめず、之を東方に向はしめんとの秘策を胸中に描いたのであつた。現に日露戰爭の起るに先つて、獨帝は露帝と會見し、露帝に對して、貴國若し東洋に事あらば、我は決して露境を脅すが如き擧をなさず、確く中立を守つて平和を保つべし、西方を顧ずして十分に東方に活動せられよとの意を漏らした。露の日本と戰ふの意を決したのは此の保障があつたからであらう。此點から考察すれば、三國の干涉及び日露の戰の起れるは、隱然獨が露を使嗾した爲めとも解釋し得られるのである。今回の歐洲の大戰は、塞比亞對墺地利の紛騷に事端を發したのではあるが、是も後に說明する如く畢竟獨の露を脅かせしより生ぜしものなることは決して空想の說ではない。

日本の獨逸より受けたる迷惑は、斯く度重つて居るが、獨帝が多方面に向つて趣味を有せらるゝ如く、其野心は又各方面に現はれて、列國の不快を受けたことは一再に止まらない。明治三十二年のトランスヴアールの事件も其一である。あの事件は雄傑セシルローズが其の部下のジェームソンをして一部の壯士兵を引率してトランスヴアールを侵さしめた。トランスヴアール共和國の大統領クリユーゲルは之と戰つて其大部分を捕虜とし、大に英國の殖民地代官セシルローズの擧を非難し、倂せて英國をも非難した。此報一たび獨帝の許に達するや、帝は快哉を叫んで直ちに祝電をクリユーゲルに寄せた。クリユーゲルは歐洲に於ける一大强國の君主の同情と後援とを得たるを喜び、之に由て一層の勇氣を得、

終に孤弱たる小共和國を以て、英帝國と戰を開くに至つた。英國は獨帝のクリューゲルを煽動したるを大に不快とし、意を鋭くしトランスヴアール討伐の軍を送るに至つた。トランスヴールは勇敢に防戰したが、終に敵する能はずして敗軍するに至つた。是に於てクリユーゲルは嚮に祝電を寄せられたる關係より、萬一の希望を懷いて歐洲に渡り、獨帝に見えて仲裁の勞を乞はんとしたが、獨帝は彼を引見せず、之を拒絶した。此事は全く獨帝の輕卒と、事を好むの結果、憐むべしクリユーゲルをして其犧牲とならしめ、トランスヴアール共和國をして滅亡するに至らしめた。若しジエームソン事件の起りし時、獨帝の祝電あらざりしならば、クリユーゲルは或は英國と戰ふまでの決心をもなさず、從つて彼の戰爭も起らざりしやも知れず、共和國も滅亡を免かれしやも知れぬ。若し又獨帝が周到なる思慮を以て、此共和國を援け、英國の勢力に對抗すべき決心ありしならば、後にクリーゲルの謁見を求めし時、快く引見して其義俠の心を勵まし幾分なりとも有利の條約を以て局を結ぶことに力を盡さなければならぬ筈である。然るに初めは煽動する如き態度を示し、終りには引見することさへなさずして、始終執るべき道を執らなかつた。其結果殘る所はトランスヴアールの悲憤慷慨と、英國の獨に對する不快の記憶のみとなつた。

獨帝は又東歐より西亞を巡遊し、土耳古帝を訪問して、國威日に衰へ、悲運に陷りつゝある土帝を慰めた。久しく諸國より疎外輕侮せられて居る所に、圖らずも歐洲の覇王たる獨帝が訪問し、甘言を得たる土帝は非常の喜びを以て之を迎へ、兩者の間に種々の約束が成立つたのである。其中には兵を取立つるならば士官を貸すべし、兵器が必要ならば兵器を用立つべし等の內約もあつたらしく、其報酬として獨逸はバグダツト鐵道の敷設權を得ることゝなり、是が爲には英露の二國を少なからず驚かした。次で明治三十九年にはモロツコ事件を惹起して、佛と衝突した。佛は英の同情を得て纔に獨の强罰を斥くるを得たが、而も全く報酬なしには收まらずして、佛は阿弗利加に於けるコンゴーの或る部分を割いて獨に與へた。此の如く諸國を凌轢侮辱して、武力に依り自國の主張を遂げたのは、極めて無理ではあるが、威力の成功一時の成功と言はねばならぬ。

最後に起つたのは今回の戰爭の主なる原因となつたボスニア、ヘルツエゴビナの事件である。是は非常に著明なる事實で、是等の小邦が土耳古より離れた時には、伯林條約に依て半獨立國となり、主權は土耳古に保たしめ、監理權は墺地利が握ることゝなつた。而して此條約は、若し之を更へんとする時は、諸國の認諾を要するの基礎の上に立つたものである。然るに一九〇八年（我明治四十一年）墺は之を諸國の協議に附することなく、墺の首相が一種の狡計を弄して露を愚弄し之を墺國に合併した。茲に於てボスニア、ヘルツエゴビナの不平は勿論であるが、露の不平も同一の熱度であつたから、先づ之に抗議を挾んだ。獨帝は直ちに親簡を露帝に送り、若し露にして墺の爲す所を不滿とし、之と戰ぶならば、獨に同盟の誼に依て露を敵とするの意を示した。露帝は此暴慢なる

威赫を憤慨したが、日露戰爭終局後僅に三年、其創痍未だ癒えず、兵力は萎靡し、財政は紊亂し、國情は分裂し到底獨と戰ふの力なきを以て、怨を呑んで之を默視するの已むなきに至つた。露帝の胸中、定めて往年獨帝に使嗾せられて日本と戰ひしを悔ゐられたであらうと察せられる。之に反して獨帝は、我が策當れり、露をして東方に疲らしめたり、今に及んで何事をや爲し得んと、密に笑みを漏らしたであらう。

而して今回の變亂は、實に是が原因となつて居るのである。見よ墺は同盟の國なり、墺にして塞比亞と戰はゞ我れは墺の後援たるべしと言つた、其語は縦令七年前に言はれたにせよ、同一の事件が今年再び繰返さるゝに當つては、勢ひ前言を履まざるを得ぬ。若し之を履まざりし時は、獨墺の關係は玆に斷たれて、其同盟は破壞せらるゝことゝなるのである。而も爭の起りはボスニアの都に於て、墺皇儲の暗殺せられしより出でたるのであり、其事柄は塞比亞人の關係せる事であり、而して墺が之を懲さんとするに當り、露は塞比亞を援けて動員した。此の如き關係であるから、獨は勢ひ墺を援けて露に向はねばならぬ事となつた。唯々七年前に於ては露に戰備なかりしが故、獨の威嚇效を奏せしも、爾後數年間、露は往年の鬱憤を晴さんが爲め、戰備を整へて機會を待つて居つたのであるから、獨の再度の威嚇は効を奏せずして實力の爭となつたのであつて前年露を威嚇せし事が今回の戰の原因となつたのである。往きに其の威嚇の奏効せしは露を東方に勞せしめ、日本と爭はしめたるに由るのであるが、今日に至ては是等の狡策と、侮辱と、我儘とが度重なれる結果、諸國の怒を激成することゝなつたのである。故に事件は今年突發せる如くであるが、其由來は遠き以前より蓄積されたる者なることは明白である。要するに獨は其威力に委せて諸國に敵を作りたると、獨の志を得るは列國の迷惑となりたる結果、此大戰となつたのであつて、斯かる大戰爭は人類の爲め非常なる慘禍であるが、是も故なく起れるにはあらずして過去の獨逸の誤れる政策が、斯かる惡結果を現はしたるものと謂ふべきである。

獨帝の野心よりして關係ある諸國は勿論、無關係の諸國に對する影響も決して尠少ではない。殊に近時の憂は各國の軍備擴張の競爭である。此競爭の發動も、主として獨逸が其根源地であつた。列國皆然りと言ふてはないが、英は屢々此制限を適當の程度に定めんと試みた。獨帝は即位後夙くも『獨の將來は海に在り』と宣言した。是は實に英國に對する海軍競爭の宣言である。爾來獨帝は鋭意海軍の擴張を圖り、又殖民地の獲得に力めた。斯くして極力英と競爭し、殆ど國力を傾けて迅速に海軍の擴張を計つたが、獨の富は到底英に及ばず、之が爲め苛斂誅求となり、下層民の生活を壓迫した。國内に社會黨の投票數の殖えたのも、一は

是が原因である。英國は富に於ては獨の上に在りと雖も、此競爭には大に苦められ、內治改良派の平和論者は切に是が爲に租稅の增加するのを憂へた。特にリベラル內閣は、國民生活狀態の改良に意を用ゐたから、何とかして海軍の費用を增加するを避け、財政の整理をなさんと努めたので、獨逸に勸めて兩國の製艦の數を制限し、調和すべき案を立てんと試み、之に就き二回までも獨逸と交涉したが、獨は斷然之を拒絕し、少しも應ずるの色が無かつた。

玆に於て平和を主義とするリベラル內閣も、餘儀なく獨に備ふるの必要を感じ、他國が一の海軍であるならば、英は少くとも一・六の割合の海軍力を維持すべく決定した。海軍大臣チャーチル卿は、議會に於て此決意を說明し、獨が海軍を擴張するのは侵略か然らざれば贅澤の爲めである。何となれば獨は海外に多くの殖民地を有せぬ故に、殖民地の保護としては左程大なる海軍を必要としない。又獨の海岸は遠淺であるから、他國の海軍は大なる軍艦を岸邊に近く進めて攻擊することは出來ぬ。故に獨逸が自衞の爲に海軍を要すとするも、決して大軍艦の必要を感ぜぬ。然るに大軍艦を迅速に建造するのは殖民地獲得の爲か、侵略の爲か、此點より觀察すれば、英は自衞の爲め海軍の擴張をなさゞるを得ぬ。好んで爲すに非ずして自衞の必要上已むを得ざるに出てたるなりと言つた。即ち獨の英に對する挑戰的擧動は、英國をして餘儀なく海軍擴張を爲すに至らしめたのである。之が爲め他の列國も亦海軍の擴張に鋭意することゝなれる結果、各國租稅の增加となり、下層民の生活壓迫となつた。其根源地は獨逸であり、其發頭人はカイザルであると云ふ決して誣言でない。

想ふに獨帝は斯く信ぜらるゝてあらう、平和論は弱者の空論である、弱者が己れの力足らざるが爲め、此論に依て自ら慰め、自ら安に居らんとするのてある、併ながら事實は實力是れ權力である。理、非理は議論に非ずして實力の勝敗に依て決せらるゝと、此の如き信念を有つて居らるゝが如くに見える。其列國を凌駕

し、屢々侮辱を加へ、又詭計を用ゐて得々たるの状は、確に勝てば非理も理となるとの信仰より出でたものて、此點に於ては國際に倫理なしとの信條を懷いて居るが如くに見ゆる。帝の言動は道義を重んずる者の心には、折合ひ兼ぬる事が屢々ある。『朕は家名に依り、又天命に依て權力を得たるものにて、民に得たるに非ず』との旨を演説せられ、是が爲め物議を釀し、此の如きは立憲君主の言に非ずとの反對論が國内に起り、囂々の聲が止まなかつた。玆に於て前首相は帝の言は、如何なりとも、是れ帝の責任にあらず、輔佐の臣、帝をして此言を發するを制せざりし責任を有すとの辯解をなした事さへある。又前に述べた義和團を鎭定するの遠征軍を派遣する時に當り、帝は軍隊に向つて『我が公使を殺せる支那の無禮を懲す爲に支那人を殺戮せよ、支那人を威嚇し、仰いで獨逸人を視せしむる勿れ』と演説して其軍を送つた。斯くして他國の領土を略奪するのが暴か、抑も之に反動して暴擧に出でたる者が暴か、何人が之を斷ずるも、同等の責任若くは挑發者に對して重き責任を負はせるであらう。殊に暴力を以て山東の一角を奪ひ、其反動の爲めに獨公使が害に遭ふや復讐として多くの支那人を殺戮せよと云ふが如き訓令を出し、事の理非を顧みざるが如きは、全く條理を解せざる言動である。又帝は嘗て軍隊に向つて『朕の忠實なる軍人は、汝の父が社會黨員となりて朕の命令に背く時は、朕の命令を重んじて汝の父を殺すを拒む可らず』と言はれた。是は極度の服從を軍隊に命ぜられたのではあらうが、斯かる言語は苟も一國の至尊の口より出すべき事ではあるまいと思ふ。要するに帝は二十世紀には容れられざる、中古の專制君主の典型である。カイザルは實に己れの力量、、己れの才能に誇り己れの爲す所は悉く合理のものなりと慢心して居られる如く見える。

故に内外の政務に於ても、十分に思慮を積まず、輕卒に事を決せらるるの弊がある。往々大國の君主に似合はしからざる、常識に外れたる擧動、粗忽なる行爲を爲すことがある。其一例としては日露戰爭に於て旅

順の陷落せし時、獨帝は乃木、ステッセルの兩將軍に對して同樣の勳章を贈られた。是は攻むる者も、守る者も、共に軍人の能力、義務を最高度に盡した者と觀察して贈られたのであらうが、其中には兩國の歡心を得んとの機心もあつたものと見える。乃木將軍は其攻擊陷落の功によりて本國にも絶大の名譽を施したが、ステッセル將軍は本國に於て軍法會議に附せられ、不名譽の人となつた。其時に於て獨帝より贈られた勳章は如何に之を處すべきか、ス將軍も定めて是には當惑せられたであらう。斯かる事は深慮ある人の爲すべき業ではない。

前にも述べたるが如く、帝は決して尋常の人ではない。內政に、外交に、軍務に、藝術に、哲學に、宗敎に、何事にも通じ、何事をも談ず。殆ど百般の事に興味を有し、往くとして可ならざるなき、多才多能の人であるが、惜しむべし自ら其才に眩惑せられ、之を適當に用ゆるの方法を失ふことがある。又父祖の遺業を受け、生れながらにして大帝國の君主となれるが爲め、俗に謂ふ苦勞人でない。ビスマークは稀世の英雄であるが故に、權力を得るに從つて極めて思慮深き進退をなした。武を以て帝國を建設したが業成るの後は平和を維持するに意を致し、或る一國を敵として武を用ゆるに當つても、餘國を悉く味方に附けんと努めたのである。例せば初め墺と戰ふに當つては、佛の中立を確保し、佛と戰ふに當つては露墺の中立を確保し、斷えず英國の歡心を失はざることに努めた。故にビーマーク在官中は、復讐の念盛なる佛の英雄ガンベッタも、策の施すべき隙も無かつたが、ビスマーク斥けられてより、帝の爲す所は着々諸國の怨を買ひ、終に今日の時局を惹起す樣になつたのである。

概評するに今日の獨逸は、ウキルヘルム一世及ビスマークの遺業に依て、遽然として大帝國となり、更に物質的文明の進步を來し、着々各方面の成功を見るに至つた。此好運の機に際して、滿身唯々功名の氣に溢れたる現皇帝は、近代の物質的文明の精髓を最も多く武事に應用し、中世紀の專制的氣風を以て、詐術の外交、權力の濫用、排他的思想に依り、其爲さんと欲する所を爲した。

帝の此氣象は、啻に其一身に止まらず、其君主たる位置と、境遇とが、之を國中に傳播して、恰も往古の猶太人が神の選民として他邦人を凌駕すべき宿命ありとの信念の下に動けるが如く。獨逸人は天下を橫行し、且つ獨逸國民たる肩書を有する人民は、世界に抵抗者無きが如き虛榮心に駈られて、帝の此危險なる思想を制せんとする者も無く、又其力を有する者も無い。偶々反對の意見を有する者あるも、其地位に立たざるが故に、聲を潛めたる結果、國として動く場合に於ても、帝と同一なる步調を取つた。此思想は平和の時にも着々發現したが、殊に今回の如き戰亂に際しては、最も明白に現はれた。中立の無視、非戰鬪員の虐待、私

有財產の掠奪、占領地の市民に對する賦課金、古跡古物の破壞、柔鼻彈の使用、是等は皆最近の國際慣例に於て許さざる所、其或る者は明に國際盟約の禁ずる所である。然るに獨軍は各地に其暴戾を恣にしたとの電報頻々として達するのである。勿論吾々の日々受取る電報は、同盟軍の側より來るものが多いから、其中には誤聞なきを保せぬが、併し中古以來世界の名跡として、人類の共有寶物として認められたる或る建造物の焚毀せられたことは誤聞でない。現に獨逸側より出た電報には、此建物を戰爭見物に用ゐたから燒いたのだと說明して居る。又羅馬法皇は、此加持力の舊寺院の燒毀せられたのを憤慨して、天罰免れずと言つた電報を見れば、古寺を燒きたるの一事は、最早や誤りなき事實と斷定して差支ない。歐羅巴諸國の人々は、土耳古が歐洲を侵せし時、暴戾を逞しうせしを以て、東洋人の人道を無視し、恐るべき者なりとの例とし、又遠くは成吉思汗の軍が歐洲に侵寇して、殺戮を恣にしたる事を回想し、東洋人は文明の破壞者なりとし、之を以て東洋人を共に齒すべからざる人種なりとの例證の資料とせられたが、今回獨逸が罪なき弱者を凌虐し、世界の共有寶物を破壞し、歐洲文明の特產物と誇れる國際公法を無視せるの事實は、正に現今の文明時代に、中古の蠻民の所業を實現せしものである。

元來白人種には他の人種に向つて道德上の責任を有せずと言へるが如き我儘なる思想がある。彼等は土耳古人が回教を信ぜざる者に對して、回教徒は道德上の責任なしとせるのを怪しからぬ事と咎めるが、現在獨逸人は縱令名のみにもせよ基督敎國の歐洲人に對して、道德上の責任無きが如き行動を敢てし、更に有色人種に對しては最も忌憚なく振舞ふかの如く思はれる。此の如き思想を有する獨逸人が、科學を應用せる各種の兵器を巧に運用して、世界を橫行することになつたならば、二十世紀の文明は、文明の產出せる利器の爲に破られて、往時の蠻族を再現するに至るであらう。今回の大戰は、確に白人種の驕傲心を戒むべき天譴なりと見るべきであるが、特に獨逸人は第一に此警戒を受けねばならぬ。

此點に於ては我が同盟國の英は、外觀に於ても極めて進步せる道を採つたと言ふて宜からう。今回の戰亂に際し、英は決して好んで其渦中に投じたるに非ずして、最後に至るまで平和に盡力し、寧ろ迂潤の如くに見えた。墺塞の國交破れ、露は動員をなし、之に對して獨が最後の通牒を發するに至るも、尙英、佛、獨、伊、墺を列ねて調停會議を開き、何とかして調和の方法を講じたい、不幸にして戰亂免れずとせば、戰局を限りて他に其慘禍を及さないやうにしたしと希望し、佛は之に應ぜんとしたるも、獨は頑として之に應じなかつた。此時に於ても英は尙決せざる者の如く獨と交涉を續け、在伯林英國大使ゴーシェンは、獨の宰相ホ

ルウエヒと會し、『佛と戰はゞ之を如何にせんとするか』と問ふた。ホ氏答へて『佛を破るも佛の領土を削るの意なし』と。更に『然らば其殖民地は如何にするか』との問に對しては明確なる答をしなかつた。茲に於て英は獨の佛國殖民地に意ある事を知つたが、尚戰意を決するに至らなかつた。而して更に白の永久中立を尊重すべきや否やを質問せるに、ホ氏は『白に兵を入るゝも戰終らば其地を返し獨立を毀けぬ』と答へた。茲に於て獨は中立を破るの決意あるを確め、漸く戰意を決したのである。英の宰相アスキス及外相グレーは、議會に向つて是等の經過を報告し、我が英國の保障せる白の中立を破らるゝも、我れ尚起たずんば信義を如何せんと結論して、茲に宣戰を布告するに至つた。此經過を見ると實に忍び能ふ限りは忍びて平和に孜々たるの跡は最も明白に見ゆる。勿論此中には多少外交的駈引もあるであらうが、順序は整然として一絲亂れず、平和の爲に盡したるの事實は疑ふべき餘地がない。

元來英國は平和論の盛なる國である。又極度まで言論の自由なる國である。故に擧國一致を見るは極めて困難なる國柄である。而も內には最近まで愛蘭に內亂の兆あり、外には數千里を距てゝ各所に殖民地を有し、特に印度の如きは數多の異れる種族に依て立てる殖民地であるから、此大帝國をして一致せしむる事は至難である。百餘年前佛國の革命に反對し、引續き那破翁に反對したる戰爭に於て、平和論者並に政府反對黨は、革命は佛國の內事である、英國が之に干涉するのは無益であると唱へ、有名なる大政治家ホックス等の如きも此の如き議論をした。其後クリミヤ戰爭の際に於けるブライトを初め、著名の政治家の反對說は、今に名說として記憶されて居る。支那に對する戰の時もコブデン等の强力なる反對ありて、爲に政府黨は少數となり、議會解散の後初めて戰爭を繼續することが出來る樣になつた。トランスヴァールの戰の時には、現今の藏相ロイドジョーヂの如きは最も强く反對した。斯く數へ來ると、過去百年以內の戰に於ては、一として擧國一致を見ることが出來なかつたが、今回の戰に於て

は、議會は非常なる感動を以て充され、擧國一致の稀なる例を示した。縱令內閣員中にモーレー及バルンズの辭職ありしとは言へ、殆ど無言の裡に其倚子を去り、特に此戰に力を入るゝ人を迎ふるの素地を作つた如くに見えるので、擧國一致と言ふを妨げぬ。此の如き例は英國の開戰をなせる內閣に於て先例なき事である。特に加奈陀及濠洲より義勇兵を出し、戰費を献じ、軍艦を提供する等、非常なる敵愾心が各殖民地にも瀰漫した。更に印度の士兵を出陣せしむるのみならず、印度の諸侯が義勇兵に加はりたるが如きは、英國の殖民地悉く一致して母國を援くるの實を示すもので、英國に取りては非常なる成功である。

元來加奈陀は、或は合衆國に併せらるゝ恐れがあると言ひ、或は印度には外侵內應の危險があると說き、人をして英國の地位を疑はしめた。若し他の强國が英の殖民地を窺はゞ頗る危險である如く感ぜしめたが、今回の戰局に於て各殖民地が熱誠以て母國を援くるに至りたるは、獨り此戰に於て利益なるのみならず、英帝國の基礎の鞏固なることを表現せる者として、大なる成功と言はねばならぬ。是は如何にして得られたかと言へば、終始平和に力を盡したが、自衞の爲め已むを得ず劍を拔いて起つた。周密穩健なる手段を執つて、立憲的行動を爲したるが爲め、人心を歸服せしめた結果であると思ふ。而して此點に於て英獨兩國の君主及國民の氣風の相違が能く見らるゝのである。

之を要するに獨は敏捷の點に於て、果敢の點に於て、勇猛の點に於て世人をして驚嘆せしめたが、英は迂遠の如く、優柔不斷の如く、戰に於て前途を疑はしむるが如くに見えた。併ながら一たび意を決するや此の如き意外なる好果を齎した。是は平素の國民訓練の相違もあるであらうが、戰は好まざるも、避く可らざる戰は敢て避けずとの至理に基いた結果である。武を用ゐ、人を殺すも餘儀ない事であるから、好んで人を殺すに非ず、好んで戰ふに非ずとの、人生に最も尊き性質を體得することは、人心を服する最大根源である。古人の所謂『王者は人を殺すを嗜ず』との語は、迂遠に似

て迂遠てない。人を殺すは餘儀ない場合の事てある、決して嗜んて殺すに非ずと言ふことが眞の文明思想てある。

我國が今や此同盟國と一致の步調を取り、共に勝利の結果を得べき好望を有するの側に立つたのは、日本の爲め一大利益てある。前にも述べたるが如く、日本と次第に遠かりつゝある獨逸が、志を世界に得るのは日本の爲め決して利益てない。併し日本も好んで此戰爭に參加した譯ではない。英國が八月四日に戰を宣し、七日に日本の助力を求めて來た。それは同盟の誼に依り東洋に於ける海上の安寧を保つを依賴すとの請求てあつた。日本は盟約第二條に依り之に應じ、啻に海上のみならず、現に獨逸を敵とする以上は、敵の東洋に於ける根據地を其儘に置くは目前の不安てあり、又向來の不安てある。故に海上並に陸上の危險を除くとの主旨に依り、膠州灣を討つことゝなつた。是亦好んて戰ふに非ず、信義の上より出てたる結果て、名義極めて明日てある。義に依て立ち、自然の利益を得ることとなる、是れ國民の異論を斷つ所以てある。而して又露人の復讐心を解くに至つたのは是が副産物である。英國も定めて日本の信義には感激したてあらう、露國も日本の男子的愉快の行動には感喜したてあらう。現に獨逸より歸朝せる我が國人の談に依れば、獨逸に於ては最初日本は露國と戰ふてあらう、日本は露に怨を有するが故、露國若し兵を西方に送らば、必ず東方に於て露に酬ゆる所があるてあらうと信じて居つたらしい。露國も亦一時は斯かる懸念があつたであらう。然るに日本は意外にも同盟の誼に依り此戰局に參加し、其結果露國をして安んじて兵を西向せしめた。聞く所に依れば露の軍隊にして東方に駐まる者三十五萬、日本の態度決定せるに依り此兵を西方に向はしめ、殘れるは纔に國境守備兵のみ、老兵のみてある。左れば日本が少數の兵を東洋に用ゐた爲め、露國に對しては三十五萬の援兵を與へたと同樣の結果となつた。而して嘗て怨まれたる露國、嘗て日本と戰へる露國は、現に怨める獨逸と戰ひ、嘗て互に仇とし見たる日露は、自

然に融和することゝなつた。

茲に於て日本の東洋に於ける地位は安全となつたから、今後に於ける日本の態度宜しきを得、日本國民鋭意して國の進歩に努め、大に富彊を圖らば日本の勢力は益々張るに相違ない。是は今より言ふべき事ではないが、此戰局終らば海に於ては英國の勢力を増し、陸に於ては露國の強を加へ、世界の二雄國として西方に犄角の勢力を張り相對立するであらう。ダルダネールス海峽バルカン諸國の問題等に於て折衝を要するであらう此時に於て日本は英と親しみ、露と善きを得ば、此兩國は今後數年間專ら意を西方に用ゐざるを得ないが爲め、日本は東洋に於て飛躍する餘地が十分ある。若し日本が危險なる國として視らるれば、現時の友邦と雖も大に意を日本に注ぐであらうが、常に平和を喜び、已むを得ずして戰ふ、其戰ふに當つては國際公法を守り、義に依ては强にも抗すべく、而かも力に委せて弱を虐ぐるが如き事なく、文明の輔導者として世界の各國と併立し、壯快なる國民と認めらるゝに至らば、英は進んで益々我と親しむべく、露は倚て我が友となるであらう。然る時は日本の位置は極めて有望と言ふことが出來る。特に支那大陸に對して一大雄力の國となりて日本の協力を得ざれば支那問題を決する能はずと見認めらるゝに至るであらう。

併ながら是は實に日本國民の思想と行爲とに依て決定さるべき問題である。若し力を恃みて驕慢となり、我儘なる振舞を爲さば、左しもに强大なる獨逸が今日の窮境に陷れると同じ運命に立至るは當然である。此點より見れば從來の獨逸の行動は、大に我が國民の教訓となるのである。日本國民が之に鑑みて、總ての方面に文明的態度を取り、一には白人自尊の妄信を打破し、彼の排日熱の如きは根柢より之を芟り、人種的僻見を去り、日本人は實に平和を好む國民である、唯々已むを得ずして武を用ゆる。武を用ゆるに當つては强にも抗すべく、弱は虐ぐる者でないと云ふことを知らしむれば、日本の向來の發展は期して待つべきである。其一例として擧ぐれば、近く日本の手に歸すべき膠

州灣の如きは、獨逸の危險思想の紀念たる海陸の防備を撤し、日本の管理する純然たる商港となし、支那に文明を入るゝ一の要路と爲すが如きは今後日本の執るべき一の手段である。

更に今回の變に依り、餘りに多く外國の物品に依賴するの傾向を轉じ、內地の產業を勸め、平素の生活にも獨立精神の意義を及ぼす如く奮勵努力せば、東洋に於ける眞の文明國を現出すべき新紀元を開くてあらう、是が今日我國民の冀望てなければならぬ。

秋高く馬肥ゆる青燈親しむべく此書讀むべし

前東京高等商業學校長 坪野平太郎先生著

忽三版

快馬一鞭

本書は德望、人格當代に傑出せる著者が多年の蘊蓄を披瀝せる卓論也、劈頭筆を「臆病退治のまじなひ」に起し「善の押賣」に終る、其間極力青年の元氣を鼓吹し**心身鍛錬の極致**を說き、時**人物向上の要訣**を傳ふ、篇中「病魔驅逐法」は著者三十年來病弱の身を以て而かも今日健康を持續せる實驗談にして世の病苦に呻吟する者は一讀**復活の福音**に接すべし

著者の眞情全篇に流露し言々句々切々として讀者に迫る悉くこれ**不朽の大文字也**

時や秋、吾人が惰氣を一洗して眞摯の情に歸るの時也、希望に輝く得意の人も逆境に沈淪する失意の士も幸に著者の**達觀**に聞かば、頓悟一番、意氣颯爽**快馬に鞭**ちて**邁進**するの想あらん

■內容目次一般■

- 臆病退治のまじなひ
- 陰氣な人に與ふ
- 心神浮氣なものはない
- 病魔驅逐法
- 朝から澁面は眞平御免
- 性格鑑別の標準
- 吾人の大將學
- 人物を一定すれば人氣を一定す
- 學校卒業者の前途
- 根氣の濫用を避けよ
- 誤解せる獨立と就職難
- 青年處生今昔觀
- 嫁の心得
- 善の押賣
- 青年と地方自治（外數十）

中版三百十頁全一冊
總布上製最美本
定價金壹圓廿錢
◁送料金八錢▷

發行所 東京市本郷一丁目大通 日東堂 電話下谷四三六二 振替東京一二五五八

（中付一の一）

文學博士 坪内逍遙譯

好評再版發行

沙翁傑作集第六

ヹニスの商人

洋裝天金頗美本
寫眞版木版密畫數葉入全壹冊
金壹圓卅五錢
郵稅金八錢

劇を口にする者にして沙翁を說かざるはなく沙翁を說く者にして**人肉抵當裁判**法廷の場を知らざるはあらず**猶太人シヤイロツク女裁判官ポオシヤ**の名は**全世界**の人口に膾炙し小學生徒も之を知らざるを恥辱とす而も其**原作の完譯**は未だあらず少くとも其嚴肅なる**悲劇的底調**なる其輕妙**滑稽趣味**なる其幽婉**ポエトリー**を共に剩さず**雅馴明快**殆ど今日の**創作物**を讀むと一般**現代語譯**は本譯を以て始とす巧に**虛實**の**皮膜間**を縫ふ沙翁の靈腕は此譯によりて最も善く窺ふに足る骨は幾百年前の荒唐なるローマンスなれども作中個々の人物は**躍々**たる**肉塊**と現じて今尙鮮かに生命を有す沙翁喜劇の特質を最も善く代表せる傑作

【既刊】

1 ハムレツト
2 ロミオとジユリエツト
3 オセロー
4 リヤ王
5 ジユリヤス、シーザー

大好評何れも重版 ◉ 各壹圓卅五錢 郵稅各八錢

發兌 東京牛込早稻田 振替一一二三三番 早稻田大學出版部
東京神田裏神保町 振替五〇一一番 冨山房
賣捌 全國書肆

(中付一の二)

⦿全歐戰亂の活ける繪圖

錦鷄間祇候貴族院議員
渡正元閣下著

巴里籠城日誌

世界の大戰が產める稀世の珍書!!!

((新刊))

色刷地圖三葉色刷挿畫二葉光澤紙刷口繪四葉‖銅版ヂンク版肖像拓葉挿入‖大判美本三百二十頁

正價 壹圓二十錢 送料十二錢

噫呼！アルサスよ、ローレンよ、汝の名が感情的なる全佛國人民の血を湧かせるもの夫れ幾年ぞ。千八百七十年の獨佛戰爭が、今次世界大亂の遠因にして將た前提たるは何人も知る所、赤穗義士復讐の顚末を知らむと欲せば、必ず先づ殿中松の廊下に於ける淺野内匠頭の刄傷に遡らざるべからざるが如く、這般歐洲大戰の眞相を究めむとせば、又必ず獨佛戰爭の實狀を知らざるべからず、著者渡正元閣下は、明治初頭軍事研究の目的を抱いて歐洲に渡航し、獨佛大戰の際は恰も佛國に在りたるの人。他の同胞二名と共に、獨軍包圍の巴里城中に籠り、砲彈雨飛の間に、萬死を冒し、百難を忍び、具さに大戰の終始を細大洩らさず精寫して、大山元帥の手により朝廷に獻納せられたるもの本書となす當時朝廷は以て軍事外交上極めて有用の書とせられ、明治四年『法普戰爭誌略』と題し、兵部省に命じて有志の間に頒たれしと雖、今は散佚して其零本をすら得難し、弊堂深く此稀世の名著の全湮滅せんとするを憾み、茲に前古未曾有の世界大戰記念として、著者の修訂を乞ひ公刊す。日本人にして巴里籠城に加はりたるの一事、既に奇にして、邦人を以て普佛戰爭の詳細を實寫するの事、又眞に珍とすべし。況んや今次改版に際し、著者が當時歐洲より齎し歸られたる珍貴なる圖畫寫眞數十面を増補し、且つ舊著の如きも努めて舊態を損せざるやう精密に複寫して、生彩奕々たる内容の記事と相俟ち、まのあたり四十餘年前の驚心駭目すべき大戰を目睹するが如き趣味あらしむるをや。本書を以て彼の新聞切張りの一夜造り的際物と同視する勿れ。世界の歷史上、軍事上、眞に不朽に傳ふべき稀世の珍書は是れ。

東京牛込見附 振替東京一七一 電話番町五三七 東亞堂

(中付一の四)

今秋美術界の新運動を論ず

日本美術院の藝術を論ず

文學博士　松本亦太郎

日本美術院の創設せられたのは明治三十一年であつた。併し日本美術院派により代表せらるゝ繪畫の潮流は此時から始まつたのでは無く、其源泉は夫より更に十年も前に溯つて之を求めねばなるまい、日本美術院が谷中に設置せられて後は東京美術學校と日本美術院とは全然異れる二の敎育機關或は研究機關となつて居るが、明治三十一年迄は日本美術院の同人たる岡倉覺三、橋本雅邦、下村觀山、横山大觀、寺崎廣業、菱田春草、西郷孤月等の諸氏は即ち東京美術學校の日本畫科の中堅人物であつた、是等中堅人物が去つて以來東京美術學校の日本畫科は川端玉章、荒木寛畝、山名貫義諸氏の如き畫家が敎職の任に當り從來の日本畫科とは全く別人を見るの觀を呈するに至つた、今日の東京美術學校の日本畫科は明治三十一年即ち久保田鼎氏が校長になつた頃を起發點として現校長正木直彦氏時代は其組織が完成せられたものと見ても差支は無いだらう、さうすると創立以來明治三十一年に至るまで二十年間の歷史を有する東京美術學校の藝術上の血統は日本美術院の方に傳つて居る譯になる、其狀譬へば藝術上の嫡子が或事情の爲め本家を出て他に獨立の一家を立て、本家は他から養子を迎へ之を相續せしめた如きものである。尤も玉章氏は明治二十三年以來美術學校の敎授となつて其晩年まで同校に踏み止り又寺崎廣業氏

は美術學校に入る事になつたから本家を相續した養子は本家と血統上全くの他人と云ふ譯でもないが初頭以來の美術學校の日本畫の主たる流れは三十一年以後日本美術院の方に傳つたと謂ふのが正當であらう。さうして見ると日本美術院の藝術上の歴史は明治二十一年に東京美術學校が創立された時から始まつたと謂つても可い。

時に隆替はあつたが兎に角二十六七年の齡を有し漸次に發育して來た日本美術院の藝術は何を以て其重なる特徴として居るか、今日の日本美術院同人中には夫れ〴〵異なれる想念を有し、技巧を有して居る畫家が包括され且つ最近に於ては少數なれど洋畫家さへ其中に含まれて居るのであるから、美術院藝術の特徴を擧ぐると云ふ事は容易の事で無い。夫等畫家の製作を細かに觀察研究した上で無ければ漫りに立言する事は出來ないのであるが、日本美術院の藝術の源頭に於て暗々裏に理想とせられて居つた事が既に其藝術の流の上に實現されつゝあるにあらざるかと思はるゝのである。

美術院藝術の頭腦となつた人物は藝術家では橋本雅邦と狩野芳崖との兩畫伯である。芳崖畫伯は美術學校創立と時を同うして沒したが其見識は美術院藝術の上に大なる影響を與へて居る此兩畫伯と共に美術院藝術を形成する上に重大なる任務を負ふて居つたのがフエノロサと岡倉覺三の兩氏である。兩氏は藝術家でないが藝術の觀照家批評家として或は藝術家の伴侶として比類の稀なる天才で、殊に日本畫道の開拓に對しては卓抜なる識見と、經綸とを有して居つた。此兩氏は日本の繪畫は其畫道の由來が深遠であつて、非常に進んで居る美術であるから、將來に於て日本畫を研究復興し、此固有の美術の基礎を益固くし、而して其長所を益發揮せしむる爲め外國美術の長をも取つて行くのが可いと云ふ様な意見を有して居つた。芳崖と雅邦は日本畫に就て如何なる意見を有して居つたか其言説に就て之を探るより直に兩畫伯の製作に就て之を考察して見ると對外的の思想が二種の態度になつて現れて居る。第一は日本畫を洋畫に拮抗せしめんとして非常なる努力をして居る、第二は洋畫の長所を日本畫に參酌し新味のある一種の日本畫を作らんと企圖して居る。芳崖雅邦共に此兩方面を有して居つたが、孰れかと云へば芳崖は第一の態度に重を置き、雅邦は第二の態度に重を置て居つたので無いかと思はれる。日本畫を洋畫に對抗せしむる必要上より芳崖は數々極めて強い線を用ひ、又烈しい配色を用ひ時としては奇矯に走つて居る、或は狩野派の強い線と平安朝佛畫の強い色とを復活し更に之を誇大にしたと見られる様な作もある。晩年に此兩畫風を調和させ、洋畫の聖母懐妊の圖に對抗する様なものを製作したのがかの有名なる觀音圖である。雅邦は椽大の筆を揮つて居るが芳崖の如く圭角が多くない。雅邦晩年の作は洋畫の描法を捨離し温和なる狩野風に復つたが、雅邦は盛んに子弟教養の任に當

つた頃は寧ろ内外を融和せんとし狩野の格法を基礎とし之を補ふに洋畫の描法を以てせんとした傾がある。雅邦の描いた修身書の挿絵の如き畫などには隨分寫實的のものもある。兎に角芳崖と雅邦に重きを置いた方面が多少違つて居るが其狙つた所は古畫の描法を活用し洋畫に對して十分に拮抗し得る新生氣を之れに吹き込まんとしたる點に於ては全然一致して居つて、フエノロサ及岡倉覺三兩氏の唱道した所と調子が合つて居つた。

日本美術院藝術を發展せしむる上に於て芳崖、雅邦の兩畫伯とフエノロサ、岡倉の兩美術學者とは不離不即の關係を有して居つたが、此場合に於て美術學者は畫家の指導者となり、美術學者の見地から立てた標準に從ひ畫家をして製作せしめたのであつたか、或は畫家の製作が主となり美術學者は夫等製作を解釋し、製作其物の趨勢を明にしたものであるか、岡倉氏の如きは自己の考へて居る所を畫家に註文して描かせたなどゝ傳へられて居る事もあつて日本美術院藝術に於ける畫家と學者との關係は前二者の孰れが主になつて居つたか今之を明にする事も困難であるが、孰れにしても製作家と美術學者との間に想念なり技巧上なりに相互關係があり、美術院の藝術が之れにより影響された事は明かである。美術院の藝術が今日に至るまで單に技巧本位に流れずして想を尚び或る觀念なり理想なりを表現せんとして斷えず苦心して居る趣があるのは此關係に胚胎して居ると解して大過は無いだらう。繪畫は想の表現である見識ある畫を描く可きであると云ふ見地は雅邦、岡倉兩氏の養成したる少壯有爲の畫家により益明瞭にせられた。大觀、觀山、春草諸氏の一派が一時世間から觀念派と稱せらるゝに至つたのは之が爲めてある、其想念を表現するを得ば描法の如き必しも格式に據るを要しない、美術院藝術は頭で畫を描くのであつて腕で描くのて無い、從て其描法たる幻怪捕捉す可らざるものがある、世人が一時美術院派の繪畫を目するに朦朧體なる稱を以てしたるは之が爲めてある。院派の畫家は想を養ひ且其想を如何に表現すべきやに就き苦心をして居て、技巧を十分に練磨する遑を有して居らないと云ふ嫌は無いてもなかつた、併し院派の畫家は傳習に囚はれたる所謂技巧は恐く餘り重を

置いて居らなかつたてあらうが作家獨特の技巧を案出する事に就ては隨分工夫を凝らしたと認めねばならない。なほ美術院の藝術を考ふるに際し玆に注意すべき事がある、夫れは美術院の藝術は其起發以來既に數多の年所を經たに相違ないが將來に長く發展すべき繪畫の流れてあるから朦朧時代の業績を以て此流れの藝風の價値を判定するは當を得て居らなかつた、此時代の業績は院派藝術の一横斷面であるから、假令技巧に於て十分ならざる所があつたとしても其技巧の圓熟する時が他日到來するかも譯らぬ、既に其向つて居る方針が有望てあるなら、世人は之を皷舞奬勵して、其發達を期待すべきてあつた。朦朧體時代に美術院派の藝術を呪つた人が七八年を經過して後下村觀山氏や、菱田春草氏の圓熟せる技巧を見たら自已の不明に對し愧死せねばならないと感じたてあらう。文部省展覽會が設置せられて以來日本美術院一派に屬する作品は常に展覽會內に異彩を放つて居つた、想念及技巧の上から見て將來日本畫の新生面を開拓する如き資格の製作が日本美術院同人中から出た。大觀、觀山、春草諸氏を頭とし安田靫彥、前田靑邨、今村紫紅、牛田鷄村諸氏の如き壯年畫家は單に將來有有望なるのみならず既に日本畫壇に於て一家の格をなして居つて後進を暗々裏に刺戟、奮發せしめて居る。東都の畫壇は千紫萬紅てあるが日本畫の新生面を開拓せんとの抱負を有する點から見れば美術院同人は最も注意すべきものてあらう。

日本美術院派の藝術家と等しく將來の畫運を開拓するを其抱負として立つたのが京都の美術學校であつた、京都の美術學校派の藝術は日本美術院のとは大に趣が異つて居つた、夫れは日本畫の技巧を洗練する方に重を置き想念を發ひ之を表現すると云ふ樣な事に就ては煩悶して居らなかつた。是れは京都美術學校の前身たる京都畫學校の組織者中に岡倉氏やフエノロサ氏の如き美術學者が含まれて居らなかつた事に關係して居るだらう、田能村直入、岸竹堂、幸野楳嶺諸畫伯の如き藝術上の識見を有する大家が中堅になつて子弟敎養の任に當つたのであるが、學者的見地から美術の事を考ふる人物は居らなかつた、東京の美術院の一派に於ける如く藝術家と學者が共同的に働くと云ふ事が無い爲め、當時の藝術家の立場としては自然に腕を重んずる事になり筆力暈色の妙を得るに心を碎き頭よりも腕て畫を描くの趣があつた。京都畫學校には最初東西南北の四派を別かち諸派を網羅せんとしたのであるが最勢力を有するに至

つたのは四條派である、四條派の弱みは畫の淵源を直接に自然界に求むる所にある、觀念的の分子は然かく重をなさない、自然が畫家の心に生ずる情趣を描き畫面に於ける風致を潤色せんとするにある、而して最も重を置く所は自然の生動の趣を畫面に躍如たらしむるにあつた。竹内栖鳳、菊地芳文、山元春擧、谷口香嶠諸氏は京都美術學校の藝術を代表する中堅の畫家である、是等諸畫家は各畫塾を開いて多數の門下生を有するのであるが、玆には夫等門下の少壯有爲の畫家をも京都美術學校派の藝術家中に屬せしむる。日本美術院派の古畫の研究、觀念の表現を主とするに相對し、京都美術學校派の藝術は自然の描寫、技巧の洗練を以て其特色とした、將來の畫運の開拓を以て任して居る此京都美術學校派の藝術が日本美術院派の藝術と兩々相對したのは文部省美術展覽會に於てした。京都派の繪畫は技巧の優秀なる點に於ては文展内に横行闊歩したが、文展出陳の藝術を見て自ら反省して京都派の藝術は想に於て修養の未た足らざる所あるを切に感じた、京都派をして想の點に於て欠くる所あるを感せしめたるものは日本美術院派の藝術が重に之を刺戟したので、勿論京都の藝術には自ら守る所があるが、美術院派の藝術からは多少影響されたやうである。夫れは京都の少壯畫家中に識らず〳〵大觀の流燈を模倣し、春草の落葉や黒き猫を模倣し觀山の木の間の秋を模倣した者の如何に多かりしかを見ても解る。又四條派より傳來した畫風は淡雅淡彩を尙んだのであるが文展以來京都に裝飾的の畫風が漸次に現れて來た、これは或る度までは自動的に出たのであるが、一面に於ては觀山や春草や大觀などの影響が無いとは云はれぬ。京都の畫家を反省せしめ、或は少壯畫家に影響を及ぼしたのは美術院藝術の力ある所以で、此兩種の藝術が將來互に相資益し競爭して行く事が新時代の日本畫の發展する爲めに極めて必要である。今年の文展の審査員に横山大觀氏が除外されたのが動機となつて下村觀山氏も審査員を去り、日本美術院派に屬する安田靫彦、今村紫紅、前田靑邨以下牛田雞村、大智勝觀、堅山南風等の少壯有爲の畫家が文展の出品を止めねばならぬ様な事情になつたのは甚だ意外な事であつて、京都派の畫家は文展に於て有力なる競爭の敵手を失つた譯である。將來の畫運を益々開發して行く上から見て美術院の藝術と京都の藝術とが一堂に相會して兩々切瑳琢磨するの機會を今年以後相失ふに至つた事は遺憾なる事である。

然るに日本美術院再興記念展覽會が今秋文展の開會と同日に開かれ、美術院の同人及之に同情を寄する少壯有爲の畫家及彫刻家が會心の製作を發表し、東都の藝術壇に一大異彩を放つに至つたのは亦我々の豫期せざし幸なる事件である、其出陳作品中には單に院派藝術の過去を語るに過ぎざるものも幾分かある、或は美術院展覽會への來客と認むべきものも幾分かある。然る類のものは姑く措いて院派藝術の本領に屬して居る

作品を見ると、院派藝術の發芽以來漠然と夢想されて居つた所が餘程明白に表現されて來た趣がある。或る觀念なり想思なりを形體に實現せんとするは美術院藝術が初發以來狙つて居た所である、今回の大觀氏の游刄有餘地の大作は其傾向を最よく示して居る。これは文惠君と其庖丁との問答を描いたのである、庖丁の風釆卓拔凛乎として犯す可らざるものあるは蓋莊子の化身なる可く、此東洋の大哲に對するに溫乎高德の相ある文惠君を以てし、且花の如き淑女を以て其背後に配せしめ、對幅の畫圖中に人間の心意の絕妙なる三方面を顯現せしめた。大觀は禽獸をして天地の氣分を語らしめ、山水樹木をして人生の運行を說かしめる、其作る所の流燈、山路、瀟湘八景、松並木等を見れば大觀の棲息する想の世界の漸次に藝術化されたる跡を窺ふ事が出來る。今回の作に於て其想の世界の如何なるものなるかゞ益明かになつて來た。而して又游刄有餘地の圖を點檢すれば大觀の手法及賦彩の極めて精妙にして、且大膽、而かも毫末の違算なきを合點するを得る、大觀の技巧には其性格の閃きがあり、獨創的なる所がある。大觀の作は美術院藝術を代表するものなれど想念を表現するに苦心する傾向は安田靫彥氏の御產の禱、今村紫紅氏の熱國の卷及中村岳陵氏の緣陰の饗莚等に於ても亦之を認むる事が出來る。靫彥氏の作の如き想念上より見るも技巧上より見るも畫界の權威とするを得可く、夢殿の沈靜瞑想的なるに反し、御產の禱は興奮的活動的である、而して想念と技巧との調子が甚だよく一致して居る。今村紫紅氏の作は親しく其境に臨て觀取したる熱國一日の經過を叙說したものである確に規模の大なる所がある。殊に原始的生活を示すに古拙と見らるゝ描法を以てしたのは表現法の宜しきを得たもので印度や日本の古畫を研究した跡が見へる。繪卷全體に涉りて橙黃の色彩と金粉の光輝とをて熱國の氣分を示して居るが、其氣分を示さんとする構想が餘り勝ち過ぎて居る。紫紅氏の示さんとする氣分が想化さるゝ傾ある事は既に近江八景に於ても之を認むるを得た、全べて是等の作は人をして感せしむるより、考

へしむる畫である。紫紅氏の藝術に於ける經歷は純乎たる美術院派の人と謂ふを得るや否やを知らされど想の藝術化に努力する點に於ては全く美術院派である。

美術院藝術は古畫描法の活用に年來考慮を費やし或は佛畫の模寫、土佐繪の復興、繪卷物の研究等に腐心した、此方面に於て殆ど其理想を達した傑作が今回の美術院展覽會に現れた、夫れは前田青邨氏の竹取の繪卷及湯治場である、青邨氏が前年文展に出陳したる御輿振は右繪卷物風の復興として頗る優秀のものであつたが未だ模寫と見るの觀を免るゝ事が出來なかつた、然るに今回の竹取に至つては古畫の描法は全く自家の藥籠中に消化され、觀念の動く所筆は自由自在に流動し、前人未發の描法を用ひて居る、諸方面に於ける古畫の研究が斯くの如く活用せらるゝに至れば新時代の日本畫は甚だ根柢の深いものとなる。青邨の湯治場は實景より得たる作家の感想を縱横無盡に筆墨化し、或は時代化し、古畫の眞粹と現代の印象的表現とを巧に融和し、加ふるに絕妙の構圖法を以てし、作家の造詣と天才とが畫面至る所に發露して居る。靫彦と青邨との兩氏は美術院の藝術が生じたる麟兒鳳雛である。古畫描法を活用し作家の想念を表現する點から見て小林古徑氏の逡巡、長野草風氏の布晒などは注意すべきの作である。北野恒富氏の願の糸は描寫の用意周到であるが時に大膽なる筆を揮ひ作者の負けず魂が人に迫る所がある大阪の畫壇を天下に重からしむるは此作家であらう。

日本美術院の藝術は朦朧體時代以後に於て又裝飾的方面を漸次に發達せしめた、これは倭繪、佛畫或は桃山以後狩野派の裝飾的繪畫を研究する結果として出て來つたものであらうが美術院藝術の發端者たる芳崖の作中には裝飾的のものがある、芳崖は今日の所謂器物の圖按畫さへ描いた例がある、悲母觀音圖の如きも一面より見れば餘程裝飾的である。觀山氏の木の間の秋、春草氏の落葉及黑き猫は勿論大觀氏の流燈の如き作も此裝飾的傾向の發現したものである。今回の觀山氏の白狐は繪畫の眞粹を失はざる範圍に於て裝飾的分子を

何程利用し得るかをよく示して居る、此作必しも新意あるにはあらざれど決して古き型に囚はれたるものに非ず、右方樹枝稍寫實的なるが多少の疑惑を生ぜしむれど全畫面に於ける描法の洗練渾和せると白狐の週邊の氣品の高尚なるとに對しては何人も敬意を表するを躊躇せぬであらう。観山氏のと趣は異つて居るが桃山時代を追想せしめ而かも現代の心持をよく示して居るのは牛田雞村氏の柳てある。雞村氏には着想の凡ならざるものがあつて、而かも其想を表現する技巧に工夫が凝らされてある。

日本美術院の藝術は既に其源頭に於て洋畫に對する關係の問題を即離兩方面より解決せんと試みたが最近に於て小杉未醒氏が美術院同人中に加つた事は此問題研究の上から注意すべき事である。新生面を開かんとする日本畫家中には實物描寫上から自然に來るのであるかも知れぬが洋畫の描法と同しきものを用ふるものが漸次に出て來た、又洋畫家中にも日本畫の筆畫法を利用するものが出て來た。日本畫は將來洋畫と一にたる事は無からう、又日本に於ける洋畫が日本畫に化して仕舞ふ事も無からうが畫界の一傾向として日本畫と洋畫と融合せる一種の新味ある繪畫が將來に發展す可きは明なる事である。未醒氏や石井柏亭氏などは洋畫の方から日本畫に接近して來る方であるが少壯の日本畫家中に日本畫の方から洋畫に接近して行くものが尠くない、近來日本畫に於て色彩を以て全畫面を塗り潰す類の繪が増加し胡粉を多く用ふるに至つたのは確に直接或は間接に洋畫の影響を受けたのである。此類の作品中には著しく古い倭繪に類したものが出來又著しく洋畫に類したものも出來る。今回の出陳畫中荒井紫雨氏の出島の秋、大智勝觀氏の聽幽及郷谷等觀氏の低徊等は然る點から見て注意すべき作である、此三作共に色調に於ては珍らしい工夫が凝らしてある、如何にも澁味のある色を用ひ考深き沈靜の情趣を極めてよく浸潤せしめて居る。出島の秋は近來の一傾向たる鳥瞰圖を構成するに於て一段の進歩をなしたる事を示して居る。

大體を通覽すると今回の日本美術院展覽會には同院藝術の最初より有して居つた見識やら、其見識を實現するに就て進まねばならぬ種々の方針方面やらが餘程明かに形を顯はして來て居る。院派の藝術は想に於ても技巧に於ても隨分多岐富贍であるが自ら其中に統一があり組織があつて院派の藝術家は其努力の進んで行く點を比較的に明に自覺して居るやうてある、院派の主なる藝術家の考へて居る所には確かに生命がある、而して技巧の自由がある。其上是等藝術家には研究の

忠實がある。此三要素は新藝術を興こす原動力である。余は日本の畫壇に美術院が新興の勢力を以つて奮起したるを喜ばざるを得ない。更に美術院藝術に新に彫刻が加はり内藤伸及平櫛田中氏の如き獨創の見を有する彫刻家が中心となり之に吉田白嶺、佐藤朝山、大橋鉞男氏の如き一味の少壯有爲の人々が加はり從來の彫刻界に見たると稍撰を異にする東洋趣味の清新なる作品を出陳し一生面を開かんと試むるに至つては愈人意を強うする所がある。日本美術院藝術は甚だ多望であると認めざるを得ない。(大正三年十月十六日稿)

新畫を嗤ふ

大村西崖

予は近年古美術の方が専門になつてしまうて、新美術の方は頓と閑却して居るから、年々の展覧會も見たり見なんだりて、批評などは勿論やつたことはない。現代美術界の趨勢は、世界を通じて、何でも新しいものを作り出して見やう、それには古人の作風様式に囚はれてはならぬ、全くそれを脱却せねばならぬ、寧ろ却て前人の作を見ぬが善い、初めから手本などを習はぬが善い、うぶのまゝなる頭と腕とで、勝手次第に自然を見て寫したり、夢のやうな空想を描き出したりした、試みが面白いのだと云ふので、まだ上手の下手のと云ふ程の境にも入らぬ、全くの素人の、畫にも何にも爲つて居ない、何を描いたのか、どう云ふ心持を表したのか、さつぱりわけも分らぬ、たゞ雕靑嵌綠、敗毫殘瀋の糊塗漫漶たるものやら、描いてあるのか描いてないのかさへ、餘程瞠目注矚しなくては分らぬやうな、髣髴儱侗たる影見たやうなものやらが、やれ斬新だの、やれ奇拔だの、又は個想の表現とやらだのと云うて、技術の實際と前古の作物とは、少しも御存じのない所謂文士や、新聞雜誌の批評家先生たちから、宜しく煽り立てゝ貰ふので、衆口爍金の喩へも恐ろしく、黑人までが、それが分つたやうな顏付をせねば、世に後れ

たやうに思はれさうなのに辟易して、多少雷同する所へつけこんで、同病相憐むの感通も行はれ、その中の或物は首尾よく受賞の番狂はせを贏得すると云ふ有様。滑稽とも突梯とも、何ともかとも申しやうのない世の中だ。曲雅（クラッシカル）な佳作のまじめな物を奨勵するが善い筈の展覧會が、これから物になるかならぬか分らぬ若輩の、一時の氣まぐれな試みを、その異を樹て奇を衒（てら）へるに眩せられて、輕卒な授賞をやる重みのなさ加減。酸齒の感に堪へられぬ。そも／＼新しい試みなどと云ふものは樂屋（がくや）の内の事で、大人（たいじん）の覽に供すべきものでない。たび／＼やつて見た上で、格調おのづから成り、衆評漸く定まつて、始めて成藝となるので、その時賞して遲くないのである。澆季浮薄、修養の根機なく、售名巧利、以て能事と爲す世の中に、多少は矯風移俗の微意を懷抱する人もあつて欲しい。新を逐ひ奇を求むる間に、古を好み雅を愛する風をも鼓吹したいと思ふ。既に大家數に入れる人たちには、穩健なるこの種の理想も往々あるやうだけれども、若手の連中には溫古の風殆ど地を拂つて居る。畫家として世に立たん程の人はせめては、一通り前人の佳蹟を寓目して、その經驗の果を利用し、獨造の徒勞を避けて、その所謂新奇の百世の陳迹たる愚を免れんことを求めるが宜しい。然るに今の世は古美術愛賞家乃至歷史家と作者とは、一縷の關聯もなく、授賞の準繩は、自作の外、鑒賞の明疎きを常とする作者のみの執持に任ぜられて居るから、新古の兩美術界は益秦越も啻ならぬ有樣となつて、作者界で新と云ふは眞の新でなくて、たゞ生（なま）と云ふものになり、奇は眞の奇でなくてたゞ變（へん）なものになつて來るのである。生（なま）な變（へん）なものばかり見せつけられる近時の展覧會は、餘り有り難くない。生（なま）と變（へん）との由つて來る所は、前人の作者を識らず、古意と典雅とを解せざるに在り、又修練を重んじないで、所謂試みばかりをやるからである。畫と云ふものはもと／＼技術であるから、腕がなくては物にならず、手の無いラファエルでは、素人にも劣る。歷史を疎じて學ばず、古書を蔑（なみ）して識らないから、頭が出來ず。

修練を重ねないから腕がない。それで畫を描かうとは、蟲の善いにも程があるといふものだ。これ宛も今の若者が、才も力もありもせぬ内から、骨を折らずに、月給ばかり欲しがつて、生活難に苦む者の多いのと同じ世風て、要するに人情の紙のやうな所に病根はある。

又作者ばかりでなく批評家もこの嘆に漏れぬが少くないらしい。文學は少しはやつたからとて、審美學は芝居や小說の理論が重で、造形美術の事は切り廻はせるものでなく、讀んだり、講義を聞いたりしただけの美術史の知識では、疊の上の水練で、實際作物にぶつかつたら、背柴に當る程の言句が出るものでない。これは予の若い時の經驗で善く知つて居る。然るに先生御批評をなどゝ謂はれると、やれ理想とか、やれ氣分とか、やれ象徵とか、流派がどうとか、樣式が何とか、立派さうな言を並べで、齒の浮くやうな諛評をあびせかけて、所謂新進連に持てゝ居る。ほんとうに畫の分る人はあつけに取られて默つて居れば、素人社會はやがてその批評が定論のやうに思つて、新進作家の誰はえらいなどゝ云ふやうなことに傚つて來る。眞に繪畫の評論をやらうと思ふなら、まづ〳〵古畫の鑒定の一つも出來るやうになつてから始めて貰ひたいものだ。鑒定と批評とは違ふと言ふだらうが、批評は個々の作者の技風特徵が眼底に明識せられて、而して後、他の作物との比較對照等に由りて始めて出來るもので、鑒定もその通りである。それが分らぬ程で批評が出來るものでない。相撲の手も分らずには行司になれぬと同じことだ。駈出しの批評家の後進を賊するや實に恐るべしと謂はねばならぬ。この種の批評家が眞に畫の分るのでないことは、曾て古畫の批評をやらぬのでも知れる。美術鑒賞の面白味を解して、評言を下さんとならば、古畫の展覽會をも見て批評しさうなものであるのに、古畫は我不レ關焉で澄まして居る。啻に批評家のみならず、作者も重に新畫の展覽會ばかり見て、古畫の展覽會は一向に見に來ない。これはたゞ現代競爭の負けじ心て、修養や參考に資するなどゝ云ふ方面からでない。古畫展覽會の振はざるは即ち前に言へる新畫に生な變なものゝ多き所以である。

予は美術史家だから古書を推奬するのでなく、又古書を推奬すればとて、これを模倣せよと勸めるのではない。數千年來の無數の作者が苦心經營して、後世に寄與したる無數の作物には、實に言ひ知れぬ無量の面白味が變化無窮であつて、今の人が新奇と思ふて描き擬める技法や、趣味や、自然の見かたや、圖取りなどが、前人旣發の多いのに驚く位なもので、遼豕と知らずに、それにも及ばぬ所をやり出して得々たるは、實に氣の毒な次第てある。又古人の中にも、新い試みをやつて失敗に終つたものも幾らもあるから、殷鑑大い

に己を忘するも少くないのである。新に走りて古を忘るゝ作界に、こんなことを言ふても振向く者もあるまいと思へば、雑誌の讀物にはふさはしからぬばかりてなく、展覧會の批評を囑せられたるに對して、これを以て責を塞ぐは、申譯ないやうてはあるが、當り障りの多い批評は、十數年前に足を跳ふたから、今年はこれて御免を蒙ることゝして置く、

美術院論

笹川臨風

正木文部省公設展覧會主事は、向後鑑査及審査に就いては作家本位を取り、第三等賞を獲得したるものに非ずんば第二等の賞を擬せざるの方針なりと云ふ。之れ新聞紙の報道にして、其確否を保せずと雖も、同氏が美術學校教育の方針と比較して見れば、强ちに虚聞に非ざるべし。美術學校は斯くして天才を出さゞりき。文展も亦斯くの如くにしてアカデミーとなり畢らんのみ。

全然作家生平の腕を度外視することの非なるは、余昨年の文展評に於て之を言へり。之れ感情問題の弊を恐れて之を云へるなり。然れども作家を本位となさば之に伴ふの弊害は又決して尠少なりとなさず。必ずしも之を論ずるを須ひず、今秋の文展に於ては現に其證跡の歴々なるものあるを見るに非ずや。文展は墮落せる作家を保護するを要せず、拙劣なる惡作に無暗に高價を附して人目を驚かさんとするが如きものを保護するを要せざるなり。

文展は作家に取りて兎に角晴れの場所なり、腕ためしの處なり。新進大家が其技倆を以て老大家と爭ふべき處なり。一切の階級と閥とを離れて其力量を示すべき處なり。情實なく、斟酌なく、畫家を奬勵し、藝術界を鼓舞し、大才の發揚を待つべき處なり。若し夫れ階級を云々し閥を云々するに至りては、其の齎らし來る結果は蓋し知るべきのみ。

是に至りて美術院と文展との差異は瞭然として明かなり。美術院は天才の養成所にして、文展は地才の修養所なり。其差異は故岡倉天心と正木主事との如し。其教育に於て然り、其人物に於て然り。一は大醇にして小疵あるを厭はず、一は小醇にして努めて誤りなからんを期す、故に文展にては多くの畵家を出すべし、美術院に於ては唯二三の畵才を出すに止るべきのみ。

美術院の再興は敢て文展に對抗せんが爲に成れるに非ず。偶々文展審査員の改選ありて、其の結果横山大觀の排斥あり、下村觀山の殉死あり、勢對抗の姿となれるなり。文展審査員の改選は畢竟駄々をこねる學者藝術家の我儘に堪へずして、成るべく大人しき如才なき官僚謳歌の連中を以てのみ組織するの天下太平なるを思ふので業と見るを至當とす。藝術がどうのかうのと云ふ如き抱負も意見もあつたものにあらず、若し斯く信ずるものあらば、そは文部省を餘りに買ひ被りたるの致す所のみ。然れども文部省に取りて時機を失したるの誤りなるは確にあり。大觀を斬ればとて、觀山が之と其行動を與にして叛旗を飜へさんなどとは豫め思ひ設けぬ所なりき。これ其の餘りにお人好しの致す所にして、官僚の傘下に於てこそ仕事をなし得べけれ、平民となりては恐くはなんにも出來ざらん、斯る手合が戰爭をなし得ざることは豫卜して燭照するよりも明かなり。若し美術院の再興成らざらんには岡倉天心死後の觀山は大觀と其行動を共にすべからず。然れども恰も觀山は大觀と與に美術院を再興しつゝありき、觀山にして大觀を見棄て美術院を見棄つれば、觀山も大觀も其立場を失ひ、美術院は遂に流產に終らんのみ。美術院の流產は先師岡倉天心に報ゆるの途にあらず、又其計畫の漸々進步して、院の建物も殆ど成らんとしたる當時に於て、之をして流產に歸せしむべきことは如何にも忍ぶ能はざる所なり。觀山は斯の見地よりして大觀と其の行動を與にせざるべからざりき。此明白なる事實を豫卜すること能はずして文展より東京派の分離を來したるには如何にも當局者の不明にして其迂算の歷々たるを證するものあるなり。

再興美術院の前途は必ずしも光明に非ずして、寧ろ其永續は眤近のものすら猜疑ふ所なりき。然れども文展審査員改選の結果は其前途をして實に光明赫灼の者とならしめたりしなり。美術院に取りては、無上の好機會にして、確實なる保證を與へられたるものと謂ふべし。美術院は再興成れりと雖も觀山大觀は永く相提携すべきものに非ず、岡倉天心の生前に於てすら、やゝもすれば此兩者は參と商たらんとしたるもの、如何でか膠漆水魚たるを得べけんや、其破裂はやがて美術院の瓦解に終るべかりしに、文展審査員の結果は兩者の死守となり、美術院の基礎をして磐石の固きに至らしめ、東京派の參加、延ては上方派の動搖を來たし、或は將來文展の衰頽を齎らし來るやの運に遭遇せしめたり。然れども當局者の不明は之れやがて藝術界の進步なり。發展なり。此點に於て余は當局者の不明を嗤ふよりも、寧ろ其決斷の勇を感謝せんと欲す。

岡倉天心は稀に見るの天才なりき。此人に指導せられ開發せられたる觀山大觀は倶に稀に見るの天才なり。下村さんは本をお讀みなさい、横山さんは書を稽古なさいと岡倉氏が勸めたるが如く、觀山は腕の人にして大觀は頭の人なり。然れども、其の倶に故菱田春草と畫壇の革命兒風雲兒たりしは爭ふべからず。されば此兩者を大將とする美術院が天才の養成所なるべきは明かなり。美術院の綱領に云はずや先輩ありて師なく、後進ありて弟子なしと。此兩者の部將として美術院の同人たるべき安田靫彦今村紫紅も天才なり。今回同人に擬せらるべき前田青邨、小林古徑等も亦天才なり。此等の天才がどこまで其天才を發揮し得べきやは問題なれども、とにかく頭のありて、畫風に一新生面を開かんと努力しつゝあるは疑ふべからず。若し將來の畫界に於て大才出づとすれば、此等天才中に嘱目せざるべからず。

梶田半古松本楓湖の門に多くの花形を出せるは、其の餘りに弟子に干渉せざるが故なりと聞く。殊に楓湖の家多く粉本を藏し其門人をして自由に之を模寫研究せしむるが爲に師承の弟子には乏しと雖も、其畫才を發揮するものは多し。美術院は師承模倣の藝術に非ずと宣言したりと雖も、其展覽會を觀れば、師承模倣の弊も亦なきに非ずと雖も、之れ亦其の好む所に辭する人間の弱點なるべし。然れども誤って文展を觀て、師承模倣の弊の著しく多きものあるには驚かざるを得ず。京都美術學校出身の人に刻意創技のもの多く、着々として新らしき試をなせるは、蓋し師承模倣の弊に感染すること少く、東京派に刺戟せられて畫界の革命をなさんとするが故なるべし。然れども其他に至りては多く師承模倣の技のみ。極端なる寫生の弊と誤られたる裝飾畫の弊とに囚はれたるものゝみ。

美術院は人を作らんとするに非ずして人を生ぜんとす。觀山大觀を生じたるが如くに天才を生ぜんとす。京都派に於ても天才なきに非ざれども、技倆の末に奔りて其頭を養成するを忘れたるもの少しとなさず。京都は多くの寺院を有し、幾多の古美術院を有する處なり。京洛に近くしては古美術品の寶庫なる奈良あり。古名匠が意匠慘憺たる彫刻物繪畫は積て山の如し。其空氣も宗教的にして、土佐繪風の山河あり。其自然其人物も繪卷物を繰り廣げたらんが如し。此無盡藏なる美術の郷に在りて、其空氣其自然に接し、自ら研究工夫

を積まば、新たなる名畫を描き得べき筈なるに、圓山四條の弊に陷り、又西洋畫寫生の風に捉はれ、却て古名畫古彫刻の神と默會して更に創意するを忘れたるもの多し。本年文展に於ける土田麥僊の「散華」の如きは其好適例にして、前途ある麥僊の爲に、其匠氣俗氣の紛々たるに堪へざるを惜まずんばあらず。然れども之れ獨り麥僊のみにあらず、京都派の繪畫に就ては多く此感あり。此弊は延て文展風なる一畫風を開きつゝあるの嘆あるを免れざるなり。之に反して、美術院派に於ては靫彦と云ひ青邨と云ひ、古徑と云ひ、多くは寫實を離れて寫神を旨とし、古彫刻古繪卷物より出で別に新意匠と新技術とを發揮し、情趣筆致兼ね備はるの妙を示す。寫實寫生の蔑にすべからざるは固よりなりと雖も、之に囚はれて其弊に陷るが如きは斷じて不可なり。美術院派は此點に於て確に其弊竇を脫却して、寫神寫意の妙諦を會得せんとするに努めつゝあるなり。橋本關雪が其南國に於て雄大なる趣を見せんとて、金箔銀箔を押したる帆船を描きて白痴威しを試みんとしたるが如きは寫神寫意の三昧に遠かること甚しと謂ふべし。京都派はどこまでも寫生風にして、裝飾畫に長じたりと謂ふべし。寫實を離れて神を寫さんとすれば、常に失敗の跡歴然たるものあるを見る。

寫生と云ひ、寫實と云ひ、唯々其形式の寫生寫實に止りて神を寫すことを忘れたらんには、畫に何等の情趣あらんや、何等の權威あらんや。寫眞と云ひ、寫意と云ひて、唯々獨りよがり、獨り飲み込みとなり畢らんには、畫は一種の判じ物に過ぎざるべし。前者の弊は既に續々として文展に見はる。美術院派は後者の弊に就て深く戒めざるべからざるなり。

近時文展の畫に倦怠の色ありと云はるゝは、其畫風が一に文展臭を帶ぶるが爲めなり。文展臭とは即ち寫生の弊と誤られたる裝飾風と之れなり。流行の來す所、滔々として一に之れならざるはなきの狀あるなり。如何にも其手際は善く、其上りは奇麗なれば、獨り俗衆の歡迎するのみならず、審査員も亦之を採りて、文展の誇となしたるが如し。斯くして自ら信ずるの薄き藝術家は相率ゐて此風に奔り、千篇一律にして、更に他の命を見ざるの有樣となり、其空氣は沈滯し、其色は頗る倦怠のものとなれり。即ち一種の文展風、展覽會型なるものを生ずるに至りたるなり。斯くして年々窮まる所を知らざれば、舊派が樣に依りて葫蘆を描けるものと何ぞ其の撰ぶ所を異にせん。

是時に當りて美術院派は一種の刺戟劑ならずんばあ

らず。元來が一騎打ちの飛將軍連中なれば京都派が其歩調を一致するものとは異なりと雖も、其のつとめて寫神寫意の主義を取り、形式の美を求めずして意想の新を競ふ所に於ては相似たるものあり。殊にもとの紅兒會一派は其中堅にして將來の統率者なれば、美術院派にして其團結を鞏固にして守る所を失はずんば、庶幾くは藝術界の風雲を叱咤し、藝術の新氣運を振興するを得ん。

故岡倉天心は天才なりしとは雖も、統率者としては、甚だ缺けたるものありき。國畫玉成會の如きは文展に對抗せんとして起り、須臾の間に消滅したり。外部の壓迫に堪へで滅びたるに非ずして、内部自らの崩壞なりき、殊に美術院は常に其内訌を絶たずして、古參の門才すら反噬せんとせり。岡倉天心すら手こずりたる美術院なれば、將來の美術院に就ても亦懸念するものなきに非ず。殊に横山大觀は最も敵の多き人なり。岡倉天心生前に於ても其施策は一に大觀の手に依りて成れりと傳へられ、盛に他の嫉視を免れざりき。其間には誤解もあるなるべけれど、其人が天才なるだけに行動突飛にして、自己を主張するに鋭意に、他を顧みざるやの風あり、其直截徑行は所謂江戸ッ子とも見え、傍若無人の觀あるは、其敵手をして多からしむる所以なり。されば再興美術院の初に於て寺崎廣業川合玉堂も相談をもちかけられたれども、如才なき兩者は巧に之を回避して參加せざりしなり。よしや參加するとも、早晩離散は免れざりしなり。寺崎廣業の度量濶大なるに及ぶべからずと雖も、統率者の一人として、大觀の缺漏を補苴すべきものに下村觀山あり。常識の發達して智慮の綿密なるは此人なり。大觀は智者の如くにして、寧ろ感情家なり。觀山は茫漠たるが如くにして、實は甚だ智者なり。殊に觀山の殉死は彼の男振りを上ぐること少からねば、大觀は宜しく其友情の切なるを感じて永く其好意を銘すべく、成るべく其鋒鋩を現はすを避けて、獨斷的の處置を取らざれば、美術院は安固なるべし。其後進にして將來の美術院を統率し得べきものには今村紫紅あり。紫紅は俐巧にして、どつしりした所あり。如才なく、智嚢滿々たる安田靫彦と相提携すれば、美術院の鞏固たるべきは到底岡倉天心時代の比にあらざるべし。

仄聞する所に依れば、東京の寺崎廣業川合玉堂は京都の山元春擧と相結び畫界に一社を組織せんとの計畫ありと云ふ。其實否を詳にせざれども、春擧は京都に於ける不平兒なり。常に竹内栖鳳の勢力旺盛にして、稍もすれば其下風に立たんとするを慨すること久し。寧ろ彼は東京美術學校教授に任命して東京に置くべき人なり。然れども彼の細君の不治の宿痾は彼をして東京に移轉せしむる能はざるの事情あるべし。寺崎川合

の二者は美術院成れるの今日やゝ其壓迫を感じて自家勢力の消長を懸念するものあらん。されば此三人者の提携は極めて自然にして、爾かありてよさゝうなことなり。若し此團結にして成立するありとすれば、文展の京都派は分裂すべく、美術院と相對して三者鼎立の姿とならん、斯くして我が藝術界は生氣あり、活氣あり、其前途は洋々として春の海の如きものあらん。

君子の爭は公明なるべく、其力を鬪はせ、其主張を戰はせて、些の讒誣中傷の陋事を學ぶべからざるなり。其旗幟を鮮明にして俯仰天地に愧ぢざる正大の精神を以て之に處せざるべからず。要するに之れ藝術の爲めなり。藝術の天地は自由なり、幾多の黨幾多の派あるを妨げず。相與に研磨し競爭して、我が藝術界の天地を開拓し宜しく人文に貢獻すべきなり。

二科會を論ず

木下杢太郎

どう云ふ機緣で實際二科會が成立するに至つたか、其微細な事情は私は善く知りません。今度の第一回の展覽會で見ると津田、有島、石井、齋藤（豐作）小杉、山下、阪本、柳、湯淺、田邊の諸氏（主なる出品者であるやうですが、畢竟是等の諸氏が出品はせぬが、南、正宗、森田の諸氏も加盟してゐることと思ふ。）が文部省展覽會の從來の審査員の審査を慊らずとし、其日本畫に第一部、第二部の分離するあるに倣つて、洋畫の新派たる第二部を別に樹立せむことを文部省の當局者に懇請し、一旦其許されざるに及んで、文部省の展覽會より獨立して「二科會」を起しこの度其第一回を開いたわけであるのでせう。

かう云ふ分離が果して必要であつたかどうかと云ふ事は、それは無論當局の側には種々の理由や主張があ

りませうが、我々第三者としては、實際展覽會の作品を見た上に冷靜に批評して見たら澤山てせう。理窟て考へると、文部省の展覽會には種々の缺點はあります。そしてそれから獨立した展覽會を樹立する理由もあります。これには第一に、文部省の展覽會見たやうな所では、各の畫家個人の氣分よりも、一個作畫の出來榮えの如何が餘計に評價せられます。出來榮えと云つても未に外面的の努力の跡てす。抑も畫にしろ、彫刻にしろ、それらは一方には靜的な、纏つた作品（第二の自然たる）であるが、一方には動的な、畫家個人（第一の自然たる）の心境の直接表現であります。そして近來は畫派にも表現派（エキスプレツシヨニスト）などと云ふ目（もく）がある程で作品をかう動的に見る傾向か喜ばれます。素描（デツサン）や習作（エツユード）が纏まつた作品に劣らず高く評價せられるやうなわけであります。然るに文部省の展覽會などでは、どうしても、さう云ふ方面よりも纏つた作品としての方面の方が問題になるのてす。大勢の人々の多くの繪が一堂のうちに錯雜として陳列せられるのであるから、どうしても、畫面の大きな手間の餘計に懸つた、相當に纏りの附いた繪が注意を引くやうになるのてす。從つて段々と所謂「展覽會向きの繪」といふ種類が跋扈し出すのてす。然るに實際は藝術の眞價は必しもそ云つた畫面の統一や大きさばかりに存するのてなく、往々一斷簡、一零墨にも存するものであり、即ち其背後の或る藝術的文明或は藝術的生活の表現たる所にも存するのてあるから、それには相當の設備を要するのてす。最も良いのは個人展覽會てす。それてなくても一人が數多く出品せられるやうな陳列方法てす。文部省の展覽會はそれに適して居りません。それ丈ても文部省展覽會以外に畫會の興る必要があります。然しそれらよりも最も肝要なことがあります。それは出品者側と審査側との間に藝術的心境を異にして居る場合てす。各藝術作品の背景たる藝術的雰圍氣と云つたやうなものに於て兩者に大きな徑庭がある場合には交互の反撥は已むを得ません。而して今回「二科會」の獨立したのも、畢竟二科會側に於て此相違を認めたと稱する所にある

のでせう。果してさうなら分離も亦已むを得ません。然し實際兩者にそんな大きな徑庭があるかどうかと云ふ事が主要の問題なのです。審査員は大體學者側の人舊白馬會の一派、太平洋畫會の一派とを抱擁してゐます。成程理解力の點に於て、藝術的感覺に於て、或は中心氣分に於て隨分方向を異にして居るだらうと思はれます。修養もまた夫々相異つてゐます。それ故是等の人々を一團として之を二科會と比較するやうなことは出來ません。けれどもかう云ふことは斷言することが出來ます。若し私が畫工であつたとしたならば、其審査を甘んじて受けようとは思はないやうな人も審査員中に無いことは無いといふことです。或はそれほどて無くても、自家の作品が十分了解せられないかも知れないといふ危惧の念を起すに至るだらうと思はれることとてす。中には無論信頼の出來る人も居る。が然し是等の種々雜多の傾向の人から同時に選ばれる場合には、作品は特殊なものは中庸、尋常なものから驅逐せられてしまう。一人が百點附けるのに一人が零點附けるものよりは、凡ての人が六十點附けるものの方が選ばれると云ふ傾があります。さう云ふ風に考へると、或人々が文部省の展覽會から分離しようといふ考を起すのも亦已むを得ないことに思はれます。殊に我々局外者と違ひ、利害關係も深く、且つ審査の實情にも通じ、また個人的感情の齟齬を有してゐる當局の者に於てはこの感も一層深いことてせう。そして自己の權利を正當に主張する上から審査の條件に對して抗議し更に其容れられざるに及んで別派を樹つるといふことも、理論上正當のことと思ひます。

今度はそれなら別に興つた二科美術會の實績が果して彼等の主張に添うて居るかどうかと云ふに、それは直ぐさま肯定することが出來ないやうです。概して二科會の出品が我々の豫期ほどには振つて居ないやうです。二科會には比較的最近の歸朝者が多い。そしてインテリジエンスも高いやうに見えます。且つ歐州の最近の趨勢に通ずることも深く、審査員側が印象派やロオランス前後を徘徊してゐるのに反して、もつと近い傾向、後期印象主義（ポストエンプレッシヨニズム）乃至最近の立方派、表現派、野蠻派等と相呼應してゐるかのやうに見える。然し忌憚なく言ふと、是等はこの會の人々の見せかけになつてゐるので所謂徹底したものは存外ないやうに思はれます。

技術の修養や熟が乏しくて「思はせぶり」の多い畫が少からずあります。實際自然中に自己を消融して、其極自然の核心に參し之を確かに把握すると云ふよりも、既にサジエスションになつてゐる記號的な技巧(色彩、誇張、單純化、様式化)を以て、強ひて或模糊縹渺なる背景を暗示しようとする技巧家が多いやうです。新傾向と言へば、文部省展覽會でも满谷氏の作品などは、前のとは餘程調子が變つて新しくなつてゐる。技術も相當にしつかりして居り、感覺も、理解もあります。二科會に於て必しも之を凌ぐ人が多しとはしせん。若し夫れ所謂新様式、新傾向の點に至つては、今回の文部省展覽會に於ても、必しも其數少しとせざるが如くである。また二科會の有力者の間に於ても技術、理解、感覺の點に於て、必しも新または優を稱し能はざるものがある。して見ると二科會なるものは理論上に於ては十分文部省展覽會より分離し、之に對抗し、更に之より一歩を進む理由のもるものではあるが、未だ之を炳乎として目睹に堪へしめるほどの實績は擧げて居ないのであります。我々が二科會へ入つても、成程是なら文部省展覽會の翻下にあることは出來ない。我々は此處に始めて意義ある新時代の藝術を見たと呼ぶほどの氣にはなりませんでした。

即ち二科會は未だ其主張を其實績を以て證すること が出來ないのでした。然し我々は二科會のこの顔觸が今度藝術界の權威となり、新藝術の先鋒となるものだと云ふことも容易く期待することは出來ません。最初我々が此會に餘り大きな豫期を懸けたのは、畢竟此會が文部省の展覽會から分離したといふ外形に重きを置いて團體として考へ過ぎ、藝術はやはり團體が生むものでなくて個人が生むものであると云ふことを忘れたからです。個人といふ點から見れば、文部省の展覽會に於ても、またこの會の展覽會に於ても、懐しむべき、或は畏敬すべき諸人格を見出します。殊に私は田邊至氏と阪本繁次郎氏との作品に同感しました。

二科會を評す

齋藤與里

自分は二科會に對して最初から惡意を以つてゐない。寧ろ同會の起因に多少同情を感じながら其の成り行きを眺めてゐる。文展が現下の美術界を基礎に置いて、先づ其の勢力と、比較的安全な物のみを取り入れる方針を立てゐるのなら異存はない。けれ共それが微

頭徹尾の目的て、藝術の眞意に對しては何等の定見もなく、唯其の形の上のみに拘泥して其の内面的消息に殆ど目もくれない、却つて頭から一種の反感を持つて其の種の作品を退け樣とする傾きを示してゐるのは、斯界の發育上違反の振舞と見なければならない。畢竟異例の作品に同情がなさ過ぎると云はなければならなくなる。眞に其の内情を見極めてそれに對する信任と親みを缺く時、其群から分離するの止むを得ないのは當然の數と云はなければならない。二科會が文展から分離したのも内面的には勿論其の點に歸着する事と思ふが、外部から見ると少しく其の趣きを異にしてゐる。此の分離の萠しとも見られるものは既に三四年前にあつた。今回の鑑査員なる某氏の宅に矢張今回の鑑査員の大部分の人々が會合して其の事に關した話があつた。然し其の時の話は頗る不徹底なものであつた。文展の他に別に同志の展覽會を開いて、同時に文展にも出品仕得る樣な算段てあつた。自分は其の時一も二もなく今の二科會の旨意書にある、即ち同時に文展に出品する事は愚作の更に愚作を集める樣なものだと云ふ理由の基に其の說に反對した。そして別に開くなら全然文展と無關係なものにしなければならないと云ふ事を主張した。それて其の企ては沙汰止みになつて今日に及んだ。今回の展覽會は全然それは別物てあると云へばそれ迄てあるが、此の評論の助けとはなる。而して今回の展覽會を外部から見ると以前に自分の主張した一條件は幸ひに入れられてある。けれ共全然文展と無關係にはなつてゐない。自分は其の態度に同情と、不徹底と、煮え切らない野心等を感ずるのである。

文展が現今の畫家の地位と名望との揭示場になつてゐる以上、それと全然關係を斷つと云ふ事は、取りも直さず地位と名望を捨てゝ顧みない結果になる。自分は其の理由から、全然文展と緣が斷ち切れない處に同情を感ずる。然し已の藝術を公示するには官權に縋るの不適當を見極めたら、何故速かにそれを斷念せぬかと云ひ度くなる。勿論同じ芝居を打つにしても第一位の小屋を望む事は自然の情である。のみならず現在の世間に照してそれは必要である。自分等は自分等の信ずる仕事をするからそれに官權を附けて吳れと賴んでそれを附けて吳れるならそれを希望する團體は無限に出來ると信じてゐる。二科會が文展に入れられれば無論

都合は好い。鑑査員も二科會の鑑査員でなく文展の審査員になる。出品者に對しても賞が付く。けれ共今回の展覽會規則が、若しも二科會の最初からの理想であれば、二科會が文展に入れられた時は其の理想を捨てなければならなかつた事が思はれる。第一『鑑査員の互撰』などゝ云ふ事は出來なくなるに定つてゐる。『鑑査員の出品に對しても通常出品者同樣鑑査を行ふ』と云ふ樣な體裁は成立つまいと思ふ。『本年の本展覽會に出品陳列せる作者は明年鑑査委員を撰び、又鑑査委員たる資格を有す』などもてんで話にもなるまい。それでも若し二科會を文展に入れる事を承諾すれば右の自由は不問の裡に葬る心算であつたか如何か。それとも右の自由が伴はない以上は斷然其の承諾を拒絶する丈の決心があつたか如何か。自分は以上の諸點に思到しては、其の不徹底と煮え切らない野心とを思はぬ譯けには行かない。

論を一歩進めて、若しも其の具體的に表れた結果が二科會の分離を當然と思はせる或る物を持つてゐるなら、我々は其の態度を意に止める必要はない。如何なる手段も方法も、それが凡て己の藝術的衝逬が基礎となつて餘儀なくせられた行動であるなら、自分は寧ろ現在の社會狀態からそれに同情的是認を與へる。けれ共今回の二科會出陳の諸作を基としては其の是認を與へる點は何處を探しても無い。文展と分離する事件が何處にあると云ひ度くなる。自分は先づ其の點を個人々々に付いて無遠慮に述べて見たいと思ふ。

外部から見て石井柏亭氏が其の發起人の一てある點からして自分には不審の感がある。氏か從來の文展から其の内幕に於て如何な待遇を受けてゐたがそれは知らない。けれ共外部に表れた氏は年々文展に入れられてゐるのみならず、現在の最高賞たる二等賞の選にも浴してゐる。其の點は氏が文展から其の藝術ゝ認められてゐる證據とならなければならない。小杉未醒、南薫造、(氏は後に同會を辭されたと云ふ噂を耳にしたがの兩氏も同樣である。其の他鑑査員諸氏も、二等賞)選に漏れてはゐるが、自分の目から見ると氏等の力量に相當した待遇を文展から得てゐたものと信ずる事が出來る。斯る以上、今回の動機は發起人諸氏自らを度外視して、他の物に同情を感じ文展審査員の藝術的眼識を疑つた行爲でなければならない。若しも諸氏にして他に眞の藝術を認め、それが文展に依つて粗略に取り扱はれ居る事實を見極めての上の義俠的行動なればそれは尊ぶべき同情である。けれ共諸氏の同情と盡力に依つて集め得た今回の諸作に對して　自分は其の必要を感じない。鑑査員諸氏の作品を初め其他の諸作に就いて見ても、到底文展と相入れない特點は何處にも

ないと云つて好い位である。殊に今回の文展の諸作と比較して、其の分離の當然を觀者に首肯かせる點は何處にもない。萬一今回の鑑査員諸氏が自分と異つた意見の基に、諸氏の同情と盡力に依つて得た効果を明瞭に感ずるならばそれに異存はない。けれ共諸氏の藝術的見解は疑はずにはゐられない。以上の意味に於て自分は二科會の運動を無用視するものである。殊に鑑査員諸氏の中に若しも自己の藝術に反省を下す事の出來る者があれば、現在の自己の力量に照して、其の鑑査員たる處に僭越を感じなければならないと思はれる者を發見するに至つては更に不快を感ずるのである。

一方出品人諸氏に就て考へても、文展審査員と二科會鑑査員との間に果して如何なる見解の上に差を認めるか。碎いて云へば黒田清輝、中村不折の諸氏等と、湯淺一郎、田邊至の諸氏等の間に果してどれ丈の差を感じる事が出來るか。藤島武二、滿谷國四郎の諸氏等と、有島生馬、山下新太郎の諸氏等との實力に對してどれ丈の信任の差を認めるか。勿論實力と鑑識は必ずしも伴ふとは限らない。二科會鑑査員諸氏が尠くも文展審査員諸氏以上の自由な鑑識を持つてゐる點丈は信じられる。けれ共自由を我儘と誤解して亂作に走る樣では同會を自滅させる樣な結果になるのみならず、却つて自由が自個の自滅の基となる。

自分は二科會の對文展運動を無用視すると云つた。けれ共斯樣な展覽會が新設されたに就いては素より異存はない。寧ろ文展以外の凡ての主腦等のみの勢力を計る團體的、賣店的諸展覽會は止めても此の會丈は益々盛大にし度いと思つてゐる位である。それにしては二科會と云ふ會名に伴ふ内輪的魂膽を全然廢して、全く獨立獨歩の會合にしなければならない。さうした曉に會員が一人減り二人減りする樣になつて、解散の餘義ない場合に立ち至らば、先きを見越した會員の態度を感付くと同時に未だ時期の至らざるを自覺しなければならない。

今回の同會展覽會を見て先づ物足りなく思つたのは鑑査員諸氏の作品の不振であつた。それは強ち其の數と量のみを意味するのではない。一二の人を除いては作品の上から展覽會に迫まられてゐた者は無いと云つても間違ひにはなるまい。

石井柏亭氏は其の數に於ては八點もあるから多い方だが、何れも水彩畫若しくは素描着色等の小品である。三點の油繪の中では『泉水』が稍大きな方であるが、何れにしても同會の主張に力附けするには不充分なものである。

田邊至氏の油繪十點は其の數量に於ては優に同會の力とはなつてゐるが、其の質に至つては同會の主義に色彩を加へる役立ちとはなつてゐない。其の他柳敬助、山下新太郎、湯淺一郎等の諸氏が、斯る作畫を提げて文展に對して分科を主張するのは寧ろ滑稽になりはすまいか。若し氏等と文展審査員との間に、藝術以外の個人關係が成立してゐればそれ

は論外だが、文展審査員の具體的方針は却つて氏等の如き流派に、凡ての繪畫を嵌込らうとしてゐる藝術を示してゐる位ではないだらうか。

齋藤豊作氏の諸作は此の展覧會とぴつたり合つてゐる事を感じさせる氏が發起人の一人である事も、鑑査員である事も、其の作品の質量に於ても同會と氏との間には比較的矛盾が出來てゐない。けれ共氏の繪は決して文展から是認されない程特種なものではない。現に氏の繪は文展に入選して賞迄貰つてゐるのを見ても分る。但し其の賞が不當であつたかは如何かは覺えてゐない。けれ共今二科會の諸作を見て自分は氏の藝術に奥行を感じない。餘りに作り繪でする。氏は餘りに自然を客觀視してゐる。眼識に任せ過ぎてゐる。随つて氏の作に表れた自然は作者其の人の核心を包含してゐない。其の意味に於てアカデミストの進行と同樣に思はれる。假令其の技に於て進境を見ても、遂に自巳を畫面に塗り出す事が出來ない樣な結果になりはすまいかと氣になる。時事新報で氏の繪を批評した時自分は限りなく美しい繪だと云つた。然しそれは一種の調逵美だと云つた。それは前述の理由から自然との衝動的經驗が餘りに簡易に終つてゐる處に起因する事と信ずるのである。引いて氏の非觸的法則は餘り武斷に失した恨みを感ずるのである。

阪本繁次郎氏は文展に於ても當然二等賞位には選ばれる實力を持つ作者である。けれ共氏は遂に其の選に漏れてゐた。若し當局者の授賞の方針が順序を基として時々の作品に重きを置かぬ樣な仕組になつてゐるなら或は氏の如きは今回位が當番になつてゐたかも知れない。自分が氏の作品を嬉ぶのは徹頭徹尾其の純朴な點にある。そして其の力にある。古き者は古書に於て定められた法則を標準とし、新らしき人は新らしく發見された他人の或る物に支配され易い。けれ共氏の作品には不思議程それがない。随つて氏の作品は古書の法則に固められた人々の目に異樣に映ると同時に、新を追ふ人々の目にも失望され易い損な點を持つてゐる。只氏の作品は眞に氏の作品である丈である。自分は先づ其の點を嬉しく思ふのである。氏位自然の意志を強く感じて、それを表現するに於て其の實感を體裁美の爲に決して讓歩しない强情者は他に類を見ないと云つても好い。其の色彩に於ても其の形に於ても、決して妥協しない自信を、其の作品を透して感ずるのである。其の點に於て氏は凡ての法則を超越してゐる。筆觸に於て細密を極めてゐても、何時も其の大局に於ては大膽て且つ自由な意志を示してゐる。氏に取つて自は何

處迄も白、黒は如何なる場合も黒てある。そして斯る諸點が繪の内生命となつて觀者に迫つて來る。更にそして其の物から氏の人格を組織する樣々な性情を直感するのてある。『早春』は田舎家の庭の一隅を描いた樣な場中一の大作てある。其の取扱はれた場面と物は極めて芝居氣のない、積藁のもとに白犬が一匹早春の光を浴びて寢てゐる丈てある。けれども其の取材は氏の内情を語り盡すに充分てある。それ程氏の藝術は主觀的て純朴である。『早春』は其の描寫が部分的に傾いて、全般を統轄する力を缺いた爲め全體の感じとしてセックに落ちてゐるが、其の純朴の力は遂に失はれてゐない。

九里四郎氏が出品を見合せて、梅原良三郎氏が一點『靜物』を出したぎりでは發起人兼鑑査員としては物足りない感がある。のみならず無責任である。作家が展覽會の爲に描かないのは誰が云はなくも分る事である。然しそれなら最初から自ら團體的展覽會の組織にはのぞまない事である。自分は寧ろ氏等の努力が二科會の骨子となるべきを信じてゐる丈に、餘計に不滿な感がした。山下新太郎氏も同樣である。作品を持たずに自分等に都好合き計畫のみを立てるのは、藝術を離れた單なる政事運動である。同時に藝術家に取つて其れは恥辱でなければならない。

有島生馬氏の『鬼』が若しも此の會の動機の爲に生れたものとすれば、其の作の價値に拘いて先づ氏の立場として其の責任を感じた點に於て敬意を拂はなければならない。それと同時に氏に取つて同會の成立は有益とならなければならない。斯樣に凡て一會の成立は會員の凡てに取つて有益にならなければならない。自個を曲げて迄も會の爲に盡す必要は勿論ないが、それが自分等の理想的會合であれば、假令それが一時的にしも相當の愛會心が起らなければならない。其の時それ等の者に取つての愛會心は引いて製作的利益となるべき筈である。其の意味から其の會の製作的不充實は、其の會の成立の不自然と不純とを物語る結果となるのである。

外部からの批難は仕易いが、内幕に立ち入ると單純に行くものでない事を自分も知つてゐる。それに思ひ立つてから比較的短日月の裡にまとめ上げた第一回展覽會としては、先づ成功と云はなければならない。以後は會員諸氏の努力に俟つのみてある。而して文展對二科會が、巴里に於ける " Société des Artistes Français " 對 " Salon D'Automne " の樣な對立を示して進行する樣になれば、我が洋畫界も好くなるのみと信じてゐる　(完)

大戰後の豫斷

△戰後に於ける軍備問題

法學博士　戸水寛人

今日までに於ける獨逸の軍隊は實に强い。豫想以上に强い。勿論永い間の事を云へば獨逸と云ふものは遂に負けて、結局は聯合軍の勝に歸するであらうと思ふが、今日までの獨逸の勢と云ふものは素晴らしい者である。何故結局は獨逸が負かけるかと云ふに、之には格別の根據がある譯ではないが、獨逸人の數は少くして、佛蘭人、英吉利人、露西亞人の數が多いだからして通常なれば――若し何か特別の事情が起らなければ、――獨逸人の勇敢なのには驚かざる得ないが、結局は聯合軍に敵ふまいと思ふ。けれども、それにしても獨逸が侵略した所の土地を、聯合軍が果して悉く恢復し得らるゝかどうか疑はしい。白耳義は悉く獨逸に取られた。和蘭はまだ取られないが、あれも先づ獨逸の手に入つたと同樣である。此二國を聯合軍が恢復し得るや否やどうも疑はしい。それで戰後獨逸は事實に於て白耳義を自分の配下にするだらう。又元來和蘭人の言語はプラツトドイツの一種でホホドイツ即ち今の獨逸語と似て居る而已ならず人種も甚だ相似て居るが爲めに、獨逸には同情を持つてゐる。それで和蘭も矢張り畢竟事實上獨逸の支配を受けることになりはしないかと思ふ。で東の方で獨逸は失ふ所あつても、西の方に於て斯の如き結果を得るとすれば、和睦に於て獨逸は有利である。何處〱までも獨逸を擲き附ける積りならば、永い間には聯合軍の勝利に歸するだらうとは信ずるが、さうならぬ中に兩方共疲れて和睦するやうな事になりはしないかと思ふ。

若し果して以上の如き形勢になるとすれば、和蘭は事實上獨逸の手中に歸し、其結果絕東に於ける獨逸の領土は非常の大を加へる。今日蘭領となつて居る爪哇、ボルネオ、スマトラの如き大きな嶋嶼も皆獨逸の勢力範圍となる譯である。夫れ故に列强は、平和會議の時に、それ等の蘭領を獨逸に合併されぬやうな條約を拵へなくてはならぬのであるが、然し聯合軍が白、蘭二國を恢復することが出來ず、和蘭が事實上獨逸の配下に屬するとすれば、果してさう云ふ條約を拵へ得るかどうか疑はしい。若し獨逸が和蘭、白耳義を併はすことになれば、獨逸は此等の國の港を利用して英吉利を攻むることになるであらう。之は日本にとつては直接の利害はないが、歐洲列强の形勢にとつては容易ならぬ事である。

東の方に於ては獨逸と露西亞と相對して居るが、露西亞兵もなか〱

强いけれども、獨逸兵は又豫想以上に强い。露西亞兵が獨逸に侵入して伯林を衝くと云ふやうな事は容易ぢやない。大體に於ては獨逸が東方に於て負けるのであらうが、それにしても大敗をして國が亡びると云ふ事は一寸想像が出來ぬ。

以上述べた所の狀態を土臺として今後日本に於て如何なる軍備をやればよいかと云ふに、私は海軍に餘程重きを置かなければならぬと思ふ。之は陸軍を忽かにすべしと云ふ事では決して無い。之は誤解を避ける爲めに一言して置かねばならぬ。若し前に言つた如く獨逸が和蘭の領土を併合するとが無いと假定しても、今度の戰爭に於て大いに敎訓を得たのは米國が今後東洋に於て跋扈するならんと云ふ事である。之は今に始つた事ではなくして識者は夙に其徵候を認めて居つたのであるが、今日に於ては公衆も亦之を認めざるを得ぬ事になつた。例へば米國は、日本が南洋に於て領土を得るとを非常に氣遣ひ、動もすると日本に反對の色をあらはすが爲めに、外務大臣は南洋に領土を持つ野心なしと米國に向つて聲言したと云ふ事である。斯くの如き聲明をなしたのは、外務大臣の失策であると私は考へて居るけれども、更に進んで其原因を探究すれば、外務大臣が斯くの如き聲言をなしたのは米國の反抗を憂ひたによるのであらう。

昔時米國はモンロー主義を唱へて、西大陸に於ては歐羅巴諸國をして干渉せしめない代りに、米國は西大陸以外の事には容喙しないと云ふ事にした。此事はモンローの宣言には書いて無いが事實上容喙しないと云ふ事になつて居つた。確か一八八五年かに阿弗利加の事に關して列國會議を開いた時に、米國からは委員を派しなかつたと記憶して居る。其當時は米國は絕東に於ても誠に穩和なる國で、政治上何等容喙する所がなかつた。然るに此頃に於ては米國の態度がガラリと變つて西大陸以外の事にも屢〻口を出すのである。歐羅巴に大爭亂が起ると云ふと、平和を列國に勸誘する如きは即ち其一例である。歐洲列强に對しては米國は武を以て何事も爲し得ぬが、絕東に於ては米國は武を以て志を成すの餘地がある。故に絕東に於て米國が事を爲す時には武力之に伴ふ者と覺悟しなくてはならぬ。支那人は多少此消息を解するが故に、今後は主として米國に據らんとして、何事に就ても米國に相談をする。日露戰爭が終つてから後二三年の間は、支那人は日本に留學生を派遣したのみならず、支那の重要政治については隨分日本に相談して居る。然るに此頃は支那人は何事についても日本を相談相手とする事を好まない。日本に於ける留學生の數の減つたのは全く其結果であると考へる。日本が青島を攻擊するに當つても支那人が幾回となく詰らない抗議を申し込んで來た。一面から云へば獨逸に對して後日の辯解の料に供する積りであらうが、他の一面に於ては、米國が支那の後援となるとを信じて居るから斯くの如き事をするのである。

此等の事情によつて考へて見ると、平和條約の際に於ても米國が日本に對して不利益な言を放つものと考へて置かなくてはならぬ。戰爭後に於ても米國は其富力を賴んで、絕東に於て覇權を握るとを志すたらうと

思ふ。日本の立場から云つたならば斯くの如き富力を抱く米國と爭ふとは得策でない。けれども勢止むを得ずして爭はなければならぬとが生ぜぬとも限らない。事茲に到つたならば日本人たるものは自衞の必要よりして全力を盡して米國海軍の侵害に當らなければならぬと思ふ。

斯くの如き事をするには日本は今から海軍を擴張するの段取りをして置かなければならぬ。之はついて思ひ出すのは前内閣即ち山本内閣の企畫して居つた所の海軍の擴張である。衆議院に於ては前内閣の提出したる所の議案が通過したるも、貴族院が反對したが爲めに遂に其案が成立せず、且つ遂に内閣の更迭を見るに至つたのである。私は前内閣の提出した議案の良否について只今議論するのではないけれども、兎に角前内閣は何等見る所無くして海軍について大規模な計畫を立てたのではない事を信ずるのである。即ち已に其時代よりして米國が東洋に於て跋扈跳梁せんとするの傾向があつた故に、其防禦策として前内閣は擴張案を提出したのである。而して今日歐洲爭亂が起つて居るのであるから、之が濟んだならば益々海軍擴張の必要が起ると思ふ。如何となれば米國の傍若無人なる行動は益々大を加へるだらうし、假りに獨逸が和蘭の領土を併はするが如き事ありとすれば、日本は海軍擴張について小さな案を以て滿足すべきで無い。日本はまだ富んで居らぬ。だから大きな海軍を作つて米國などゝ對抗するは苦しいに相違ないが、國の存立の點より考ふれば斯くの如くせなければならぬのである。實業家は動もすれば軍備の擴張に反對して不生産的行爲なりなどゝ云ふけれども、然しながら實業家は政治の事については十分の研究をなしたのでないから、容易に實業家の言に耳を假すとがならぬと思ふ。嘗て和蘭と英吉利と相對立するに當つて和蘭の實業家が頻りに軍備縮少を主張したが、愈々之を實行した曉には和蘭は如何になつたか。忽ち英吉利の爲めに壓倒されて了つた。和蘭と英吉利の戰爭の歷史は大いに日本に對しては教訓になると思ふ。和蘭は歐羅巴の三十年戰爭最中に西班牙の羈絆を脱したのであつて、一六四八年のウエストフリアの條約によつて和蘭は初めて獨立になるとを決定せられた。其頃に於ては和蘭の海軍は可なり强かつた。獨立後間もなく和蘭と英吉利の戰爭が起つたのであつて、英蘭第一戰は一六五二年に初まり、和蘭の大將のヴアン、マルチン、トロンプの如きはなか／＼强かつたが、一六五三年にとう／＼戰死して和蘭は負けて了つた。英蘭第二戰は一六六五年に始まつて居る。此時に和蘭のデー、ルイテルが和蘭の艦隊を以て英吉利の艦隊を破り、一六六七年にテームス河を遡つてグレープスエンドまで至り、倘又テームス河口に近きシアネスを陷れてゐる。斯の如く和蘭人と英人と對抗したる當初に於ては和蘭人も强かつたが、和蘭の實業家が軍艦の製造に費用を投ずるとを惜んだが爲めに、和蘭の海軍が益々劣勢となり遂に英國の爲に破られ、世界に散布した和蘭の領土は大半英吉利の手に入つて了つた。之は日本人にとつて大いに教訓になるとと思ふ。實業家などは算盤を彈くことは知つて居らうが、世界の大勢には通じないから政治を談ずるには役に立たぬ。日本をして眞に富强ならしめんが爲めには海軍擴張の如きは第一の要件と思ふ。

次に陸軍について少し述べたいのは歐洲爭亂の後に於て露西亞人は餘程疲弊して居るから日本には軍備擴張の必要なしと云ふものがある。けれども私は之は誤つて居ると思つて居る。戰爭終るや否や露西亞は絶東に兵を用ふるとはしないであらう。然し戰後久しからずして必す其創痍が癒えるものと思ふから其頃には又絶東に手を出すに相違ない。殊に又戰爭の創痍を癒えしむるの手段として絶東に手を出すのが得策かも知れぬ露西亞人は固より日本人と戰を好むものではない。又今日に於ては兩國が益々親密を加へつゝある。然し日本の軍備に弛みがあると云ふと、露西亞人と雖もいろ／＼絶東に於て事を仕出來すだらうと思ふ。其時に至つて日本が故障を云ふ事出來ぬとすれだ、日本が絶東に於て失ふ所必らず大である。且つ又露西亞と戰爭を避ける積りなら軍備を擴張しなければならぬ。今日擴張の案を立てた所で直ぐに役に立つものでない。數年後にあらざれば擴張の効果があらはれぬ。だから日本は今日軍備を擴張するの必要なしと云ふは誤れりと思ふ。

戰爭前に於て露西亞人は支那に對して如何なる計畫を立てたか。之は支那通の皆知つて居る所で詳しく云ふ必要がない。露西亞人は白耳義のシンジケートの名を以て海蘭鐵道の敷設を計畫した。此海蘭鐵道は大體に於ては西比利の並行線である、一朝事ある時には之によつて大兵を支那に入れるとが出來る。歐羅巴の戰後に於ては露西亞人は必ず此鐵道を敷設するとを企てるに相違ない、之は固より戰爭の爲めに作るのではないけれども、然し戰爭の用に供するとも出來るものである。だから日本人は歐洲の大亂を見ても決して油斷は出來ぬと思ふ。

之を要するに戰後日本に於ては大いに海軍を擴張せなければならず且つ又陸軍の擴張を忽かにするとが出來ぬのである。而して此擴張と共に飛行機や、大砲軍器等の改善進歩を計らなければならぬ事は勿論である。（十月十六日）

△大戰後に於ける平和運動

安部磯雄

△平時に於ける平和運動

今日の樣な大戰亂の最中では歐洲に於ける平和論も全く沈默を守らざるを得ないのであるが、これは決して平和主義の無力なることを證明して居るものではない。既に國家が劍を拔いて起つた以上これを止むることは容易でないから、平和論者は已むなく聲を潜めて其時の來るを待つて居るのである。今日でこそ國家は殆んど舉國一致で戰ふて居るけれども、國民の多數が平常平和主義者であることは何人も疑ふことの出來ぬ事實である。若し基督教信徒の全部と勞働者の全體とが熱心なる平和論者であることを考へたならば、國民の八九分までが戰爭反對論者であると推定することが出來よう。勿論彼等は戰爭開始後に於ては強いて國論に逆行することを好まないかも知れぬ。然し彼等は平時に於ける熱心な

る平和論者である。クリスチャンや勞働者の機關たる新聞雑誌を讀めば直に彼等の主張が那邊に在るかを了解し得るではないか。若し今回の戰爭が突發的でなくて、開戰までに多少の時日があつたとしたならば、彼のモロツコ問題當時の如く、各方面に於て猛烈なる平和運動が起つたに相違ない。然し今回の戰爭を豫防し得なかつた平和運動者は戰後に於て實に花々敷活躍を試みるであらうと思ふ。瑞西のベルン市には國際平和會の本部があつて、毎月一回英佛獨の三國語を以て機關雑誌を發行して居る。今後平和會は活ける事實を提げて平和の必要を說き各國民の覺醒を促すことが出來る。而して灰燼に歸したるルーバンやランスやアントワープの跡を弔ひ、都會の工場や田舎の耕地が荒廢に歸したる慘狀を目擊し夫や父や子を失ひて盡きぬ怨に泣ける歐洲人は眞面目に平和の福音に耳を傾くるに相違ない。

△武裝的平和は頼むに足らず

歐洲各國が苦い思をして今日まで軍備を擴張して來たのは彼等がこれによりて平和を維持することが出來ると信じたからであらう。彼等は毎年軍費の爲に四十億圓位は費して來たのであるが、これを今回の如き大戰爭に要する軍費に比すれば遙に廉價である。玆に於て彼等は武裝的平和を以て歐洲の平和を維持し得るものと考へた。彼等は其平和を更に確實ならしむるために三國同盟對三國協商といふが如き勢力平均策をも案出した。然し今日よりこれを見れば勢力平均策も武裝的平利も却て今回の如き大々的戰爭を促進する動機となつたのである。大戰役の歐洲は何勢力平均策や武裝的平和を繰返すの愚を爲すであらうか。私は戰役後の列國會議に於て必ず根本的なる平和保障法が案出せらるゝであらうと信ずる。今其保障法に對する私の豫想を陳べて見よう。

△軍備制限說

軍備縮小說や軍備制限說は隨分久しい間唱へられて居る。彼ヘーグの萬國平和會議に於て度々提案せられた如く、戰後の列國會議に於てこれが再び問題になるかも知れぬ。軍備の競爭を許せば結局今回の如き大戰爭となることは明白であるから、將來歐洲の平和を保障するには軍備を制限するか、若くはこれを全然撤廢するより外はない。然し實際問題としては何れも困難なる問題である。過去に於ける軍備制限說は如何なる形をとつて現はれたか先づ此方面から陳べることにしよう。

英獨の海軍競爭が漸次激烈になつて來た時、幾多の制限案が專門家によりて示された。或人は英獨の海軍力に數字的割合を定めて、双方これを守ることとすれば、競爭は必然巳むであらうと唱へた。例せば英國の海軍力を三とすれば獨逸の海軍は二を超ゆべからずといふが如きである。然し此の如き案が到底英獨二國の承認する所とならぬのは知れ切つて居る。英國は假想敵二ケ國の聯合艦隊に優る海軍力を有することを原則として居るから、勿論これに反對する。更に獨逸が何時までも三對二の割合に服從することの出來ぬは明である。玆に於て英國政府は第二回のヘーグ萬國會議に於て英獨二國は將來軍艦の建造を爲すに當り相互にこれを通告すべきことを提案したのであるが、獨逸の首相も直に贊同を表し

たるがため、終に此點に關し條約の締結を見るに至つた。然しこれが軍備制限に幾何の効果があつたか、何人も殆んどこれを認むることは出來まい。

キールのハームス教授は海軍問題に關する大家であるが、海軍は外國貿易を保護することを主とするものであるから、英獨の海軍力は外國貿易額に比例して定むべきであると論じて居る。これは獨逸にとりて至極都合のよい議論であるけれども、決して英國を滿足せしむることは出來ぬ。若し英國をして言はしむれば必ず次の如き辯駁論が出るに相違ない。海軍力の必要は外國貿易の保護のみではない。英國の如く外國より多く食料品を仰て居る國は國民の生活を保護するといふ點から殊に大なる海軍力を要する。更に植民地保護の上から見るも同樣の必要がある。故に海軍力の割合を定むるには、外國貿易額の外食料品を外國に仰ぐ程度と植民地の多少とを標準とせねばならぬ。斯の如く議論が續出すれば、是れ亦水掛論に終るのではあるまいか。

武器に制限を加ふるといふことは全く出來ない相談であるが、第一回ヘーグの萬國會議以來屢討論せられたのである。即ち第一回ヘーグの會議に於ては銃砲、火藥、爆彈等の改良に如何なる制限を加ふべきかにつき充分なる討議が行はれた。其後瑞西のルーザーンに於ける平和會議に於て以太利のフアチオー氏は砲兵を全廢すべきことを提議した。其外潜航艇や鐵嘴を有する軍艦を禁止すべしといふ議論も度々試みられた。更に以太利王やルーズヴェルトなどは軍艦の噸數に制限を加ふべしといふ說を持出したが、全體軍備制限說が極めて不徹底の意見であるから、容易に行はれそうにもない。武器の制限をする位ならば寧ろ軍人の數に制限を加ふる方が有効であるかも知れぬ。私は勿論これを以て根本的の解決法といふのではないが、武器の制限といふことに比すれば慥に一層論理的である樣に思ふ。今軍人の數に制限を加ふる方法の二三を擧ぐれば左の如くである。或人は常備兵の數を制限するために、軍人は人口千人につき一人の割合たるべしと唱へて居る。或人は一家族より一人以上を軍人として徵集すべからずと言ふて居る。更に或人は義勇兵制度を採用すべしと論じて居る。中には一年兵役制度を强行すべしと說く者もある。要するに軍人數制限說は其徹底的なるだけに實行も極めて困難である樣に思はれる。

若し徹底的といふ點から言へば兵數制限說よりも軍費制限說の方が何ほ一層優つて居るかも知れぬ。軍費の制限さへ出來れば武器の制限も兵數の制限も自然に出來る譯ではないか。軍費制限說は大分以前より唱へられて居る。ロンドンに開かれたる平和會議は各國が或時期を限りて海陸軍費に制限を加ふることの得策なることを可決した。今其制限法を說かんに、若し各國が今後十年間軍備を制限すべきことを契約するとすれば、過去十年間に於ける平均一年間の軍費を標準として、將來これに超過せざることを約束するのである。第二回ヘーグの萬國會議に於ても此問題が討議せられたのであるが、唯一の反對論として陳べられたのは、軍費は每年議會の決定するものであるから、政府は獨斷的に軍備制限に

關する契約を爲すことは出來ぬといふにあつた。然しこれは餘り有力なる反對論ではなかつた。何となれば第二回のヘーグ萬國會議に於ては先きに反對論を唱へたる合衆國、英國、佛國の如きも全然其態度を改めたからである。

△結局は軍備全廢か

軍備制限説はヘーグ萬國會議の主唱者たる露帝ニコラス二世によりて唱へられたる以來種々なる形式に於て案出せられたのであるけれども、まだ其効を奏しない。如何なる點から見ても私は軍備制限説が實行せられようとは信ずることが出來ぬ。よし軍備の制限が可能であるとしてもこれが果して歐洲の平和を永く保障することが出來るであらうか。これが大なる疑問である。若し各國が古來の歷史と情實を無視して軍備を制限することが出來る位ならば、寧ろ軍備を全廢する方が彼等の爲に容易なことではなからうか。禁酒は比較的容易であるが、節酒は非常に困難である。私は軍備熱と飲酒癖との間には余程似た點がありはせぬかと思ふ。今度こそ歐洲人は全く軍備熱より覺めたに相違ない。彼等は正に節酒すべきか禁酒すべきかといふ問題を解決せねばならぬ位地に立つて居る。若し彼等が軍備制限といふが如き姑息手段を取りて一時的平和を貪らんとするならば、數十年の後歐洲は再び修羅の巷となるに相違ない。たとひ此度の聯合軍が獨逸を撲滅することが出來たとしても、近き將來に於て第二の獨逸が出現することは何人も容易に想像し得る所である。漸く論じ來れば大戰後の歐洲諸國は必ず軍備全廢といふ根本的問題にまで突進することであらうと思ふ。

獨逸の聯邦や北米合衆國の各州は各自に軍備を爲すの必要がない。何となれば各聯邦間や各州間に起る紛爭問題は中央部に屬する司法權これを處分し、其處分に服せざる者ある時は警察權若くは兵力を以てこれに制裁を加ふるからである。國際的紛爭を仲裁々判によりて解決せんとの意見は第一回ヘーグ萬國會議以來屢々唱へられ、最近には合衆國によりて提出せられたのであるが、其が多數平和論者の贊同を得たるに拘はらず、尙ほ其實行を見るに至らないのは全く警察權のこれに伴はぬがためである。若し歐洲の列强が軍備を撤廢して、これに代ゆるに各國共有の軍隊を以てしたならば、歐洲の平和は永久に保障せらるゝのではあるまいか。私は獨逸を撲滅したる英佛露の三國が如何に獨逸を處分するであらうかを考へて見たい。獨逸より五十億乃至百億マークの償金を取ることも一の方法であらう。然し獨逸の軍備に對して何等の處分をも加へざる時は是れ明に百年の憂を貽すものである。獨逸は一八七一年佛國より償金として五十億フランを徵したけれども、佛國の軍備に對して少しも手を着けなかつた。これがため普佛戰爭後獨逸は常に佛國の復仇を恐れて一日も枕を高うすることが出來なかつたではないか。然らば協商三國は將來の憂を除くため、獨逸より全然軍備の權利を奪ひ去らねばならぬ。獨逸は實に兵力を濫用して歐洲を攪亂したのであるから、其兵力を奪ひ去るの外に何等の手段なしといふべきである。私は何よりも何よりも獨逸を懲戒するにはこれが最良の方法であると信ずる。

然し私の思ふて居る所を遠慮なく言へば獨逸だけの軍備を奪ひ去るのは姑息なる遣り方である。若し協商三國の軍備が依然として繼續すれば早晩第二の獨逸の現出することは免れ難い。英佛露は寧ろ軍備全廢を斷行することが得策ではないか。彼等にしてすべての國際的紛爭を仲裁々判にて決定するとゝなれば米國が其同盟に加入することは明白である。此四大強國が一致の行動を取ることゝなれば其他の諸國がこれに贊同することは疑がない。玆に於て仲裁々判を有効ならしむるため各國は共有の軍隊を組織せねばならぬ。私は軍隊の組織につきて詳細を陳ぶるの必要はないと思ふけれども、其大體に就ては左の如くに考へて居る。即ち世界各國より平等に若干の軍人を中央部に送りて陸海軍を組織する。其に要する費用も各國平等にこれを負擔するのである。陸海軍は世界の各要所に配置して、仲裁々判に服從せざる國家に對しこれを差向くることにする。勿論これは一の想像に過ぎないけれども、私は高價を拂ひたる今回の戰爭が此位の思ひ切つた結果を生ずるのは當然の事と考へる。どうか歐洲諸國をして斯の如き根本的解決法を取らしめたいものだ。

△戰後に於ける日本の地位

石川半山

今回の大戰亂の後に於ける日本の地位如何を豫斷せよと云はれても、之れは神ならぬ身の容易に明答を與へることは出來ない、第一に戰局が如何に發展する者やら豫斷が困難なるが上に、第二に之れが何年かゝつて濟む者やら分らない、第三に其の講和の情況に依て、世界の大勢が如何に變するやら分らないから、世界の如何なる先見達識の士と雖も、恐らくは日本が戰後に於て如何なる地位に立つと云ふことを豫言し得る者は有るまい、勿論大膽に左樣なる豫言をなす者も有ろかも知れぬが、それが的確に命中するや否やは何人も保證する事は出來ない。唯玆に一問題として戰後に於ける日本の地位を如何に進むべきやは、政治家を初め國民一般の講究すべき者に相違ない、如何になると云ふ豫斷ではなくて、如何にすべきやと云ふ事なら、我輩と雖も多少の意見がないでもない。

南滿東蒙の處分

第一に我輩が希望する所は、南滿東蒙の處分だ、之れが日本の勢力範圍たる事は、既に中外の認むる所で有るが、唯公けの手續が未だ濟んで居らない、ソコで戰爭中でも宜しいが、之れは相當の手續を了して、戰後に於ては公然日本の物として經營する事にしたい者だ、北拾南進論者と稱する者の間では、滿蒙は荒凉寂寞の地にして、之を取るの價値なしと思ふて居る者も有る樣だが、それは滿蒙を知らない者の言ふ事だ、抑も滿洲の地たる今日既に五百五十萬町步の耕地を有し、七千萬石の穀物を產し、二億六千萬圓の貿易品を吐呑して居る、其中南滿洲盛京の一省に屬する者、耕地二百六十四萬町步、穀物收獲高四千萬石、貿易額一億圓以上で有る、農產物は高粱、小麥、大豆、粟の四種で有るが、近年稻

作も有望なることが發見され、既に之に着手し、關東都督府の調査に依ると、南滿洲に於て水田に適する地は二百萬町歩、其の收獲三千萬石に達すべき見込みが有ると云ふのだ、日本全國の耕地も、田が二百八十萬町歩畑が二百四十萬町歩で合計五百二十萬町歩に過ぎないとすると、滿洲は耕地だけでも日本と同じ大きさで有る。若し滿洲を價値のない所とするなら、日本も價値のない所と謂はなくてはならぬ。それに大森林が有る、又地下の富源は金銀銅鐵石炭石油皆無盡藏だ、試みに撫順炭鑛を見たばかりでも、其の富の大なることが分かる、東蒙古も亦耕作に適する地が一千萬町歩で、其の既に開墾されたる者が二百萬町歩を超へて居る、蒙古にも亦鑛物が有る、それに家畜類の多いことは、日本人の想像の及ばぬ所だ、此等の地方を日本の物として十分に經營する事は、日本國民として此際やらねばならぬ事で有る、而して之れは先つ英露兩國の承認を經て、支那に交渉すれば必ず成立すべき事と考へる。

山東省の經營

第二に山東省は新に日本の勢力圏へ移入されなくてはならぬ、是迄獨逸が山東省に於て有したる勢力は、全然日本の手に讓與されなくてはならぬ。獨逸は必ずグズ〳〵言ふに違ひない、或は其他の列國の間にも、何か反對らしい事を言ふ者が有るかも知れない、獨逸に買收されて居る支那人等も、何とか理屈を附けるに違ひない、然かしながらソンな事に顧慮する様では日本は世界の大舞台に活躍する事は出來ない、泰然自若として其の歩武を進め、其の堅實なる勢力を此の方面に扶植しなくてはならぬ、近頃往々にして膠州灣無用論を耳にするが、若し膠州灣を日本の物にしない位ならば、五千萬圓の金と少からざる人命を犧牲にして之を攻め落す必要はないではないか、或は又山東省を取る必要なしと唱ふる者も有る、之れは支那の形勢を知らない者の言ふことだ、全體此の青島及び山東省の實地を見ざる連中が、ソンな机上の空論を吐いた所が、それは何等のオーソリチーを値ひしないことだ、一たび此の地方を通過して之を見た者は、誰れでも之を日本の領有とする事の如何に利益あるかを知て居る、山東鐵道は勿論、鑛山でも何でも是迄苟くも獨領に屬したる者は、悉く日本領として之を經營するが宜しいと思ふ、獨逸が此の權利を獲得するに付て費やしたる者は唯僅かに二人の宣教師と滿洲朝廷の腐敗したる大官へ贈くつた數萬圓の賄賂に過ぎない、日本は之に數百倍する人命と黄金の犧牲を拂ふのだから、其の勢力は、更らに大いに伸長して然るべき事だ。

支那大陸に於ける日本の勢力

第三には支那大陸に於ける日本の勢力を、確實に進展せしめなくてはならぬ、歐洲の列強が此の大戰に依てドレだけ疲勞するやは、固より豫斷することは出來ないが、然かし必ず疲勞することは爭はれない事實だ其の程度如何は分らないけれど、ドレだけか疲勞することは疑ひもないことだ、戰前の列強と雖も、東洋に於ては、日本が敢て一歩を讓るべき理由は無かつた、[illegible]を極東に送るの便宜を有し、旅順や浦鹽に大軍隊を有したる露國すらも、日本にはアレだけの失敗を取つたのだ、況んや其

他の强國をや、日本は武力の一點に於ては決して世界に恐るべき者はないのだ、特に今回の大戰を經過して彼れ歐洲の列强が、大に疲勞したる時に於ては、最早や何の憚る所が有らふぞ、ドシ〳〵其の勢力を進展するが宜しい、斷じて之を行へば鬼神も之を避くと云ふことが有る、如何に强大なる實力を有して居ても、其の精神が臆病なれば、弱者から馬鹿にされる世の中だ、日本は常陸山や太刀山の如き堂々たる威風を以て、大陸の土俵を濶歩するが宜しい、勿論列國から多少の苦情は持ち込むかも知れぬ、支那人の間でも何れ種々の叫聲を發することと考へるが、ソンな事にビク附いて居ては世界の列强の一に加はつて、大きな顏は出來ない、何人も當る可らざる强大なる自信力を發揮して、思ふ存分に日本の實力を此の大陸の上に現示しなくてはならぬ、若し此の勢ひを以て臨めば、袁世凱の如きは我が旭日の國旗の前に叩頭して其の意を迎へ、あらゆる難問題は悉く容易に解決が出來るで有らふ。

南洋に於ける日本の地位

第四に南洋に於ても日本の地位を進める必要が有る、我輩は北進南進東進西進論者だから、必ず北方ばかりとは言はない、南方へも伸長せよと云ふのだ、開戰の當初に於ては、或る事情の爲めに日本の艦隊は南洋に於て、何等の活動をもなすことが出來ない事情の下に在つた、英國の軍艦が如何に良い所を占領しても、日本は唯指を食へて見て居るべき事情の下に在つた、然るに獨逸の巡洋艦エムデン號が、印度洋に於て暴行をなしたるが爲めに、日本の艦隊が南洋に於て多少の活動をなし得るの權利が出來た、而してヤルート島を占領することが出來た、然かし今後日本軍艦が更らに有利なる地點を占領し得るや、又之れから戰爭の終了する迄、何等の活動もなくして終るや、それはサッパリ分らないが、何しろ戰後に於て日本の南洋に於ける地位が一進する樣に努力することは日本國民に取て最も必要なる事で有る、獨り獨逸領ばかりではない和蘭領に向ても日本の勢力を進める方略を講ずるが宜しい、獨逸領は裏南洋で有て、和蘭領は表南洋で有る、是れ迄列强が表南洋の和蘭領に垂涎しながら、之に手を出すことを憚かつたのは、全く獨逸を恐れて居たからで有る、若しも今回の戰爭で獨逸が失敗して彼れが恐るべき者でないとなつたならば、ジャバ、スマトラを初め和蘭領一帶の地は、列强の爭奪に會するに違ひない、日本などは此の場合に決して坐視傍觀すべきではない、大に進んで取らざる可らずと考へる。

强國の得手勝手

外國の鼻息ばかりを伺ふて居る連中は、南洋に日本の勢力を進展すると、英米兩國の感情を害するから、之れは大に愼しまなくてはならぬと言ふ、然かし日本は英國の屬國でもなければ、米國のテリトリイでもない、全體英國は勝手に世界中を取つた國だ、其の國土に太陽の輝かざる時なき迄に、領土を擴張したのは、決して正義人道ばかりで押し通した者ではない、鴉片を賣て支那人の身體を害し、それを拒絕する支那人を討伐して、香港を奪ひ取つたではないか、ソンな惡事をして置きながら口を拭ふて正義人道の一手專賣人の如き顏をするのは、怪しからぬ次第

で有る、特に南洋に於ても濠州を初め、多くの土地を占領して置きながら、日本人は此の方面へ來てはならぬと云ふのは、ヒドい我儘だ、今回の如きも自分で逸早く獨領の旨い所を占領して置て、日本は指を喰へて見て居れと云ふのは、得手勝手の甚しい者だ、世界の人は「日本の外務省はドウニング街に在り」と言て笑ふて居るさうだが、我等日本國民は外務省をソンな途方もない遠方へ置いた覺えはない、米國にした所が、弱い西班牙をイジめて比列賓を奪ひ取て置きながら、日本が南洋へ出でるのを彼れ是れ言ふのは我儘だ、米國人に責むるに此の事を以てするとナニ我等は比列賓を西班牙から買ひ取つたので、奪ひ取つたのではないと云ふが、ソレはヘラズ口と云ふ者だ、成程、媾和の形式に於ては、米國は西班牙の顏を立てる爲めに、少しばかりの金を拂ふたに違ひないが西米戰爭で叩き附けて置て、少しばかりの金をやつたからと云ふて、强盜の罪は逃れるワケはない、自分では勝手な眞似をして置て、人にはさせぬと云ふのは理屈が違ふ、コンな事を默過して居れば、ドノ位增長するか知れない、然るに日本の外務大臣は一昨年あたり重要なる公文書に對して、ブライアンの撿閲を請ふたと云ふ事だ、此の意氣では實に國家の前途が思ひやられる、日本國民たる者は最早や遠慮は入らないことだドシドシ何處へでも突進して、思ふ存分に其の勢力を發展しなくてはならぬ。

米國との關係

歐洲列強は今回の戰爭に依て、大に疲勞するから戰後に於ける日本の發展に對して、從來の如き干涉的態度を改めるかも知れないが、獨り米國に至ては歐洲が衰へる反比例に强くなつて、日本に向て强烈に當て來るかも知れぬ、之れは多くの識者が恐れる所で、我輩も之を認める所だ特にカリフオルニア州の如きは、如何にもして日本人を怒らしめようとして居る、其の意氣は國交を害せずんば止まざるの勢ひが有る、昨年は土地問題で矢釜しかつたが、日本は唯抗議をしたばかりで、何の實効もなかつた、實力の伴はない抗議は何の役にも立たない、ソコで今回は更らに一步を進めて來た、昨年は日本人の土地所有權を奪ひ取つたが、それが成功したので、今回は日本人の借地權をも奪ふべしとの運動が始まつた、想ふに來年の州議會は必ず此の法律を通過して、日本人は一層甚しい迫害を受けるに違ひない、凡そ屈辱を忍ぶ時は、相手はドコ迄も增長して無法なことをする者だ、一步を屈すると一步だけでは濟まずして、必ず更らに强い壓迫が來る、米國の國内で日本人を壓迫して、日本人が之れに屈服するのを見れば、更らに國外の支那に於ても、南洋に於ても、日本人の活動を制せんとするに違ひない、日本人は米國へ入るの自由を失ふた、之れは米國が先づ日本の上に加へたる壓迫の試みの第一で有る、此の自由を奪はれて屈服したのを見て、彼れは第二に土地所有權を奪ふた、之れも屈服したから更らに借地權を奪はんとして居る、若しも之れにも屈服すれば、支那でも南洋でも日本人の頭を叩き附けるに違ひない、ソコデ日本が此の橫暴なる米國に對して、ドレ程迄に屈服すべきや、何時迄屈服すべきや、若し屈服せずとすれば如何なる決意をなすべきやは、最も

冷靜に考量すべき問題で有る、而して此の決意如何は戰後に於ける日本の地位に甚大の關係を及ぼす者で有る。

貿易は國旗に從ふ

日本が十分の覺悟を以て、東洋及び南洋に確實なる地歩を占むるに於ては、貿易は國旗に從ふの道理だ、我が國産の販路も自然に開かれて、貿易も必ず繁榮を來すに違ひない、是れ迄東洋及び南洋へ獨墺白佛の諸國が賣り込んだ物資は凡そ五百餘種で、其の年々の賣込み金高は凡そ二億圓で有る、されば今回の戰亂で彼等が之を市場へ送くる便宜を欠いで居る際、日本の生産品を此の方面へ輸出して、此等諸國の物品に代はらしむべしとの聲が高い、如何にも尤もなる言論だ、我輩も至極同感で當業者の奮發を促すに付て、決して不同意はないが、然かし考へて見ると貿易は國旗に從ふと云ふ事は忘れられない、今一時獨墺白佛が戰爭に多忙なるに乘じ、其の空巣をネラふて、市場を開拓した所が、日本の國旗の威力が薄弱で有つたなら、戰後には又其の市場を列强に回復されて仕舞ふのは明白だ、故に戰後に於ける日本の地位を確實に進展して、貿易の繁榮を企圖し、生産の增進を計畫するには、ドウしても先づ日本の國旗の威力を、東洋及び南洋の各地に發揮しなくてならぬ、言ふ迄もなく二十世紀の競爭場裡に於ては、勝者は正義で有る、强からざる者は正義を叫んでも其の功がない、總べての權利は唯强き勝利の人に依て決せられるのだから、日本國民たる者は先づ力を養ひ、後に之を發揮するの努力をなさなくてはならぬ、而して此の努力の程度如何に依て、戰後に於ける日本の地位は定まるワケで有る。

△戰後に於ける思想、藝術の傾向

中澤臨川

最近の歐洲は、思想や藝術上では、國境と云ふ觀念は、餘程薄くなつて居る。隨て這回の戰爭で、地圖の外形は、如何樣に變らうとも、思想や藝術の傾向進歩には、大した影響は無からうと思ふ。要するに、泰西の文明は、所謂ユウロピアン、カルチユーアと稱する廣い文明の方に進みつゝある。戰爭は一時心的文明の行路を阻止しても、之を退化させ又は其方向を急に曲させる樣な事は無からう。從て戰前の傾向が、戰後も引續き押進むものと見て宜い。

現代の歐洲文明は非常な光明を前途に有して居る。其の一般的特性と云へば、精神的復興否寧ろ精神的新生の機運に向ひつゝあると云ふ事が出來る。十九世紀の物質文明から、脫出して、新らしい精神の聲が聞かれる樣になつた。本能に重きを置く生命の哲學にしても、新藝術の機運にしても、又はブラバツキー夫人の唱道し初めた見神學にしても、皆な此の機運を豫言して居る。ブラバツキー夫人は其の著書の中で、恁う云つて居る、「二十一世紀の我等を今日の有樣に比較すると、我等の地球は

一つの天に要るであらう』と。

恁樣な機運は甚だ旺んではあるが、未だ無自覺の狀態にゐるので、確定した言語で、其の意味を充分に現す事は出來ない。唯だ之を哲學及び美術の方面から丈觀察して見やう。今日の哲學は一方にベルグソンの說く樣な、生命の哲學、直觀の哲學が唱道せられる一面には、劍橋大學のラッセル博士の說く樣な、前者とは全然正反對な本質(エッセンス)の哲學、堅實な常識の哲學が唱道せられて居る。又た美術の方面では、是と並んでカンディンスキーとピカソの繪畫とがある。恁樣に兩方面とも正反對の樣に見える傾向が並んで存在しては居るが、是は只だ人間の精神的活動の兩方面を見たもので、孰れも新らしい精神復興の旺んな機運に促されて起つたものである事は事實である。我等の恁樣な精神的要求は、今日まで我等が支配され、影響されて來た外的自然即ち物質界の影響から全然離脫しやうと云ふ努力に於て現はれる。換言すれば、在來の因習を超脫しやうと云ふ事である。ベルグソンの言葉を借りて云へば、自働律(オートマチズム)は敵である。夫れでデカルトからカントに至つた數學及因果律に囚はれた哲學を破するのが、ベルグソン哲學の要旨であつた。又一方ラッセルの哲學では、理智は尊重するが、今迄の五感に囚はれた因習的數學の囚れから脫して、矢張りカント哲學の缺點を超越するが其の目的であつた。

美術の方面でも、功利的の感官から脫して、眞の物、即ち外觀の奧に隱れた絕對實在即ちユニバーサルに到達しやうと云ふのが最近の努力である。

要するに、物質から超越し、其の影響を離脫し、奴隸的因習に打克ち我等の精神的獨立を確保して、心靈の自由に到達しやうとするのが、現代の要求である。で、戰後の文明は國境の如何に拘らず、此の偉大な根本的要求に促されて、新しい心靈の天地を開拓するにあるであらう。一步進んでは我等の個性をも超越し、種族をも超越し、藝術では其のスタイルをも超越して、純粹精神界に達する事が未來の文明の努力であらう。ニイチエが『人類を苦む』即ち人類を超越すると云つた言葉の意味が夫れである。

要するに今後の文明の意義は『精神的新生』、『破因習』、『純粹』、『絕對』といふやうなモットーで現はすとが能きる。

△戰後に於ける列強の國內狀勢

法學博士 蜷川新

豫斷は極めて難事である、乍然過去現在の狀勢より推考して、現時の交戰諸國の戰後に於ける狀勢を豫想するのも、亦一種の興味ある研究である、生きた社會は固より如何樣に變化し來るかは不明であるが、過去と現在とより順當に進むものとして如何なる狀勢に至る可きかを推測して見よう。

之れには先づ獨逸を敗者と斷定し、且つ如何なる程度に於て向後獨逸を存在せしむるかと云ふことを豫定したる後にあらざれば本問には入り込めないのである。獨逸を充分に挫くのと生き殺しにして置くのとで、戰後の各國の狀勢に餘程の差異がある。余は獨逸が夥多の償金を課せられ、航海業と海軍との根據地を奪はれ、アルサスローレーンは勿論、萊茵地の工業地を佛白に取られた事として、列強の戰後の狀勢を述べるのである、蓋し議論の根據を定めずして、漫然甲國は斯く々々乙國は斯く々々と云ふのは夢中の夢とでも云ふ可きものであるからである。

一、佛國の向後の狀勢

爾來佛國は天才國として各國も認め自分でも固く信じて居る國である。腕力を自慢するのは、乍憚自分等が昔し若い時分やつた事で、今ま時分そんな野蠻臭い事は、自分等のする事ではないと云つた樣な風に、惡く言へは老成した、好く云へば進歩した思想を持つて居る國である、二百萬三百萬と云ふ多大の陸軍を養ふたのは全く獨逸に對する爲めである。であるから敵の獨逸が起つ能はざるに至つたなら、彼れは極端に平和を主張し智力と富力との競爭で來いと云ふ國民になるに違ひない、ジョーレーは殺されたが、ジョーレーの樣な主張をする者は益々殖へることであらうと思ふ、佛蘭西の樣に一般の人民の智識が進んで居る國民に對しては言論思想の自由を壓抑する事は到底不可能であるは云ふ迄もない。

佛蘭西人は一時は那翁一世を厭つた、併し今の佛蘭西人は深く那翁を敬して居る、又帝政を希つて居る人もある現に今春「ル、マタン」新聞で佛國の向後を如何にす可きかと云ふ題の下に、廣く意見を募つた時分に、帝政を可とするものも折々あつた、乍然佛人は那翁の如き曠世の偉人の出る事は再び望む可らざることであつて、而して一人の心を以て國民の休戚を決する樣な政治は危險であると云ふ考が大多數の人の心を司配して居るから、假令戰勝つて軍人が偉功を建つるとも、それは國民全體の力と認めて、決して武人崇拜武人萬能と云ふ情態は生しまいと思ふ。

佛國は獨逸に比しては人口は少いが、アルサス、ローレーンを取れば人口二百五十萬を增して四千二百萬計りの人口となり、英國とは人口の點では互角となり、從來の如く悲觀するを要せぬ國となる、況んや佛は多數よりも少數の精を重んずると云ふ國民思想であろから、獨逸に對する武力の問題を除けは、四千萬も居れば充分であるから、愈々各人の智力を充溢し、各人の富を蓄積し、數よりも實質を選ぶの主義を愈々益々重んじて、勞力の過剩や、富の不平均を避ける樣にして、社會問題を良好に解決して行くであらうと思はれる。

佛國の殖民地は、本國から地中海を越へて、彼岸亞弗利加の三分の一に亘るので、此上殖民地を世界に求める必要は毫もない國であるから、領土擴張と云ふ樣な問題は向後全く之れを顧みずして、此の未開地の開發に力を注ぎ、文化の開拓者と云ふ名を得て、世界に矜るに努めるであらうと思はれる、今でも現に南米の植木を亞弗利加に移殖し、サハラの砂漠を利用し熱帶の日光を一種の動力に使用することを研究して居り、佛人の中には殖民地は投資や人口移殖の爲めに有するにあらず、文明の爲めに

有するのであると力昧んで居るものもある位である、向後益々然るであらうと思はれる。

佛國の美術工藝や獨特の産業は益々進歩するに違ひない、佛國の文學、法學、醫學、理化學、土木工學、並に農學は愈々益々進歩するであらう、世界に獨逸熱が衰へれば自ら佛が學問の中心と成り來るのであつて、佛の實質上の進歩は、今日既に著しいのであるが、流行心理で從來は獨逸の呼び聲が甚だ高かつた次第である、佛は得意にならうが失意に陥らうが、其の人民には天才が居り、學問研究に熱心な國であるヿは、過去の歴史の示す所で、此點は永久に衰へるものであるまいと思はれる。

佛蘭西の國内政治は不相變小黨分立で、内閣の動揺は不相變頻繁であらう、佛人の様に、各人に各々意見がある國民には、小黨分立は當然である、對外政策の爲めには常に不利の結果を來すが、國内政治としてはドーカして權力にこびり附からうと云ふ様な、官權主義の政治よりも却つて男らしくて人民の爲めにも、決して不幸ではあるまいと思はれる。

佛蘭西は向後益々英國と親しみ、兩國同士は恐らく爭ふヿはあるまいと思ふ、經濟上にも互に其の特長を維持して、有無相通し、英獨の如き競爭を來す様な産業には、互に注意して手を出すまいと思はれる、而して兩國の間には遠からず隧道が出來て船に依らずして交通し、英人は巴里を休息の場所として頻々として來遊し、別荘等も追々と出來英人の性質は漸次に佛國化せらるゝに至るであらうと思はれる、今日既に明かに其の徴兆が見へて居る。

要するに佛蘭西は益々平和的、文明的、共和的の國民となり、智と富とを以て、永く歐洲に鳴るであらうと思ふのである。

二、英國の向後の狀勢

英國は「船、商業、殖民地」の國である、此れを脅かす國さへなければ、英國は安んじて其國内の社會問題を整理し、全力を之れに盡す可き國であらうと思はれる、

英國は既に領土を過食して居る、英國には最早領土慾は有り得ない獨逸さへ衰へれば「商業」と「船」との問題は當分安全である、殖民地も印度の方面が心配丈けで、後は先つ安心である、而して印度は如何に海軍を盛んにしても解決せらるゝ問題ではないから、努めて露國と親和し、其の國内の整理に力を盡すであらう。

英國は工業國であるが爲めに勞働問題が常に興る、之れを救ふが爲めには多額の費用を要するから、出來る事なら其の海軍費を減じて之れに向けようと望んで居るのである、向後は即ち暫く其の時であらう、從つて對外政策に重きを置く保守黨よりも自由黨の方が、向後の英國の爲めには重寶がられて、自由黨内閣は益々萬歳であらうと思はれる。

英國の農民は誠に憐れである、土地は富者に領有せられて、農民には土着を必要とする念が全くない、であるから、農民は次第に都に出るか外國に去つて、英國の爲めに、此の現象は目下大ひに憂へられて居るのである、地方衰へて都のみ膨脹する今日の英國は、ドーしても社會問題

が湧いて來て之れを解決することが國の急務であるとせられて居る、此れも亦自由黨内閣の當然解決す可き問題である、何れを向ひても英國には差當り自由黨のなす仕事のみである、英國は向後社會問題解決の爲めに極力盡瘁することであらうと思はれる。

英國の政界は佛の如くに向後も大動搖することは斷じてあるまい、蓋し英人の性質が然らしむるのである、英人は甚だ政治には熱心であるが、百人百色の意見を出すと云ふ樣な國民ではないのである。

英國の商工業は益々盛んであらう、併し英國には盛大なる學問は起るまい、學問の民としては英人は佛人よりは確かに劣つて居る、此事は英人自身が認めて居るので、向後に至りても此の事實は變ずることあるまい英人は始終商工業の民である。

英國人の自治を愛する精神と民主主義を重んずる觀念とは、益々研かれるであらう、而して英國人の義務心と自治の觀念とは、不相變好く調和して行くであらう、英國人は固く此の自信を抱持して、徴兵制度や軍國主義は永久に之を實行することがあるまいと思はれる、又殖民地も英國人の住する地方丈は、永く此の精神により英國より分離することを欲する樣な事はあるまいと思ふ。

要するに英國は向後暫くは對外問題よりも、主として社會問題の解決に努むるに至り、平和を愛好する自由の民として存するであらうと思はれる。

三、露國の向後の狀態

露國は武の國である、まだ英佛程の進化なき國である、又南下を欲する國である、であるから此國はドコ迄も侵害主義に出づるかの如くに思ふものが多數だが、此國の南下と云ふのは、今日では其の無限の國產の販け口の爲めに必要なのであつて、之れさへ得れば後は其の尨大の領土の開發に全力を注がざる可らざる狀態に在るので、露國の爲めには此點同情するのが當然と云ふ可き次第である、今回露國にして地中海なり北海なり或は未來の約としてペルシヤなりに進出する道を得れば、露國は必ず其の武備よりも產業に力を盡す國になると思はるゝのである、今日に於ても「ボスフオラス」海峽を通過する貨物の多くは露國の穀物である、室を領するものは其の鍵を受取らざる可らず、露國が黒海迄有して「ダーダネルス」を有せざるは不自然である、英佛が之れを妨げたのは餘りに酷であつた、露國を邪魔して、露は南下の野心ありと天下に叫ぶのは英の猾智である、露國は向後西伯利亞の開發を圖り無限の富を啓くに努力するであらう、ポーランドに自治を與へれば、露國人の移住は愈々西伯利亞方面となる、露國の年々增殖する多數の人民を西伯利亞に移して此土地を全部農地とすれば、其の富の大實に無限である、露國は必ず玆に志し而して後靜かに印度に出づるの案を實行し、玆に露は眞に完全の大國となるに至るであらうと思はれる、併し之は餘程先きの事に屬する。

露國内にも文化は益々進み益々言語の自由は發達するであらう、乍然露國は農國であつて、土地は餘りあるが故に、勞働問題は比較的輕少であると思ふ、而して露國民が益々自國の偉大なるを自覺し、偉大なる農

業國として利益の多大なるを知るに至つたなら、益々統一協和し來つて過去の如き無定見の國内紛擾は自ら消へ去る事であらうと思はれる、而して又之れと同時に文化も進んで來ると思ふ、併し兎に角恐る可きは此の國であるのである。

四、獨逸の向後の情態

獨逸の將來の事は十月號の太陽に述べた通りで、本來交戰列國は、此國の陸軍を潰し、海軍を亡ぼし、其の海運業を衰へさせ、其の商工業を打撃し、其の帝國主義を覆滅せんが爲めに、戈を取つて起つたのであるから、此目的を達せらるゝ迄は戰ふものと見ざるを得ないのである。

若し豫定の通り獨逸が打撃せられたとしたら、獨逸は必す再起の力は全く無くなるに相違ない、何んとなれば、從來獨の强勢は墺と伊との伴侶があつた爲めであるが、伊は全く離れ墺は向後全く無力のものとなる事明白であるからである。

獨は斯ふなれば其の固有の國民性に返り、外國移民として各國に出てゝ各國に同化し、其の國内に居るものは、音樂文學に志し、國内は平和を愛し、自由と民意とを重んずる民となるであらうと思ふ、獨逸民としては此れが最も適して居り、又最も萬全な策であるのである、又最も穩健開明の思想である、英佛も必す之を望むに相違ないと思ふ。

五、墺國

墺と云ふ國は土耳古の如くに、やたらに多くの國を呑んで少しも消化しきれないのである、外形計り大きくつても胃弱者である、向後到底望みはないのである、此國が多數の異民族に分離する事は露佛の爲めに望ましい事であるから、必ずさうなるに違ひあるまいと思ふのである。

六、塞比亞

「セルビヤ」は古への大セルビヤを理想として「ボスニヤヘルセゴビナ」を領し、「アルバニヤ」の一部をも領有せんと志さすに相違ない、然し大國の指揮で「アルバニヤ」はモンテネグロに與へてバルカンの均勢を取るとになるかとも思はれる、露西亞の政策は墺を分裂させて之れに由つて以て獨の再起を不可能ならしむるにあると察せられる、セルビヤも必ず滿足して產業に努力するとであらろ。

七、白耳義

白耳義は一時獨逸に敗れても一自由の國として再び隆昌になるに相違ない、多額の償金とラインの左岸に若干の土地とを得るであろうし、不相變工業國として又永世中立國として大國の間に立つに相違ない、獨逸さへ衰へれば此國は再び今度の樣な目に遭ふゝとはあるまい、此國が獨立して居る事は英國の熱望であると云ふ迄もない、此國は現時に於ても國際法其の他法律の研究盛んであるが、向後は必す益々國際法の研究熾んであらうと信する、白耳義の中立が侵されたとの故を以て、國際法に權威なしなんて云ふ連中は、全く法律と云ふとが解らない人であつて、白耳義人に由りて這回も國際法の價値は益々發揮せられたのであるから、此國人は益々矜りとして之れを研究し主張するであらう と思 ふの である。

歐洲伏魔殿の新解剖

ドクトル フィロソフヒー 長瀬鳳輔先生
文學士 内藤智秀先生 合著

巴爾幹の變遷

菊判 四百餘頁 定價壹圓六十錢 郵税金十二錢

巴爾幹半島は由來歐洲の**伏魔殿**と呼ばれ、或は危險地帶と稱せられ、其の禍亂動もすれば歐洲一般に波及し、列強政治家の神經を惱ましたること一再に止まらず。古來此地に起れる戰爭にして**歐洲六列強の參加せざる事殆ど無し**。是蓋し歐洲勢力の均衡を維持せんが爲のみに非ずして、直接間接に自家の安危消長に關するに由る。特に汎**スラーヴ主義の露國竝に其餘國と汎日耳曼主義の獨墺兩國**とに取りては國家の存在上重大なる意義を有するが爲なり。現に今回突發したる**世界の大戰亂**も、**其導火線の此半島に在りたる**事實に徵して益明瞭ならずや。この巴爾幹半島を種々の方面より觀察するは最も興味深き事なるにも拘らず、從來此地に關する著書は單に東歐問題に關するもののみに限られ、其最も**曲折波瀾に富める變遷を詳述**して史的知識を與ふるものに至りては、我國には絶無なりき。著者兩先生深く之を遺憾とせられ、數年の星霜を費やして本書を公けにせらる。凡そ文明人士に取りて史的知識の興味あり必要なるは固よりなれど、今日此際何人も讀んで知見を開き、快哉を呼ぶもの本書の右に出づるものあらざるべし。

發行所 東京神田 (振替五〇一一番 電本 四一三〇 一〇三六) 合資會社 富山房

（中付二の二）

南島の占領は愈本書の切要を證明す

後藤男爵 新渡戸博士 内田總督府民政長官 序

農學士 東郷實先生著

臺灣農業植民論

菊判七百五十頁
附表大小五枚

定價貳圓五拾錢

郵税内地十二錢
臺樺卅錢
鮮支四十錢

國力の發展と領土の膨脹とに伴ひ、最も研究を要するは植民政策也。本書は著者が臺灣總督府に在り前後二回歐米に遊びて各國植民地を視察し八年間研鑽の結果に成れるものにして引證該博、立論適確、所説斬新、能く學理と實驗とを調和し、實に最近稀れに見る名著なり。本書題して殊に臺灣農業植民論と稱すれども、其内容は極めて廣く、世界の大勢より、熱帶植民地の將來を論じ、更に臺灣統治の根本と母國農民の移植策に及び、且つ官營農業植民の現行制度を述べ、資本的、移住的兩植民政策併用を主張し、以て民族統治の大政策を詳論せり。今や帝國植民地は何れも母國農民の移植を必要とし、且つ南方熱帶の經營最大急務たるの秋に方り、帝國の植民政策に對して最良指針たるは勿論植民政策研究者唯一の好參考書にして一般經世家必讀の名著也

東京神田
合資會社 富山房
振替五〇一番
電本四一三〇・一〇三六

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

通俗にして最權威ある
最新事實のエンサイクロペヂア

時事叢書

（第一編）伯林と巴里　文學士　保科孝一先生著
（第二編）歐洲文明の沒落　理學博士　遠藤吉三郎先生著
（第三編）歐洲大戰の中心人物　慶大教授　田中萃一郎先生著
（第四編）白耳義及白耳義人　法學博士　長岡春一先生著
（第五編）ビスマルクと獨逸帝國の建設　文學士　齋藤文藏先生著
（第六編）獨逸と獨逸人　文學士　片山孤村先生著
（第七編）英國及英國人　文學士　內ケ崎作三郎先生著
（第八編）獨逸皇帝　文學士　煙山專太郎先生著
（第九編）戰爭と世界の終局　陸軍教授　昇曙夢先生著
（第十編）墺洪國と其皇帝　文學博士　坪井九馬三先生著

以上十月中既刊
以下矢つぎ早に發行

毎月數册發行　口繪及カット入　定價廿錢　郵稅四錢

時事刻々急轉變化せる世界日新の事實に對し、最も平易にして明快なる解釋の資料を得んとせば、「時事叢書」を讀め流麗の文章、珍貴の繪畫、趣味と實益を兼ねたる國民座右のエンサイクロペヂアとして家庭の讀物として永く新時代の寵児たるものは本叢書也

東京神田　合資會社　富山房　振替五〇一二

壯烈無双　天下一品

大戰寫眞畫報

菊判二倍大毎月十五日定期刊行口繪三色版一光澤寫眞卌二頁二百餘種▲詳細戰局圖附

定價廿五錢　郵稅二錢　三月分郵稅共七十九錢半年一圓五十六錢

曠古の大戰を記念すべき最大の寫眞畫帳として滿天下の熱狂的歡迎聲裡空前の巨數を發售せる本誌は戰局の進展と共に世界各方面より最新材料の到着益々豐富也。活動飛躍天下に敵無き武者振を見よ

初號　九月十五日發行
十一月號　第一卷第一號十月十五日發行以下定期刊行

（中付二の三）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

本叢書に收むるものは全文全譯にして断じて梗概にあらず

百科精英 文明叢書

發行所 東京神田佐久間町四丁目二十三番地 植竹書院

電話下谷三四一九、振替東京一二九五三

定價拾錢 壹編に付き

●郵税二錢●十册以上注文者は郵税不用

●ポケット形美本●壹編百頁全六號活字

●決闘の如く一册にて二篇を包有するものは廿錢、飛行機の如く一册三篇を有するものは卅錢其他皆この割合なり

本叢書が如何に「廉價無比なるか」

一先づ實例に見よ!!

本廣告中の決闘●マグダは共にもと定價九十錢の本なりしを縮刷せしもの(乃ち四分の一よりも尙廉價となる)踊は定價壹圓の單行本の大半を縮刷せしもの(乃ち約五分の一よりも廉)其他皆是の比なり、敢て無比の廉價と云ふ

●印を附せるものは近刊

歴史と新科學等

一編 カイゼル 福本日南著

十四編 ラヂウム講話 ソヂー教授著 永代静雄譯

自十一編至十三編 ●飛行機 廣部・徳永兩博士序 早大工學士田邊一雄著

五十二編五十三編 ●電氣概論 田邊一雄著

五十四編 ●愛國本義 福本日南著

現代文學十名家選

十編 變を知る頃(脚本) 谷崎潤一郎著

廿四編 心中未遂(小説) 正宗白鳥著

廿五編 ほんち(小説) 岩野泡鳴著

廿九編 六月(小説) 相馬泰三著

三十編 踊(小説) 森田草平著

卅一編 樂園(小説) 田山花袋著

卅二編 四十女(小説) 徳田秋聲著

卅三編 山吹の花(小説) 田村俊子著

卅四編 桐屋(小説) 後藤末雄著

五十一編●放火(脚本) 長田秀雄著 伊井東儀合同十一月興行臺本

全譯泰西名著

二編 サロメ ワイルド作 生田長江譯

三四編 決闘 チエホフ作 小山内薫譯

五六編●マグダ ズーデルマン作 藤澤古雪譯

七八編 馭者ヘンシエル ハウプトマン作 秦豊吉譯

廿六廿七編 露西亞印象記 ブランデス作 中澤臨川譯

廿八編 キツス チエホフ作 廣津和郎譯

卅五編●タイス フランス作 谷崎精二譯

卅七編●獄中記 ワイルド作 廣津和郎譯

卅八卅九編●ウヰルヘルム・テル シルレル作 舟木重信譯

四十編 戀愛と道徳 エレン・ケー作 金子筑水 田制佐重共譯

四十一編●血笑記 アンドレーフ作 尾瀬哀歌譯

四十二編●父 ストリンドベルヒ作 橋田東聲譯

四十五四十六編 闇の力 トルストイ作 林鷗南譯

四十七編 初戀 ツルゲーネフ作 馬場文學士譯

五十編 ロダンの藝術 シルクス作 半田良平譯

(中付二の四)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



伯林落ち

在倫敦△△生

八月十四日の夜十一時半　伯林「レーアター」停車場から、和蘭指して落ち延びた日本人が確に百人位はあつたらうと存じます。——其中の一人が私なんでした。

實は私はどうも形勢が危ういと見たものですから二三の友人と十三日に立たうと約束したんでした。それて十二日の夕、ある奥様に暫しの——それが永の別離になれとは誰が願ひませう——別離を告げに參りました。斯う唐突に申上げては御分りになりますまいが、その奥様と云ふのはある「チョコレート」工場の支配人の夫人で、非常に富裕なのに拘らず些しも高ぶつた處のない優しい女性なんです、もう十二三の男の子がある位ですから勿論若い美人と云ふのでは御座いません、姑の眼病の看護にわざわざ伯林からボンへ二週間許り來られた時に——西洋の女でも斯う云ふ孝行振りを示す場合があるんですね——色々親切に案内して廻つたのが、ゆかりて、去年の十月伯林へ私が參つた時には自動車でシャーロッテンブルグから「ブランデンブルグ」門迄「チーアガルテン」を乘り通して見せてくれたり、獨逸劇場のはねを夜の二時頃迄「カッフェー」に話して「是れが伯林よ」と微笑んで呉れた事もあるん

です。正直に白狀して置きますが、一體私は自分より年上な女に、戀てはなしに、さりとて亦單なる友情と云ふてはなしに、自分の胸の中にある若い燃える樣な溫かみ優しさを惜氣もなく溢れむ許りに注ぎかける事の此上もなう好きな人間なんです。だからも一度悠然伯林へ行きたいと始終思つて居つた處へ、戰爭騷ぎてハイデルベルグは危うくなりませう、それに此奥樣からは、動員が始まれば、直に旦那は東普魯西に出征して妾は淋しく子供と留守居をする譯ですと云ふ手紙が來て居るてせう、どつかへ行かねばならぬと定つた時に、直に伯林へと一決したのに、格別不思議もないぢや御座いませんか。其出發の晩往來て會つたS先生が、「伯林よりミユンヘンかスツットガルトへ行つた方が安全だらう、狙はれて居るのは伯林だけだから」と云はれたのに『戰爭の哲學を研究するには伯林が第一てせう』と答へましたつけが、本當に心の中て考へて居たのは全く違つた事なんてした、其れ程迄にして來た伯林を五日もせぬ内に――其間も毎日日本倶樂部へ行つて模樣を見るに忙しくてゆつくり訪問もしなかつた間に私は伯林を引揚げねばならぬ!?

「どうしてそう急に行かなければならない?」

「だつて日本との通信が絕えて、毫も金が來ないぢやありませんか」

「御金? 御金なら妾の方て少し位どうにかなるでせうよ」

「それに日英同盟の爲めに日本が引張込まれゝば、露西亞人の樣に虐待されて、うつかり外へも出られなくなるでせうしね」

「その時は詮方がないから、妾の家へ籠城するのね。御飯だけは缺かさずに食べさして上げませうよ。それに此家は廣いんだもの。」

實際其家は廣い立派なものでした。目拔きの「クーア、フユルステンダム」通りとは云ひ乍ら一年に七千馬克の家賃を拂ふんですからね。前に日本大使の私宅だつた事もあるとか云ひましたつけ。私の方でも引揚げずに濟めば、引揚げたくないのは申す迄もありません。そ

れてすから、其翌日の十三日に約束通り一緒に大使館へ預けてもらふつもりで、些しの荷物をT君の處へ持つて行つて、T君に「今日はまあよそうよ」と云はれた時にも、腹が立つより先き立つ嬉しさの方が多かつたんでした。聞けばT君が前晩日本倶樂部で大使代理の參事官に會つて探つた處では、どうも大使館が引揚を希望する理由は金がなくて結局大使館の厄介にならなければならぬ樣な人が四百人も在つては困ると云ふので、充分の資力ある人は強いて立退いてくれなくとも好いと云ふ邊が眞意らしいと申すんです。

「だから、一言にして盡せば、一寸藥が利きすぎたと云ふ形なんさ。なんだ馬鹿馬鹿しい」

「此樣なに澤山退去しては日本倶樂部が困るだらうなんかと參事官は笑つてられたつけ」

「ぢやあ國交斷絶の危險なんか無いと云ふんかな」

「今の雲行では其氣配だになしとさ。それに大使館へも金が來る見込は着いたし、電報もそろそろ通ずる樣になつたと云ふんだから、昨日は實に陽氣なものだつた」

「それでは此荷物はも一度持つて歸つて改めて形勢を觀望するんだね。やれやれ御苦勞の事つた」

歸りに例の夫人の處へ寄つて其旨を話したらば「そら御覧、だから妾が云はないこつちやない。……それにしても貴君は大變嬉しそうにしてるぢやないの……」の自分も美しい齒を見せて笑つたんでした。

此日一日は至極陽々たるものでした。倶樂部で會つたNさんは「臆病風に吹かれて君が逃げると云ふから實は今から留めに行くつもりだつた」と申されました。夜になつて同僚のK君と一緒に日本村――御聞になつたでせう、日本人のよく參る「カッフエー」のある「モッツ街」邊を俗に稱して日本村と申すんですがね――を彷徨いて

「毎日朝から晩迄倶樂部に集つて同じ要領を得ない話をするのにも飽いたが、明日からは勉强かな」

などと太平樂をならべて、二時頃に――伯林では二時や三時は倫敦と違つて宵の口で御座いますからね―

—村を去つたんてした。たしか其時N、Kは村娘と一緒に歸つたようてす。……なあに稀な事てもないんでせう。

明けた十四日はからつとした好い天氣てした。朝飯をすましてから——英吉利と違つて獨逸の下宿の朝飯は極く簡單なもんてしてね、そう珈琲と「バタ」を附けた「パン」二片三片位てす。「オートミール」と「ベーコン」とに慣れた英吉利から御出てになれば、當座は御辛いてせうよ——新聞を隅から隅迄讀んてる處へ、戸を叩いて入つて來たのが、Q君てした。用はと聞けば今晩立つんだと云ふぢやありませんか。私は暫らく返事も出來ませんかつた。

「大使館へ昨晩電報が着いたらしい、それて態度一變さ。斯う云ふ掲示が出て居る」と云つて見せてくれた紙には

「爾今本國より通信の途斷然杜絶するにつき、在留諸君は一刻も早く當國を立退かる可し。」

と書いてあるぢや御座いませんか。

「大使館では出來るなら今晩立つてくれ、でなければ明日立つてくれ。仕事が片附かうが片くまいがそんな事はどうても好い。金が足らなけあいくらても貸す一刻も早く引揚げろと云ふんだから、もう今迄の樣な勸告では無くて命令だ」

「詮方がない、ぢや今晩かい？」

「そう、今晩！荷造より先に停車場へ行つて切符を買つて來るんだね」。

まだNさんは御存知あるまいと思つて寄つて見れば御留守てしたが、出て來た御主婦さん。「日本人は皆立退かねはならぬと云ふ噂は本當なんてすか、確かめに行くと云つて出られました」と云ふて、略ぼ、行先は分りました。

大使館て會つて、

「どうなさいます」と伺ふと

「詮方もありませんが、困つたものてす」と云ふ答の聲迄如何にも困つたと云ふ調子てした。

「何日御發ちてすか」

「とても今日と云ふ譯に參りませんから、明日にしやうかと存じます。」

「何れ英吉利で御會ひ出來るでせう」

「私はひよつとすれば、もう日本へ歸るかも知れません。かう豫定が狂つては詰りませんからね。」

大使館では退獨名簿に名前と日附とを記入しただけでしたが、それから停車場へ行つたり、日本俱樂部へ廻つたり荷造を濟ましたりした爲に「クーア、フユルステンダム」へ參つたのは七時頃でした。愈々今度は本當に引揚げですと切出して見ても戲談だと思つて取合つて呉れないぢやありませんか、此通りと私の出した切符には「伯林よりハンノーバーを經てサルツペルグ迄」と書いてあります。それをぢつと讀んで暫らく考へたあとで默つて切符を私に返しながら「夕飯をたべていらつしやい」と命令する樣に云ひました。

折好くと申しますか、折惡しくと申しますか、其日は親しい身寄りの人々が招待されて居つた晩でした。集つた男の人達は誰も彼も非常な意氣込で早晩自分も行けると奮ひ立つ樣な事を申し合つて居りました。其晩公けにせられた死傷表で或る聯隊の將校の殆んど全部が死んでしまつた。報を見ても格別意氣の阻喪する樣にも見えませんかつた。其人々は私が引揚げる理由を問訊したり日本迄をも引込れたいと云ふ英國は如何にも臆病だと冷評したりしたんでした。そう云ふ中に交つて私の直ぐ左に直角に坐つた奧樣はいつもと違つて妙に考へ込むで、餘りに口數を利きませんかつたが、食事を終つて皆應接室へ戻る途中、私の耳の極く近くで「何故人間は國家をたて、戰爭をしなければならない」と呷いたのを聞いた時に、何を思つてるかと云ふ事は略ぼ分つたんでした。

やがて分れを告げて出た跡に、窓に倚つて手巾を振つて呉れた其人の寫眞は今も持つては居るんですが、果して何日また何處で會へやうやら、和蘭を出てから此方端書一枚書けない狀態とは情けないではありませんか。

汽車は混んで居りました。二等の切符持ちながら三

等に乘るより外はありませんかつた。がようしたものて、其時私共は乘れたのがせめてもの幸と思ふ程に無慾になつて居りました。多くの人々の中には百萬石の侯爵もありました日本で始めて「オペラ」を聞かせてくれた音樂家もありました。誰も彼も只「一刻も早く當國を立退かる可し」と云ふ一句が惡魔の樣に後ろから追立てると感ずると云ふ眼の色をして居りました。暗の中をゴトゴトと動き出した列車の中に身を小さく詰め合つた私共に、大驛小驛の分ちなく止つて見る列車はしみじみまだるつこく又情けなく感ぜられました。――其れ程皆は先を急いて居つたんです。

それが短い夏の夜だとは云へ、一夜を汽車の中で過ごすは決して難有い仕事では御座いません。廣軌乍ら端の方に通路を取つた餘りの坐席は定員四人なのに私等は五人宛座らんければなりませんかつた。それでもまだ二人は其通路に置いた鞄の上に腰を下ろして立ち續けの苦勞を避ける必要に迫られました。斯うして詰め込んだ十二人の中に獨逸人は只一人召集に應じて行く勞働者らしい男と十八九の女だけでした。――それでも搖られ搖られて、十五日の朝のしらしらと明け渡る頃には、緊張して居た處がだんだんとゆるみそめて「口を開けて寢た女の姿は見つともないものだ」などと勝手な事を云ひ合ふ樣になりました。

常ならば三時間許りの道程の「ハンノーバー」へ着いたのはたしか十一時半頃だらうと存じます。我れ先きに飲みものや食ひものを買ひに飛出して扨て歸つて見れば、驚いたことにさらぬだに狹い私共の室へ新に三人の獨逸人が來て居るぢやありませんか、然も其中の二人は女なんだからいやでも坐らせてやらねばなりません。幸ひ前の車室を詰めてもらうと一人二人入れそうでしたから、そこへ二人許り行く事にして何とか出來ぬなりに始末を着けたのは、「ハンノーバー」の市街を汽車が離れた時分でした。其時分に、日本人許り乘り合はした後の室では前からの續きの婦人解放可否論が盛に上下せられて居りました。列車の響で途切れ途切れにしか耳に入りませんかつた中に、

「若し我々人間が互に自覺して自分に罪惡を犯す素質がある事を知つたなら、それて我等は罪惡から逃れ出る力を得る事が出來る」と斷定せられた人がありました。

「だから婦人を解放して自由を與へたが好いと云ふのは理想論て多數の民衆は左迄に進んて居ない」と答へた人はきつと醫學か自然科學かをやつて居る人てせう。

暫らくして誰かゞ

「奥様」——確に其人は奥様と云つた樣てす、そしてそれは間違ひてないのてせう——「貴女はどう御考へなんてす」

と聞いたのに

「妾なんか古い女なんて御座いますから……」

と答へた聲は一度帝國劇場て「カバレリアルスチカナ」を唄つた聲に相違ありませんかつたが、其時程のしなやかさは無かつた樣です。——之を旅の疲れと説明しやうなら可愛いゝ女に旅はさせぬ事てすね。然しそんな事はどうても好いと云ふ樣に大人しい旦那さんは鞄を力にうとうととねて居られました。それに對して前とは違つた人が

「古さを標榜して新らしく行動するのも妙てせう」

と突き込むだ挨拶をして居られるのを聞き乍ら

「近代人の特徴は自己の中に在る罪惡に傾く素質を如實に認めるにある。然かも其素質を除き又蔽はむとせずして却て之に安んじ、之れに誇らんとするにある」

と默想して居る私に隣のN君が

「オイ、君の向ひに坐つて居る娘は大きいね」

と話しかけた。

全く其娘は大きい女てした。隣りに坐つて居るJ君は日本人としては大柄な男なんてすが、並べて見ると寔に見すぼらしいものてした。腰から膝へかけての太さが少くとも一倍半は有つたてせう。ぽつと紅い頰、しつかと張り切つた乳の邊り、何時も何物かに憧れて居る樣な活き活きとした眼眸、そう云ふ若い血が踊らいて何としませう。そう云ふ若い胸が夢みないて何としませう。十八九の女はたゞそれが十八九だと云ふ事

だけて男をそゝるものなんてす。それに此若き此强き――いつか新嘉坡を過ぎて非常な夕立の跡に燃え立つ樣に盛んな樹々の綠を見た時の感じ、そう云ふ風な原始的な威力の前に在る刹那に私は何時もかう上から頭を押へ附けられる樣に感じるんてす、此時も心の中で窃に

「强い、西洋の女は强い、靈にも肉にも强すぎる、はては肉が靈を虐待する」

と繰返して見たんてした。或は之は間違つて居るのてせう。日本人の我々が持つてる弱い靈をあの强い西洋人の肉の支配の下に置けば、それは堪えきれない重荷を感ずるでせうが、西洋人は我々よりも强い靈を持つて居つて平氣に其肉に對抗して居るのでせう。文明が人間を獸から神に近けるものだとすれば、西洋の神は日本の神よりも强い神なのかも知れませんが。神が獸的に强いと云ふ思想は私共には一寸妙に響く樣ぢや御座いませんか。と云つてもあの「ピカデリー」街へ臺灣茶をのみに行つて押したら潰れそうなかよわい日本女と逞しい脊の高い肉のしまつた英吉利女とを比べて見せつけられる時に思はず「强くなれもつと强くなれ」と叫びたくなるのは果して私だけでせうかしら。

夏の暑い盛りを詰め込むだ列車の中に半日以上も坐つたあとは誰しも只疲れて來るもので、漸々に話題も盡き興味も失せて行くに伴はれて、互に顏を見合はせながら茫然と坐つて居る樣になります。一々停る停車場に時々見る兵士も格別注意を惹かぬ樣になります。そして寢て居るでもなく起きて居るでもない我々を載せた汽車は何の爲かは知りませんが、時々野原の眞中に立往生をする事はあつても、根氣よく然かし張りも意氣地もなく、ゴトン、ゴトンと軌道の上を宿命的に轉つて行きます。窓の外の野原に時々老人や女連が淋しく刈入れをして居る上の靑い空には太陽があかあかと照り輝いて居りました

そう云ふ沈滯の中に皆の興味を惹く問題はやがて乘替と云ふ事てした。誰の口からとはなく、和蘭行は

ムて乗替へるとの説が傳つて居た。處へロエーネで乗替えるんだ、との説が起つて來たんてした。地圖を見れば、ハムへ廻ると非常に迂回する様なんてす。それてそろそろロエーネに近くにつれて處々の停車場て聞き合して見るんてすが何處て聞てもハムへ廻れば時間を損するとの事しか教へてくれません。取越せるだけの苦勞を取越す人達の集つた一團ですから話は纒まる事が餘程六かしいんてした。殊にそう云ふ時分には事の適否よりも只自分の主張を通そうと云ふ風な態度もあつて餘計に仕方がないんてした。頻りにハムだのロエーネだのと論じて居るので話の內容を察したと見えて其娘が私に何處迄行くのかと聞きますからサルツバルグ迄行きたいのだと返事しました。するとそれてはロエーネて乗替へるより外はない、妾は何度も此途を往復して居るからよく知つて居ると申します。それならロエーネから先への聯絡が好いか、餘り待つならハム廻りにしたが好くなからうかと誰かが聞くと、それは此前の停車場に勤めて居る自分の親戚の人に尋ねたが行つて見ねば分らぬとの返事だつたと明瞭に答へました。

　ロエーネに着いたのは五時半頃てしたらうと記臆して居ります。此處で大分人が減つて樂になつたんてした。大して妙な事でもありませんが、此新しい列車の私共の室には其娘が居るんてした。その向ひには新聞を澤山袋に入れて持つた四十格好の獨逸人が座つて居りました。私より先へ行た連中が座つたあとに殘つて居る座席は其娘の隣りだけてしたから私は何の氣もなく其處に座り込みました。其時友人も私も其娘の隣りと云ふ事に何等かの意味を附する迄の注意を其娘に拂つては居ないんてした。

　其驛を離れた頃から日は追々と傾き初めました。昨日一晩を滿足に眠らず、それから今迄續けさまに搖られて存分疲れて居るんてすがかう云ふ時刻になると反動的に元氣が出て來るもんだと云ふ事には貴君も御經驗があるてせう。相當に皆話を始めました。前に座つた男はまだ日本が獨逸を助ける準備中だらうと云ふ様

に考へて居りました。

「田舍の人は矢張り神經が鈍い」

「僕は大使館が僕等を立去らすのは和蘭の封鎖されて通信が絕えるからで、日本が始めるわけぢやないと聞いた」

「それは間違ひだらう。和蘭が封鎖される事もあるかも知れんが實は日本も始めるらしい。ある銀行への手形の取立を大使館へ依賴しておかうと思つたら、大使館も何日迄居るか分らぬと云つて斷はられたもの」

などと云ふ會話が、日本人同志の間に交換されて居りました。

其間に前の男は戰爭が始つて以來、今迄車掌が引受けて各驛に分配して吳れた新聞紙を自分で配分しなければならぬ樣になつた事だの、それにしても汽車の時間が不確なのには困る事だの、自分も或は戰爭に引張り出されねばならぬ恐がある事だのを、處々分らぬ獨逸語で語り續けました。

何處かの停車場で菓子を買つた私は隣りに座つて居る女を無視して獨りで食ふのも何かと思つて御上りになりませんかと何の氣もなくすゝめた處女は一應辭退したあとで、其一片を手に取つたんでした。それを見た向ひ側のN君が

「そんなに御機嫌を取つてどうするんだい」

と皮肉を云ふのを聞いて私はハッと氣が着きました――見れば房々とした「ブロンド」の髮の毛が豐かな耳朶を掠めてそよとの音もなう滑り行く首筋の稀ならずルーベンスに見る健やかな女のそれを想ひ起さすではありませんか。丹味を帶びた顏の全體に巴里の女に認むる爛熟はなく倫敦の女に會ふ緊縮はあらずとも、のびのびと何の制限もなく生ひ立つた若さ無邪氣さは其鳩の樣な雙の眼を通して直に人に迫るてはありませんか。其眼の中に我を思はす淸い淚のせめて一滴を宿し得るならば――私は前とは違つた眼を此娘に向け始めました。

娘は私の思つた通りの素直なものでした。戰爭が始つて危ないから暫らくハンノーバーの親戚へ行つて居

つたが、矢張り親の家が戀しいから歸つて來たと云ふ事、兩親とも健康で兄弟は只一人の弟があるだけだと云ふ事、もう女學校は終つて格別勉强する氣もないから親の膝下に暮して居ると云ふ事、此邊りは百姓か牧畜許りて人が少く生活が單調だと云ふ事、御互の人が氣安くて「貴君(シー)」と云ふかはりに「御前(ヘーア)」と云ふが慣はしだと云ふ事——それからそれへと取りとめもない話が其唇を滑つて出るんでした。其間に私は「パン」を買つた事もありますし、珈琲を取つた事もあります。たつた一つ私の驚いたのは其女が十四日前に滿十七才になつたと云ふ事でした。自分にもそう云ふ若い時分があつたのかと思ふと私は何だかしら悲しくも美しくなりました。私は自分の年を取り返したくなりました——何時の間に新聞配達の男が下りたのか氣も附かないで居る内に列車には火が入る樣になりました。たゞし其火は國境で飛行機に鐵道線路の所在を知らせぬ爲の用心とかで日本の汽車の燈よりも暗いもんでした。

暗くなるにつれて友人達は昨日からの疲れて又うとうとゝまどろみ始めました。それには座席が廣くなつて橫になれる事が大に都合よかつたんでした。向ひ側の二人が橫になつたのを見たJ君は私に自分も橫になりたいからも少しそつちへ寄つてくれないかと賴みます、其要求を容れる爲に私は娘を窓の側に押しつめた上私の身體をひたと其娘の身體におしつけねばなりませんかつた。——殆んど森と原野許りの間を切り拔けて行く汽車の外の眺めの暗さは他の人の寢た間を只二人座つて居る私共二人の心に旅の淋しさ賴りなさを想はせました、霞と共に後にした花の都に思ひ深くとも白河の關に秋風の吹き初むるに會へば、それを忘れるだけの暖かさはほしくなるものです。

「日本人は皆そう小さい手を持つるの?」

と其内に娘が問ひました。

「比べて御覽、そう小さくは無いでせう」——白い手にふれた黄い手は其白い手の無性にほてつて居るのに氣が着きました。

「寒いぢやない?」

と云つて娘は黒い上衣を白い下着の上に重ねました。私は自分の外套を膝の上に掛けました。「寒ければもそつとそちらへ延ばしませうか」と尋ねたら「それだけの御親切があるならば」と云つて自分の膝の上へ其れを引張りました。其蔽はれた下で二つの手は幾度一固く結ばれました。——斯うなると男と女とはもう話しの種はなくなります。と云ふよりも話をする事がつまらなくなります。私共は只眼と眼とを見合はせて默り合ふ様になりました。

「貴君はどうしても今日和蘭へいらつしやるの」

「私一人連れと分れて殘る譯には行きませんもの」

「いつもう一度御會ひ出來るでせう?」

「それは……」

答の澁る私を見詰めた女の眼が、曇るぢやありませんか、異様に光るぢやありませんか、と見る間に何かゞ伏せた其眼から下へ落つるぢやありませんか、一つ!二つ!……。

思はず私の左の手が娘の肩に掛けられました。其髮の毛が私の頰に觸れました。……。汽車は元の通り野原の中を走つて居りました。星は矢張り淋しく下界を見下ろして居りました。而して其時白耳義では獨逸の荒武者が佛蘭西軍を息も吐かせず南へ南へと押し詰めつゝあつたでせう。

* * * * *

御話は是れ迄で御座います。それからどうなつたかと仰しやるんで御座いますか一向どうもなりはしなかつたんで御座います。此娘とはサルツベルグの停車場て分れた切りなんですもの。翌朝何の事もない國境の檢査を經て穩かな和蘭へ入つて私共がほつと一息した時分に、其娘は久し振りに兩親に會つて旅のうさつらさを物語つて居つた事でせう。フリシンゲンで英吉利行の船に乗つた時に

御身と分れて淋しく我は今此港より何處へか立去らむとす。しばしがほどは御身に假りの便りする術だにあらましうこそ思はるれ。短かかりし逢瀨を忘れて恐

ろしき戰の終了を待ち給へ。其時何處よりか御身に便りする我なるべければ。

端書に書いて送つたんですが、果してそれが着きましたやら、又どれ程熱かつたにせよ只の一度の接吻を其娘が今だに忘れずに居る事やら……。

つまらぬ事を長々と御しやべりしたものです。何も自分の弱點を誇る近代人でも御座いませんが、是れ位のしなやかさはいつも人生に有つたつてよからうでは御座いませんか。

エ、其娘は何と云ふと仰しやるんですか。貴君も案外現實的な御方ですね。名はアウグステと申しました姓は……姓は御許し下さい、餘り美しうも響きませんもの。

（一九一四・八・三〇倫敦にて）

戰局の活外交家死外交家

鐵拳禪

一

擧國一致は、國民衷心の絕叫なり。愛國心の發動なり。政府者より强要せられ、若くは世間體を顧慮するが爲めの行動には非ず。然るに政府者、動もすれば擧國一致の聲を利用し、固く國民の口舌を緘し、政府者の爲す所は理非を問はず、默認せしめんとするの傾向あり。斯の如きは、愛國心を助長せしむる所以に非ずして、却て國民精神の萎靡を招來するものなり。政府者が言論尊重の言明を待つ迄もなく、擧國一致の秋と雖も、吾人の愛國的論議は自由ならざる可からず。擧國一致は、決して問題忘却の意に非ず。國防問題にせよ、廢減稅問題にせよ、外交問題にせよ、議すべきは議し論ずべきは論じ盡さざる可からず。殊に現下當面の外交問題の如きは、國民等しく炬の如き眼光を以て、政

府者の行動を監視せざる可からざるなり。

政府者、時に氣紛れに國民的外交を云爲すと雖も、尙依然として舊樣の秘密外交なり。偶ま經過を公表する事なきに非ずと雖も、其の時効に係らざる以前にありては、單に其の結論を示すに過ぎず。現に今次の日英交涉に就ても、何等詳細なる經過を提示する所なく、日獨開戰てふ結論を國民の前に突き付けたるのみ。此の點に對して慊らざるの感あるは、惟り政友會の代議士のみに非ず、戰局の前途に杞憂を抱く者は、何人も其の交涉の內容を知らんと欲するや言を俟たず。唯國民の日獨開戰の報を得て狂喜せるは、三國干涉の張本人たる獨逸に痛擊を與へ、二十年の遺恨を晴らさんとするの、敵愾心の勃發せる結果ならずんば非ず。此の一時の昂奮は、政府者が失敗せる外交の總てを忘れて其の結論に成功せる武斷外交を謳歌するに至れるなり。

然れども、吾人は武斷外交を謳歌し、侵略主義を讃美する者に非ず。平和は何人も望む所、惟り國際の事に限らず、社會百般の問題をあげて平和の解決を見んこと、固より吾人の異論なき所なり。好んで衝突を試み、平和を攪亂するの不可なるは言ふ迄も無き事なるが、時に自衞の必要上よりし、時に征服的態度に出でん事は、强者の常に忘却すべからざる所なり。平和の名は洵に美なりと雖も、是れ人間の理想する所の夢幻の世界に過ぎず。神話の昔より人間の現代に至るまで、人生は戰鬪の連續なり。東西文明の進步も亦、此の間斷なき競爭の賚なり。既に生存競爭の激甚なる以上、夢幻的平和の得らるべき道理も無ければ、武斷外交の不用に歸する時機も亦容易に來るべしとは信ずる能はざるなり。外交の妙諦、素より戰はずして善く他を屈するにありと雖も、平和の解決を見る能はざるに於ては、遂に最後の一斷は即ち實力相搏つの外ある可からず。列强の軍備に由りて均勢を保ち、平和を確保せんとすと雖も、其の均勢一度破れて、外交の妙用施すなきに至れば、外交の後援たるの軍備は、遂に進んで無慘にも平和を蹂躙し、實力の勝敗に由りて問題を解決

するに至るは、今次の歐洲戰爭に見るゝ明かなりとす。弱者の平和は無價値なり、能く須臾を保つべきに非ず。苟も世界平和の保障者たらんと欲せば、先づ自から强者たらざる可からず。先づ自ら偉大ならざる可からざる也。

我邦の常に求めて止まざる者は、東洋永遠の平和なり。而して此の永遠の平和を得んが爲めに、一度淸國と戰ひ、再び戟を露國と交へたり。戰爭と平和とは兩極端に立つべきもの、其の行爲の矛盾之より甚しきはなしと雖も、碧血は平和を得んが爲めの犧牲に供せられたるなり。今日の所謂平和とは、小康の異名なり。眞に東洋永遠の平和を確保せんと欲せば、太平洋上の制海權を把握すると同時に、陳腐なる言草ながら富國强兵の實を擧げざる可からず。唯徒らに一時の小康を得んが爲めに、歐洲列强の鼻息を是れ窺ひ、自主的外交をすら敢てするの勇なくんば、奈何ぞ東洋の盟主たることを得ん。從來我が外交方針は確定せず、動もすれば他の後塵を拜して平然たるの風あり。戰勝の効果は何時も平和の外交に於て減殺され、平時の外交は又武力の押が利かず、空しく泣寢入、讓步等に終りたること一再のみに非ざるなり。

【二】

現内閣の首班たる伯大隈重信は、外交の爲めに隻脚を失ひたる人なりかつて條約改正の祭壇に立ちたる犧牲者なり。明治の初年既に外交の局に當り、兵庫談判の際英公使と折衝して奇功を奏したる事あり。當時彼れは青年外交家として推重せられ、彼れ自身も亦新政府の外交家たるの自負と、自信とを有したるに似たり。明治二十一年二月始めて外相となり。二十九年九月再び其の椅子を占め、三十一年六月三たび外相となり、其の任期通計三個年半に過ぎざるも、比較的自信力ある外交振を見せたるは人の知る所なり。其の外交的手腕、素より伯陸奥宗光の機峰辛辣なるに比すべからざるも、其の抱負の雄大なる、斷々乎として成す所を成さんとするの氣魄、大に壯とすべきものあり。唯彼れの運籌疎放にして周密ならず、其の怜悧と機轉との行き詰まるに至りて、九仞の功を一簣に缺くの失なきに非ず。夫の條約改正の如きは、當時何人も難しとせし所なるに、伯大隈は兎に角或程度まで運びたるに、世論の反噬する所となりて、隻脚を失ふの始末とはなれるなり。失敗は素より失敗に相違なきも、當時の世態人情の未だ彼れが進步主義を理解せざりしことも亦、其の禍因の一ならずんば非ざる也。

今や外交の前科者たる、隻脚伯大隈は、更に至難の時局に會す。彼れは漸く青年時代の才氣縱橫の生彩を失へるも、其の言ふ所年と共に大風呂敷となり、帝國議會に於ける理想主義の鼓吹者となれるを以て、其の實行に對しては何程か懸念なき能はず。吾人は言ふ者能く行はずとの古諺を捻出し來りて彼れを責むるに非ざるも、實際彼れの云ふ所と行ふ所とは多大の逕庭あり。就任以來内政の事旣に然る以上、外交に關しても亦多大の割引をなして聽かざる可からず。然れども彼れの聲明する所は、確かに堂々たる外交家の口吻なり。曰く『我邦の國是は、維新以來開國進取なり、而して方今の時局を解決するは、正義人道の教ふる所に依りて進むべきのみ』と。其の意味深長にして、非難の挾むべきなしと雖も、是れ彼れが執る所の方針大綱のみ。其の如何に之を實行に現はすべきかは政界の等しく注視する所なりしが、彼れが新聞記者に豫告せる所謂お土產を提供するに至れり。然れども吾人を以て觀れば、其のお土產の內容は、伯大隈の豫告と、其の實物とは多少の相異あるに似たり。最初彼れの提供せんとせる所謂お土產は、日英同盟の規約に依りて驀進的行動を執らんとするにありしが如きも、元老等の要請する所となりて凝議の結果、獨逸に對し最後通牒を發し、其の成行を見て軍事的行動を執るも遲からずとなせる者の如し。是に於てか、最後通牒即ちお土產となれるも、お土產提供の時日の遷延せるに見て、其の內容變換の議の容易ならざりしを知るべし。政友會の徒は、此のお土產の豫告を攻擊するも、こは抑も末なり。眞に伯大隈の外交を批評せんとせば、何ぞ進んで其の眞相に向つて肉迫せざる。徒らに揚足を取りて快哉を叫び、言葉尻をとらへて憤慨するが如きは、堂々たる大政黨の公的行動に非ざるなり。顧つて伯大隈の行動を見るに、帝國の大宰相として輕躁の氣味あり。開戰前の外交の巧妙ならざりしが如く、軍國議會の操縱も亦甚だ拙劣にして、僅かに解散の擬勢を以て通過せるは、輿論を尊重する彼れの爲めに遺憾なき能はず。

由來我邦の政治家に病む所は、內硬外軟にあり。內に在りては解散を以て威嚇する强硬なる鐵腕家も、外に對しては讓步を是れ事とするの軟弱なる外交家と化す。伯大隈の正義人道の爲めに敢然として起つも善く獨逸の軍國主義を一蹴するも亦妙に、領土的野心を包藏せざるを表明するも亦不可ならずと雖も、苟も兵を山東省の一角に動かし、旗を南洋の一群島に樹てたる以上、列强地圖の色彩を變化する上に於て優秀の地步を占めざる可からず。侵略劫掠素より不可なりと雖も、東洋永遠の平和上より、自國萬年の防衞上より、大和民族の海外發展上より、大なる考慮を要すべきこと勿論なり。開國進取を聲明する伯大隈の、必ずや國家及び民族の將來の爲め、玆に意を致しつつあるを疑はずと雖も、一朝外軟の宿痾を再發するに於ては、由々しき大事たらざるを得ず。此の秋に際して、徒らに內硬外軟の本家たる元老に聽從し、虎視眈々たる米國に迎合するが如きは、彼れの志を成す所以に非ず。夫の隻脚を失へるの當年に想ひ及はば、國家の安危を双肩に擔ひて、斷々乎として其の方針を貫徹する、決して左顧右眄を要せざるなり。後入齋は、侯松方旣に之を能く

す。伯大隈の踏襲すべき、主義方針に非ざるなり。

〔三〕

外交の事は吾人の說く迄もなく、四圍の狀勢を洞察すると共に、自個の地位の奈邊にあるかを覺知し、而して間髮を容れざる底の機敏の處置を採るを要す。時機の逸し去るや飛鳥の如く、一たび其の機會を失すれば、更に數層の不利と困難とを增すや必せり。然るに從來參謀本部の外交と、外務省の外交とは、相對立して下らざるの弊あり。外務省の外交策源地たること多言を要せざるも、何等外交に關係なかるべき筈の參謀本部の出洒張るは、國際外交の餘りに軟弱なるが故に外ならず。一を國際外交とすれば、一は即ち軍事外交なり。而して軍事外交の任に當る者は、各國に派遣されたる武官及び軍事視察者なり。彼等の報告は外交官の夫れよりも有力にして、廟議を動かすこと珍しからず。兩者の外交一致するの際は、國際上好結果を齎すも、一朝扞格するに至れば、參謀本部の外交は外務省の外交を制肘し、牽制し、然らずんば相背馳して、國家の不利を釀すこと尠からず。今次の如き、甚しき扞格を見ずと雖も、陸海兩軍の活動に比すれば、國際外交の尙軟弱なるを免れず。軍事外交には、中將明石元二郎の如き鐵腕家あるも、國際外交には鐵腕之と比すべき者あらず。平和の外交には適する者なきに非ざるも、戰時の外交には其の力量を半減する者尠からず。平和の活外交家素より必要なりと雖も、吾人は、より以上に戰局の活外交家を要求して止まざるなり。

然らば戰局當面の外交家に如何の人物ありやと云ふに、外相に男加藤高明、次官に松井慶四郎、政務局長に小池張造、通商局長に坂田重次郎あり。何れも霞ケ關にありて、天下の風雲を指呼するの勢を示せり。男加藤は消極論者なるに、小池は積極論者なるを以て、多少意見に扞格あるやに傳へられたるも、大體に於て斷行に一致せるは、陸海兩相の贊せるに由ること論を俟たず。即ち彼等は擧國一致を見るの前、既に廟議一致の態度に出でたるを以て、甚しく機宜を失せざりしも、其の擧措必しも敏捷なりとは稱す可からず。伯

大隈のお土産を豫告し、男加藤の滿腹せる鞄より書類を取出す間にも、刻々と好機に逸しつゝありたるを想像するに難からず。然れども過去は追ふべからず、彼等は今時乃至今後外交的手腕を揮ひ、帝國の利權を占むると同時に、國威を宣揚するに遺算なきを期せざる可からず。

男加藤は帝大卒業後、三菱會社員として出立せるも、明治二十年に至り方向を轉換して官界に投じ、外交官の群に頭角を抽んじたり。二十三年頃大藏省に入りて參事官となり、累遷して主税局長となりたるが、二十七年特命全權公使となりて、再び外交界に出頭せり。爾來今日に至るまで外交界にあるも、其の間一度退きて代議士となれる事あり。彼れは斯の如く普通の外交官と其の行徑を異にし、單に交際場裡を蝶の如く飛舞し、我は婦人の靴の紐を結ぶを以て得たりとするの徒に非ず。其の夫人は富豪三菱の愛孃なるも、朝夕其の機嫌を取りて、外交の機宜を失するの輩と同列に見るべからず。男加藤は理智の人にして、利害の打算に長じ、事を行ること周到なり。其の風丰晴中の森林の如く、其の應酬も亦無愛想極まる者なれども、全く血の通ひ居らざる譯にも非ざれば、夫人の前には木で鼻を括るとも思はれず。其の辯論の理義明晰にして諷刺を含める、他を三寸の舌頭に翻弄して傍若無人の概ある、他の片々たる外交官の企及する所に非ざるなり。

彼れは明治三十三年十月始めて外相となり、邦人に對して傲岸なるも外人に對して屈讓するを意とせざる子青木の後を承けたるに拘らず、當時若輩ながら相應の手腕を揮ひ、露國の滿洲に跋扈するに對して強硬なる抗議を試み、面目を施したる事あり。又英國公使としては日英の親善を圖り、後年同盟成立の動機を作れり。三十九年再び外相となるや、鐵道國有に反對して其の椅子を棒に振り、主張の爲に殉せしが如き態度を示したるも、實は三菱との利害關係に由るとの風聞あり。之のみは餘り稱すべからざるも、昨春三度外相の椅子に凭れるに、桂内閣の瓦解と悲劇的運命を共にせるは氣の毒なり。然るに今次同志會總裁として、四たび外務の要樞に坐し、時局整理の大任に當るに至れり。彼れは鐵道國有問題以來内閣の破壞者を以て目され、其の偏狭にして他と融和せざるが如く非難さるゝも、是れ官僚的氣風の自ら然らしむるのみ。近時彼れは努めて雅量を示さんとするも、其の造作の澁味と、傍若無人の態度とは一種の保護色となりて又如何ともすべからざるなり。男後藤の小感情に驅られて、新政黨を去れるに、彼れは兎も角も其の總裁として操縦の任に當れるを多とせざるを得ず。而して彼れが外交上の政策如何と見るに、彼れは消極主義なり。別語之を云へば、讓歩的平和主義なり。英雄的征服を試みるが如きは、彼れの絕對に反對する所ならずんば非ず。

男加藤は、伯大隈の饒舌に比すれば、極めて寡默なり。外交上の秘密は蟇口の如く、開くに損ありて閉づるに益ありとは彼れの信條なり。此の信條を有するが

故に、彼れは胸襟を元老の前にすら披かず、況んや自己の統率する黨人の輩に對するをや。伯大隈の何程か元老の歡心を買ひつゝあるに反し、男加藤の常に白眼視され、動もすれば長閥の爲めに排斥せられんとするなり。斯の如きは彼れの多く顧慮する所に非ざるも、同盟國の感情を害せざらんが爲めには、百方手段を講ずるに似たり。彼れが頻りに電報を以て英國と知照せるが如き、戰局制限を暗默の間に是認せるが如き、善意に解すれば、打算的にして周到なる遣り口と云はざるを得ず。侯小村は進むに敏にして、斷ずる事亦機宜を逸せず。男加藤に敏活の行動は望むべからざるも、豫め退路を準備するが故に、大なる失脚を演ぜず。前者は勇將にして、後者は幕僚の器なり。されば彼れは時に縱令世論に副はざるも、國家の爲めに殉せんとするの意氣を有す。是れは成るべく時勢を利用し、功を己れに收めんとするの嫌なきに非ず。夫の對米問題の解決困難なるや、國民的外交の實を擧げんと揚言して日米外交關係書類を公表し、前外相の無能を曝露すると同時に、更に新規蒔直しに交渉を開始せりと言明せしも、夫れ以後の經過は依然として祕庫に密封するを見る。國民的外交は一時を糊塗するの口實のみ、誠意の奈邊に存するかを知るに苦しむ也。方今第一流の外交家を以て世人も許し、己れも任ずる所の男加藤にして斯の如くんば、餘他の輩に至りては知るべきのみ。彼等が時に擧國一致を欲し、時に國民的大運動を迷惑とするが如きは、決して外交の美果を收むる所以に非ざるなり。

男加藤は、愛知の産にして英國通の目あり。次官松井は、大阪人にして米國兼支那通の稱あり。而して其の下に活動する小池は、福島の産にして、是れ又前者以上の支那通なりと稱せらる。共に帝大の出身にして外交官、領事官として累進今日に至れる人物なり。男加藤の英に對するは勿論、松井の米に、小池の支那に對する時局當面の外交家として最も誂向の人物なるも、通のみにては活動を期待すべからず。通は見巧者なり。如何に海外の事情に精通すと雖も、識見と手腕

との伴ふなくんば、活潑々地の折衝を試むること能はざるなり。松井は京城より轉じて米英に駐在すること數年、清國事變の際は同國に在りしが、三十八年本省に舞戻り、後出でゝ佛米に赴き、遂に山本內閣の下に始めて外務次官となれり。當時日米の外交懸案あり、其の國情に通ずる彼れを起用し、以て其の解決に縱橫の手腕を揮はしめんとせしも、舞踏の外多く知る所なき風流才子は、遂に何等成す所なくして今日にも尙其の地位を死守するに過ぎず。而も男加藤の日米外交の失敗を裴露せるに際し、政務官たる彼れが、其の責任の前に恬然たるに至りては、吾人終に言ふ所を知らざる也。

(五) 小池の何程か有能なるは、松井の無能なるに對して潤澤と生彩とを發揮す。彼れは三十三年の交外相秘書官となりて本省に勤務せしも、其の前後數年は朝鮮、英米及び清國に駐在せり。殊に四十一年以後數年は奉天、長春等の總領事となり、滿蒙關係の懸案に對して犀利なる手腕を揮ひ、漸く政界の視目を惹くに至れり。對支外交の犧牲となれる政務局長阿部の後を承くるや、孜々として其の手指を外交事務の上に働かせつゝあり。彼れ人と爲り謹直にして奇骨あり、巧言令色の外交官風に染まず、將來何等か成さざれば止まざるの人なり。現下次官松井は單に外相の命を取次ぐに過ぎず、大小の機務一に彼れに決するの有樣なれば、彼れを以て事實上の次官なりと云ふも敢て溢美の言に非ず。

〔四〕

更に眼を轉じて、在外の大使及び公使の顏觸を見れば、日露戰役當時の夫れに比し、著るしく遜色あるを覺ゆ。日露戰役前にありては、公使採用の方針は必しも並木制度の川身者のみに限らず、廣く人材を試驗點數以外に求めたり。從つて外交官中には毛色の變れる人物あり、隨分怪腕辣手を揮ひたるものなれども、今日に至りては斯かる異材を有せず。人物一樣に低下し、本省の訓令を是れ奉じて、秋毫も過なからんを欲するの徒のみと成り了せり。其の中に稍頭角を抽んずるは、男林權助、男本野一郎、佐藤愛麿、男珍田捨巳、男石井菊次郎等なり。

男林は一度外相に擬せられ、男本野は二回外相候補に擧げられ、新聞辭令をすら頂戴せることあるも、前者は伊國に、後者は依然として露國に在り。倭身小軀の林は會津の人、官學の出身なるも、一種の風格を有す。在學時代には灰殻を以て知られたるも、今日は鏡面に向つて修飾す

るの慣きまでに老いたるか、腰骨稜々たる人物と化せり。官學を出でて官臭を脱し、灰殼を去りて腰骨と入れ替へたるは、蓋し會津武士本來の性格に歸れるなり。彼れは峻嚴にして豪放なるも、子青木の如く却て反對に本省に訓令を發する程の自負心を有せず。已れを責むるに嚴なると共に、他に對しても亦秋毫も假借せず、爲めに怨を買ふことなきに非ず男林の始めて其の手腕を知られたるは、明治三十二年より七年間韓國公使たるの時に在り。夫の啞鈴と腕押をするが如き韓國政府と折衝を試み遂に日韓議定書より日韓新協約を締結せるは、根氣善き男彼れの如くならずんば能はざる也。轉じて支那公使たるに及びて、愈よ彼れの技倆は認められ、外交界の活舞臺に名聲を馳するに至れり。

男本野は佐賀の產にして、里昂法科大學の出身なり。夙に國際法に精通すと稱せられ、法學博士の學位を有する筈なり。飜譯官より進みて參事官となり、公使となり、遂に今日あるを致せり。彼れは教育を佛國に受けたるのみならず、西南人の濶達の氣性は、彼れをして好個の外交官たらしめ、自然に湧出する所の巧妙なる外交術は、軟かに人を魅するの力あり。初め白耳義に駐劄し、次で佛國に轉じ、日佛條約の締結者として令聞あり。戰後露國に赴き、兩國の和親を恢復するの任務に服せり今や露國は漸く我に親近し來りて、日露同盟の或は成るの日あるやを豫期し得るの狀態に進めり。是れ今次の戰局の影響として、必しも彼れの功に歸すべからざるも、當初の目的は殆んど達せられたるを見る。其の外交的手腕に至りては、男林に一籌を輸するが如くなるも、多くの難局を無難に通過し來れるは、又好運の男と謂はざるを得ず。相貌何となく印象派の詩人を髣髴するものあり、機智縱橫の才人に非ざるも、其の言行より見れば、宛然平和的人物なり。是れ經綸的外交家に非ずして、所謂外交官の渾成せる者なるが故ならずんば非ず。

米の珍田及び佛の石井は、曾て外務次官たりしを以て、新進の兩雄の如く評價せらるゝも、前者の遣口事務官式なるに對し、後者の應酬式部官風なるは、自ら兩者の優劣を語るものなり。然れども兩者共に久しく本省にあり、一は次官たること七年、一は通商局長より次官に進みたるもの、其の事務に通曉する點に於て、方今外交官中彼等の右に出づる者あらざるべし。而して大局を見るの明は前者稍これ有らんも、事務を處理するの手腕に至りては後者の熟達せるに若かず。

男石井は上總の產にして、赤門の出身なり。明治二十四年以來領事官乃至外交官として勤續せるもの、其の經歷に於ては申分なきまでに外交界の雰圍氣を呼吸せり。善く泳ぐ者の却て溺るゝの例尠しからざる事なるが、彼れが通商局長たりし時、加州排日問題に對して姑息の解決をなし一時を瞞過し去れるが故に、遂に今日の對米懸案を生むに至れり。其の脊拭ひは現下珍田の任なるも、子內田の日米條約改正の姑息的解決と共に、彼等の外交的罪惡を記念する者なり。男石井は人と爲り溫和にして當世灰殼の典型に近きも、到底佛國の滋味ある外交と雄を競ふの手腕を有する人物に非ず。外交事務に通ずるを以て、形式的報告をなすに巧みに訓令外交を取次ぐに適す可けんも、未だ巴里外交界に、帝國を代表す

る外交家としては甚だ貧弱なり。現に今回の歐洲戰亂に就ても、外交界の低氣壓の如何に移動しつゝあるかを察せず、又獨逸の心事を觀破すること能はず、火の手熾んにあがるの時、始めて之に氣付きたるが如きは、迂中の迂なるものに非ずや。男珍田は明治十八年外務省御用掛より身を起し、外務屬より累進せる者、官學出身の男石井とは大に其の氣風を異にす。日露戰役の當時、外相小村の下に次官となり、自由に其の手腕を發揮せしは、彼れが經歷中特筆に價するものなり。先年出でて米國に赴くや、多大の期待を以て迎へられたるも、事務官の器は依然として事務官の器なり。徒らに本省の訓令に聽從するのみにして、機宜の處置を採らず。彼れの經綸の如きは、殆んど見るを得ざるなり。夫の對米問題の如き、殆んど無期延期の狀態にありて、同胞の不利愈よ甚しきものあり。加之、今次の戰亂に對するの態度、表面局外中立を明示するも、動もすれば我邦の行動を監視するに猜疑の眼を以てするに似たり。日米親交の語の屢繰返さるゝに拘らず、米國外交の態度斯の如くなる以上、男珍田たるもの宜しく細心と機敏とを以て之に對せざる可からず。

〔五〕

同盟國の大使には、侯井上の養嗣勝之助あり。白耳義には新任の伯陸奧廣吉、蘭國には三菱の附馬幣原喜重郎あり。何れも名門の子弟、乃至富豪關係者なるは、外交界の注視する所なり。伯陸奧は、剃刀外相陸奧の嗣子、大阪の產なり。日清開戰の八月始めて翻譯官となり大本營附を命ぜられ、翌年十月外交官補に任じ、順次立身して大使館參事官となりたるも、病の故を以て閑地に在りしが、最近起用せられて白耳義の公使となれるなり。幣原の擢んでられたるは、男加藤と義兄弟の關係あるに由ること勿論なるも、凡所の資に非ず。剃刀伯の伜の、蒲柳にして而も鈍力の觀あるに比すれば、三菱の附馬なりと雖も、肥馬秋風に嘶くの槪あり。併し何分にも明治二十八年帝大を出で、農商務屬より外交官に轉替し、歐州乃至本省に勤務せるのみなれば、未だ男石井の域にすら達せざるなり。其の手腕力量を發揮するは、寧ろ今日以後にあり。

大使井上は、長州の產なり。始め日本銀行支配役となり、後大藏權少書記官となり、十七年十月外務の夫れを兼任するに至りて、外交官となるの機緣を結べるなり。二十九年五月辨理公使となり、三十九年一月特命全權大使となるまで殆んど十年、岳父の權勢に貪緣して無造作に陞進し來れり。其の人物溫雅にして重厚なる所あり、名門の子弟に見るが如き翩々たる輕薄才子に非ざるも、未だ是れが彼れの功勞なり、手腕なりと指摘し、推稱すべきものを見ず。何程か好評ありしは、前任地なる伯林外交界に於ける手際なり。併し乍ら其の手際と云ふと雖も、平和の交際社會を賑はしたるに過ぎず。而も其の好評すら、英獨佛の三個國語を自由に操る夫人の交際振と、其の姥櫻の如き姿色なりと云ふに至りては、吾人啞然として謂ふ所を知らざるなり。日清戰役の當時、伯林には毛唐を娶れる靑木周藏あり、巴里には競馬公使曾禰荒助あり、露都には守錢奴西德二郎ありて、三國干涉の發動するを知らず、碧血の成果を一擲せしめたる痛恨事あり。彼れは眞逆此の轍に倣ふ者には非ざる可けんも、

日英同盟にのみ信頼して、大局に眼を注ぐ事なくんば、平和克復の日に瞞するなきを保すべからず。由來歐洲の戰亂は、其の聲甚だ大なるも、何等か媾和の機會を發見するに於ては、卒然兵を收むるの例なり。英國の豫期する獨逸膺懲の程度と云ひ、南洋の獨領に對する意嚮と云ひ、英米提携の將來と云ひ、我邦の攻究すべき問題一にして足らず。徒らに其の愛妻と倶に交際場裡に甘醉を貪り、訓令傳達の器械たるが如き事あるべからざるなり。

新任支那公使日置益は、智利の場末より來りて東洋の活舞臺に立てるもの、如上の大使公使より以上の苦心と手腕とを要す。日獨開戰前の支那は獨米に傾き、今日と雖も尚獨逸を援けて米國に親しみ、以て事を成さんとするの底意を有す。加ふるに米國の眼は既に極東に轉じ、一旦乘ずべきあらば、其の雄大なる野心を逞しうせんとしつゝあり。夫の南洋の一島すらも我邦の領有に歸するを喜ばざれども、英國の攫取し去るに敢て異議を挾まざるは、米國の人種的偏見に由ること勿論なりと雖も、亦以て米國の意の奈邊にあるかを知るに足るべし。此の際に於ける對支外交は、決して支那一國の問題に非ずして、帝國自衛の問題なり。東洋永遠の平和を確保すると、否との問題なり。對支外交の忽緒に附すべからざるは、青島攻圍に關して續發する小問題のみに非ず。其の小問題を導火として誘起さるべき支那の大禍亂と、夫れに由りて生ずる列强の分割とを未然に防壓すべく、最も巧妙、且有力なる外交を試みざるべからず。然るに確固たる對支方針を確立せず、一局部の小問題に齷齪し、之を解決するをのみ能事とせば、軍事的行動を相殺するの結果を來すやも測るべからず、日置の不徹底的外交に對して懸念すべきは、武斷を背景とする小問題の解決に非ずして、東洋に於ける帝國の地位を確立するの經綸如何にありとす。

日置は伊勢の人、明治二十一年の帝大出身なり。同年十一月試補となり、翌年七月紐育に在勤せるを最初の舞臺とし、爾來交際官試補、公使館書記官を經て、三十九年七月駐獨大使館參事官に陞進するまで、米露朝鮮清國等に勤務せるを以て、外交界に於て使用する所の英佛語に熟達せり。而して彼は三十三年以降四年

間清國に在勤し、三十三年の清國事變にも會ひ、三十五六年の交日清通商航海條約改正委員、清國關稅率換算委員に擧げられ、對支外交に多くの經驗を有す。彼れが今次の拔擢を見たるは、必ずや是等の經歷あるに由ること疑を容れず。然れども、日置が四十一年九月特命全權公使となりて智利に駐箚し、祕露阿爾然丁等に兼勤するに至りて、殆ど外交界の視界を去りたるの觀あり。侯小村及び男西德二郎等に用ゐられたる際は、多少頭角を顯はしたるも、其後は沈衰の爲體なりしに、今次男加藤の知遇を得るに至れり。少時彼れは剛毅にして圭角稜々たる所あり、加ふるに外交官の溫柔と志士の意氣を有したるが故に、有紫圈內の明星視されしが、近年漸く圓熟して、如才なき外交官となれるの感なからず。老猾袁世凱の對手として、陰晴明日を圖られざる支那にありて、果して能く帝國の使命を全うするや否やを疑はれ、貫祿未だ足らずとせらるゝ所以は、全く其の不徹底的の態度に存するなり。

日置の赴任するや、其の鼻先に突き付けられたるは、攻戰地帶に關する交涉なり。次に起れるは吳淞問題なるも、一は日露戰役に於ける旅順口の先例あり、一は無線電信に關する中立違反の所爲に對する抗議なるを以て、左程の努力を要せずして解決せり。而して最近に勃發せる濰縣及び濟南府占領問題の如きは、一步誤れば日支衝突の端を啓くに至るやも測られざるの形勢なりしも、事は山東鐵道に關聯せる事件なれば、理義明白の問題なり。如何に獨逸の策を弄するあるも支那政府の眞面目に抗議をなす程のものに非ず、殊に實力の優に支那政府を壓するに足る者ありしかば、無事に解決を見るに至れり。然れども、日置の爲す所は事毎に機宜を失する者の如く、斯かる小問題にすら多くの困難を伴ひて、喘ぎつゝ進まざるべからざるの境地に陷るを見る。唯纔かに武力の後援あるが故に、大なる紛糾を來さゞるを得るのみ。今日にして斯の如くんば、今後に於ける利權問題の如き、支那保全問題の如き、如何の抱負を以て獨米外交家の辣手に對せんとする乎。對支外交の死活は、實に帝國の運命を決する

の重大問題なり。膠州灣より獨逸の勢力を驅逐するが如きは、此の重大問題を決するの前提に過ぎず。軍事的行動終結後に於ける國際外交こそ、眞個に重大なる意味を有するものなれ。吾人は切に伯大隈の聲明する所の國是に則り、以て對支外交の方針を確立すると同時に、盟主的活外交を試み、東洋の禍根を一掃すると共に、外交界の面目を一新すべきを勸告せざるを得ず。

〔備考〕

職名	日淸戰役	日露戰役	日獨戰役
首相	伊藤 博文	桂 太郎	大隈 重信
外相	陸奥 宗光	小村壽太郎	加藤 高明
次官	林 董	珍田 捨己	松井慶四郎
政務	加藤 高明(轉) 小村壽太郎	山座圓次郎	小池 張造
英	加藤 高明	林 董	△井上勝之助
米	栗野愼一郎	高平小五郎	△珍田 捨己
佛	曾根 荒助	本野 一郎	△石井菊次郎
獨	青木 周藏	井上勝之助	△杉村虎一 船越光之丞(代)
伊	中島 信行(歿) 高平小五郎	大山 綱介	△林 權助
墺	―	牧野 伸顯	△佐藤 愛麿
露	西 德二郎	栗野愼一郎	△本野 一郎
蘭	高平小五郎(轉) 赤羽 四郎	三橋 信方	幣原喜重郎
白	青木 周藏(兼)	加藤 恒忠	陸奥 廣吉
支那	大島 圭介	内田 康哉	小幡酉吉(代) 日置 益

△は特命全權大使、他は特命全權公使、(代)は代理公使なり。

探訪ロマンス（一）

松崎天民

「探訪ロマンス」は、予が新聞記者生活の追憶録なり。十五年の記者生活、短きに似て、決して短からず、大阪に、東京に、接觸したる「人」と「事」と、詩もあれば小説もあり。月清らかなる秋の靜夜こそ、思ひ出がたりには、ふさはしけれ。

「絞殺された女」

一、酔ばらひ

あの晩、彼奴(あいつ)はよつぽど酔ぱらつて居た。

時事新報社横の喜仙て、正宗とキリンを飲て、竹川町の臺灣喫茶店て、烏龍茶(ウーロンチャ)を飲て、天賞堂の横手てすしの立食をして、それからライオンの三階に上つたのだもの、何(ど)んな奴でも酔ばらつてしまう。エビスとウキスキーとドムと、いろんな酒やら飯やらが、胃の中てゴタ／＼になつて、腸はひつくり返る様に暴れ初める、頭はガン／＼痛み出す、膽玉は無暗に大きくなつて、世界がグル／＼廻り出す。いやもう、矢ても鐵砲ても持て來いと云ふ元氣だもの、賑かな銀座の通りを歩いて居た、見も知らぬ藝妓らしい女の群の中に割り込で、

「姉さん、今晩は……」

なんかと、西洋人らしい物懐(ものなつ)こい調子で聲を掛ける位のことは、大目に見て遣つても宜からう。

連は二人あつたが、男の方は待たせて居た俥に乗つて、何時の間にか消えてしまう。女の方は何やらプン／＼怒り散らして、これも電車の中に姿を隠してしまつた。しまひには酔ばらつた彼奴(あいつ)が一人になつて、尾張町の四角に立つたまゝ、ものゝ三十分余(あまり)も安葉捲の煙を吹かして居たらう。

「あの……失禮て御座いますが、深川黒江町の方へ參

ります電車は、こゝで乘りましたら宜いので御座いませうか。ツイ連の者に放れましたものですから、當惑いたして居るので御座いますよ。ほゝゝ」

大きな丸髷を結つた、いやに女の匂がする三十前後の奥様らしい縞の羽織が、彼奴の傍に寄つて斯う云つた。ロンドンか何處かへ行つた樣な氣持になつて、誰か斯う擦れ違ひ樣に、手でも握つてくれる女は居ないか、と夢のやうな事を思つて居た處へ、「御座いますで御座います」を浴せかけられたので、彼奴も餘程びつくりして面喰つたに違ひない。

「えゝ、向ふの服部の横手から乘つて、茅場町と云ふ所で乘換へる…。判らねば車掌にお聞きなさい、妾の行く所は何處だと云つても、電車は溫順しく運んでくれます。黑江町は暗い町ださうですね、もとより洲崎とは方角が違ひまアす」

大丸髷もびつくりしたに違ひない。默つてお辭儀をして、天金の方へ行つた後ろ姿を、何時も彼奴だと「誰やらに似て居る」なんかと、直ぐ材料に使ふのだけれど、醉ばらつて居ては、眼がちら〳〵、足がふらふら。用もないのに、電車の監督に言葉を掛けて、

「青山行は未だありますか」

などゝ愛想を云ふ。服部の時計臺は九時を打つたばかり、赤までには未だ三時間餘もあるくせに、彼奴、餘ほど何うかして居やがる。

彼奴自身では、誰かの魂魄が乘移つたのだとも思つて居るし、或は死だ女房の亡靈が、暗い冥府から痩細つた手を上下して、彼奴をあやつッて居るとも思つて居るらしい。酒を飮むのも、醉ばらふのも、辭めなくても宜い社で、「辭退仕度く候間……」の辭表を出したのも、誰かにあやつられて居るとしか思つて居ないらしい。宅に歸ると悄氣返つてしまつて、人知れずメソメソ泣いたりする癖に、彼奴も酒を飮て、醉てる間だけは、人並の男らしく、何處かに弱い所がある。

「俺もいよ〳〵浪人になつた」

古い紋切形の言葉だけれど、「感慨無量」と云ふ四字が、今の彼奴には一番能く當てはまる。その「感慨無量」に

に囚はれたくないばかりに、酒を飲て久し振りに酔ばらつたのだと云つても、世間の奴等は、普通の酔ぱらいにしか取扱つてくれない。そんな道理の判らない男でも無ささうなに、彼奴よほど酔うて居る。

さうだ、彼奴は酒ばかりてはない、生活そのものにも酔ばらつて居る大馬鹿者てある。

二、大馬鹿者

何時も使つて居る原稿紙に、何時も使つて居る大きな萬年筆で、社長に宛た「辭職屆」と、社の幹部に宛た私信を書いて、それを懐中にして彼奴が社に出たのは、九月二十五日の午後二時頃であつた。月給の袋を貰つたら、中には書附ばかりが澤山入つて居て、現金は一圓五十錢しか無かつた、彼奴一人が酔ばらつて居るのみでなく、彼奴の月給の袋までが、年百年中酔ばらつて居やがる、人を茶ッ。

調査部に入ると、何時も楚人冠の倚つて居る大い机の前に、彼奴の友達が頑張つて、可愛相に酔ざめの様な白い顔をして居る。

「俺は辭めるよ、これを渡してくれ給へ」

理由も何もない、御辭退申し上げたいから、御辭退申し上げるまでのことだ。困らうが困るまいが、彼奴は彼奴の思ふ様に振れ舞はして置くが宜い。酔ばらいを捉へて四の五のと云つたところで、啖呵を吐いて氣焔を高めるばかりだ。まアそッとして、酔の覺めるまで寢させて置くに限るぢやないか。

四度目の辭表、いよ〳〵お聽許に相成つて、百圓足らずの月給にしろ毎月のお扶持に離れたとなると、さすがに彼奴でも妙な感じがしたに違ひない。自分の力量相當か、自分の手腕以上か、或は自分の技倆以下にしろ、戰爭で不景氣な當節柄、百圓に近いお金を頂戴すると云ふことは眞に以て勿體無い極で御座る。それを自分から捨て掛つて、自分の思ひ通りになつた今、「感慨無量」は聞て呆れまさア。

「愉快に働きたいから辭職するのだ」

憚りながら此の外には何も御座りません。月給を頂いて飼殺されるよりは、ノラリクラリとして當り障りの無い様な、太平無事で至極く結構な生活を續けるよりは、自分で自分をもつと何とかしたい。自惚れでも何でもない、彼奴は十五年の記者生活に一段落を付けて、これからいよ〳〵ほんとの道を歩かうとして居るのだ。蛇か出やうが、落し穴があらうが、ほんとの道さへ歩き得られるなら、逃げも隱れもしはすまい。女房が死で一周忌近い今、彼奴は自身の生活全部を、根柢から引くり返して、成田屋張の大見得を造りたいのだらう、それに違ひない〳〵。

「見物が受け様が受けまいが、そんな事は問題ぢやない。俺は俺の道を行くんだ」

十五年の疲勞が、一度に出やうとした時、彼奴は先づ酒に酔ばらつて何も彼も思ふまいと努めた。勤めて居た社と、先輩や同僚に對する私的感謝も、不平も、不服も、忘れてしまはうと努めた。酔ばらつてさへ居

れば、「俺は何時でも俺で」あり得る、その心安さと暢達とした氣持と、放たれた自由の歡喜とを受け入れるには、常に醉心地でさへ居れば宜い。

「これから何うして飯を食はう、俺一人では無い、三人の子がある。明日の朝から働かねば、三度〳〵の二等米も食へないぢやないか。働くにしても、俺に何の手腕がある、何の技倆がある、何の力量がある。全體、俺は何うしたら宜いのだ！」

さすがに不安と心細さと寂寥とが、彼奴の女々しい氣持を、一層弱らしてしまうことがある時、彼奴は醉ぱらつて居ながらも、「生活」と云ふ事に就いて、嚴肅な思索に耽る樣になつた。幼い時から月給取の生活にのみ馴れて、勤人で飯を食つて來た彼奴は、初めて「飯を食ふ」と云ふ事に就いて、今まで經驗したことのない、新しい不安と勇氣とを自覺したらしい。

「要するに、人生は醉ぱらいだ。何時まで經つても、覺めることの無い醉ぱらいが、この人生と云ふものだ。俺も醉ぱらいながら、醉ぱらいの生活を續けて行かう――」

眞面目に考へることが厭さに、彼奴は自分の生活までも醉ぱらいにしてしまつて、そこに安住の世界を求め樣として居る大馬鹿者である。

三、感慨無量

深川黒江町行の電車をたづねた、大丸髷女に別れてから、彼奴は的もなく上野行の電車に飛乘つた。電車の中を見渡せば、誰も彼も不景氣な面ばかり、秋も次第に冷たくなると、電車の中にまで「生活難」が纏つて皆が申し合せた樣に嘆息ばかりして居る。

公園前で電車を降りて、池の端の方へ歩いた時、彼奴はまた一人の婆さんに逢つた。

「旦那樣ア、これから大宮の方へ歸る者ですが、お金入を落して難澁して居りますから。二十錢でも十錢でも宜しいに、何うか惠んでおくんなされや。恥かしい事にねえ、知人はありませずら、はい、はい、先刻から途方に暮れて居りますに、旦那樣ア」

白木綿の小さい風呂敷包を抱へた、餘り人品の卑しくない六十近い婆さんで、紡績物の羽織さへ着て居た。新橋際や尾張町角や、赤坂見附などで見る體の好い乞食の類だとは知りながら、彼奴は五十錢銀貨一つを與へて、默つて電車停留場の方へ引返した。

一年前の其の日その夜は、赤十字社病院へ入院して居た彼奴の女房が傳染病室に移された日で、母の病氣に感染した彼奴の二男が、同じ病院の傳染病室に送られた日であつた。僅に一年の間に、長い間連れ添うた女房には死別れ、大阪時代から因緣のある朝日新聞は辭職するし、兎もすれば「感慨無量」が頭を持上げて、彼奴を泣かせ樣〳〵とする。

其の上、醉ぱらい樣が烈しかつたので、男の友達には失敬されるし、女の友達には逃げられるし、全く以て戯談ではない、秋の夜寒が身に泌みたらう。おまけに變な大丸髷には、御座いまされるし、變な婆さんには五十錢取られるし、醉は次第に覺めてくるし、何だか斯う氣が焦煤し

て、電信柱にでも衝突かつて、喧嘩を仕掛けたい樣な氣持にもならう。死だ石川啄木が、「目の前の菓子皿などをかり〳〵と嚙みてみたくなりぬ、もどかしきかな」と云ひ、「怒る時かならず、一つ鉢を割り、九百九十九割りて死にたし」と歌つたのが、恰度、彼奴の今の心持かも知れない。

醉ばらいの心持になつて、この世を過ごさうと思つても、お氣の毒だけれど時が來れば覺めてしまう。凡ての世界が次第に現實に復つて、生欠伸が出て水が欲しい頃になると、誰でも倦怠と疲勞を覺えて、頼りない心細い哀趣を感ずる。そんな時に再び酒を仰いで、醉心地を呼起すだけの氣力が無い彼奴は、人知れず涙をホロ〳〵こぼして、後悔慚愧の情に咽ぶのが常だ。醉ばらつて居て、見たり聞いたりした事が、幕一重を隔てた彼方の世界にあつた、遠い昔の夢の樣に思へて、厭で〳〵堪らない事もあるし、懷しくて〳〵仕樣の無いこともある。これが彼奴の例の癖である。

「働かなくては、飯が食へない」

これほど平凡な事でありながら、近頃これほど力強く彼奴を刺戟した言葉はなからう。上野から電車に乘つて、山の手線を大迂回して、澁谷からブラ〳〵と宅に歸るまで、彼奴は「飯を食ふ」ことばかり考へた。醉は最う覺めてしまつて、彼奴の頭の中は「生活」の問題ばかりが、グル〳〵と渦を卷いて居た。

宅へ歸つて、風呂に入つて、大きな茶碗で飯を食つて、二階の書齋に入つた時、彼奴はまた今更の樣に、孤獨の寂しさを感じた。飯を食ふために、大切な貞操を賣物にして居る女や、飯を食ひたいために、惡い事をして居る男や、飯が食へないために、殺されたり殺したりする男女がある事を考へて、彼奴はそれが、他人の事の樣には思へなんだ。

生活のために起る樣々の悲劇、そんな事は十五年間の新聞記者生活に彼奴が飽きるほど見て來た「三面雜報」である。酒の香失せた彼奴の頭には、其の舞臺面の所々が、活動寫眞の映畫の樣に去來して、彼奴にいろんな事は考へさせたり、書かせたりするのだ。

四、女房殺し

彼奴が先づ想ひ起したのは、大阪で見た「絞殺された女」の身の上であつた。

何でも日露戰爭の前後、彼奴が今度辭めた「東京朝日」とは、兄弟分の「大阪朝日」に居て、警察廻りの探訪に從事して居た時のことである。今とは違つて、其の頃の社會種と云へば、警察で取扱つた事件が、主要なものとして歡迎されて居た時代だから、仕事も骨が折れたが、然し面白い事も面白かつたらう。

彼奴が其の頃から、普通の警察廻りの探訪にしては少し異つた頭腦を有つて居た。新聞全體の調子が調子

なので、五人殺しとか無理心中とか、貰子殺しとか毒殺事件とかゞ有つた場合には、興味が有つても無くても、普通の事だけたは探訪もせねばならず、また雑報にも書かねばならなんだ。けれども彼奴が眼を付けて居たのは、同じ警察事件の中ても、新聞記事としては、六號活字か何かの中へたゝみ込まれるものゝ中に、ほんとの「人生」を見出すことてあつた。彼奴はたゞそれが樂みに、毎日〳〵自轉車に乘つて、南、難波、天王寺の三警察署を廻り歩いて居た。

十年も昔の事だから、人の名や町の所在は忘れてしまつたが、天王寺署の管内で、一人の女が縊死した事件があつた。大阪も町外れの天王寺は、其の頃まだ開けて居らず、暑い夏の盛の事とて、所に依つては蚊がブン〳〵唸つて居た。彼奴が何時もの様に自轉車て馳け付けて、公廨に居る司法係の警部から、衛生係の警部と順々にお世辭を振舞いて歩いた後、疊敷の刑事室へ顔を出して見ると、知合の刑事が二三人、

「君、君、大事件が有るぜ、一所に行かんか」

と如何にも大事件が有りさうな顔をして、莨入を腰に差して立ちかけた。心安い間柄になつて居ると、能く其の「大事件」でかつがれるので、「ほんまかいな、何やね、一體。何處ていな。またかつぐのやないかいな」と、さすがに新參の探訪屋さんの様に、滅多に笑止千萬な狼狽へやうはしない。

「ほんまやとも、默つて從いておいて……」

或る家に同居して居る夫婦者があつて、其の亭主が昨日の晩出た後で、今朝二階に上つて見ると、女房が蚊帳の中て死んて居たと云ふ。事件は至極く簡短な様だけれど、其の死因が自殺か他殺か疑はしいので、兎に角くこれから下検分に行つて、都合に依つては判検事の臨検を仰ぐのだと云ふ。成る程、小事件の様でも或は大事件になるかも知れない。

二階の六疊に、女は蒼い顔をして倒れて居た。女の頭には細帯の様な黒い布片が卷き付いて、髪を振り亂して死で居る姿は、日の光の強い夏の白日ても、餘り氣持の好い眺てはなかつた。口の中からは、聲を立ね

ために押込だらしい古手拭の端が、ダラリと垂れて居るし、痩せた三十五六の大柄な女が、古い蚊帳の中に死て居る姿は、ゾッとするほど物凄かつた。

新聞屋四五名は直ぐ追出されて、いよ〱判検事の臨検となり、刑事は四方八方に飛て、行方不明になつた亭主を捜索した。如何に敏腕な探訪記者でも、斯うなつては手の着け様がないので、一先づ天王寺署に引上げて、司法係からの發表を待つて居た。但し司法警察に關する智識の無い探訪記者の眼にも、女の死が自殺にしては變だし、他殺にしては可笑しい位のことはとうに判り切つて居た。

「女房殺しました、私だす、私だす」

まだ一時間も經つか經たない間に、死人の樣な顔をした一人の男が、呼吸急き天王寺署に馳け込んで、恐るべき女房殺しの犯罪を自白した。これて何も彼も片付いてしまつて、「哀れなる女房殺し」の記事は、翌日の新聞に、二號標題て二段近くも出た。彼奴が眼を付けて居た「人生」の或るものが、此の事件の底に流れて居たので、彼奴は雀躍して喜んだ。

五、刑事の涙

「これだから、探訪記者の面白味は忘れられない」

彼奴は今でもさう思つては、悲しい此の夫婦の身の上を憐れんで居る。さうして事件の經路が、如何にも戯曲的の色彩に富て居るのを、極めて興趣あることに眺めて居る。事件は遂に小事件に終つたが、其の底には生々しい人間の叫嘆が、強く烈しく響いて居た。

村ては相當に暮して居た二人が、不如意の波に漂つて流れ流れた果であつた。亭主は職人であつたか、區役所の臨時雇であつたか、確とした事は思ひ起せないが、天王寺の家に同居した時には、貧乏のどん底に落ちて居た。一厘一錢の收入もなくて、最う何うする事も出來ない上に、女房は長年の肺病で、痩せ衰へる一方であつた。不治の病に惱む愛妻を抱いて、其の日〱の生活に窮迫して居た亭主が、

「女房を殺して、俺も死なう」

と決心したのも、考へて見れば憐れ至極である。何時

まで經つても、全治ると云ふ見込のない難病に苦しむのみか、いとし良人に生活向の心配をかけるのは、苦勞の上の苦しみである。足手まといの自分さへ亡き者になつたなら、良人はまた世に出る時もあらうとて、

「妾は死にたい、殺しておくんなはれ」

と迫つたのも、考へて見れば悲慘の極である。

二人とも血の涙の遺書を殘して居たので、謀殺でも故殺でもなく、全く自殺幇助であることが判つた。其の前夜亭主は何處からか一升の酒を買つて來て、夜更けるまで夫婦差向いて、ヒソ〳〵と話し合つて居た。兇行があつたのは、まだ宵の八九時頃で、女房が覺悟を極めて、口の中へ古手拭を入れると、亭主は自分の締めて居た黒木綿の兵兒帶を、女房の細い頸に二卷き卷いた。「南無阿彌陀佛」も聲が出ず、醉ばらつた勢で力まかせに二三度強く絞めると、女房は聲も立ずに絶え入つたと云ふ。——亭主の自白聽取書である。

「私も直ぐ死なうと思ひましたけれど、何や知らん惡い事した樣で、恐うなりましてなア、前後も知らずに逃げ出しました。酒の醉が覺めますと、不憫なことした、可愛想なことしたと、涙がこぼれて仕樣がおまへん。最う斯うなつたらなア、自分で死ないでも、お上て何とかして貰へますよつて、何も彼も自首して出ましたんや……」

男は刑事に向つて、涙をこぼしながらこんな事まで述べた。犯罪人の檢擧にのみ從事して居る警察官にも同情の涙は人一倍に熱かつた。

「二十年も刑事巡査してるけど、こんな可愛相な事件は初めてや。犯人やかて神妙なもんやし、自殺幇助やつたらなア、假出獄許されんこともないやらう。君等、大に同情して遣らはれ、貧乏ゆゑの犯罪やかて、ほんまに可愛相な事件やないかいな」

天王寺署で鬼刑事と呼ばれて居た人さへ、涙を流さんばかりに氣の毒がつて居た。彼奴の書いた雜報は、文章も拙かつたし、彼奴自身の主觀を加へることは、絕對に許されない雜報のこととて、明ら樣に同情することは出來なんだ。けれども、彼奴は其の時まで經驗

したことのない、昂奮した充實した氣持になつて、この悲慘なる犯罪の事實を世に傳へた。

多くの讀者は、この雜報を讀だ時、何んな感を起したであらう。事件の大小を問はず、自分の關係した記事が、自分の從事する新聞紙上に現はれた時、いろいろの反響を見るのは、愉快なことであり、滿足なことであらう。たとへ其の記事が、社內の黑人筋には不評であつた場合でも、天下の讀者に多大の反響を與ふれば、こんな愉快なことはあるまい。

この事件にも、思ひ設けぬ意外な方面に、有力な一つの反響があつた。

六、中井さん

此の記事が新聞に現れた二三日後の午後、彼奴(あいつ)が社に出て何か書いて居る處へ、

「天民さん、電話です。辯護士の中井さんから」

だと云ふ給仕の取次があつた。「辯護士の中井さん」と云へば、薄田泣菫氏の親友で、彼奴とも心安い間柄の人である。大阪の少壯辯護士界では、親切と熱烈と眞面目とを以て、頭角を現はして居る好紳士だが、其の中井さんから電話とは、ハテ合點のゆかぬこと。

「はア、さう、成る程、結構です、喜ぶでせう、實に可愛さうです、悲慘ですなア、はア、さう、成る程、承知しました、一度私の考へも聞いて下さい、無罪、減刑、いや執行猶豫ですか、なんにしても哀れな事件です、えゝ、承知しました、失敬〳〵」

電話口へ出た彼奴は、こんな事を應答したに過ぎないが、この中井辯護士こそ、思ひ設けぬ意外な方面の同情者であつた。

常に人生の事に、思を惱まして居る者でなくても、斯うした事件は直に人の感情を衝いて、美しい涙を誘ふだけの價値がある。殊に職に辯護士としてある人が、法の適用が許す範圍內に於て、憐れむべき犯罪の處刑を輕減して遣らうと思ひ起つのは、別に珍しいことでは無い。たゞ一片稜々の俠氣で、無報酬を以て辯護の衝に當り、哀れなる生活的犯罪者を救ふて遣らうとする處に、中井辯護士の清い涙がある。

それから一ヶ月の後、彼奴は中井辯護士から、女房の自殺を幇助した男は、極めて輕い刑の宣告を受けると同時に、執行猶豫の恩典に浴して、生れ故郷へ歸つた由を聞いた。此の犯罪事實に對しては、判檢事も一方ならず同情して居たが、中井辯護士の熱烈な辯護のお蔭も、與つて力あつたに相違ない。

「いろ〳〵御盡力でしたねえ」

その時、中井辯護士と彼奴との間には、いろんな會話が取交されたが、彼奴は何も彼も忘れてしまつたらう。けれども彼奴が忘れずに居る唯一つの事は、犯罪者が一升餘の酒に醉ぱらつて、絞殺に等しい自殺幇助の罪を犯した點である。若し彼の晩、酒を買ふ金もなくて、冷水か何かて別れの盃をしたならば、あんな事件も起らなかつたてあらう。酒を飲て醉ばらはなくては、如何に切迫詰つて居ても、女房の首を絞められないのが、「人間の眞實」てあると思つた時、彼奴は世上の醉ばらひを、心の中て呪咀して居た。

それから後一二年經て、彼奴は東京の國民新聞に入社し、大阪で遭逢した總ての事件は、遠い昔の樣な氣持て眺めて居た。彼奴が取扱つた事件の主人公や女主人公に就いて、「其の後の運命」を想ひ起すことがあつても、自殺幇助の犯罪者だけは、彼奴の記憶に浮かばなかつた。一つは其の事件が餘りに陰氣てあつたのと一つは背景も何もなくて、生一筋に運んでしまつたのが、思ひ出の種としては、餘りに色彩が淡かつた爲めでもあらう。

「片腕を斬られた松川屋妻吉は何うしたらう」

「貰ひ子殺しの惡婆は最う死んだか知らん」

「福井丸の機關長は壯健て居るか何うか」

「廣瀨中佐の遺族は何うなつたてあらう」

「林鳥海艦長の未亡人は相變らず美しいか」

「木村權右衛門は佛樣になつたてあらうか」

「鷲特務曹長は死んだのか生きてるのか」

「千日前の魔美人はお婆さんになつたらう」

「前科三十犯箱師の繁吉は改心したらうか」

「木賃宿の裸體美人は婆さんになつたらう」

彼奴の思ひ出には、こんな斷片が走り廻るのみで、今まで一度も「絞殺された女」と、其の周圍の人々を思い起したことがあつた。「彼の男の其の後」に就いて未見の人から受取つた一通の手紙が有つたことさへ、彼奴は此の頃まで忘れて居た程の酔ばらひてある。

七、大詰の幕

全體、彼奴が浪人した今頃になつて、「生活悲劇」の舞臺面を過ぎ去つた昔の歳月に探ねて居るのも可笑しいが、こんな事件が有つた事を、今まで忘れて居たと云ふのも不思議である。彼奴が「人生探訪」の材料としては、いの一番に使つても宜い程の事件を、今まで打ちやつて置いたのは、何う考へても奇怪である。

此の事件の結末は、これで終つたと云ふのではない。執行猶豫を申渡されて、嬉し涙に叫びながら、生れ故郷に歸つた男の後日に就いては、未だ一場の譚が殘つて居る。明治四十一年秋十月、未見の人から彼奴に來た一通の手紙に、何も彼も盡してある。意味だけは判るけれど、殆ど文が體を爲して居ないし、罫紙に十五六枚も書いてあるから、全文を掲げることは出來ない。こゝには其の事柄だけを記して、「酔ばらつて女房を殺した男の後半生」に大詰の幕を閉めさへすれば宜い。惜しいことには、郵便のスタンプまでが不明瞭で、彼の男の故郷が何處か、それさへ判らない。

手紙には、斯う書いてある。

酔ばらつて、肺病の女房の自殺を手傳つて、執行猶豫になつた男は、彼の事件があつた後、二三ケ月經つて歸國しました。村の者は不憫だと云つて、慰めて遣つた連中もありましたが、中にはたとへ自殺幇助にせよ、女房の頸を絞めた様な男とは、村交際が出來ぬと云つて、口一つ利かぬ連中も大分あつた様子です。

村役場の臨時雇に採用されましたけれど、半年とは續きませんでした。執行猶豫でも前科者は前科者に違ひないと云つて、狹い土地だけに、七十五日經つても、人の噂は消えませんでした。可愛相に彼の男は悄氣返つてしまつて、若い時から好きであつた酒は一滴も飮まず、大きな聲では話もしない程に、謹慎して居ましたけれど、とう〳〵半年ほど村に居たのみで、姿を隱してしまひました。土佐の住友の銅山に行つたとか、足尾の古河鑛山に行つたとか、九州の炭坑で働いて居るとか、種々の噂はありますけれど、誰もほんとの行方を知つて居る者は、一人もありません。

（私は人も世も怨まん、私の蒔いた種は、私自身が始末を付けねばならん）

と云つては、何時も涙をこぼして居ました。

いつそ昔の様に酒でも飮で、常に酔ばらつて居ることが出來れば、こんな苦しみも忘れられるが、素面で居ては堪らなく苦しくて悲しくて、死でしまう方が氣樂な様な氣持がする、私はたゞ彼の時、女房と一所

に死でしまはなんだか、あゝすまない、すまない）果は物狂はしい様子になつて、聲を上げて泣いたりして居ました。何でも夜の一二時頃になると、頸に細帯を巻いた女房が出て來て、何も云はずにサメ〴〵と泣くのださうです。彼の男も其の時ばかりは、蒲團の上に飛び起きて、(成佛してくれ、成佛してくれ)と、冷たい汗を流して彌陀を唱へたさうです。

私は仔細があつて、彼の男が今、山陰道の山の中に居ることだけを知つて居ます。何をして暮して居るか、たゞ(壯健で居る)とだけ、端書に書いてありました。辯護士の中井さんにお知らせしましたら、あなたにも知らせてくれよとの事でしたから、取敢へず右の旨だけ、お知らせ致します。

彼奴が此の手紙を受取つてから、最う六年目の秋が來た。相變らず山陰道の山の中で暮して居るか、或は醉ばらひ過ぎて死んでしまつたか。杳として何の消息も無いけれど、彼奴自身が讀まうとする小説は、兎に角これが最後のページであり、大詰の幕であらう。

醉めなくても宜い社を辭めた今、心細い浪人の境涯を味はうのが厭さに、醉ばらつてばかり居る彼奴にも、こんな思ひ出のロマンスはある。

八、生活の味

「彼の男は醉ばらつて、女房の首を絞めたけれど、俺は醉ばらつても、浮かれて泣くばかりだ。醉ばらひの結果は異つても、醉ばらひ其ののゝ狀態に至つては、共通の點が無いとは云はれない。醉ばらひ〳〵此の世界は、要するに醉ばらひの人生だ」

「醉ばらひの人生」——彼奴は警句の積りで云つて居るのかも知れないが、それは彼奴の卑怯未練な逃げ路で、彼奴のために彼奴の人生が「醉ばらひ」になる迄には、彼奴の齡が四十を超えなければ駄目だ。醉ばらひの女房の首を絞めた男まで行かなくては、徹底したとも云へぬし、墮落したとも云はれまい。

彼奴だつて馬鹿ではない、社を辭めて困る位のことは、百も二百も承知して居やうが、生活の不安を賭してまでも、太平無事に月給を貰つて居た新聞社を辭めたのは、よく〳〵自分の意志と感情とを尊重したからであらう。世俗的の意味から云ふと、彼奴は直情徑行の正直者であり、生一本の大馬鹿者であるが、自分と云ふものを尊重する近代人の立場から云ふと、彼奴にも蔑り難い強い勇氣がある。それで居ながら彼奴自身では、今まで曾て經驗した事のない生活の不安を覺えて、泰然自若として落着いて居られないとは、彼奴、餘程いろんな矛盾を持つて居る。

好んで「生活」など云ふ文字を使つて居たが、彼奴がほんとの「生活の味」を知るのは、浪人になつたこれからだと思ふ。世間の生若い奴等でも、能く「人生」とか「生活」とかほざいて居るが、ほんとの「人生」や「生活」は、交戰國の横文字を見たばかりで、おいそらと解る譯のものではなからう。「自分で働かねば飯が食へないのではない、自分で働いて飯を食ふのだ」と云ふ様な、平凡な陳腐な眞理を、今更の様に適切に自覺した彼奴の神經は、餘程どうかして居るに違ひない。それでも彼奴自身は、

天下萬人が知つて居る筈の世俗的教訓の上に、何か知ら新しい內容と意義があるのを發見したのは、社を辭めて月給に放れた賜だと信じて居るらしい。不安もあれば煩托も起るだらうが、それがやがて「生活の眞諦」に觸れる第一步だと思ふ時、彼奴の心は、初めて「生き甲斐のある人生」の門出に立つた歡喜の情に燃えるであらう。

彼奴は赤門を出たのでもなく、早稻田を卒へたのでもなく、十一歲の春から自分で働いて、自分で人と爲つて來た一種の變り者である。世の荒波にゆられゆられて來た男にしては、餘りに我儘で、餘りに苦勞の影が無く、餘りに一本筋な直情經行が、不思議な位である。文字も知らず智識も無く、何一つとして取柄の有る男ではないが、たゞ一つ眞面目であることだけが、彼奴の比較的好い所であらう。彼奴自身も亦、「俺は眞面目である」と云ふことを旗印にして、不眞面目な群俗輩の中を進むが宜からう。醉ぱらひになつたり、大きな聲で唄つたり、そんな事を不眞面目だと云ふ奴は、自分の「皮相」と「僞善」とに取返しの付かない裏書きをして居る大馬鹿野郎であらう。

「戰爭が濟んだら、〇〇〇へ行きたい」

其の國の言葉も話せず、其の國の文字も讀めない癖に、彼奴は北の空ばかりを眺めては、憧憬の胸をおどらして居る。そして天下萬人に共通する自分自身を描くと云ふことが、終世の大事業だと云つて居る。「自叙傳」を書いて一生涯を送る！ペンを持つか持たない迄の差で、世間の人達も皆、「自叙傳」を書きながら、墓場へ墓場へと步いて居るのだ。

醉ぱらひの自叙傳、醉ぱらひの人生觀、醉ぱらひの生活日記――、醉ぱらひは單り人間ばかりではない。今年は世界の國々まで、砲煙彈雨に醉ぱらつて居るし「地球」は常にグル／＼と、無窮から無窮へ、永遠に醉ぱらつて居る。――

あの晩、彼奴も餘程、醉ぱらつて居た。

――大正三、一〇、一五晚――

次は「△△△△△」

或る美人の妖術魔術、暫く題目を秘密にして、讀者の想像におまかせ致します。

從軍記者團門出の活劇

日比谷庵主人

名譽ある我が征獨第十八師團に隸屬して、青島包圍戰の實況を視察すべき壯快なる任務を帶び、去る九月二十日東京を出發せる東京各新聞の從軍記者團の一行は、脚未だ山東の地を履まざる中、內地の汽車旅行中に於て、夙くも壯絕なる一大戰鬪の活劇を演じ、敵味方共に多少の損害を見たり、と云へる一大警報!?は、何所からとなく飛んで東京の各新聞社に來り、編輯局の同僚を驚かした。

豈敢に流行の獨探が、從軍記者の行動を探知に掛つて發見された譯でもなければ、迷子の獨逸艦隊が突然姿を瀨戶內海に現はした次第でもない、事實を聞けば飛んだ御茶番で、所謂旅の恥は搔棄的の醉中戯に過ぎないが、見樣に依ては亦之れ記者諸君が士氣の旺盛なるを證據立てたものである、其顚末は斯うだ、………驚いては不可い。

△記者團の顏觸

此汽車に乘合はした記者の顏觸れは、と調べて見たが、餘り能は分らない、然し兎に角東京から行つた記者の大部分が此列車で出發したのは事實だから、一二の疑はしいのを穿鑿するでもあるまい、其殘らずの人名社名を擧ると、左の如くである、敢て次第不同などと斷はる要もあるまい。

報知新聞	平井千太郎
都新聞	柴田一郎
萬朝報	伊藤理基
東京毎日新聞	松川木公
讀賣新聞	丸茂草村
中外商業新報	新聞庄藏
日本新聞	村上隆逸
時事新報	室伏信高
中央新聞	朝日奈長
東京朝日新聞兼大阪朝日新聞	美土路春泥
東京日日新聞兼大阪毎日新聞	安藤繁次
國民新聞	玄耳 澁川柳次郎
やまと新聞	紫陰 藤木九三

從軍記者の中には此外帝國通信及び電報通信の兩社員も居るが、此話しに關係もなく、又餘り中央の文壇に關係がないから、此には遺憾ながら失敬する。

△食堂の祝盃

一行中の元老たる澁川玄耳先生は一人內切符で納まつて居るが、他は

皆パスの二等室、兎に角戰爭に行くと云へば、翻り間違へば之が東京の見納めかも知れぬ、先づ勇士の門出に一杯の祝盃と、何れも斯道に掛けては覺えの剛の者、食堂は忽ち大繁昌を來して、活氣横溢、近よるべからざる勢になつた、白切符の玄耳老人も何時しか引張り出されて、差し居れ、飲むはの氣焰、獨逸語の玄耳老人が、迂濶りプローヂツトと叫んで敵國の語を用ゐる不屈漢と罵られ、あとはグードラツクにウヰスキーを啣り、ヴオートルサンテにブランデーを傾けて、夜の更くるのも知らなかつた。

重ぬる强烈な洋酒に口の粘るを覺えて、誰やらが摘み出すシガーレツト、No Smoke. の掲示などは鼻の尖で笑つて、燻す一擦紫の烟りを裊蛇かすに、後れたは殘念と隣卓の大男、何所でアツプしたか服裝に似合はぬシガー一本、芳香脉々と薰じて一同を羨ます處に、ウエーターはツト傍へ寄つて、『烟草は御免を願ひます』と云つた。

△咄！無禮漢

物も言ひ樣で角が立つ、左なきだに高慢ちきな面構へ、愉快に談し合て居る席へ餘計な咎め立てと、記者連は悉く憤激した、何れも日に一度位ゐ憤激しない事のない連中、夫が無禮なウエーターの一言に對し、一所に憤激の血を爆發さしたのだから耐らない、怒聲叱聲霄の如くウエーターの上に注ぎ掛くる處に、年齡こそ老つたれ、手の早い事に掛けては東京新聞界のレコード破りと言はれる玄耳先生、『何を小癪なッ』と云ふより早く、前なるウイスキーの盃は突嗟に空を飛んで、發矢！と許りウエーターの横顔に命中した、硝子の盃は粉と亂れて四方に散り、中なる酒は驟雨の如く飛んで、折しも其前に晩餐を取つて居た洋裝紳士の肩に掛つた。

此ウエーター能々の短氣者と見えて、己れの商賣も忘れて、矢庭に玄耳先生の處へ殺到した、洋服の紳士また數盃のビールに好加減酩酊して居る者、最前から記者連の氣焰に少からず不快を感じて居たらしいのが見事玄耳先生の酒つぶてを被つて意外な恥辱を受けたのだから堪らない見る／＼烈火の如く怒り狂つて、前のウエーターと共に玄耳先生のテーブルに襲ひ來つた、

△連合軍大捷利

玄耳先生はと見ると、例の蒼い顏を一層蒼くして——先生は酒を飲むと蒼くなる質の人だ——、爛々たる眼玉を光らし、右手にナイフ、左手ニフオークを握つて、サア來いと身構へる、何方が先へ手を出したか、白兵戰は靑島ならぬ汽車の食堂車中に始まつて、喊聲天地に震ふ光景、慥かに從軍記者の筆を煩はすに足る。

斯くと見た他の從軍記者連、何條玄耳先生を見殺しにすべき、假令ウヰスキー擲弾は玄耳君の手から飛んだにせよ、問題の根本問題は連帶責任である、此で中立を守るは伊太利の事、イデヤ我等が手並の程をと、覺悟は電の如く銘々の胸に通つて、一同直ちに結束して起つた、獨墺の二國は此に猛烈なる連合軍の襲擊を被り、怒號叫喚、叱咤突擊、慘憺たる室内戰の状況は、到底實地其場に臨んだものでなければ想像も附かぬ

位だつたさうだ。

大捷利の名譽が、連合軍側に荷はされた事は云ふ迄もない。

△玄耳先生の遁逃

此に奇怪なのは玄耳先生の行動だ、衝突の責任が先生に在るは云ふ迄もない、然るに此大突撃の後、不思議な仲間が現はれて、双方慇懃に挨拶して立分れた時、肝腎の玄耳先生の姿が見えない、捕虜になつた譯でもあるまいに、不思議な事もあるものと、皆で諸所を捜して見たら、先生何時の間にか自分の寢臺へ潛り込んで、何も知らぬ顏の高鼾、無責任にも程があると、復もや憤激しかゝつた人もあつたと云ふ、之は嘘かも知れない。

出征前の戰鬪の所云は正に此の如くである、聞けば此の如き事が今一つあつた由だが、其方は善く分らぬ、何れ從軍餘話とか何とか云つた名で、世に公にされる事もあらう。

△記者連の人物評

前の話しには玄耳先生の外、他の記者の名が傳へられぬが、實は此衝突に參加した豪傑は澤山あるので、或る一人は拳固の先を痛めて、廣島で醫者に見て貰つたと云ふ、偖如何なれば此一鬪がそんな衝突を引起したかと云ふ事を領解せしむる爲に、次に聊か記者諸君の人物談を試みやう、之は局外者たる小生が時々耳にしたものに過ぎぬから、或は多少の誤聞がないとも云へぬ、若し惡い方へ間違つたら、從軍中それ彈にでも當つたと諦めて貰ひたい。

△醉へば必ず撲る

玄耳先生は何から見ても一行中の先驅だ、殊に手の迅い事に於て然りで、先生は却々の好酒家だが、醉へは必ず人を毆る癖がある、何の理由もなきに人の面が癪に障ると云つて、拳骨を飛ばす、巖谷小波君なども曾て何所かの宴席で此御見舞を受けた由で、以來先生を見ると、逃げて歩く、朝日の社中で先生の拳骨を頂戴せぬ者は殆どないと云ふ、近頃は大分老けて溫淑しくなつたが、此癖許りは未だ脫け切らぬ、之が命懸で戰地へ行くのだから、其勇氣の程も推察すべしである、但し先生平生は淚もろい極く好い人で、喜んで後進の世話をする、汽車中の活劇などは先生の此癖が一寸顏を出したに過ぎぬ。

△騎兵中尉と驛夫

二六の豪傑陸軍騎兵中尉關東兒吉田淳君も亦勇氣凛然たる人である、二六編輯長の肩書より中尉の肩書の方が自慢である位の男だから、其軍人氣質も無理でない、酒も强い、腕力もある、『己は軍人だぞ、公等には眞實の戰爭は分るまい』と云ふ氣焔、中尉殿今頃は乘馬服に拍車附きの長靴でも穿いて、得意で居るだらう。

報知の平井千太郎君も亦奇抜な男だ、此先生は元新橋驛で切符切をして居て、運が向いて報知記者と出世した位の人だから、社會の暗黑面は能く知つて居る、辛辣な事も隨分やる、喧嘩などは朝飯前だ、之に狙はれたら大抵の者は降參しやう。或意味で豪い男だ。

やまとの藤木紫陰は將來のある記者だ、學校は福知山の中學を出た

位だが、熱心に獨學を続けて、一廉の新體詩人となつた、飛行機記者としても亦有數の方で、素人としては珍らしい飛行機通である、性質も圓満で酒も餘り飲まぬ、拳骨には緣の遠い方だが、イザと云へば分らぬ。

△玄耳先生の好敵手

中央の朝比奈長君は一行中では較ゝ先輩らしい、珍らしい佛蘭西學者で却々のハイカラ男、頭腦も好く筆も立つ、酒は非常に強く腕力も大の自慢、蓋し玄耳先生の好敵手との評判である、決してヒケを取る事ではあるまい。

朝日の美土路春泥君は玄耳先生の舊門下生で、怜悧な男である、角力記者などを長くして居るが、餘り得意の方であるまい、聊か變人らしい所もある、勉强は一寸眞似が出來ぬと云ふ。

時事の室伏高信君は、一行中に二三人しか無い硬派記者の一人で、平生は政黨の本部などへ行つて居る、尾崎學堂に私淑して常に其教訓を受けて居る、年齡は未だ若く經驗は少いが、見識は却々あり議論も能く立つ、先頃「大國民」で犬養木堂征伐號を出した時、都下の操觚者連が大分誤詫を並べた、先生の文章は嶄然異彩を放つて儕輩を驚かした、將來は必ず物にならう。

某紙の原田讓二君は早大出の文學士、河井酔茗や小島烏水などの仲間で、相當の文士であるが、酒が過るので如何か、體格も美事で腕力もある方、アルコールのある間は斷じて後は退かぬ人。

△十人十色の腕前

毎日の松川木公君は原田君と共に前に讀賣に居て共に一方の大將を勤めて居た人だ、見識もあり智識もある、不思議に外國事情に精しい、今度の從軍も其邊から來て居るだらう。

都の柴田三郎君は畫家が本職である、成程都新聞には相應はしい從軍記者で、巧くはないが文章もかけ、重寶な記者だ、中外の新開庄藏君は大分變つて居る、此人根が好人物であるが、酒に醉ふと器物を破壞するのが好で、德利や皿を敲き壞しては痛快がつて居る、全く一種の狂的で大した惡氣はないのだが、玄耳先生の前辺りで此藝をやつたら必ず一騒動持上るイヤ險吞々々。

讀賣の丸茂天材君が先づ尋常の軟派記者、頭も古く學問も餘りない、然し如何にも忠實で氣轉も利いて居るから、記者として出してやるには生じつかの大家先生より、或は此方が得かも知れぬ。

△女優秋元千代子の良人

萬朝の伊藤理基君と來たら、一行中大に異彩を放つて居る人だ、先生お定まりの早大文科の出身で、先年上山草人等と文藝協會に居た事もある、其時同窓の女優秋元千代子と熱烈な戀に落ちて、遂に芽出度く夫婦となつて了つた、伊藤は秋元の男妾だとは酒燒連の惡口で、家では夫婦同權位だ、先生が千代子夫人に對する熱情は今尚冷めず、戰地からも日々二通位づゝ夫人の處へ手紙を出す、社へ出す通信より千代子宛の書信の方が遙かに多い位で、之には陸軍の檢閲官も全く弱らされて居ると云ふ噂だ、嘘と思ふ人は千代子の家へ行つて見給へと保證する人がある。

從軍記者の事に就て、未だ〱書きたい事は澤山あるが、後が怖ろしいから此位に止めて置く。

人物評論（五十四）

小杉未醒と石井柏亭



△柏亭と未醒の藝術

有島生馬

○柏亭にしろ、未醒にしろ、以前から既に立派に一本立の青年畫家で、世間でも所謂大家の一人に數へ

る事を許して居たようだ。實際未醒とか、柏亭とかいへば隨分普通な名で、津々浦々までよく行き渡つて、田舍などでは時に僞物の水彩や油繪が行はれると云ふ話がある。それ程の評判とか人氣とかいふものを集めるのに二人は他の多くの畫家とは異つて洋行もせず、留學もしないで直ちに之を贏ち得たのは、今日までには寧ろ異數とせねばならぬ。二人は先づこふ云ふ足場を築いて置いて後、前後して申合せたように美術見學の爲歐洲旅行に上つた。古今の名作や遺蹟などを親しく尋ねて、見聞を廣め、研究を積んで歸朝した譯だ。世人が擧目して二人を注視したのも無理はなかつたと思ふ。私は今こゝで二人が此旅行から持つて歸つて來た土産に一件を與えてみたいのである。

○先づ第一に考へねばならぬのは、二人にとつて此歐洲旅行は有益だつたか、無益だつたかと云ふ事である。何故私がそふいふ馬鹿氣た質問を第一に出すかと云ふに、人の性質や天賦や境遇によつて、歐洲留學といふ事も全く無意味に終つて終ふ例が少くないからである。私の觀察では柏亭も未醒も、此旅行で大分利益を得て來たやうに思はれる。未醒は一見豪傑肌の意氣を尙ぶと云つた風の氣概を標榜して居る男である。之に反し柏亭は常識的で綿密な、注意深い人間である。而して二人が共に相應な收穫を得て來たと云ふのには一つ共通な點がある。夫れは藝術品に對する理解力がよく發達して居る事である。彼等は歸朝すると共にその通信文などを蒐めて「美術遍路」と「畫筆のあと」といふ興味ある著書を公けにした。夫れを通じて古今の美術品に對する二人の鑑賞力、趣味、嗜好が略ぼ窺はれる。而して誰れしも彼等の理解力を是認する事が出來ると共に、その聰明が彼等の藝術に何等かの影響を及ぼすべきを期待するは無理ならないのである。柏亭の書いたものを見ると極めて趣味が廣く行き渡つて、夫れに科學（シアンス）と理論が常に冷靜な判斷を加へつゝあるのが分る。未醒のものは、より斷片的で、直感と奇智に富んで居るが、その趣味は寧ろ偏して居る。

○柏亭は殆んど諸ての藝術を是定して居ると云ふも差支えがない人だ。然しいかなる場合に於ても、彼は感激に堪えぬとか、興奮し切つて終ふとか云ふ事はないようである。彼は常に冷かに自己を視て居る。諸てに對してかく客觀的であればこそ、平らかな廣い趣味を持ち得るのである。故に興味をもち、尊敬を拂つたらうと思はれる多くの藝術家、藝術品に對しても、之を見る事殆んど路傍の人の如くで、自分は夫れから何等の感化も受けない代りに、束縛も受けることなく、顧みた丈けで別れて行つて、更らに恨む所も、惜む所もなかつたようである。然し夫れは全然無關心だつたのとも違ふ。彼の理解力は他を解すると共に、自己をもよく解して居る。彼は他の光を借りて自分の歩むべき道を安心するまで照してみる事は怠らなかつたらう。彼は大作熱にも罔かされず、題材に就いても特別な嗜好を捕へようとしなかつた。從來の通り平々凡々たる自然の一角を描いて、夫所に悠暢な一種の氣分を樂む事を努めたかに見え

る。而して自らも佳作は常に小品にのみ見る事が出來ると斷言して居る。柏亭が今秋二科美術展覽會に陳列した、四點の水彩、四點の油繪に就いて見る者は、その餘り淡々として水の如きに驚くかもしれない。私にとつても餘り執着がなさ過ぎるのは甚だ物足りない。然しかゝる批難も或は却つて彼を滿足させるかもしれない。何故なれば彼には夫れが慾と願つた結果であるかもしれないからである。

○かくの如く柏亭が今日描くものも、以前描いたものも、其間に大なる相異を見る事が出來ないとすれば、彼は土產も持つて來ず、進歩もないと云ふ事に決着する譯だ。要するに所謂波形の外廓線なるものを、後期印象派の手法から學んで來たといふ外、色彩にせよ、描法にせよ別に取出して云ふ事はなくなつて終ふ。然しこれでは餘り速斷に失し、過酷なようである。彼には別に彼の苦心と工風があるのである。即ち自然の單純化（サンプリフィカーシヨン）と、それに關連して起る様式化（スティリザシヨーン）を求めようと努めたのではあるまいか！

○未醒は元から感覺を通じて、自然に耳を傾けようとする畫家ではなかつた。早くから一種の傾向を示して、装飾畫に赴いた。彼は畫面を飾る爲めに、或る撰んだ自然の部分々々を蒐める事に興味を持ち苦心した。洋行以前の彼の畫面には恐るべき惡傾向を含蔵して居た。惡傾向とは其時分の藝術一般に泌み込んで居たアール・ヌーボの様式である。彼はピウヴィス・ド・シャヴアンヌの聖浄高遠な作風の德に浴すると同時に、遠く故郷に幽韵を放つて居る宗達等の藝術を顧みて、一種の興奮に堪えなかつたらうと思ふ。シャヴアンヌの藝術の中に、誰か宗達の俤がないと云ふ事が出來よう。同時に宗達等の藝術の中に、誰れかシャヴアンヌの渾淳と洋暢がないと云へよう。彼は必ず意外の合一に心中竊かに快を叫んだ事であらう。

○柏亭と異り、未醒にとつて様々なる藝術の理解は反つて之を自己中心的に敬遠したかの觀がある。彼の尊重するセザンヌも、ゴーガンも、ゴッホも彼に何等の接觸を保つ事はなかつた。彼は唯一人シャヴアンヌを慕ふて遠方から西方に其後影を見た許りで、既に東洋に向つて出發した。彼は今後數年ならずしてシャヴアンヌの後影すら見なくなつて終ふであらう。然しかの恐るべきアール・ヌーボと手を切つたのは、實に此大先達の德の然らしむる所であつたのは永く記憶せねばならぬ。

○かくして未醒の期した所も亦之を詮じ詰めれば柏亭の至らんと努力したものと等しく、單純化と様式化の二點にあつたのは適合であるが、決して不自然な暗合ではないのである。未醒の單純化は柏亭の夫れより更らに自由で、更らに寛大である。然し往々單純化といふよりも簡略になり、省略になる事がある。柏亭の單純化は何ほ不純で力を缺く時があるし、未醒の夫れは何ほ單調で空虚に陥る弊が伴ふ。様式化に於ても、未

醒は柏亭より一層突込んで自由である。然し靜かに顧みて個性的といふ點になると、今の所未だどつちがどつちとも斷言するまでに至らない。様式化には最も個性の明瞭になる事が必要である。夫れがなければ折角の苦心が皆んな死んで終ふ。個性の感覺が直ちに様式化されるに於て、初めて眞の意味があらうと思ふ。

○歐洲の畫壇は今や自然の模倣と日光の研究から暫時眼を背けて居るかの感がある。柏亭未醒の二子が期せずして、後期印象派以後の目的たる、畫布上のサンサシヨンに主張を置かんとする起企と、從來の寫生主義との結合を試みんとしたのは注目すべき點である。殊に二人は無數の模倣者と追隨者とを持つて居るのであるから、此數年の發展には最も注目すべき値がある。私が日本の畫界と歐洲の畫界とに再びかく交渉をつけて論じたのは、學問藝術に國境がないと云ふ許りでなく、歐洲の藝術界で起つた現象で日本にその影のさゝないものはあつても、明治大正の藝術で之を歐洲の藝壇に求め得ないものはないと云ふた、前言を悲しくも未だに信ぜねばならぬからである。(終)

△未醒君と柏亭君

百穗生

△未醒君も柏亭君も、洋畫家としては已に定評があるから、私しはその方面は措いて日本畫の立場から、一つの希望を述べて見ます。未醒君にも、柏亭君にも、日本畫的分子の多い事は一般の認て居る處であるが、私は何百尺竿頭一歩を進めて、日本畫の方面に向つてウンと突込んで貰ひたいのです。

柏亭君は是迄絹や紙にも試られたものが多くあつて、已に新日本畫譜の著もあり、また日本畫についての識見も充分に持つて居られます、祖父君も父君も日本畫の名家であつて、其血を享け其家の空氣に育つた柏亭君は、日本畫なるものについての智識も自然深いのを首肯される處です。

又未醒君が近業の、シンミリした氣分は、その材料や手法の何たるを考ふるのいとまなく、私は直ちに微笑を禁じ得ないのであります。それに君は今美術院の一員に加つて、日本畫に接觸するの機の多い事を喜びます、聰敏なる君は必ずや何物か獲得せらるゝことゝ思ひます。

△柏亭氏の性格

津田青楓

小杉未醒氏に就て自分は未だよく分らないから何も云へない。

石井柏亭氏は會つていゝ感のする人だ。そして非常に眞面目ないゝ人だ。

藝術家にはいろんな僻があるものだが氏にはそれがない。殊に他人と交渉の場合に何か彼にか他人に不快な感を與へる性格の一部をもつてゐる人が藝術家には多い。

假令ば藝術家以外の役人とか、商賣人とか云ふ人と話す場合に相手を非常に輕蔑して眞面目に話を聞いてゐない人とか、又は些細な一言半句の事にも非常に神經を尖らせてムキになる人や、或はどんな話が出ても、どんな問題が起つても、一言も口を開かないで沈默してゐる人がある、又他人の云つた言葉に一々皮肉な批評をさしはさむ人がある。斯云う事は場合と人とに依つては別段不快を感じないが、ある場合には非常に他人を不快がらせる事がある。

柏亭氏は斯云つた性僻の微塵もない人である、だからどう云ふ場合にも氏と逢つて不快を感じる様な事は決してない。

柏亭氏はたつた一つの仕事にうつゝをぬかして他を忘却すると云ふ事のない人である。自分の爲す可き仕事の總てを同時に同樣の程度に努力を拂ふ事を惜まない人である。同時に總ての方面に興味を持つてゐる人である。氏は水彩畫もやり、テンペラもやり油繪もやり、日本繪もかき、文章も書き演説もすると云ふのは氏が多方面に興味を持つてゐる證據である。そしてどの方面にも相當に成功してゐる。

柏亭氏の藝術は氏の性格を遺憾無く物語つてゐる。

要するに自分は氏を人間として尊敬すべき立派な人だと思つてゐる。

然し昔から狂人だとか或はそうまで行かなくとも、可成色の濃い性僻をもつて周圍の人に迷惑をかけたり友人からつまはぢきをされたりしてゐる位の人が可成り立派な藝術を遺してゐる例がある。人間として完全な人が比較的いゝ藝術を遺さずに反つてそれ程でない人が傑れた藝術を作つたと云ふ事は自分にとつて一個の矛盾した問題として時々考へさゝれる事である。然し非常に偉大な藝術と云ふものは矢張り人間として尊い人格から生れるものでないだらうか。

△夢みる人と醒めたる人

林田生

小杉君は夢みてゐる、石井君は醒めてゐる。

小杉君にはローマンスがあり、詩がある。石井君には科學があり、常識がある。

石井君は説明してゐる、そこに智的眞實がある。小杉君は餘裕がある、そこに低徊趣味が見える。

石井君はナチユラリストである、小杉君は一種のロマンチストである。

石井君のナチユラリズムは、物質的ながらも徹底してゐる。小杉君のロマンチシズムはそれみづからには特異の氣稟を見せながら、思ひ切つて現實と絶縁し得ないところに或る解決を殘してゐる。

△石井君と小杉君

木下杢太郎

石井君とは久しく交際して居りますが、小杉君とは二三度しか會つたことがありません。日常の嗜好等の事は暫く措き畫家として論ずるに、二人共著しく日本趣味を現はして居ります。然し傳承して居るところが多少違つて居るやうです。石非君はもとよく無聲句などへ純粹の日本畫を出して居り、暗い調子で場末の橋とか、墓場とかの題目を一種日本畫風の筆勢で畫いて居ました。俳句などに見るやうな游らさびしい氣分が主調になつて居たやうです。油繪をかくやうになつてからも、色彩や描法に多少の變化は來しても、其根本の肌合は殘つて居るやうです。即ち石井君は從來の浮世師でない日本畫家の肌合氣分の正統といふやうな人で、それが洋風の技巧のもとに現はれるのは面白いことと思ひます。

小杉君の畫品は石井君のに較べると、更に甘味が勝つて居ります。初期の浮世繪などからの興味と、歐洲の最近畫派の單純な技巧と、それにピユウヰイ・ド・シヤワンヌ風の構圖などがもつれて一種の畫品をなして居るやうですが、また渾然たる統一には達してゐないやうです。

△レアリズムとイデアリズム

齋藤與里

柏亭君と未醒君の間には其の趣味に於て似通つた點が見出せる。柏亭君も日本畫を描けば、未醒君も日本畫を描く。油繪畫家の中には日本畫に趣味を持つて描く人は他にもゐるが先づ此の兩君などは勝れてゐる方である。然し兩君の行き方は全然反對の方面に向つて進んでゐる傾向を示してゐる。未醒君の近頃の作風が洋畫の形式を日本畫の形式に引き付け樣としてゐるのに引き換へて、柏亭君は日本畫を洋畫化仕樣と企てゝゐるらしい。勿論兩君共殊更な行爲とは思はれない。其處に自分は柏亭君のレアリズムと未醒君のイデアリズムとの分れ目を見出すのである。

柏亭君の作畫を見ると何時の場合でも寫生が基となつてゐて、其の日本畫に於てさへも殊更に圖案化仕樣とは仕ないで何處迄も天然自然を貴んでゐる。然し未醒君の場合を見ると先づ意想が先きになつてゐる。假令それが極めて小さな鉛筆スケッチにしても、被描寫物は必ず意想化されてゐる事に氣が付く。隨つて兩君の間には其取材に於て自然異なる點が生じて來る。柏亭君は與へられた天然自然を正確に描寫し、未醒君は對象を場面として其の中に意想を踊らせる。前者は評論的で後者は詩的である。故に何れを是とし何れを非とする譯けには素より行かないが、比較的自由は後者に多く與へられてゐると思ふ。

製作をするに寫實の技の重要である事は云ふ迄もないが、それより先きに構圖的意想、即ち描かんとする世界が腦裡に築き上げられなければならない。それが製作に對する最初の動機である。此のまぼろしが多分に腦裡を往來する時、其の人は自然イデアリズムの班に入れられる。そして未醒君は其の人の樣な氣がするが柏亭君には其の傾向が見えない。其の意味から柏亭君は比較的小品物に適し、未醒君は大物に於て完成するとも云へる。(完)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

法學博士蜷川新先生著

◉憂國の血漲れる博士は今や峻辣の筆を呵して國民の大覺悟を絶叫す

歐洲の大亂は曠古の大事件にして世界の大勢は之れより一變せられんとす、大亂豈に一朝にして爆裂せるものならんや、當今の變局自ら其因あり、世界の大勢に後れざらんと欲するの國民は當に宜しく之を知るを要し而して之を知らんと欲せば歐米最近の事情を究むるにあらずんば豈に好くせんや、蜷川博士の本著は實に其要求に應ずるものなり、博士歐米を歷遊して武裝平和の遂に流血に終る可きを洞察し、南船北馬、微細に各國の民情を視察し特に主として國境の情況に注目し其都度其感想を筆に走らせて之を友人家郷に報ぜられたるもの即ち本書の後編にして而して博士の歸途太平洋上邦人歐化の非を歎き慨然として國民警醒の爲に筆を取られたるもの即ち本書の前編なり、本書載する所は實に博士が憂國の涙にして、又博士の得意とせらるゝ列國最近形勢の詳叙なり、想を國家に存するもの必ず一讀を要すべきなり

歐米我觀

（忽三版）

純白クロース天金箱入美本

定價壹圓七拾錢
送料內地十二錢

◉歐洲大動亂の因を繹ね世界の大勢に後れざらんとするの士は速かに一讀せよ

（中付三の一）

東京神田 清水書店 發行 電本九六五・四四四七 振替東京七・四四七番

大取次各書店

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

○主任會長 岩堂保

○顧問 ジャパンタイムス學生號少年號主任 森濱五郎

天下を風靡したる英語研究法

追究 纍進主義

時間勞力費用の大節減!!

天才英學者の實踐したる英語實力養成法を見よ

創立未だ全く一ヶ年ならずして既に我が**英學界の一大權威**たり!!!

本會は天才英學者が自己の經驗より案出したる獻身的事業にして最も成功せる空前絶後本邦唯一の英語研究機關なり。

一日の費用僅金壹錢内外

今や入會の好時機!! 秋！萬人勉勵の季節は來れり●大膽なれ!! 奮起せよ！

來れ來りて諸君の英語に最後の仕上げを爲せ
何人も必ず「見本」を請求せよ通知次第無料贈呈
見本を見た丈けでも諸君が得る所莫大なり◉程度中學五年以上國民全體

東京市芝區南佐久間町一丁目一番地

英語五千字會

振替東京二七六五九番

大橋會川先生著 （最新刊）

和英寸鐵大觀

◉美裝全一冊・四百餘頁・定價金一圓五十錢

本書は讀書界の珍なり諷刺滑稽・皮肉・頓智の無盡藏なり世態人情の裏面を照す明鏡なり處世の活教訓なり而して空前の趣味深き英語自習書なり!!!

内容概目 （女の研究・衣裳哲學・戀愛哲學・キッス及其他・結婚訓・皮肉集・定義集・雜錄）



Dolls are the playthings of childrens, childrens the playthings of men, men the playthings of women, and women the playthings of the devil.

—*Victor Hugo.*

人形は小供の玩物
小供は男の玩物
男は女の玩物
女は惡魔の玩物

發行所 東京小石川茗荷谷 日英堂

▲東京日本橋馬喰町 振替東京一八四四 興文社

（中付三の二）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

高島平三郎先生著

修養二十講

■新刊忽再版發行■

中判布綴
特製函入 ―― 正價壹圓貳拾錢
小包料金八錢

心身鍛錬の好時機
此心理的教訓を繙け

初等、中等、高等教育に多大の經驗を有する心理學の權威たる著者が多年の蘊蓄を披瀝して組織的に心身鍛錬の妙締を説きたる者之なり。第一講「青年の心理」より第廿講「國民の天職」に終る間學生日常規箴、雄辯と人格、基督と孔子、農村と青年、新舊思想の衝突、道德の權威、煩悶の解脱等を叙するに所論卓拔にして一々肯綮に當り一讀人をして釋然たらしむ。就中第八講「心理學より見たる禪の修養」の如きは滔々數萬言近時論壇の寂寞を破る文字にして之を一卷とするも優に洛陽の紙價を貴からしむるの價値あり

■松崎天民著■

忽三版 **同棲十三年**
四六判布綴特製
正價金八拾五錢
小包料金八錢

三版 **社會觀察 萬年筆**
四六判四百六十頁
正價金七十錢
郵稅金八錢

再版 **女八人**
四六判四百六十頁
クロス天金函入
正價金壹圓
小包金八錢

四版 **人生探訪**
四六判三百五十頁
正價金六十五錢
郵稅金八錢

六版 **淪落の女**
四六判瀟洒裝幀
正價金五十錢
郵稅金六錢

■發行所
東京日本橋區鐵砲町六番地
振替口座東京壹五〇五六番
磯部甲陽堂■

(中付三の四)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

評論

文藝時評

若き露西亞の美術家

中澤臨川

現代の露西亞は佛蘭西と並んで新興藝術の鬱葱たる産地を成してゐる。スタニスラブスキイの統率する莫斯科美術座の一團の演劇に於ける、ニジンスキイの舞踏に於ける、ドブュッシイの流を汲むムソルグスキイの音樂に於ける、カンディンスキイの繪畫に於ける、みなその好例である。

ワシリー、カンディンスキイは今日の新興藝術界に於て、顯著なそして特異な位置を占める。彼は立體派のピカソと正反した對照を成して、共に時代精神の一面を現はしてゐる。彼は今ミユニッヒに住ひ、そして其地の若い畫家、音樂家、詩人等の一團から成る「新(ノイエ)藝術家同盟(キユンストレルフエライン)」の牛耳を執つてゐる。

我等は彼の發達の經路を彼自身の口から聽かう。彼は或る私書の中で斯う言つてゐる。

「私は今まで約十五年間畫を出品して來た。そしてその同じ十五年間、私が私の道を餘り極端まで行き過ぎたといふ小言(こごと)を聞き通(とほ)した。……

私をして素直に物談らしめよ。眞に天才のあるあらゆる藝術家、即ち内からの衝動を受けて働く藝術家はその發足のそもそもから、或る神秘な方法で彼に授けられた道を歩まねばならぬ。彼の一生は彼の爲めに（彼自身に依てではなく）定められた任務の遂行に他(ほか)ならない。て、最初から世間の憎惡を買ふことに由て、彼は朧氣ながら自分が表現の使命を荷つてゐること、そ

の表現に向つて或る方法を發見しなければならないことを覺る。これが所謂「嵐と惱み」の時期である。それから敢然たる探求、苦痛、大苦痛の時期が初まるそして最後に彼の眼が開かれ、彼自身にかう言ふ「其處に私の道がある」と。その後の彼は唯だこの道に沿ふのみである。彼は最後の日まで、否應なしに同じ進路を續けねばならぬ。我等が勝手な道を擇んで歩るく日曜の午後の散歩と之れとは全く相違してゐる。否な其處には日曜もない。それは最も強い意味での勞働日てある。て、その藝術家が偉大であればあるほど、彼の仕事は偏よる。勿論、彼は（彼の「才」に由て）他の種類の「上手な」仕事をする能力をも有してゐるが、然かし内的に重味のある、無限に深い、そしていたく眞面目な物を造り出すには彼の偏よつた藝術に依るほかはない。天才とは勝手に何方へでも向けることの能きる懷中電燈ではない。それは親愛なる「主」に依て道を定められた星である。

私自身の場合を言へば、最初に私が自分の道を發見しえた時は、宛うど雷に打たれたやうな感があつた。私は惧れを懷いた。私はこのインスピレーションを一つの幻想、一つの「誘惑」と思ひ違へた。

私がいろ〳〵な疑ひを解いて、この道に從ふ自覺を得るまでには、どれだけ苦心したであらう。勿論、私は「實物から離れる」といふことの何れだけの仕事であるかを知つてゐた。何れだけ私はそれに就て自分の力を疑つたであらう。……私の前途に視るあらゆる仕事可能の無限の富、繪畫の無限の深さを私は茲に説明することは能きない。第一何人もかやうな事を説明しようと思つてはならない。そは秘密の暗い所で内的に熟し、そして畫家の製作に由てよりほかには現はすことの能きないものである。

若しも卿が或る時の後、もつと正確に私の畫を生きる能力を有たれるやうになるなら、その時卿は、是等の畫に「偶然」の分子の至て少ないといふこと、廣い積極的方向の饒かであるといふことを覺られるであらう。

私の構成に使つた諸形像は、外面的には曖昧に見えても、事實は宛うど之等が石に刻まれたやうに堅實に固定せられてゐる。……」

人類の精神生活は、譬へば一個の大きな鋭角三角形のやうなものである。その三角形は垂平の直線を以て幾つかの不同な部片に分たれ、上部の部片は狹く淺く、下部の部片になるほど廣く深く、そして大きな面積を有してゐる。この三角形は全體として靜かに緩く前方にまた上方に動く。今日頂點の在つた地平に、明日は第二の部片が達する。今日はたゞ頂點に住ふ者のみが會得するだけで、他の部分の者には全然不可解な思想感情が、明日は第二の部片に住ふ者の思想感情となる。かうして我等の精神三角形は、あらゆる障害を打破して、靜かに緩く「時」と與に前方にまた上方に動く。

時としてはたつた一人の人がこの三角形の頂點に立つ。そして彼の希望の幻像が全フユーマニチーの無邊の悲み、惱みの上に孤立する。彼に最も近い者達てすら彼を理解することが能きない。彼等はもどかしさの餘り彼を罵り、彼を狂人視する。正にかうしてビートーベンの一生は孤獨に立つた。

されば精神生活の頂點に立つ者の歩みは、眞の意味に於ける經驗である。彼等は惱みと恐れの中に、いろ〱の方面から、自分の與へられたいろ〱の道を探つて、模索し且つ先驅する。一難を排した後からまた新しい一難が來たる。嘲けられ、憎まれながら、彼等はその背後に全人類の重い戰車を索き〱、石の道を行く。時として彼等はその荷を棄てゝ休まうと思つても、それが能きない。彼等には日曜日がない。彼等の「星」は希望の幻影を以て不斷に彼等を誘ひ惑はしてゐる。

我等は混沌たる物質文明の一世紀を閲みした。その爲めに我等の精神生活は阻止せられかの觀がある。我等の心は無信仰無理想の惱みにいじけ、此世界は無用なゲームと惡鬪とに浪費せられてゐる。それにも拘ら

ず、かの三角形は不可抗の力を以て靜かに緩く前方にまた上方に動く。て、近代文明の外見的整然と安固にも似ず、その三角形の上方には、最早或る神秘な不安と動搖と希望とが湧きかゝつてゐる。見えざるモーゼスが山から下りて、我等に新しい智慧の貯へを與へた。彼は既に彼のまわりに樂しい舞踊者の幾人かを見た。

現代の有樣は宛うど或る不可思議な地震に搖られてゐる、立派な建物の並んだ市街に喩へることが能きる。高樓になればなるほど其の動搖と不安が劇しい。人類は今かやうな精神的市街に住んでゐる。どの建築家も數學者もその設計に當つて、かやうな不可思議な動搖に對する安全率を豫想してゐなんだ。此方ては大きな塀が、玩弄物の家のやうに倒れた。彼方ては不窮の精神柱て築き上げた、天を摩するやうな高塔が危しく傾きかけた。荒廢した墓場の地が裂けて、忘られてゐた幽靈が現はれた。古い太陽にはところ〲汚點が出來た。異樣な然かし新しい光の星が之に代らうとしてゐる。

宗教も科學も道德も倒され、殊に最後に我等を外部から支へてゐた物質文明が頽れかけた時に、我等はおのづと「自己」に手頼らざるを得ない。殊に未來の精神に屬するものは、最も能く感情に由て現實される。而してこの感情に達するには藝術家の天才に由るほかはない。この意味に於て、カンディンスキイの言つてゐるやうに、『あらゆる藝術はその時代の兒である、そして我等の情緒の母である』。

されば斯樣な混亂の時代にも拘らず、我等の傑れた藝術家は、かの三角形の頂點に立つて、靜かに未來の理想の爲めに働いてゐる。疑もなく、我等の未來の要求は精神の解放である。從て今後の藝術家の努力は、カンディンスキイの所謂 "innerer Klang" の表現にあらねばならぬ。彼の說に從へば、今日かやうな傾向を最も良く現はしてゐる者は、文學に於てメーテルリンクがあり、音樂に於てシエーンベルグがある。斯の墺太利の作曲家は古來の因習美を突破し、我等の音樂的經驗が耳の問題てなくして、唯だ心靈のみの問題てあ

ることを示した。彼にとつては諧調が必ずしも諧調てなかつた。彼の內的要求は或る破調を用ゆることの必須をさへ强いた。未來の新音樂の發足點が此處にある。

耳の因習的諧調から心の新諧調へ——これがシエンベルグの音樂である。眼の肉的リズムから、"innerer Klang" へ——これがカンディンスキーの繪畫である。

彼の說に從へば、凡ての藝術は夫々が違つた道を探つて、何れも『絕對、非物質』の方へ進みつゝある。眞の藝術家は、意識的にせよ無意識的にせよ、その內的要求に應じて彼の使用する材料を整理し改良せねばならぬ。て、その努力の結果は期せずしてあらゆる藝術を同一方向へ導く。即ち之等は皆な音樂を其師としつゝある。藝術としての音樂は自然現象を再現するよりも、寧ろ藝術家の心靈を表現するのがその目的てある。然るに、在來の繪畫は久しく自然の形像に囚はれて來た。かやうな點から言へば、繪畫は最も幼稚な藝術であると謂へる。今日の畫家は、自由て外形に囚らはれない音樂の表現法を羨まざるを得ない。そこで彼は自然と彼自身の藝術に音樂の方法を借りようと努める。最近に於ける繪畫の運動は、實にその結果としてリズムを探したり、絕對的または數學的形像に憧がれたり、色の複雜な調を求めたりするやうになつた。現代形像美術の使命は、在來の如き自然再現の道を棄てて、永く音樂の用ゐて來た表現の精神に依據し、そが新しい力と方法とを試めす時期にある。我等は外的再現から內的表現へ進まねばならぬ。換言すれば、畫家の使用する材料即ち形像と色彩とは、能ふ限り自然顯象から超越せねばならぬ。

然かし、繪畫が自然から獨立しやうとする革命の萌したのはほんの昨今のことて、我等はまだ形像と色彩との心的意義に對して無自覺の狀態を脫することが能きない。我等が全く自然の形像から離れて純粹構造を成しうるやうになるまでには永い時日を要する。されば、今日の畫家の眼ばかりでなく、其心をも修錬して色彩の心的意義を讀破するやうに努めねばならぬ。若し、そのコンポジションがたゞ徒らに自然から離れる

ばかりで、内的諧調の之に伴はない限り、それは無意義な装飾畫に墮して了ふ。即ち或る畫家の製作が自然の形象色彩を離脱する程度は、彼の情緒をも共に伴ひうる最頂點に止(とゞ)まらねばならぬ。『内的要求から作られたもの、心靈から湧き出した物が唯だ美である』。

カンディンスキーの要求する繪畫は音樂的のそれである。彼は形像よりも寧ろ色彩に重きを置き、その動的諧調を表現することに努めた。彼は繪畫を區別して單律的(メロヂック)及び複律的(シンホニック)の二種類とした。で、セザンヌやピカソの製作を前者に屬する物とし、彼自身のそれを後者であるとした。

彼はまた彼自身の製作を次のやうに大別してゐる。

(一)外界の自然から受けた直接印象を純粹の藝術的形像で現はした物、即ち『印象』。

(二)内的性格、非物質的自然の殆んど無意識的な自然な表現、即ち『即興樂』。

(三)徐かに熟し、永き考慮の上出來上つた内的感情の表現、即ち『コンポヂシヨン』。

彼の發達を直接彼の製作から熟知してゐる者は、この區別に多大の意義を見出すであらう。彼は徐かに第一の製作から第三の製作の方へ熟して行つた。そして彼の自覺は益々明らかになり、意識と理性と目的とが彼の表現の基礎をより多く堅めるやうになつた。そして、彼は次のやうな意味深い豫言を與へてゐる。

『私の意見では、我等は今ま理性的、意識的コンポヂシヨンの時代に近づきつゝある。畫家が彼の製作を構造的(コンストラクチーブ)と公言しうる時期がくるであらう。……我等は我等の前に意識的創造の時代を望見する。で、繪畫に於けるこの新精神は、思想界の精神と手を取つて、偉大な精神的英雄の出る時代のかたへ進みつゝある』。

今日の哲學及び形像美術の運動には、兩者の間に非常に近かしい平行がある。而もその平行は二重的である。之を端的に言ひ現はせば、一方にはベルグソンの哲學に對してカンディスキーの繪畫があり、他方にはラッセルやムーアなど劍橋の根本的合理派に對してセ

ザンヌやピカソの繪畵がある、情緒の方面から、『生命』の哲學の現はす對境へ進んだのがカンディンスキーの『コンポジション』の繪畵であり、『本質(エッセンス)』の哲學の現はす對境へ進んだのがピカソの『造形(ストラクチユア)』の繪畵である。前者は流轉または持續の境地であり、後者は不變永久の境地である。前者の世界をば時間が支配し、後者の世界をば空間が支配する。前者は動的であり、後者は靜的である、前者は音樂的であり、後者は建築的である。なほこの事に就ては他日題を改めて詳論することにしやう。

附記、近頃有名なクライブ、ベルの『藝術論』はラッセルやムーアの哲學の感化を受けて、後者の靜的藝術を對照としたもので、之を音樂やカンディンスキーの繪畵にまで適用しようとすると誤りを生ずる。要するに藝術の一面觀である。

新刊批評と紹介

△女のなか

中村星湖著　早稻田文學社發行

氏の作は從來稍平板に陷るの嫌ひありしが、近來氏の生活と共に藝術上亦一轉機を劃し、本書に收められたる諸作の如きは正に氏が平面描寫としての渾熟せる藝術境を示せるものにして、昨年に於ける我文壇の貴重なる收穫たるは言ふまでもなく、中に就きて「女のなか」他二三篇の如きは近來の傑作として推稱せられたるもの、何人の熟讀をも薦む。(定價金九拾五錢)

△生の悦び

中島孤島譯　早稻田大學出版部

本書はゾラの大叢書"Les Rougon-Macquart"の中なる"La Joie de Vivre"と題する一篇を譯したるものにして、同書はゾラの作中最も無難なる穩健な作物として認められたるもの、而も素よりゾラ一流の現代人の苦惱、遺傳、性慾の問題を忌憚なく描出せり。譯文亦穩當にして、些の澁滯を見ず。ゾラの或一面の代表作を得たるを我文壇の爲めに欣ぶもの也(定價金壹圓四十錢)

△吾輩の見たる亞米利加(下)

保坂歸一著　日米出版協會發行

著者は十年間米國に滯在して、親しく彼地の事情を知悉せる人、今其觀察を猫の口を藉りて面白く表はさる。只故らに猫を借らずともよさ相なもの也。(定價金壹圓四拾錢)

△人形の望

野上彌生著　實業之日本社發行

例の子弟の健全なる讀物として選擇されたる愛子叢書の第五篇として發

行されたるもの也。（定價金四拾錢）

△印度更紗

北原白秋著
金尾文淵堂發行

白秋氏の歌集にして遺憾なく氏の好尙を表せるもの、今第一輯として眞珠抄を發行せり。（定價金三拾五錢）

△オイケン哲學の批難

古谷榮一著
東京堂發賣

オイケンの哲學に對して大膽なる論斷を下して、同時に「我」の哲學を提唱せるもの、こゝではそれを批評する餘地もないが、兎に角熱心な稍鼻息の荒いものである。問題は只其充實さにある。（定價金壹圓貳拾錢）

△若き雄作のかなしみ

辰巳正直著
青鳥社發行

此書は六年間の勞作に成つたものであるさうな。御風氏も言つてをられるやうに此書は就くに所なき著者の苦しい告白だと言へる。其熱心、其努力、それらは素より買はねばならぬ。唯今一息眞摯な自己内省と批判とに缺けてゐはしないか。それが愬て現代といかほど交渉するかといふ事に依つて本書の價値が定められるのである。（定價金壹圓五拾錢）

△傳說研究歷史の謎

高瀨羽皐著
東亞堂發行

傳說と史實とを比較研究せるものにて、事實と傳說との異同を明かにし所謂歷史の謎を解かんとせるものにして、能く研究されたれば興味深し。（定價金六拾錢）

△理想之良人

磯田房三譯
泰山堂發行

本書はワイルドの "An Idael Husband" の譯書にして譯文も比較的にこなされたり。例の原著者一流の唯美的憧憬的生活は本書にも亦躍如たるを見る。（定價八拾錢）

△ルソーの眞髓

松本雲舟
原正男 共譯
南北社發行

近代人の祖先とも言ふべきルソーの偉大なる思想を知らしめんとせるものを本書となす。原著者の思想の中心思想を譯出して一讀ルソーの眞意を知らしめんとせるものを本書となす。廣汎に亘れる原著者の思想を窺ふには便利なる書也。（定價金壹圓）

△沙翁史劇物語

小松武治著
北文館發行

本書はクイラー・カウチ氏の「沙翁史劇物語」といふを基にして沙翁劇中史劇に屬するもの〻梗概を說いて沙翁研究の栞たらしめんとせるものにして、歷史上活ける事實を背景として人物性格を審かにせり。沙翁研究者に絕好の參考書たるべきを信ず。（定價金壹圓二十錢）

△オイケン現代思潮と倫理問題

今岡信一良著
警醒社發行

本書はオイケンの "Ethics and modern Thought" を譯せるものにして附錄として「宗教に歸れ」の一篇を卷末に附せり。オイケンの倫理學は未だ體系をなせるものにあらずと雖も、要するに本書はオイケンの哲學的根據の上に立つた倫理說を廣く紹介して一般日本人をして眞にオイケンを理解せしめんとせるもの也。（定價金七拾錢）

△南海一見

原勝郎著
東亞堂發行

謙遜なる著者は言へり。「本書によりて政治とも經濟ともつかず統計的數字にもよらざる南洋の一斑を會得せらる〻とせば著者の至幸也」と。蓋し一篇の南海見聞記也と雖も、其眼に映ずる所自ら著者の卓見を示さざるなしとせず。卷中寫眞數十葉を挿めり。（定價金壹圓三十錢）

△運命論

加藤咄堂著
東亞堂發行

窺知し得べからず、思議し易からざるは運命也。本書、咄堂氏が例の

據大の筆を揮つて、その知り難きを知り難しとし、僅に知り得たる所に努力の要を語らんとせるもの、以て其内容を知るべき也。(定價金二圓二十錢)

△源氏の人々　高須梅溪著　實業之日本社發行

源平盛衰の歴史は宛らの詩である。本書は既刊「平家の人々」と共に源家中爲朝、義朝、義經等の面々に就いて著者の情熱的觀察を下したる詩也。(定價金七拾錢)

△文學上及醫學上より觀たる中年の女　西澤富則・菅谷晴一共譯　二舍書房發行

本書は獨逸の女醫フイツシヤア、デユツケルマン女史の著になる「文學上及醫學上より觀たる婦人の交年期」を土基にして大に著者の見解を加へたる「中年の女」を研究せるもの也。「中年の女」はあらゆる意味に於いて興味ある研究題目にして、今醫學上並に文學上より研究せる本書の如きは一讀の價値あるべしと信す。(定價金壹圓)

△須永の話　夏目漱石著　鈴木三重吉發行

鈴木三重吉氏の編纂に係る「現代名作集」の第一編として發行せられたるものにして、漱石氏の大著「彼岸過ぎ迄」中の最も傑れたる一短篇を收めたり。定價一部僅かに十五錢なるが爲めに意匠等に三重吉式を發揮する能はざりしを惜むも、三重吉氏の批評眼を以て選擇したる作物のみを發行する由なれば讀書子を益すること多かるべしと信す。(定價金十五錢)

△比較研究歐米及日本の政治　藤原喜代藏著　大日本圖書株式會社發行

徹頭徹尾眞面目なる研究にして政治上の參考となる節多し。(定價金一圓三十錢)

△フランチエスカ　鷲尾浩譯　新陽堂發行

ダヌンチオの劇詩「フランチエスカ・ダ・リミニ」を譯したるもの、譯者の原著に對する熱愛の情は極めて眞摯なる譯筆となつてあらはれ、讀んで心地よし。(定價一圓五十錢)

△歐洲大變局　惠美東臺著　帝國圖書普及會發行

文章稜氣を帶び、叙說にたど〳〵しき箇處少からざるも、現下の大問題に對する研究なれば一讀の價値あるべし。(定價壹圓參拾錢)

△日本經濟叢書(第一卷)　日本經濟叢書發行會藏版

日本に於ける古き經濟書を蒐錄せるものにして第一卷には「本佐錄」「豐年稅書」「嵩徹問答」「大學或問」「孟子井田辨」「恆產記」「民間省要」等を收めたり。實地上より割出したる眞摯なる意見は讀んで益する所多し。(非賣品)

△現代文士の書簡(定價金六拾五錢)　澁谷八郎編　述文社發行

△國史叢書南朝太平記(全)(定價金壹圓)　國史研究會發行

△國史叢書鎌倉公方九代記(全)(定價金壹圓)　國史研究會發行

△國史叢書土佐物語、四國軍記(定價金壹圓)　國史研究會發行

△世界名著物語シルレル物語（定價金四十錢）　白鳥省吾著　實業之日本社發行

△世界名著物語ハーディ物語（定價金四十錢）　仲木貞一著　實業之日本社發行

△世界名著物語モリエール物語（定價金四十錢）　後藤末雄著　實業之日本社發行

△パンテオン叢書第一編農夫（定價金拾五錢）　チエーホフ作　松本苦味譯　金櫻堂發行

△パンテオン叢書第二編死の勝利（定價金十五錢）　ソログーブ作　昇曙夢譯　金櫻堂發行

△現代評論叢書　第一篇　簡易生活社發行

△新文明の源流（魚澄文學士著）△モンナバンナ（村上靜人著）△鴨（村上靜人著）△鎌倉の史話（龍居文學士著）△廢都（日野月文學士著）△源氏物語上（小山文學士著）△近世社會運動（佐藤正著）以上アカギ叢書（定價各金拾錢）

寄贈の書籍尙數十種を餘せど其紹介及批評は次號に讓れり。乞ふ諒せよ。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

福本日南先生著

四六版美本 定價八十五錢（郵稅八錢）

忽再版

實傳 豐太閤

日本第一の英雄、豐太閤の傳記は兒童走卒と雖も熟知せざるはなし。然れどもその知るは皆傳說の太閤傳にして、その眞傳に至りては恰も雲中の蛟龍の如く、鱗甲爪牙は屢ば瞥見するを得れども、その大部分は常に疑問の黑雲中にあり。日南先生太閤の研究に沈潛すること既に十年、今やその蘊蓄の一端を洩して本書成る。先生が利刄のごとき史眼によく辟雲の如き傳說迷論を苅り盡して太閤の眞髓始めて明月のごとく輝く。蓋し稀世の名著にして吾が大和民族たるもの、何人と雖も一本を藏して、吾人の代表的大英雄の風格に親炙せざるべからざるなり。

內容目次

日本人の天性
半面神秘の太閤性
彼の素性
彼の生年月日
彼の幼名
猿についての附會
日神のまなし子
御落胤
彼の幼時
松下家への奉公
彼の寃罪
織田家への奉公
藤吉郎の結婚
藤吉郎の出世
豐臣秀吉
彼の至誠
彼の威嚴
彼の精力
彼の快活
彼の度量
彼の膽勇
彼の志業（上下）
彼の細心
彼の堅忍
彼の機敏
彼の戰略
彼の豪放
彼の逸興
彼の洒脫
彼の鑑識
彼の工夫
彼の主義
彼の同情
彼の孝行
彼と戀愛（淀君の年齡）
彼と戀愛（彼と北政所）
彼と戀愛（彼と諸嬪）
彼と戀愛（彼と淀君）
彼の戀愛（彼の雜戀）
彼の戀愛（太閤と家康）
彼の慈愛
彼の素養
彼の詩想
彼の越味
彼の趣味（彼と茶儀）
彼の趣味（彼と能）
彼の趣味（彼と土功）（大阪城・聚樂城・大佛殿）
彼の趣味（彼と土功）（名護屋城・伏見城）
概評（當時の太閤評・附言）

傳說的の英雄傳にあらず、史實によれる太閤の眞實傳也!!

（中付四の一）

發行所 東京市神田區佐久間町四丁目二十三番地 植竹書院（振替東京一二九五三 電話下谷三四一九）

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

現代代表

現代諸名家の代表的傑作のみを集めて發刊するを得ば我文壇の幸にして又讀者の利便なるを信ず。然れどもこれ全く至難の業にしてために多大の犧牲を拂はずんば能はず。本叢書は實にこの要求を滿たさんが爲に敢てこの難を侵して出たるものなり。乃ち自然主義以後の名篇傑作はすべて本叢書に網羅さるべく現代文藝を知らんとするものは本叢書を座右に備へをかば敢て他書に俟つの要なからむ。加ふるに全文六號活字を以て縮刷したるが故に内容極めて豐富價格極めて低廉。これを普通の書籍に比するに約三分の一の價格となる。大方の讀書子の淸鑑を待つ。

谷崎潤一郎著

第三編

縮刷 麒麟

潤一郎傑作選集

結城素明裝幀 ○横山大觀 ○長野草風 ○安田靫彦 ○平福百穗 四氏畫

珊瑚樹同型總布極美 本全六號活字一頁八百餘字詰紙數五百餘頁

定價壹圓拾錢 郵稅八錢

内容

◎小説

□麒麟
□刺青
□少年
□幇間
□秘密
□The affair of Two watches
□恐怖
□惡魔(前編)
□惡魔(後編)
□捨てられるまで
□饒太郎

◎戯曲

□誕生
□信西
□象
□戀を知る頃
□春の海邊

◎著者が自ら會心の作として選集せられたもので實に氏が代表作であると同時に殆んど全集と見ることが出來る

内容の豐富と價額の低廉とは本書に匹敵するものなし

發行所 東京神田佐久間町四丁目二十三番地

作叢書

本叢書は代表作を得るに非ざればたとひ一ヶ年に亘りても一冊をも發行せざることあるべし。

森田草平著◎特製上等カンバス製の表紙に畫家が一々肉筆を揮ひ、著者草平氏が扉に一々題號姓名等を揮毫せられしもの……(殘部僅少)

第一編　九版

縮刷　煤煙　四卷合本

傑作煤煙を知らざるものは未だ現代文藝を語るに足らず。唯この名著の出版者があまりに發賣禁止の厄を恐れたる爲め、徒らに前後四卷の分冊となして讀者に多大の不便を與へたるは實に吾が文界の恨事なり。今や合本縮刷成る。即ち價格に於て從來の三分の一の廉價となり裝幀に於て會心の美本となる、乞ふ一本をそなへよ。

□新形總布極美本
□全六號活字□定價九十錢　郵稅八錢
□特製定價壹圓六十錢　郵稅八錢

第二編　鈴木三重吉著　四版

縮刷　珊瑚樹　三重吉傑作選集

津田青楓氏裝幀總クロース
木版手刷十數度刷

□菊半截四百十餘頁
□全六號一頁七百餘字
□定價九拾五錢　郵稅八錢

內容

□櫛□一枚の瓦□桐の雨
□小猫□女□お三津さん
□赤い鳥□黑血□穴

今迄著はした十數冊の小說集の中から著者自身に最も氣に入つた作物ばかりを選り集めて縮刷したものです。裝幀も亦善美をつくして特製のやうです。

續刊第四編

題未定

田山花袋著

振替東京一二九五二　電話下谷三四一九　植竹書院

(中付四の三)

小宮豐隆氏著（既刊）

演劇評論

藝術界の根本的革命
演劇評壇の最高權威

第一　歌舞伎劇に於ける作と人と

中村吉右衛門論
米吉のおあさ
徳子の梅ヶ枝
「野崎村」
「渡海屋」
「吃又」
「清玄」
「吉田屋」
「勧進帳」の比較
其他數編

第二　飜譯劇に於ける作と人と

「寂しき人々」……ハウプトマン
「ファウスト」……ゲーテ
「鴨」……………イブセン
「モンナ・ヴンナ」マーテルリンク
「エレクトラ」……ホーフマン・スタール
「夜の宿」……ゴーリキー
「サロメ」………ワイルド
「オセロ」………シエーキスピア
「武器と人と」……シヨオ
其他數編

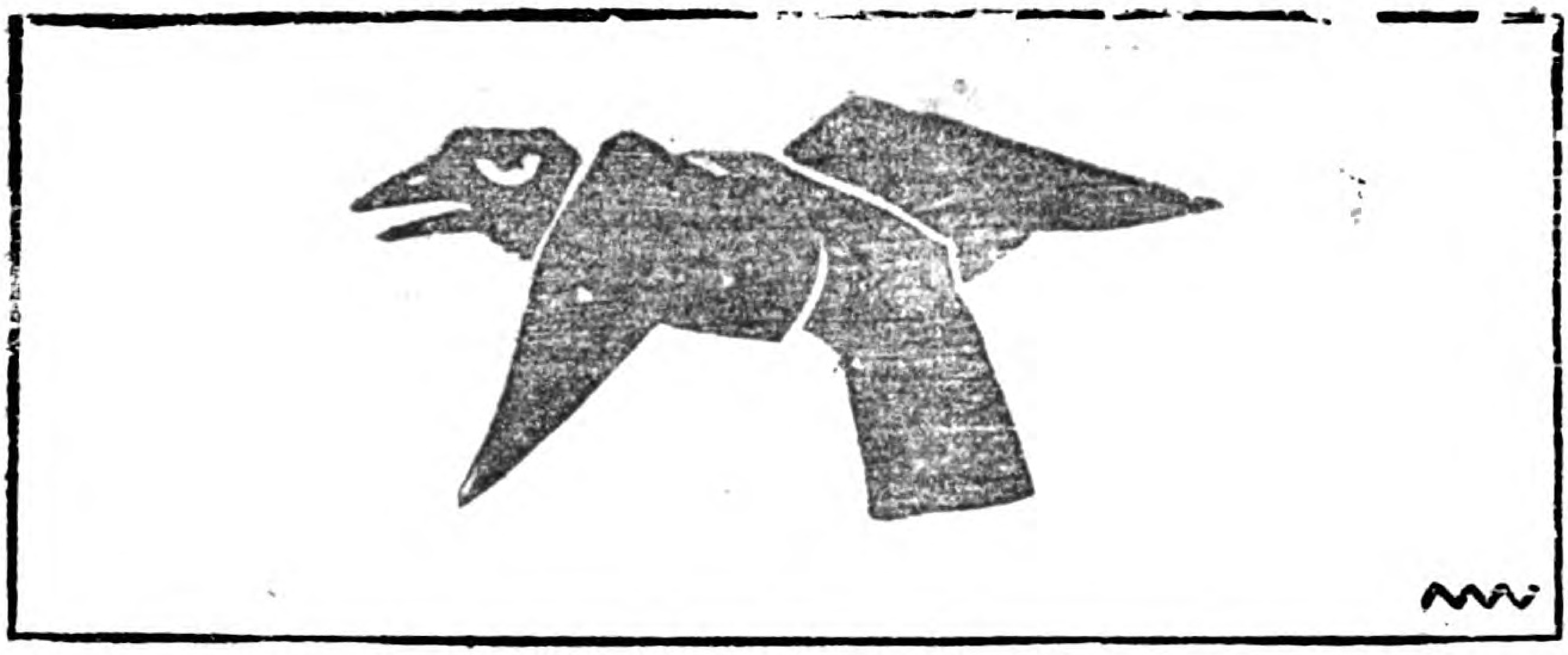
第三　劇評斷片

女優について
舞台美術について
坪内博士の「浦島」
坪内博士の「お夏狂らん」
斷片一
斷片二
斷片三
斷片四
斷片五

四六版四百五十餘頁
定價金壹圓
郵税八錢

（中付四の四）

發行所　植竹書院内　日月社
東京神田佐久間町四の廿三
振替東京一二九五三
電話下谷三四一九



男清姫

近松秋江

一

七月の初めある暑い日であつた。加茂は、日光ゆきの車室の窓枠に肱を凭せて、涼しい風に面を吹かせながら、青々とした林や田圃の過ぎて行くのを眺めてゐた。避暑は、まだこれから初まらうとするので二等室にはたんと客が乗つてゐなかつた。赤帽が席を取つてくれたまゝに、新型の旅行鞄と大きな信玄袋とが塀をしたやうに、廣げて敷いた膝掛けの兩端に置いてあつた。

今年は梅雨に雨が少くつて、例年(いつも)よりも早く夏が襲うて來た。ひどい夏劣けをする彼は、六月の末時分から急に酷しくなつた暑さに驚いて、斯うして狼狽てゝ都會を逃げだしたのである。

北(きた)へ行く汽車には、彼は何年か振りで乗つたのであつた。加茂はそんなことを考へながら、かうして自由に旅をすることの出來るのを淡い心持で愉快に感じないでもなかつた。

彼は、汽車の中に腰を掛けてゐながら、遠くの方の山を見たり、大きな鐵橋を渡るのを小供のやうな心持ちで悦んだ。

宇都宮までは、烈しい太陽が正面に窓に射し込んでゐたが、其處を出て日光線に分岐すると汽車は段々深林に分けて行つた。嵐氣が肌に觸れて來た。霧のやうな細い雨さへ窓から吹込んで、冷々と顏を濡した。

やがて日光の停車場に着くと、單衣では寒さを覺えるくらゐであつた。到頭雨が本當に降つて來た。加茂はまた赤帽を呼んて、窓から二個の手荷物を受取らして、それを直に馬返し行の電車に運ばした。電車は、神橋の處て、握り皮にブラ下るほど乘つてゐた滿員の客を大方降して了ふと、倍々降つて來た雨の中を緩い勾配の道を辿りつゝ山を深く上つて行つた。大谷川に浴ふた兩岸の山々には濃い霧が濛々と立ち罩めてゐた。

加茂は、長い間寂莫には馴らされてゐるが、斯うして刺激の多い繁華な都會を遁れて深く山の中に入つて行く自分を顧みて淋しさを感ぜずにはゐられなかつた。七月の初といふに、山の上の僅かばかりの平地に切り開かれた畠にはまだ麥が枯れたやうになつて立つてゐたり、豌豆が實つてゐたりした。

馬返して電車が無くなると、其處の休み茶屋に入つて遲い晝支度をした。泥餡の菜て硬い飯を甘く食つた。其處から手荷物を一臺の俥に積んで、自分は二人輓に揺られて葛折りの二里の急阪を登つて行つた。

車夫は時々梶棒を停めて向の溪に懸つてゐる瀧の名を說いたり、華嚴の瀧の投身者の噂をしたりし

た。馬返して一時止んでゐた雨が、またひどい勢で、深く生ひ繁つた林に音を立て降つて來た。薄暗い山の中が倍々暗くなつて、寒さが肌に泌みた。暮れ方になつて中禪寺湖の畔(はとり)に着いた。

二

加茂が、この夏中を此の山の中で暮すつもりでやつて來たのには、單に避暑を目的ばかりでなく、他に考があつた。彼は、出來るものならば、どうかして女といふ者を全く斷つて了ひたいと思つた。あらゆる愛欲の絶滅、若しそれが成就出來たならば、どんなに自分の心が輕くなるであらうかと思つた。彼は、これまで隨分女に惱まれて來た。長い間の過ぎ去つたことを思へば始終女といふ者にばかり囚へられて生きて來たやうにも思はれる。彼は、甘(あまん)じてその誘惑に自分を委ねて安心してゐた時もあつたが、よく考へて見れば見るほど男は何時も女の爲にのみ心を勞してゐるやうに思はれた。女が彼の胸にその姿を宿す時、初は美しい形が後には皆妖魔に變化した。丁度戸隠山の鬼女が、次第に本性を顯はして來るやうなものであつた。それで、どうかして女といふ惡魔を頭の中から追拂(おつぱら)つて了つたならば、さぞ氣が樂になるだらうと思つた。

が、都會にゐては知ると、知らぬとに係らず、凡ての女は、そのあらゆる方法を用ゐて常に自分を誘惑してゐるやうに見える。道を歩いてゐても、女は屢々彼の神經を攪亂した。

それ故斯うして山の奥に逃げて來たのであつた。

けれども、それは矢張り彼自身を欺いてゐるに過ぎなかつたのだ。成程彼は既に長い間女の肉體からは遠かつてゐるが、頭の中には常に女の姿が宿つてゐた。彼は何樣な女でも女を思はないではゐられな

かつた。もし思ふべき女を持つてゐないと寂しくつてゐられないばかりではない、思ふべき女を持たない時には世の中の觀る物聽く物には何等の感興がなかつた。

三

彼は實に女といふものに渇してゐるのである。けれども、それほど女に渇してゐながら、彼は新に現實の女を求めて、それに接近することを好まなかつた。女といふものに疲勞してゐる彼は、現實の女よりも空想の女を好んだ。彼が嘗て關係した女の事を想ひ浮べて過去の緊張した興味を追想することに於て女に對する渇を醫する方が、現實の女に關係するよりも遙かに自由で安易であつた。

今年の春、街頭の柳が青く芽吹いて、時々表を花電車の通る時分、十五六人の知人と銀座邊のあるカフエーで一寸した晩飯の會食をした崩れに、彼はその中の二三人と最後まで附合つて、途中から雷門ゆきの電車に乗り換へた。

その夜多勢で戯談を言ひながら、何れでも可いと思つて見立てた遊女が、後に別室に入つてから横になりながら見ると、案外に派手な顔をしてゐた。彼等によくある血の枯れた寧ろ氣味の惡い容貌と違つて、頬の豊かな頭髪の房々した、色の白い皮膚の滑かな女であつた。

赤い太い房の付いた紐で吊した大きな衣掛けに擴げて打掛た華美な友染縮緬の長襦袢の模様が電燈の朦朧とした火影に浮いて見えた。

赤い裏の夜着が女の白粉の匂や香油の匂と融け合つて、異樣な、男を誘惑するやうな匂ひを漂はせて

ゐた。それは伽羅を燃いて薫じた匂ひであつた。

「さうして靜と寢てゐらつしやい。一寸行つて來るから。」

と、いつて遊女が出て行つた後、彼は、認かその異香を嗅ぎながら、柔い蒲團をすつぼり頭から被つて長い廊下の足音や、遠くの座敷でする騒ぎの三味線や太鼓の音を、靡爛した頭に聞くともなく聞いてゐた。さうしてもう遊女は歸つて來なくつても可いと思つてゐた。このまゝ翌朝まで何物にも妨げられずに熟睡したいと思つた。さうしてゐても矢張寢付つかれぬ頭に、表を流して行く夜更の新内や浄瑠璃の三味線の音色が、人を情けながらすやうに、もどかしがらすやうに響いた。何事をも運に任せて、このまゝ斯うしてゐても好いといふやうな氣にならした。

彼は堪えられなくなつて、むくと蒲團の中から起き上つて、三階の廊下に出て、下の方を眺めた。十二時過ぎの表の通りは、流石に森として、ぞめきの人脚も絶えた中を、何者の粋の果でか、夜更の寒さに三味を鳴して行く。加茂は五拾錢の銀貨を取出して、それを高い處から投げやうとしてゐると、背後から、

「貴方何爲るの？」

遊女が部屋に戻つて來たのであつた。

「お止しなさい。ね、最う遅いから。」

翌朝目を覺して、面を洗つてから、烟草を吹かしながら、またよく見ると、遊女は、色の白い處に濃い柔い蠶のやうな眉毛をして、大きな島田に太い〳〵樺色の手柄をかけてゐた。

彼は、昨夜此の女を買つたのかと思つたら、新に自分の生活の內容が一つ增したやうに思はれた。

やがて其處を出て麗かな春の朝日を浴しながら淺草公園の方に出て戻る途中、とある牛屋に入つて淸淨な朝湯に身體を洗つて朋友と話しながら、牛て酒を飮んだら食欲が稀しく進んだ。

それから五六日立つて、冷い春雨の降る宵であつた。櫻花が咲き盛つてゐるのに春雨がしと〳〵降つてゐた。加茂は、その日一日何處にも出ないで、朝起きてから、また床を延べて安臥してゐた。晩になつて家にゐるのにも退屈したので、八時頃から先達て行つた遊女の處に一人で出掛けた。おばさんを對手に酒を飮んで冷くなつた身體を暖めやうとしたが、どうしても暖くならなかつた。先達ての夜と違ひ家具が冷くつて、翌朝まで身體が暖まらなかつた。

彼は、それきり其處へは足を向けなかつたが、斯うして一人で山の中に來てゐると、矢張りさういふ處の華やかな夜の巷が思ひ出される。

それに就ても思ひ出されるのは、矢張りそれと同じ種類の女てあつた。一體加茂は以前は、さういふ種類の女は餘り好まなかつた。それ故さういふ處へは自分から進んで行かなかつたが、どうかする氣分の機會て四谷の先の方には出掛けたことがあつた。

それは今からもう十二三年も昔になる。小さい家て三四度知つた遊女があつた。その後一度行くと、それが病氣だと言つて他の遊女が代つて出た。すると先の女よりも此度の女の方が好かつた。先の女は顏の青膨れた、氣の重い、それてゐて狡猾る女であつたが、後のは血色の冴えた、身體の肉の引締つた、氣持ちの洒然とした女てあつた。けれどもそれは其の時一度きりて、自分は間もなく何處かへ旅行

してその夏中東京にゐなかつたので、そのまゝになつてしまつた。大分古い事だ。今頃は何うしてゐるだらう。

四谷の先にはその他にはまだ知つた女が二人ばかりあつた。それも皆古いことだ。さういふ女がどうなつて行つたか、何だか彼等に對して罪惡を犯してゐるやうな氣がする。……遠く過ぎ去つたことがまた想ひ起された。

今年の五月瀨戸内海の方のある溫泉場に行つた時、其處で遊んだ藝者は、白い柔い肉體をしてゐた。そこでは藝者でも二枚鑑札を持つてゐた。口元が締てあつたけれど、目元のぱつちりした眉の柔かく濃い女であつた。その時東京に歸つたら何か送つてやると言つたが、そのまゝになつてしまつた。

四

それから彼はまた、矢張り今年の春關西に旅行した時、奈良に一晩泊つた時のことを想ひ出してゐた。加茂は、關西線に乘つて汽車の窓から伊勢路から鈴鹿山の溪谷、伊賀國の平野、木津川の溪流などを眺めるのが好きであつた。その時は、もう春の末であつたが、尾張伊勢の平野には菜の花が見渡す限り咲いてゐた。處々に眩い日が照つてゐるのに、薄曇りした空から、しと〳〵と微溫湯のやうな春雨が降つてゐた。奇麗に揃つて濃く生ひ茂つた杉林の間々に切り開かれた山畠に微かな日影が射してゐるのに向の方に群り聳えた鈴鹿山脈の峯々には白い霧が鎖してゐた。『阪は照る〳〵鈴鹿は曇る。土山あひの、あひの土山雨が降る』

といふ唄は此處の古い街道の實景を謠つたものである。此處ら邊の自然くらゐ古めかしい懷しい情緒

に富んだ處は稀れてあつた。加茂は斯ういふ處を眺めながら奈良や大阪に行くのでなければ興味が十分に加はならかつたのだ。

加之昨夜の東海道の乘客と違つて、此の線路の乘客には、多忙な用事の爲に、東の大都會から、關西の大きな都會々々に旅行するといつたやうな人間は少なかつた。人の好さゝうな田舍の物持ちの夫婦づれだとか、大阪あたりの女達が伊勢參宮をした歸途だといつたやうな長閑な連中であつた。

彼は、昨夜東京を立つ時、ある若い友達が窓の外から贈つてくれた榮太樓の甘納豆を、漸つと落着いた氣分になつて取出した。龜山驛で買つた伊勢路の番茶を啜りながら、それを少しづゝ口に入れながら大阪の新聞を買つて讀んだ。四面を遠い山に取卷かれた伊賀の上野の平野には、暖い春雨が降つて、大きく伸びた黄白の菜の花がもう春雨に凋れかゝつてゐた。

加茂は昨夜の睡眠不足の上に暖かな陽氣に心地よい眠を催されて、廣々とした車席に横になつて空氣枕の上にぐつすり寢入つて了つた。

轟といふ響に漸つと眼を覺されて氣が付くと、汽車はもう伊賀と山城の國境の隧道を通過してゐる處であつた。それを拔けて出ると、汽車は忽ち人家の背後の峭道を直走りに走つてゐた。向の突兀たる山と山とを分けて木津川の清瀬が高い水音を立てゝ流れてゐた。大河原の驛を過ぎると鐵道は木津の溪の南岸に沿ふた嶮岨な棧道に架つてゐた。奇怪な形をした岩石に塞かれた急湍深潭が、直ぐ眼の下を西に流れてゐた。加茂は北側の車窓に凭れて、其等の溪山を飽かず眺めた。その大きな岩の轉つた上を這つて帆綱を引張つて溯つて行く川舟があつた。その川舟には蛇の目の傘を翳した男が、乘つて立つてゐ

た。春雨が西の方から細い糸を下げたやうに横さまに降り灑いでゐた。その春雨に西の空から明い日が照つて、白く光つてゐた。

笠置驛を通過すると、溪流は次第に開けて、山と山との平地に麥の緑が烟つてゐた。やがて加茂と木津との二つの驛を過ぎると汽車はもう奈良に向つて行くのである。

加茂は名古屋で乘換へて、寛いで取り散かしてゐた荷物をこの時漸く形付けたり、帶を締め直したりした。

西の空を高く劃つて懷かしい生駒山が春の末の強い西陽に眩しいほど黑く烟つてゐた。「あゝあの彼方には大阪があるのだ。」東の窓からはもう春日神社の濃い森や大佛殿の高い屋根などが見えて來た。彼はわけもなく胸の動悸が仕出した。

奈良の停車場の車夫は旅客を扱ひ馴れてゐた。彼は長途の汽車に乘り疲れた身體を車上に搖られて、奈良の街を眞直に奈良公園の方に走つて行つた。

猿澤の池の畔には、もう四月の末といふのに、淡白な山櫻が夕暮れの風に落ちもせず、靜に薄暗の中に咲いてゐた。彼はそれをば恰も古い都の精のやうに思做しつゝ車の上から眺めた。折から南圓堂の方て御詠歌の鉦の音が滅入るやうに聞えてゐた。

車が、ある大きな門の内に入つて行くと、玄關の脇　寂しい、顏の色の稍蒼白い二十一二の仲居が膝を突いて待つてゐた。

「お越しやす。」

彼は久し振りに柔かな京阪の女の言葉を耳にしたのである。

仲居は、自分で持てさうな輕い蝙蝠傘と膝掛けを手に取つて、

「どうぞこちらへ。」と、いひつゝ長い廊下を先に立つて奥の方の廣間に客を案内した。

疊が古びて、ひどく荒れた座敷であつたが、廣い廻り椽などが付いてゐた。何百年の風霜を凌いで來たやうな大きな松の樹を取り入れた低い土塀を取卷いた庭があつて、斑入りの椿などが柴草の上に咲いてゐた。表の方の二階座敷で盛に三味線が鳴つてゐた。

「姐さん、好いねえ。あの音は。違ふねえ京阪の三味の音は。」

「さうおすか。」

「さうおすかつて、好いよ。東京のとは違ふ。」

「そりやさうだんな。此方のは調子が緩うおますよつて。」

「さうさ。どうしてもあの音を聽いてゐると京阪に遊びないね。」

彼は、染々京阪に來たと思つた。もう欲も得もない、斯うして旅をして遊んでゐたい。さうして旅に死にたいと思ふ氣にさへなつた。

まだ少し早かつたから彼は直ぐ外に出て靜かな公園道を大佛殿から二月堂の方に歩いて行つた。嫩かい色をした若葉の蔭にはまだ處々山櫻が淡白く咲き殘つて、薄暗の中にほろ／＼と淋しく散つてゐた。二月堂の廊下に立つて西の方に遠く潤けた昔の皇居のあつた跡などを眺めた。さうしてゐるとまた春雨がザアと若葉を叩いて落ちて來た。見る間に遠くに黒く聳つてゐた生駒山の輪廓が白くぼやけた。近く

の眼を壓するばかりに茂つた若葉から白い潮吹が立つた。

加茂は春雨　濡れつゝ清淨な砂混りの道を歩いて戻つて來た。

風呂に入つてから、夕飯の膳に向つた。鯛の刺身、蟹の具足煮。白い蟹の身の上に匂ふてゐた。

『狙さん酒を一つ持つて來て貰らはうかねえ。』

加茂は酒を飲む氣になつた。

『姐さんは美しいねえ。藝者してゐたの？』

『まあ！……私のやうな者にそんな氣の利いたこと。出來しまへん。』

物をいふ拍子につッと後に反つたやうにして笑つた。

『さうぢやない。全く藝者のやうだ。』

『よう云はゝる。』

『姐さん、もう一旦お嫁に行つたの？』

『まだ行きしまへん。』

『でも、もう行く時分だらう。』

『私達貧乏やさかい。こんな商賣してゐますと、目が高うばかりなつて、嫁に行けしまへん。』

彼は、いろ〱な話を續けて一本の酒を長く飲んだ。

さうして認か醉心地になつて繪端書などを書いた。春雨は強い音を立てゝ降つてゐた。その中を彼は

傘を翳して、運動かた〳〵郵便局まで入れに行つた。その歸途にネーブルを袂に入れて戻つた。

「姐さんナイフを貸しておくれ。」

仲居は盆にナイフを載せて持つて來て、それを輪に切つて、皮を剝いて一つゞつ差出した。

「姐さん一つお食べ。」

酒の後の渴いた口に滴るネーブルをくゝみながら、彼は言つた。

「えゝ。」と、言つたが食べはしなかつた。矢張り輪に切つては皮を剝いて差出した。

「姐さん、名は何といふの？」

「お菊」

その夜、加茂が床に入つてからも、お菊は脫いだ物など疊みながら、長く其處で話してゐた。

翌日出立の支度をしながら、

「姐さん、どうだ。東京に行かうぢやない？」

と、いふと、

「私、東京に行きたうて行きたうて仕樣がおまへんのや。」飛び立つやうに微笑して言つた。

「東京は好いよ。」

「さうだつしやろ。東京の人は皆好い。いひまへん。京阪の者は皆そりや不人情やけど。……私二十にな るまでにはどないにしても一遍東京に行かんなりまへん。」力を込めて、無邪氣に言つた。

「三十になるまでには心細いぢやないか。今行かうよ。……僕これから大阪の方に行つて歸途また寄る

から其の時一所に行かう。」

「えゝ、どうぞ。」

出立の用意は出來た。

「姐さん、此處の家から生駒山がよく見えるか。」

「えゝ、よう見えまん……あつちの三階から尙ほよう見えまん。あつちお越しやして。」

さう言つてお菊は、西南に向つた高い三階の廊下に案内した。

其處から郡山の方の田圃が遠く春霞に烟つて見えてゐた。

「彼方の遠い處に赤い煉瓦の大きな工場見たいな處が見えますやろ。彼處が郡山だす。」

お菊は指しゝて敎へながら、自分も遠くの方を恍惚として眺めてゐた。白い耳の處に銀杏返の鬢のほつれ毛が、明けた硝子戸の間から微々と吹いて來る春の風に搖れてゐた。加茂が、それを横から竊と窃見するのも知らずにお菊は何時までも眺めてゐた。女は、何といふ人を魅する生物だらう。

五

それから間もなく加茂は、湊町ゆきの汽車の窓に凭れて舊跡に富んだ西の京の田圃を眺めてゐた。春の草に埋れた野川の岸には名の知れぬ黄色の花や紫の花が咲き溢れてゐた。昔の大極殿のあつた跡のあたりの田舍の村々にはもう强過ぎる程の春の日が高く伸びた青麥の野に照り渡つてゐた。目高を掬ふ里の小供が、小さいお尻を捲つて田の畔を驅けてゐた。それが汽車の來たのを見て「わあア！」と言つて笊を持つた手を擧げた。

加茂は微睡くなつて、車席に横になつた。彼は目を瞑りながらこれから湊町に降りることを考へて空虚な感に襲はれてゐた。湊町の停車場から難波新地は直ぐ一と跨ぎの處にあつた。彼は今斯うして丁度半年ぶりで大阪の地を踏むのである。去年の十月の末難波新地の女とは、半月ばかりのつもりで東京に歸る時別れたのがそのまゝ永い別れとなつてしまつたのであつた。

堅く末を約束してゐたその女は、加茂が東京に歸つてゐる間に、身を落籍て何處ともなく姿を隱して了つたのである。それを、彼が毎時行き付けの大阪のお茶屋の主婦からの報知で知つた時には、どんなに失望と悲憤と寂莫とに身を苦めたであらう。女は東京から遠くない處の山國の産れであつたが、いろいろな土地を流れ〳〵て到頭大阪まで行つて身を賣つてゐたのである。卑しい勤めの女であつたが、加茂には、ひどくその女の性質が氣に入つてゐた。標緻もさう惡くなかつた。目鼻立ちのはつきりした色の蒼白い寂しい女であつた。

暫くと思つて遊びに行つてゐたのが、その女に引掛つてから、一年の間大阪の土地に足を止めてゐた。けれどもその女が大阪にゐなくなつてからは、彼は東京に歸つたきり、また急いで大阪に戻つて來る氣はそれきりなくなつたのだ。

一と月餘り經つてから、女は男と一處に臺灣に行つてゐることが、その女の姉の處に來た手紙で分つた。姉は、その不幸な妹の爲に、わざ〳〵田舍から東京に出て來て加茂の處を訪ねて、女の行末を賴んだのであつた。その事があつてから間もなく女が大阪にゐなくなつたといふことが加茂の處に知れたのである。加茂はその報知に接すると自分で田舍の姉を訪ねた。姉は妹の爲に、加茂が愛してゐた女の爲

に額を突合せて、行つた先きを想像して見たのであつた。

それが臺灣までも行つてゐると分つた。姉の處に手紙を寄越してから後、加茂の處にも時々手紙をよこした。それには加茂との約束に背いたことを詫びたり、今の男とは、ほんの金の義理に迫られて來てゐるのだから、長く臺灣なぞにゐるつもりはないと言つたり、其處は不自由な土地だから樂しみがない、少しも早く東京に歸りたい。と、言つたり、種々自分の身の上の不仕合なことを溢して來てゐた。

加茂は、さういふ手紙の來る毎に、新らしい妬みや憎しみの湧き上るのを覺えた。さうしてその裏面には新らしい憐憫や未練や愛着の情が絡り起つた。

「……主人の寢てゐる間に認めました。」

といふやうなことが手紙の中に書いてあつた。すると、寢るといふ文字が電氣の如き鋭さと迅さとて、加茂の胸に忌々しい聯想を呼び起さした。

さうして男が寢入つてゐる間、女が夜遲く起きて手紙を書いてゐる有樣が眼に浮んだ。男は歡しい期待を以つて、最後に女を獨占したといふ意識の中に安らかに寢床に橫つてゐるであらう。手紙を書き了つた女は、やがて靜に寢仕度をして、枕頭の燈を細めながら、その傍に秘と身體を橫へるであらう。

加茂は、それを明歷と想像に描き、幻影を見詰めて、强ゐて求めて厭な感覺に苛嘖まされてゐた。

忌々しい刺戟によつて胸を衝き詰めては、不健全な快感に耽つてゐた。

女から、「貴郎の深きお情けは永く忘れはいたさず候。」といふやうなことを手紙に書いて來ると、

「いくら俺のことを忘れないと言つたつて、現在お前の身體が、そちらに行つて他の男の自由になつて

ゐる以上は、おれは少しも嬉しくはない。』といふやうなことを書いて送つた。

それでも女からは、何時も素直な手紙を寄越してゐた。

加茂は、『お前のやうな女は、俺がもし無教育な人間であつたら屹度殺される女だ。』とも書いてやつた。彼は、實際女を殺すことを考へて見た。女を殺してゐると、その間だけは胸が清々した。

獨り寢の夜半に眼が覺めてどうしても寢付かれない時など、彼は、寢ながら消したり點したりすることの出來るやうにしてゐる直ぐ頭の上の電燈を捻て、手近の秘密函の中に收めある女の手紙を取出して何度も讀み返すことがあつた。さうしながら、遠くの方に自分を騙して默つて行つてしまつた女が、今時分男と二人でどうしてゐるだらうと、いろ／＼な場合を暗黑の中に描き出しては瞋恚の炎に胸を焦してゐた。

さうして彼は女のことを想はうとすると、何よりもその多い黑い房々とした頭髮が眞先に眼に浮んだ。暫時の間なりとも自分の花にして眺めて遊んでゐた時、自分はどんなにかこの黑い髮を愛してゐるいだらうと、胸の中で思つて見てゐた。やがて全く自分の獨占にしてしまつたら、その時は尙ほのこと此の髮が好くなるだらうと思つてゐたのであつた。自分の所持してゐる何物よりも此の髮を大事にかけて愛撫しなければならぬと思つてゐた。あの頭髮は、自分を現世に繫ぐ生命の綱であつたものを。それが今他の男の寢床の上に縱に亂れてゐる。さう思ふと、彼は眞夜中に居ても起つてゐられないやうに神經が亢奮して來て、翌日になつたら、どんなにでもして工夫して臺灣まで出掛けて行く計劃をしよう。さうして向に行つて、あの頭髮を根元から斷ち切つて持つて戻つてやらう。せめてあの頭髮を切取つて來て、それを毎日見てゐたら好い心持になるだらう。どんな犧牲を拂つても屹度さうしよう。

そんなことを次から次へ夢想しながら寢床の中に眼を覺してゐることが稀しくなかつた。けれども、一旦夜が明けると、眞夜中の妄想は明るい晝の光の中に消え失せてしまふのである。

けれども女のことを少しも思はずにはゐられなかつた。深く胸の底に絡り付いた女を、去る者は日に疎し。といふ世間並の人情に委せて忘れ果てゝしまひたくなかつた。忘れてしまふことの出來るほどならば、何も一年の間あの女の爲にあんな苦しい思ひを辛抱するのではなかつた。忘れてしまふには惜しいほど愛着してゐた女であつた。

それに女は、薄情なことを仕向けたつて、追驅けて來ることの出來ぬ遠方に行つてしまへば、いくら男の方でやき／＼焦れたつて、どうすることも出來はしない。その内月日の立つ間には忘れてしまふ。斯う思つて多寡を括つてゐるのだらう。

さう考へると、意地になつても何時までも新しい心持で女を憎んでゐてやらう。斯樣なことも思ひ返されてゐた。

加茂はその女の爲に方々に不義理を重ねたり、自分にも、馬鹿らしいほど不自由な目をして一年の間大阪を去ることが出來なかつた。そんなことまで女には解つてゐなかつたが、それだけの埋め合せをしなければ、どうしても腹の蟲が收まらない。

手紙によると、女は一年か半年ゐたら歸る、自分とて臺灣のやうな處に永くゐる氣は少しもない。と、言つてゐる。どうかして呼び戻すか、それとも自分が出掛けて行つて、怨みのたけをいふか、兎に角その女の事に拘つてゐるのが、差當つて、自分の生きてゐる理由である。假ひ怨むにもせよ、慕ふにもせよ、

自分は今好きな女の事を思ひ詰めてゐる。思ひつめてゐればこそ、其處に自分が生きてゐる證據てある。それを除いて世界の何物を以つて來ても一切自分とは無關係である。

大阪に行つたつて、もうその女はゐないのだ。けれどもその女の居た土地は懷しい。燈火の明かな、美しい化裝をした女の往來う花街に行つて、せめて女と遊んでゐた時分の緊張した心持に浸つて見たい。餘處の座敷に行つてゐるのを貰ひをかけて此方に横取つたり、夜更けて待つても待つても來ないのて不安に驅られながら待ち疲れてゐると、漸つとのことて十二時過ぎになつてから來た時の嬉しさ。馬鹿らしい苦勞をする代りにはその苦勞を忍んで餘るほどの歡樂があつた。

いつぞや夏の夜更けのことてあつた。宵から返事を出して待つてゐても、今行つてゐる座敷が十二時までになつてゐると言つて、遲くまで來なかつた。彼は待ちあぐねて、何度も外に出て花街を歩いて見た。奇麗に整つた軒並の貸座敷に明るい燈が點つて、狹い通に向き合つた二階座敷の簾に凉しい風が流れてゐた。大阪の難波新地の夏の夜ほど華かな處はない。派手な長襦袢を裾を端折つた藝者や遊女は皆表に出て扇子てパタ〳〵胸のまはりを煽ぎながら、お座敷のかゝつて來るのを待つてゐた。

加茂は、二階の椽側から簾をあげて、いつまでも人通りの絶えない街を眺めてゐた。餘處のお茶屋に送られて行く女は幾人も其處を通つて行つた。段々人足が薄くなつて、やう〳〵花街が靜になる時分になつてから、彼が下の通りを見てゐると、女は、いつもの男衆と肩を並べて此方に歩いて來てゐた。女は歩きながら懷紙を取出して口元を拭いてゐた。彼はそれを見て『あゝ來た』と思つて、すぐ引込んだその時の女の姿も眼に殘つてゐる。さういふ高潮した心持には再びなれないのだ。その他いろ〳〵な場

合があつた。
身を引く時には、彼が常に呼びつけてゐたお茶屋へも顔出しもしないで行つてしまつたといふことだ。そこの主婦は彼等の爲に屢々どんなにか心を盡したであらう。彼は、せめてその主婦に會つて、去つて行つた女のことを話しもし、聽きもしたかつた。さう思ふと少しも早く湊町驛に行きたかつた。彼は汽車の中に横りながら、強く記憶に殘つてゐる甘い思出を繰返へしてゐた。

五

半歳ぶりで河半の入口に立つた時には、加茂は流石に胸の躍るのを覺えた。
「まあ〳〵若旦那が來やはりましたて。お久しおます。」お芳がゐて、奥に聲をかけた。
主婦は晝寢をしてゐた奥の間から起きて來た。
「まあおめづらしいこと。あれからずッと東京だつか。」
「去年の秋歸つたきり、一昨日の夜、東京を立つて來たのさ。」
「さようか。まあ若旦那には申譯けのないお氣の毒なことゝて。勝山はんが落籍いた時、私どう手紙を書いてえゝか、書けんいふたら、主人て、どうもありのまゝを書いてやるより他にどうも仕方がない。といふて、あゝ書いてやりましたが、自家でも若旦那があの手紙をお見やしたら、どないにびつくりしやはるやろいふて、いろ〳〵噂してゐましたんや。」
「いや仕方がない。彼奴に騙されたのが私の修業がまだ足らぬのさ。」
「騙したといふわけもおますまいがな。私の處でも他に人があつて、自前になつてゐるといふことちつ

とも知りまへんぬんやから。』

『兎に角彼奴悧巧な奴だ、よくも騙しやがつた。そんな奴だから尚ほ自分の物にして置いて見たかつたんだが仕方ない。』

『なんでもその人といふのは、始終船に乗つて貿易とかをする人やさうだす。それで今一度臺灣に行てゐるさうだす。』

『うむ、それは僕の處にも手紙を越すから知つてゐる。』

『それも、なか〳〵何處へ行てゐるか分らなんだのを、いろ〳〵虎どんをせめたら、分りましたのや。あの虎どんの奴が憎らしい。あれほど若旦那に氣を付けて貰ろて居りながら、少しもさういふことを話さんから。』

『もう幾許言つたて駄目だ。が、彼奴に本を預けて置いた筈だが、なかつたかねえ。』

『それは自家に取つておきました。』と、いつて主婦は奥に行つて一冊の洋書を取つて來た。

『さう〳〵ゑゝ物が入つてゐますて。』と、言つて主婦が渡した本の間に女は寫眞を一枚入れてゐた。

如茂は、その寫眞を見ると、ぼやけかけてゐた記憶が再び明に浮んで來た。さうして旅をするにも毎時その寫眞を鞄の底に秘めてゐた。旅寢の寂莫に耐えかねてはその寫眞を取出して飽かず眺めてゐた。

中禪寺の湖水の畔に、遠く都會の喧騒を避けてゐても、深く彼の胸に喰入つたその女に對する執着と怨恨とは、どうしても拂ひ去ることが出來なかつた。記憶は記憶を追ふて、強く甘い愛着の情に心を惱ました種んな場合が、今となつては懐かしく想ひ回された。

もう一度あゝいふことがあつて見れば好いと思ふことさへ多かつた。まだ去年の九月、その女に心惹かれて東京に歸ることが出來ないで、攝津の有馬に逗留してゐる時分のことであつた。

九月中ばのある朝起きて見ると、この間中二三日濕り勝ちであつた天氣が、拭ふたやうにカラリと晴れて、青く透き通るやうに澄んだ大空には、千切つたやうな眞白い雲が靜に浮いてゐた。その空にも、空を劃つて直ぐ眼の前に聳えてゐる、枝振りの面白い松の生ひ茂つた山にも、麗かな太陽が美しい光を浴せてゐた。

彼は楊枝を使ひながら、椽側に立つて稍々暫くその秋らしい空の色に見惚れてゐた。つい二三日前までは空氣の肌觸りにも、まだ何となく夏らしい心持が殘つてゐたのだが、僅に二三日の雨を通り越すと、もう何も斯もが秋の色に充ちたやうに思はれて來た。貸し浴衣の寢衣一枚では寒くつて耐忍が出來ないくらゐであつた。

そんな快い天氣になつて見ると、彼は、靜としてはゐられなかつた。それに最早半月ばかりも溫泉宿に籠居してゐるので、近くの散歩する處は見て了つたし、今に來るか〳〵と待つてゐる女は來ないし、山の上の方の高い美しい秋の空を見るにつけて、彼はわけもなく唆られてフラ〳〵ッと、その山の彼方の大阪に行きたくなつた。大阪の女の處に此方から出掛けて行きたくなつた。一旦さう思ひ染めると、もうその氣になつて了つた。

さうして朝飯を濟すと、直ぐに支度をして大阪まで出掛けた。彼は女とお茶屋の主婦とへの土産に、女中に急いで取つて來さした炭酸煎餅を提げてゐた。別莊の庭にはもう木犀の花が、濕つた土の香に交

つて蕭やかに匂ふてゐた。彼は、その一枝を取つて嗅ぎながら、帽子の鉢巻に挿した。

有馬から大阪に出る六甲山の山道は眺望が好かつた。雨上りの松林に松茸臭い强い土の熱蒸がしてゐた。爽やかな空氣の肌觸りを覺えながら彼は樹蔭の道を俥を走らせた。

裏道から見た六甲山の脊面は、赭土色をした山の地膚が、痛ましい傷痕のやうに生々しく露はれてゐた。雨水に洗ひ削られた赤土の岩が巨人の鋒のやうに幾つとなく聳立つてゐた。その下には深い谷が抉つたやうに堀れてゐた。阪道はその大きな溪谷に添ふて下つてゐた。

彼は好い心地て身體を俥が運んで行くのに任せながら、凝乎と眼を瞑つて、これから女に逢ひに行く樂しみに伴ふ種々の心元ない空想に囚へられてゐた。

『かうして有馬の山の上から、わざ〳〵大阪まで出て行つて、好い鹽梅に女は家にゐるだらうか。』かういふ心配があつた。

女はよく賣れる妓であつた。二三日前に電話を掛けて、來るのか來ないのか訊ねた時に、そんなに來なければ此方から出て行かうかといつたら、『待つてゐらつしやい。私行くから。』と言つた。今日來るとは思つてゐないだらう。來るといふから、抱への妓が三四日他處行きの出來るだけの錢を送つて遣つたのに、病氣をしてゐたとか、癒つたけれど、家で遠出を許さないから樂花て馴染の客の處へ遊びかたがた行つてゐるとか言つてゐた。そんなに樂花の座敷が勤まるくらゐなら、錢まで送つてやつてあるのだから、保養かた〳〵出られぬわけはない筈だ。そんなにして稼業を休んでゐるのに出るほどの馴染の客といふのは、どんな客であらう。そんな客に出るほどなのに、自分の處へ來ぬといふのは、どう考へて

も解らない。
さう思つて來ると、彼は一刻も早く大阪に行つて、今日直ぐ、自分の言ふことを承知さして、晩の汽車で、いくら遲くなつても有馬に連れて歸らう。——空想と不安とが躍る胸の中に果てしもなく往來した。
さうして漸つと大阪行きの停車場まで山を下りて來ると、急いで電報を難波新地のお茶屋にあてゝ打つた。
有馬ではもう秋が來たと思つてゐたのに、大阪に來ると、まだ夏らしい乾燥いだ光が疲れたやうな街區を照してゐた。
午後のお茶屋は靜寂としてゐた。彼は『御免なさい。』と聲を掛けながら上つて行つた。長火鉢の傍には誰れもゐない。奥の主婦の居間に主婦の妹のお芳さんが一人晝寢をしてゐた。彼は突立つて柱時計を見た。急いで來たほどあつて、まだ二時を少し過ぎたばかりであつた。
『早かつた。これなら屹度何處にもゆかないで居るに違ひない。』と、思つて安心しながら、『お芳さん〻〻!』お芳の枕許に寄つて行つてお芳を呼び起した。
お芳は漸く寢呆けたやうな顏を擡げて大きな欠伸を一つした。
『お越しやす。』
『お芳さん、電報を打つたが、來たか。』彼はお芳の落着いてゐるのに、そろ〳〵焦れながら何より先に訊いた。

『えゝ、まゐりました。』
『何時頃着いたかね？……さうして最早あちらへさう言つてあるの？』彼は疊掛けて訊ねた。
『えゝ、もう一時間ほど前だしたな。すぐ店の方へさう言つて置きました。五時までになつてゐますよつて、明き次第送りますいふてゐました。……今日有馬からだすか、若旦那。』
お芳は、漸つと長火鉢の處に起きて來て、長煙管を吸ひ付けた。
『今日、おかみさんは、どうして？』彼は薄暗い家の中を見廻しながら訊ねた。今時分ならば、屹度直ぐ出來ると思つた女が、晝間から他へ花に行つてゐるので、喪失したやうになつて、毎時のやうに主婦がちやんと長火鉢の向に座つてゐて、さういふ時に何とか斯とかお世辭よく氣安めを言つてくれないのが一層物足りなかつた。さうしてこの間中病氣をして休んでゐるとか、樂花に行つてゐるばかりだとか言つてゐたのだが、今時分花に行つてゐるとすれば、屹度その馴染の客の處に行つてゐるに違ひない。
さう思ふと、一刻も早く、自分が遠くの有馬からわざ／＼出て來たことを行先の女に耳入れして、向の座敷を外させたかつた。
『姉さんは、今日本宅の方に行てゐやす。もうやがて三時だす。もう二時間と一寸だす。お二階に上つて少しお休みやすな。』
お芳は、時計を見上げながら言つた。
彼は、いはれるまゝに二階に上つて行つて、後からお芳が入れて來た茶を飲んだ。
『暮までになつてゐますさうやけど、もう一遍電話をかけて見ませう。』

お芳は降りて電話を鳴してゐた。彼は酒卓に肱を突いて階下の話に耳を立てゝゐたが、よく聽き取れないので、階段の降り口の處まで行つて上から覗いた。

「……暮までになつてゐるのやな。暮までゝ屹度此方へ貰ふておくれやす。……ようおます言ふて、本人に耳入れしてくれたんだすか。耳入れ、まだしえへんのやろ。これから直ぐ本人に耳入れしておくれやす。……有馬から若旦那がお越しや言ふて頼んますぜ。」

お芳は、くどく念を押して置いて、電話を切つた。彼は降りて行つてお芳の脊後から電話の話を聞いてゐた。

「まだ今まで耳入れしてゐなかつたんだな。私が出て來てゐるといふことを、本人に知らすやうに、よくさう言つてくれたてせう。店て直ぐその通り知らしてくれるだらうねえ。……一體今日は早くから何處へ行つてゐるんだらう。」彼は後を獨言にいつた。

さうしてまたしても種々な不安と疑惑とに襲はれた。

錢まで送つてやつて、受取つたことをも電話で話してゐながら、有馬へ來ぬのからして不都合だ。夏から、あんなに連れて行つてくれ、連れて行つてくれと言つて置きながら、今に悦んで來るだらう。來たら二人で顏を見合はしてどんなに嬉しがるだらう。と、そんなことばかり考へて待つてゐたのに、先達て中のやうに、そんなら進んで行うとも言はなかつたのが不思議だ。病氣で座敷を斷つてゐて、馴染の處へだけ遊びながら樂花で行つてゐるほどだから、丁度有馬に來れば好いわけだ。それにも係らず來ないのが氣に懸る。今に來たら、その理由を糺してうんと脂を搾つてやらねば氣が澄まぬ。……

こんなことを考へながら、彼はまた二階に上つて來て、兩手を枕にして仰けに横になつた。仕方がないので五時までは待つてゐなければならなかつた。

その内に主婦も歸つて來たと思はれて、階下で聲がし出した。夕方近くなつて花街に人の出入が繁くなつたらしい。

彼は暫くしてまた長火鉢の傍に降りて行つた。やがて暮近くなつたので、此度は主婦が直ぐ頭の上の電話口に立て暮までの駄目を押した。

彼は二時から待ちあぐんで、漸つと五時近くなつた時計と主婦の電話口の交渉の有様とを交る〴〵見詰めてゐた。

『そねえなことを言ふたかて、今日既う一時からさう言ふたあるのやないか。暮までになつたるいふことやつたから、そんなら暮には屹度貰ふとくれやすとくれ〴〵も頼んで置いたんやないか。……六時には屹度貰ふとくれやす。』

主婦は強く言つて、電話を切つた。

『六時まで……もちつとの間や。辛抱おしやす。』

その一時間が、彼には待遠しかつた。

外は七五夜でぞろ〴〵とぞめき足音が續いた。花街には最う軒々に明るい灯が入つて、美しい夕化粧を凝した藝者や遊女が男衆と肩を並べて送られて行つた。涼しい風が單衣を着た肌にもう冷かつた。

河半の店にもそろ〴〵客があつた。電話の鈴が忙しさうに鳴つた。柔かい調子の藝者が『今晩は』と

明るい長火鉢の前で主婦に一寸挨拶をして直ぐに二階に上つて行つた。お芳や仲居は黒光りのする箱段を急しく上つたり下りたりした。間もなく三味線や太皷が鳴り始めた。

主婦は、彼がさも〳〵待遠さうにしてゐるのを見かねて、莽後の催促をした。電話の返辭は、また延びた。

『餘程大事なお座敷だすのやらう。』お芳は考へたやうに言つた。

それが、今心細くなつてゐる加茂の胸に響いて一層心元ながらした。

『大事なお座敷つて、一體どんな客なんだらう。』彼は獨言のやうにいつて首を傾けた。

長火鉢の傍は急がしかつた。主婦は向側に座つて徳利を銅壺に漬けてゐた。仲居は燗の出來たのに鯛煎餅の炙つたのなどを持ち添えて上つて行つた。後から來た客の注文はどん〳〵出來た。送られて來た藝者はパッと媚びるやうに匂ひをさせながら加茂の鼻の先を通つて二階に上つた。

『今日は一時から、さう言ふてあるのに、今になつても貰へんいふのは、これは何かわけがあるに違ひない。』主婦は徳利を漬けながら加茂の顏を見ていつた。

『向のお茶屋に行つて、本人に耳入れをしてゐないんだらうと思ふ。勝山に私が來てゐることが知れゝば、何とかして貰つて來ないわけがない筈だ。』

勝山に錢を送つたことは、河半の主婦には内證であつた。河半からでなく、勝山の自分花にして有馬に來る約束が加茂との間にしてあつた。それは二人とも河半には言はぬことにしてあつた。

それを全然話してしまつた。

『さういふこともあるのだから、私が有馬から出て來たことが勝山に知れゝば、何とかして貰つて來なければならぬのだ。』
『左樣か。ぢやあ貴郞方二人の仲にどんなことがあるか、私知らんけど。』

七

その內八時が來た。主婦はまた電話口に出て催促をした。虎どんが起きて來たから、今虎どんが向のお茶屋に勝山を迎へに行つてゐる。歸つて來たら直ぐ送らす。といふ返辭である。
『もう來ませう。』主婦が言つた。
加茂は樂しい不安に襲はれてゐた。
八時を過ぎて三十分も待つたが、それでもまだ來ない
『どうしたんだらう？』加茂は時計を見ながら咳いた。
『本間にどうしたんやろなア』主婦も咳いてまた電話の鈴を鳴した。
今歸つて來た處だから、これから其方へ行くといふ返辭である。
暫く待つてゐる處へ、虎どんが、遣つて來たが、勝山は見えない。
『ぢあ虎どん、勝山はん、どうしてくれるんや。』主婦もお芳も口を揃へて、いきなり極めつけた。
『私ももう困つてしまひした。』
虎どんは、苦しさうに太息を吐きながら言つた。
『勝山はん、何處にもゐやはりやへんのだす。』呼吸が急いで虎どんは言葉も切々である。

今まで好い加減落胆してゐた加茂は、それだけ聞いて、ワク〳〵動悸が打ち出した。

『何處にも居らんいふたかて、そんな事あるもんか。今日晝から、もう何度電話を掛けてある。あんた居らんから知るまいが、耳入れをしたかといへば、したいふし。今にも貰ふて來るやうなことをいふ置いて、どうしてくれるのや。若旦那今日、有馬からわざ〳〵出て來てゐるのやないか。』暫時呆れて默つてゐた主婦は、斯う言つた。

『あゝ、お越しやす。』虎どんは、初めて氣が着いて加茂の方に頭を下げた。『いやもう、それは何といはれましても仕様がおまへん。私、今日寢番だしたよつて自家に行てゝちつとも晝の事知りませんもんやから。漸つと少し前店に來て河半から勝山さんの事で、これ〳〵やと他の者に聞きましたから、心當りを探しても、何處にもゐやはりやへんのだす。』虎どんは、汗ばんだ顏をして只管謝つた。

『あんだ、そりや晝の事は知らんのは無理はないやろけど、店の人が不都合やないか、今にも出來るやうなことをいふて、晝から客に待たして置いて、九時にもなつて、今更本人の行て居る處か分らんいふて、私の處で客に濟まんやないか。』

『御尤もだす。そやから今晩の處は私に免じて勘辨して頂きます、へえ。』虎どんは、頻に主婦の前に頭を下げた。

男衆の言ふことには問ひ詰めてゐると、どうしても辻褄の合はぬ處があるけれども、兎に角勝山は、午前からプツリと一人で店を出たきり、まだ歸つて來ぬといふのであつた。

それで二時から今まで店が電話で返辭をしてゐたことは、まるきり嘘であつたことだけは分つてしま

つた。加茂も主婦も疑惑に鎖さゝれた顏を凝乎と見交はしたが、さうかといつてどうすることも出來なかつた。本人が居なくつて、加茂の來てゐることを、、、てんで知らないのであつて見れば、勝山を責めることも出來ない。けれどもそれも疑へば疑へないこともなかつた。加茂は惚れ拔いてゐる女の來ぬのに、いはうやうもない失望を感じたけれど、何も斯も虚僞でばかり表面を繕つて居る此の社會の、その嘘が何處まで逹いてゐるかを探つて見たいやうな興味が起つて來たのであつた。

『午前から一人で出たつて、それにしても今時分まで何處にウロ〳〵してゐるんだらう。第一店でも大切な抱妓を放つて置くわけがないな。』

『それとも活動寫眞でも見て居られますか。』虎どんが言つた。

『阿呆らしい。何ぼ活動寫眞が好きやかて、午前から夜の九時も十時までも見てゐられますかいな。虎どん本當の事を聞かしとくれやす。何處に行てるのや。』主婦は賺かすやうに言葉を靜にして訊ねた。

『本當に知れまへんのや。それが知れてるくらゐなら、斯樣なに困りやしまへん。』言葉に力を入れて斷言した。

すると、店から虎どんが行てはゐませんが、他に用が出來たから直ぐ歸るやうに言つてくれと電話が掛つて來た。

『まあも少し探して見ます。……私も他にも用がおますさかいな。……勝山はん、ほんとに何處に行たんやろ。私一人難儀や。』

獨り言を言ひながら、急がしそうに歸つて行つた。

九時が過ぎ十時も過ぎたけれど、そのまゝ虎どんは顏を出さなかつた。加茂は頻りに焦れつたがつた。

暫くしてお芳は電話て何度めかの催促をしてゐたが、氣の無い顏をして、

『まあ姉はん、店ではなあ、勝山はんは、先刻虎どんが、あなたの處に斷りに行た筈やがいふてるんだつせ。今晩は勝山はんはお斷りしますいふて。何が何やら、ちつとも分りやへん。』

『斷りに？……それては先刻虎どんが來たのが斷りに來たのやつた。それを、あの男、人が好いもんやさかい斷るいふことを、よう言はんのや。』

主婦はさう言つて加茂の顏を疑はしさうに見た。

『こりや矢張り勝山はん何處へも行てへん。何處か其處らのお茶屋にゐるんや。今晩は斷るといふのは本人のいふことや。何か此には譯があるに違ひない。』

加茂は氣が急けて來た。

『さうだらうか。……しかし本人がゐるとすれば、さういふわけは無い筈だがなあ。そりや此方が騙されてゐるのかも知れないけれど、今も言つたやうに金も大分渡してあるし、まさか本人がゐて、さういふんぢやなからう。』

加茂の胸は千々に掻き亂れた。

『さようか。そりや貴下方二人の間にどんな事があるか、私の方てはよう知らんけど。……あなた、またどうして遊女に金を渡したりしたんや。』

『まあ可い。その代り、本人から斷るといふのだつたら、もう彼奴とはこれつきりの緣だ。』

『まあもつと待つて見て、まだ十時やさかい、あの女に限つたことはない、あれがどうしても來なんだら今日は他のを呼べやえゝ。えゝのが、なんぼでもあるさかい。』

『いや、もし來なかつたら、今晩は、一人で泊めても貰ふ。その代り後で仇を取つて遣るんだから』

加茂は、勝山と自分とを主婦が、譯もなく言つてゐるやうに、唯普通の仲と思ひたくなかつた。

『そやけど本人が留守で知らんのやつたら、本人に罪はないもの。』

『虎どん、どうしたんやなあ。勝山はんは。』表で外を通る客を呼んでゐたお芳が呼び掛けた。

男衆の虎どんがまたやつて來た。

『私困つて了ひました。何處を探ねてもどだいゐやはりやしまへんのや。』太息を吐いて言つた。今が一番忙しい時刻と思はれて、汗で顔が光つてゐる。

『矢張りお客に連れられて行つてゐるんだらう。』

加茂は、晝前から今時分までゆつくり外で遊んでゐるお客は、どんなお客だらうと、種々に想像して胸を焦してゐた。一人ぢやない、客と一處に違ひない、とも思つた。そのお客と何樣にして遊んでゐるだらう。さう思つて自分と女との場合から今何處でどうしてゐるか明歴と幻影に描いて、それを心の中で凝乎と見詰めてゐた。有馬に來られないと言つた口の下で、さうして他の客と出歩いたりしてゐる。

『勝山はんが、よう行かれるお茶屋に行て見ましたけど、ゐやはりやしまへんのだす。向でも餘り私がきつう言ふもんやさかい、そんなら上つて見てくれ言ひますから、上つて一々座敷を見ましたけど、ゐ

やはりやしまへんのだす。」

「さうやろ。矢張りお客に連れられて行たんやろ。それて行く先は何處や。」主婦は、問ひつめた。

「え丶、漸とお茶屋だけ分りましてえ。さあ何處へそれから、行かはつたやら、分りまへんのだす。」

「ぢや他所ゆきだらう。」加茂は、傍から口を出した。

「いえ、他所ゆきなら、他所ゆきと届けてゆきますから、他所ゆきやおまへん。」

そんなことを言つて何時まで男衆を責めてゐても際限がないので、兎に角歸つたら屹度貰つて來るやうに根押しをして主婦は虎どんを歸した。さうして

「どうもお可笑い。前と今と言ふことが違ふ。なあさうだつしやろ、前來た時には、晝前一人て店を出たいふかと思ふと、此度は、矢張りお客と一所やいふし。」と言つて、不思議がつた。

けれども他處行きならば、掟として取締へ届けて行かねばならぬものが、届けを出してゐないから、他所行きてないことだけは分つた。さうすれば幾許遲くなつても歸つて來るには違ひない。さう思ふと、加茂はまた安心しやうな心持になつた。さうして少し氣晴しに外に出て見た。

夜が更けるにつれて中秋の滿月は大空高く潤んだやうに澄んでゐた。何處の屋根の上の涼み臺にも夜露が降りてゐるのかキラ〱光つてゐる。明るい藝者屋の門先には長い床几を出して、それに出の着物を着飾つた藝者が赤いのや夕染模樣のや長襦袢の裾を高く捲つて腰を掛けて、口の掛つて來るのを待つ間を笑ひさゞめいてゐた。涼しい夜風が意氣な街筋を流れて、櫛の跡の美しい鬢の毛を吹いた。何時までもぞろ〱人足が絶えなかつた。

加茂はさういふ通を歩いたり、瀟洒な露地を拔けたりして一と廻りして戻つた。さうして、その内段々晝間からの疲れが出て、もう遊女も何も入らぬ、早く横になつて寢たくなつた。お芳に毎時の三疊に床をのべさした。

脊から騷いでゐた客も騷ぎ疲れたと思はれて、靜になつた。表も大分寂しくなつた。

加茂は、着物を脱いで蒲團の上に横ると、何時の間にか睡微としてゐた。すると、

「まあ、勝山はんどうして。待つてゐましたて。」

門口にゐたお芳が大きな聲で呼ぶのが二階まで聞えた。それと同時に

「どうも濟みません。遲くなりまして。姐ちやん。」

頭に膠着いて忘れやうとて忘れられない、少し嗄れた勝山の聲がした。

あゝ來た。と思ふと加茂は急いで夜着を頭から、すつぽり被つだ。畜生！　どうしてくれやう。心は嬉々しながら、何處までも寢入つた風をして居らうと決心した。

「若旦那、勝山はん來やはりましたて。」

お芳が聲を掛けながら入つて來た。

お芳が入つて來たので、寢た風を裝ふて居らうと思つたのが、さう出來なかつた。

何故、女は早く上つて來ないのだらう、もし一寸挨拶だけにでも來たのぢやないかと、またそれを氣使ひながら、

「女はどうしたの？」とう女なんかどうでも可いといふやうに訊ねた。

「今、階下で一寸話してゐやはります。」

さういひながらお芳は、加茂の横になつてゐる枕許に座つて、

「勝山はん、到頭來やはりましたさかい、どうぞもう何にも言はんと置いておくれやす。」

詫びるやうに頭を下げて見せた。

「何も言やしない。どうでもいゝ。」

其處へ勝山が入つて來た。

「待つたてせう。」

と、言ひながら加茂の頭の處に來て蒲團の上にペタリと座つた。

「隨分緩りお樂しみだつたな。お氣の毒さまだ。」加茂は、生欠伸を嚙み殺しつゝ言つた。

「そらまた出た。」

女は、冷かすやうに笑つた。

「どうぞ、もう何も言はんといておくれやす。」

「姐ちやん、どうもお氣の毒さま、遲くなつて濟みません。今日多勢でお客に連れられて神戸に行つてゐましたの。歸つて來て直ぐ來たわ。」

「あゝ、さよか、……若旦那が、急きやはりますさかいな。よう歸つて來ておくれやした。どうぞ御緩り。」お芳は降りた。二人ばかりになると、

「ウンどうして。待つたてせう。え。」

瞰すやうに言ひながら、女はぴつたりと膝を男の體に押付けて、仰けに寢てゐる顏の上に覗きかゝるやうにして、兩手を靜と男の胸の上に置いた。

多い鬢のほつれ毛が撫てるやうに男の顏に輕く觸つてゐる。女の襟頸や、きちんと掻き合せた小さい胸のあたりから欝陶しいやうな化粧の薫りがする。男は兩手を差伸ばして女の背を大きくかゝえた。縮緬の單衣羽織を被つた女の體が撓ふやうに柔かい。

離れにも他の男には手を着けさせたくない。自分獨りで此の女を何時までも斯うして我が物にしたい。と思ふ情が、新しい勢て男の胸に涌き上つて來た。

男は女の唇を輕く銜いた。それは幼兒が慈母の胸を披いて「乳」を探る時のやうな心持てあつた。女の口の色は鮮かな淡紅色をしてゐた。小さくて柔かてあつた。男は優しい涙が潤むのを覺えた。

「今晩これから夜中遊びませう。」

女は機むやうに言つた。

「神戸に行つてゐた。どうした客だい? よく來る客かい?」

「うむ、臺灣の方に行つてた人間‥‥」

女は事もなげに言つた。

「よく來る客かえ?」

「まあよく來る方だねえ。」

「神戸には多勢て、どんな連中と。料理屋へ行つて遊んでゐたの?」

「えゝさう。他は皆藝者。私には初めての人ばかり。」
「そのお客一人で？」
「えゝ一人。」
「ぢや金持の、遊び好きだな。」
「さうだねえ、金は持つてゐるらしいねえ。……あの奴。」
「何時頃から來てゐるの？」
「七月時分から。」
「月に何度くらゐ來る？」
「さうねえ、大抵五日めくらゐには來るわ。」
「その客好い男かい？」
「否！ 好かない。色の黑い奴。」
「酒でも好きな客かい？」
「大好き。幾許でも飮んで、腰が立ちやしないの。」
「でもこんな遲く神戶に泊らないで、よく戾つて來たねえ。」
「私一人で窃と脫けて戾つたのよ。」
「だつて、お前や藝者と違つて、寢る時分になつて用があるんぢやないか。」
「そんなことが出來るもんですか、醉つてゝ身體が動けないのだもの。」

「後になつてお前がゐないことが分つたら、怒るだらう。」

「さうかも知れない。ですから歸してくれと言つては歸してくれないでせう。それて窃と脫けて來てやつた。また丁度好い具合に私、虎どんに電話を掛けたの。虎どん私もう歸りたいわッて。さうすると、虎どんが、「勝山さんあなたは今何處にゐるんです」と聞くから神戶から電話を掛けてゐるの、と言つたら、虎どん呆れて「身體が惡いのにまあそんな遠方にどうして行つたんです。此方ぢや何處に行つたかと思つて斯々て大騷ぎてす。直ぐ歸つて來て下さい、私が一人て困つてゐます。」と、いつたからそれて尙ほ急いで戾つたの。初め虎どんに迎へに來てくれと言つたけれど、忙しくつて、そんな遠方まで迎へに行けないからッて、梅田まて迎へに來てくれた。」

勝山はおぼこ娘のやうなあどけない聲て話した。昔も今も變りない、全盛の妓は抱主には大切にされ、男衆には下僕のやうに侍かれてゐた。

加茂は、勝山のいふことに辻褄の合はぬ處があるのに氣の付かぬこともなかつたが、强ゐて疑はうともしなかつた。それよりも甘い歡みに耽るのに心が急けた。

「あゝ可愛い……。」

女は緊めつけるにやうに肉體から出る言葉を發して黑いよく働く瞳で男の顏を見詰めた。

男もさういつた女の顏を凝乎と見詰めた。不確なやうな甘い愛情の疑問が男の胸を通つて行つた。男は、女からさういふ愛情の表はれた言葉を遠から求めてゐたのだ。

男の瞳に輕い疑問の表はれたのを、速に見て取つた女は

「……顏をしてゐるわねえ、矢張り。怒つた時には恐い顏をするけれど。」

前の言葉を言ひ譯するやうに言ひ足して、男の頰を痛くないほど抓つた。

血の循環が止つたかと思はれるやうに發作的に疲れて蒼くなつた顏が、男の感能を一層刺戟した。

翌日は晝過ぎまでも寢てゐた。

八

臺灣まで一處に行つた男は、その時神戸に連れて行つた客であつた。

「今晩は斷る。……どうも可怪い。本人が言ふことぢやな。何かこれは勝山さんにわけがあるに違ひない。」

と、言つて、あの晩河半の主婦が不審の小首を傾けたのは流石にその道で食べてゐる主婦の推察の通りであつた。

加茂は『さうだらうか。まさか。』と思つて、幾度となく胸に忌な疑ひの雲を漲らして、女を飽くまでも不信な者にして見ようとしたけれど、自分と可愛い女との間に、どうしても興索る他の男の姿を認めることが出來なかつた。

「……今に素人になつたら、斯樣なに何時までも寢てばかりゐられないわねえ。」

前夜から翌日までも寢通してゐる時など、女はそんなことを言つてゐた。

「私の古いのでお召の褞袍をこしらへてあげるわ。……不斷は木綿物でも好いわ。」

「それでも、さうばかりも行かない。お前に好い物を着せて見るのが、己の樂しみなのだから。」

主婦は小猫をよく可愛がつてゐた。

「あなた猫嫌ひ？」

「嫌ぢやない。」

「階下に好い猫の兒がゐるのよ。連れて來やう」

遊女はよく夕染縮緬の長襦袢の袖に小猫を包んで來て寢ながら戯れてゐた。

「お前も好きだなあ。飼うと可愛くなるものだ。」

「東京に歸つて家を持つたら、猫を飼ふか。」

「えゝ飼ひませう。」

加茂はお召の半纏を被つて終日小猫を玩弄にしてゐる婀娜たる遊女を長火鉢の向に置いて描いてゐた。

「お前、眞個に俺の處に來る氣かい。」

「眞個ですとも、あんな約束までして。」

「でも千圓近い大金は、私にはとても出來ない。斯うしてゐる間に他の客で千圓出して身請けをしようといふ者があつたら、その時お前はどうする？　俺の方は金は急には出來ない。一方は早く出來る。それてもお前は私の方に來られるまで待つてゐるか。」

「それは、いくら遲くなつても貴下の處に行くまで待つてゐますさ。」

「いくら遲くなつてもか？」

『いくら遅くなつても、あなたの方で出して來れさへすれば待つてゐるわ。』

かういふ話がよく二人の間に言ひ交されたのは、まだその年の春の頃であつた。春雨の濕々降る時分加茂は毎日のやうにその土地に入り浸つてゐた。

その賣女は丁度その頃、長く通うて來てゐる客に身請けをされて自前で稼いでゐたのであつた。

九

加茂は、またしても女の寫眞を取出して見詰めながら、今言つたやうな事を現在のやうに樂しく思ひ耽つた。ハウプトマンの『僧房夢』の騎士は、最愛の妻に裏切られた胸の苦みに耐えかねて、わが此の苦みは、高い梯子に登つてゐる者のやうだ。一旦登つた者は必ず降りねばならぬ。降りねばならぬほどならば、寧そ登らなかつた昔の方が安かであつた。と言つてゐる。一旦執着した女は、深く心に絡み着いてなか〳〵に忘られるものではない。

先達て、この地に來てから間もなく、女の姉は手紙を越して妹が近い內に內地に歸ると言つて來たから、歸つたらば早速お知らせすると言つて來た。加茂は、それからは日々女の歸つて來たといふ音信のあるのを待つて日を消してゐた。

ある晩彼は毎時のやうに獨りボートに乘つて湖の沖に漕いで出た。夕暮れかゝつた男體山は、湖水の椽を離れて、遠く水の上に出れば出るほど、その雄々しい姿が沈欝な色を增して強く人間を威壓してゐるやうに見えた。幾日も雨が降らぬので、湖の水は、物凄いほど紺碧に澄んでゐた。それが夜の色の近づくとゝもに、倍々暗黑に變つて來た。黑く暮れた周圍の山の峽には白い雲が棚曳いてゐた。冷い風が

遠くの水の上に浮んでゐる彼の白衣の姿を吹いてゐた。鷗鳥のやうに湖水の上を幾つとなく彼方此方滑走してゐたセーリング・ボートの白い帆も、大分前に見えなくなつてしまつた。湖岸の大きな木立の間に立つてゐる外國の大使館の別莊に火影が見えて來た。其處から暗い水を渡つてピアノの響きが靜かな湖上に傳つて來た。

彼は、一般の舟も見えなくなつた、廣い水の上に暫くオールの手を止めて、靜かな波の搖するまゝに舟を流し放しにしながら、認か夜の風に吹かれてゐた。

さうしてゐると、暗い〳〵闇の中から、また遠くに行つてゐる女の姿が明歴と浮んで來た。白い顏、刮と見開いた時の派手な黑い瞳、毒々しいほど房々と多い頭髮、媚るやうな襦袢の襟の色、さういふものが病的に明に彼の頭に蘇生つて來た。自制力の無くなつた頭には、さういふ妄念ばかりが安々と浮び上るのであつた。晝間さへ妄想に耽り勝ちの彼の頭は、さういふ眞暗い湖水の上に獨りで浮んでゐると、恰も夜の夢と同じやうな魔夢が現はれた。彼は段々遠くへ舟の流れて行くのも忘れて、現の夢に見入つてゐた。女の姿がつい其處に立つてゐるやうにも見えて來た。彼は覺えず手を擧げ、女を打たうとして空を拂つた。

『畜生！　彼女が戻つて來るといふ、戻つたら殺してやる。』

彼は、これまでも何度となく恨みのある女を殺すことを考へた。女を殺してゐる處を現の夢に描いて見て僅に積る胸の惱みを晴してゐた。殺すにしては、今の女くらゐ都合のいゝ女はない。常に親兄弟と遠く離れて殆ど行先不明になつてゐる女である。さうして美しい。十年苦海に身を沈めてゐるのを見殺

しにしてゐるやうな親や姉が何時とは知れず此の世から姿を消したとて彼女の跡を探す氣使ひはない。あの華奢な優しい身體をした女、今まで何千人と數知れぬ男の肌を觸れた女のあの肉體を、不意に絞殺して、あの肉を啖つてやらう。「雨月物語」の中に、愛欲の迷ひから、無明の業火の爲に遂に鬼と化した僧が稚兒の死肉を喫ふたことを書いてある。あれこそ愛欲の眞だ。自分はあの女の肉を喫はねば滿足出來ぬほどあの女を愛してゐるのだ。自分には、最早普通の手段では女に對する情欲を滿足せしめることは出來ない。

彼がそんな空想に耽つてゐる間に、ボートは自然に沖へ〳〵と流れて行つた。フト頭を上げて、星の明りを頼りに暗い水の上を見渡すと、舟は一里の水の上を流れて殆ど對岸の寺ヶ崎といふ處まで來てゐた。

中宮祠から湖水の岸に立つて、遠く對岸を見渡すと、欝叢と樹木の茂つた島のやうな處が見える。それは島ではなくして寺ヶ崎と呼ぶ延長八丁余の出島である。中宮祠の部落に近寄つた處から歌ヶ濱の觀音の邊までは湖畔の森林の間々に貸別莊などが建つてゐて、外國人が家族を連れて夏中を其處に過してゐるので、其等の洋館に食料品などを賣込む御用きゝの小僧どもが始終往來してゐるから、そんなに寂しくはない。

寺ヶ崎は、其處からは遠く離れてゐた。歌ヶ濱から先は、僅に湖水の岸に沿うて、足尾峠につゞく小徑が、白樺や山毛欅などの高山植物の大木が繁茂した間に通じてゐるばかりであつた。そんな人足の稀れな處であるが、中禪寺の湖畔で其處ぐらゐ眺望の好い、地形の優れた處はない。半丁ばかしの廣さて

細長く突出た半島の根は、丁度大きな鎖のやうに奇怪な形をした岩が亂雜に續いてゐて、濃い紺碧の水がヒタ〳〵と、樹木の掩ひ被つた其等の岩を飜してゐる。栂や黑檜や落葉松の間には躑躅や八汐の老木が繁茂してゐた。その寺ケ崎の突鼻に一宇の藥師堂が立つてゐた。

加茂は、夜目にその藥師堂を見ると、思ひ付いたやうに『あゝ、此處に連れて來て女を殺してやらう。さうぢや〳〵。』と獨りうなづいた。

すると、何時の間にか、湖水の上が、明くなつたのに氣が付いて東の方を見上げると、十七日ばかりの月が赤く彼方の峯の上に覗いてゐた。月光の爲に近くの水の上に却つて凄いばかりの隅が出來て來た。彼は覺えず四邊に一人てゐるのが恐しくなつた。さうして自分の考へてゐることも恐しくなつた。自分の心が鬼に化けて居るやうに思はれた。

鐵橋の下

小川未明

一

一度あなたにおたよりをいたさうと思ひながら、あなたの行衞が分らないために、今日まで書かずにゐました。これすら、あなたが見て下さるものやら、どうか分らない。

其の時ですら、あなたは既に三十を過ぎてゐました。あれから、もう十幾年と經つてゐます。流浪の女を思ふたびに、私はいつもあなたの寂しい、しかし輝いた顏を思ひ出す。大きな欅の木の下にあつた家に私と他二三の者があなたの世話になつてゐた。私が國へ歸つて結婚をして、出て來てからも、あなたの世話になつたことを忘れません。

其のうちに、あなたは何處へか行つてしまひました。私等は町から町へ越して移りました。而してこの世間の苦しい經驗にも觸れて來ました。あの時分、若か

つた妻はもう年を取つてしまひました。私の青春も去つてしまひました。たゞ時々私等はあなたのことを思ひ出して語り合ひます。而して、其の當時住んでゐた長屋と、木の下にあつたあなたの家とを思ひ出します。

けれど、いよ〳〵この手紙をあなたに宛て書くといふ氣持になつたのは、つい昨夜のことでありました。しばらくこれを聞いて下さい。同時に私の目下の生活をお知り下さい。

私は頭を押へ付けられるやうな重苦しい氣持をたび〳〵經驗しました。するとつい四五日前から、黄色な臭ひのするものが下つて來ます。いよ〳〵腦の一部分が傷んで、其處から出て來るものと思ひ、何か効く寳藥がないものかと考へて見ましたけれど思ひ出せません。臭素加里や、健腦丸などいふものは是迄幾たびも用ひたことがありますけれど、其れ位では役に立ちさうもなく思はれました。もつとも私程醫者の處へ行くのを嫌ひなものもないと見えます。しかし今度は見てもらはなければならぬやうな氣がしましたので出掛けました。其れにしても、大きな玄關を張つて看護婦の幾人もゐるやうな處へ行くのは厭なので、直ぐ近所の小さな醫者の家に行きました。

「これは腦ではありません。鼻が惡いのです。もうずつと古くから惡いやうです。五六年は間違ひなく經つてゐます。もつと以前からかも知れません。腦が惡いと言はれるのもこれが原因です」と醫者は言ひました。

其時、私は隨分長い間からの神經衰弱の徴候や、氣持の鬱し勝ちになることや、腦の痛むことなどを

思ひ出して、

『子供の時分からではありませんでせうか』と醫者に聞きました。

『或ひは、さうかも知れません』と醫者が答へました。

醫者は私の鼻を洗つてくれました。而して、これは自分の專門外の病氣だから、もし罹つて手術を受けるなら、其の醫者を紹介してやると言ひましたけれど、其れには暫らく入院しなければならぬと言ひましたので、私は躊躇しました。

『藥て癒らないでせうか』と私は問うて見ました。而して、出來るものなら、他の醫者へは行かずに、この醫者で治療をしてしまひたいと思ひました。

『二月はかゝらうと思ひます。しかし、二月もお洗ひになつたら、多分癒らうと思ひます。何れにしても根治といふことは困難でご座います』と醫者は言ひました。

なぜ私は良醫にかゝつて、早く癒さうとは思はないでせう。自分にも分りません。たゞ大きな病院に行くといふことが嫌ひなのです。すべて堂々とした處へは行くといふことが病的な程嫌ひなのです。殊に大きな門を入り、大きな玄關の下に入るといふことは死よりも嫌ひなのです。私は大きな店て物を買つたことは稀れてす。また大きな料理店て物を食べたことはありません。どうしても止むを得ざる場合の他は、小さな店に行きます。其の方が氣が置けなくて、すべてが神經に柔かに觸れます。

今年はどういふものか、私の好きな夕立といふものが少なかつたのです。昨日は珍らしい大きな雷が鳴つて、凄まじい夕立が來ました。其れて路の上が奇麗に洗はれたやうになつてゐます。色々な小石が

頭を出してゐます。醫者の處から出ると、私は足許を見詰めながら考へて來ました。いかにも毎日これから二月ばかりも通ふといふことが辛棒出來さうにも思はれなかつたのです。いつそ入院して、早く治療を受けたものかとも思つて見ました。仰いて、青々とした大空を眺めて、思ひ切つて深い呼吸を試して見ますと鼻の通りがよくていかにも樂に出來たのです。始めて、大空の下で自由に空氣を呼吸することが出來るといふ氣持がしました。

曾て、自分にはかういふ生活を送つてゐた時があつたのだ。其れがいつしか知らぬ間に呼吸を狹められて、重苦しい氣持となつて、其れに氣付かずに日を送つて來たのだ。今漸く分つたといふやうな感がいたしました。さう思つて、この世界を見ると急に明るく、今迄になかつた晴々とした氣持がいたしました。まづ當分、この醫者に通つて見やうと心に決めました。

二

私は家に歸つて、二階に上つて机の前に坐つた時、妙なことを思ひました。

其れは生れ付き、自分といふものは快活て、明るい質の人間であつたかも知れない。けれど長い間陰氣と暗い感じといふものに慣れて來た。言ひ換へれば、長い間、病氣が自分の體に宿つてゐて、性質や氣分を暗いものとして、自分はいつしか其の暗い世界を故郷とするやうになつてしまつた。自分の書く物てさへ、この色彩や、氣分が一種の特色となるやうに至つたと思ひました。しかるに今其の病氣が癒ると共にこの世界からも別れて、急に明るい世界に出たとしたなら、自分はすべて物を觀察したり、考へたりする上の調子が狂つて、惑はないと限らないと思ひました。さう思ふと何となく不安を感じずに

はゐられません。

「やはり、この儘、醫者に罹らずに投つて置かうか知らん」と自分で考へました。

しかし、此頃の體に疲れを覺えることは一通りでありません。物を書いても、また讀んでも直に厭きてしまつて、無理につゞければ頭が痛んで來て、臭ひものが下りて舌の上に溜ります。何うしても此の病氣を癒さなければならなくなりました。

私は机に向つて、鼻を氣にして、呼吸をして見ますと、はやいつの間にか鼻の孔が塞つてゐて、自由に空氣が通りません。私は何となく心がもどかしくなりました。而して、果して、十年も、もつと前からの痼疾が醫者の力で癒るものであらうかと疑ひました。から考へると健全であつた、子供の時分のことが思ひ出されました。而して、二たび新たに生れ變つて來るのでなければ、其のやうな活々とした明るい、樂しみに滿ちた世界が見られないのだと思ひました。さながら、既に死んで行く者のやうに、この世界が暗く、自分の體も處々朽ちてゐるやうに覺えました。私は、此時自分の年を思ひ出しました。もはや生れてから、此處に來たまでは、この先き生きないのであります。獨り私ばかりでない。すべての人が、何等かの病ひを抱いて、其れが癒らずに死んで行きます。私の病氣などは、生死に關係あるものではありませんけれど、また恐らく、死ぬまで、もはや癒らずにゐるものゝ一つでありませう。

あなたは、私があの頃から、たへず頭が痛いと言つてゐたのを覺えてゐて下さるでせう。私がさう言つた時に、あなたがさも思ひ遣り深く眉を顰めて、私の顏を見られたのをよく忘れずにゐます。あの頃のあなたは尙ほ美しうご座いました。其の後も、私は暗い、濕つぽい風の吹く日などに頭が押へ付けられ

ふやうに痛んで、しかも氣持が重苦しくて、氣が狂ひさうに思つたことも、若しまたこんな厭な氣分が一日や、二日で癒らずに、かうして長くゐなければならぬなら、自殺した方がいゝと思つたこともありました。昔から、私は外界の刺激に敏感であります。ある時は、もう行く途が盡きて、灰色の空に打突かつたやうな絶望的な氣持になつて、この人生も、自然も、悉く白ちやけて、色の失せたやうに思ひ込むこともありました。これ等が悉く鼻の病氣が原因してゐると思はれないこともあります。

今年も、秋が老ける頃となりました。日の光りも弱くなりました。今はちやうど日の暮れる少し前です。この二階の窓からは町の家根を見下すことが出來ます。一様に瓦葺の家根の上が光つてゐます。遠くの建物は西日にうす赤く彩られてゐます。私は太陽の光りを仰いで思ひました。やがて奈落の闇に落込んでしまふものを、其れとも知らぬ顔にまぢ／＼とした顔付きで、此の世界を照らしてゐる。其れが何となく哀れなやうな氣がしたのです。また、やがては黄色く朽ちて、冷たい地面に落ちてしまふ木の葉が其れとも知らぬ顔に、日の光りを浴びて、きら／＼と風に吹かれて笑つてゐるのが何となく可憐らしく思はれました。

すべてのものが運命に對して、全く無智である。死の前に、闇の前に、刹那の享樂に耽つてゐるのだと感じました。殊に人生の短かい命數を考へて、私の心は暗くなりました。しかも其の短かい一生を常に心をおびやかされながら、不安に戰きつゝ送らなければならないのであると思ひました。

かういふことを考ふる時に、私は必ず年老つた母のことを思ひます。これから北國の海は日々に暴れ狂ふばかりです。空が暗く、濁つて、高い山には雪が來る頃です。私は枯木の梢が北風に鳴る山の麓で、

煙出窓の戸を閉めて、今宵、微か霙の來るらしい、外の寒い木枯の音に耳を欹てゐる、年老つた母の姿を思ひ出しました。自分はまだ若い。體力は病魔と闘つて、尚ほ久しく、抵抗することが出來る。けれど、母は明日のことも分らない。かう私は思つたのであります。

『この月の金を送らなければならない』と私は自分に言つて、無意識に机の前から起ち上つて、室の裡を歩き廻りました。頭の亂れた時、心の悩ましい時に、私は體を落付けることが出來ずにかうするのが習ひてありました。

私はもう幾日か、かうして机の前に坐つてゐながら、書く氣になれないのであります。半日、一日、終夜、頭は疲れて痛みを覺え、心苦しく、氣が焦々として、其れで書けないのであります。これが書き上つたら、其時、母に送金することが出來ると思つて、其の日の來るのを待てゐますけれど、其れが何時のことやら、非常に遠い未來のことのやうに思はれて、紙の面に目を落して絶望してゐます。

『今夜、何處かへ出て、少しばかり工面をして來やう』と私は自分に言つて、其れて今日は書くことを見合せやうといたしました。一日でも、一時間でも、かうして筆から身を脱がれることが、どれ程、目下の疲れた私にとつて消極的の慰藉になるか知れません。どうしても、一度は書く處までは、書かなくては、心の義務が濟まされないと知りながら、やはり仕方なしに一寸脱れに逃げてゐるのであります。私は机から體を少し離して、疊の上に臥轉びました。眼が落窪んで、頭が知覺ないやうな心持がいたします。而して、厭氣に滿ちた欠をつゞけていたしました。

もう、日が西に沈むと見えます。最後の赤銅色の光線が木立の葉を染めてゐます。

三

私は、今M町に住んでゐます。あなたはこの町をご存知のことゝ思ひます。

ちやうど町の祭日で、外へ出ると賑かでご座いました。赤い提燈が吊下つて、旗などが軒々に立てられてゐます。女や、子供が着飾つて往來を歩るいてゐます。平常から人通の多い街の往來が一層雜沓して見えました。もはや、遇ふ人の顏色が、燈火の光りを借らなければ、はつきりと分らん時刻でありました。私は歩きながらも、やはり鼻の病ひが氣になつてなりません。出來得るものなら、早く病氣を癒して、より豐富にこの人生を樂しみたいものであると思ひました。此時、頻りに號外を賣つて歩るく、鈴の鳴音が聞えました。今日も既に二三度も號外が出たので、あまり其の記事に付いて知りたいとも思ひません。戰爭が始つてから、毎日この鈴の音を聞かない日とてないのです。

私はもはや毎日の新聞を開いて戰爭の記事を讀むことに飽きて來ました。單に飽きたといふのでは私の心持が言ひ現はされない。寧ろあまり痛々しさに見ることが忍びなくなつて來ました。私も、人も、同じく生きてゐるといふことに變りがない。感情、神經、生命、すべての人間が持てゐます。而して、其の人々には兄弟、姉妹、兩親、友達があります。而して、同じくこの一生を幸福に送りたいと希つてゐます。今、其等の人々が日々戰場に於て幾千、幾萬となく、血を流して酷たらしい死方をする有樣を見て、この記事を讀むことに堪へられなくなりました。世間で悲壯とか、雄壯とか言つてゐることがあまりに冷酷で、無責任で堪へることが出來なくなりました。

戰場は冬景色　呈してゐる處もあると言ひます。鈍色に曇つた、雪催ひのした空の下で、寂寞として

荒れ果てた曠野の上に、屍が堆く重なり、折れた劍や、壞れた大砲などが空しく、どんよりとした光線を受けて横はつてゐる光景を想ひ見ては、身慄ひを禁ずることが出來ません。

自分は、かうして兎に角平和な日を送つてゐることが出來る。しかるに同じい人間が此日血を流して、地球の一角で戰つてゐる。其れを考へることが既に不思議のやうな氣がいたされるのであります。

子供の時分、西の方へ行けば、其處に明るい文明な國があると聞いてゐました。而して、つい最近、二三ヶ月前に至るまで、私の頭には、海を越えて西の國へ行つて見たい。巴里はどんな處だらう。ウキインはどんな處だらう。またレムブラントの產れた國や、其の繪畫にある風景に憧がれてゐたのです。しかるに今は全く西の國は眞暗な闇の如くに思はれます。而して、二たび舊の平和な、明るい國になるのには長い間のかゝることゝ思はれます。私の短かい一生の間にも起る、さま〴〵な人生の變動、其れについて考へ、惱みます。私は、一生其の西の國を見ずに死ぬかも知れない。

眞に秋景色であります。街には、美しう火が點つてゐます。乳色の白い靄が下りてゐます。遙か南の方の空の色が、葡萄色に、僅かばかり紫色がゝつて、明日も天氣だといふことを知らせ顔に見えます。

私は默想に耽りながら歩いて來ました。ある電信柱の處に黑くなつて、人影が五六人も集つて、其の柱に貼られた號外を見てゐました。私も其處に寄つて、其れを見ました。要塞攻擊に加はつた我が少尉と三人の兵士が戰死した報知てありました。

私は其の三人の兵士を憐みました。將校もまた無名の兵卒も同じい人間だからであります。而して、誰れも我が屍を曠野に横へんがために此の世に生れて來たものは一人もないのだと思ひました。すべて

が自分の力を超越した運命に支配されてゐるのを悲しみます。自我は絶對に自由なるものでない。社會の力に屈しなければならない。人間の無智は、全く暗黒の未來の前に戰かなければならない。永劫に比して、數にもならない人間の一生ですら、尙ほ恐怖と不安に滿ちてゐることを思ひました。私はこの三人の故郷の村の夕暮方の景色を思ひ浮べました。家族の者は、暗いランプの下で息子の消息を待つてゐるでせう。若しくは夫の安否を氣遣つてゐるでせう。裏の高い木立に風が當つて、鴉はこの秋の暮方の愁しみに傷んで啼きつゞけてゐる、窓の處で、小供等を相手に何か話してゐる貧しげな女の姿も思ひ浮べられます。此時、私はレムブランドの此種のエッチングを思ひ出してゐました。

　私は電車に乘るために、明るい町の坂を下つて來ました。坂の下に三十ばかりの貧しげな女が、脊中に乳飲兒を負つて夕刊を賣つてゐました。私は袂を探つて、一錢銅貨を出して一枚買つて、其れを懷の中に入れました。電車に乘つてから、ゆつくりと讀む考へでゐました。街の中を通つてゐる電車は大概混み合つてゐる上に速力も遲いので、郊外線に乘つて目的地に行くことにいたしました。濠端に來て、水の上を見ますと町の火が美しく映つてゐます。また走つてゐる電車の灯が、流星のやうに青黒い水の面に尾を曳いて、消えて行きます。私はしばらく立止つて、この都會のどよめきを聞き、夜の街の景色を望見しました。日が全く暮れて、何處にも、彼の夕暮方の空に眩ゆかつた、幻影の名殘りが盡きてしまひました。

　私は寂然とした、崖の下にあつた郊外線の停車場にやつて來ました。其處にはガランとした待合室に赤濁つた電燈の火が點つてゐました。其の火は賴りなく四壁を照らしてゐます。同時に眠むさうな顏付

きをしてゐる驛夫の顔を彩つてゐます。私はゴト、ゴトと下駄を鳴らして階段を上り、橋を渡つて、彼方側に降りて、ベンチに腰を下して、沈默に首垂(うなだ)れました。

　街頭から送るどよめきは、其處まで聞えて來ました。ちら〳〵と半ば枯れた木立の間を透して、壕端の火が見えて來ました。私はこの時、この街に住む人は、一度は老ひて、死んで行く。けれどこの街はやはり永久に賑かで美しからう。新時代の男や、女がこの街を歩くであらう。死後のことを考へるのは全く無意味なことである。自分は、短かい一生を樂しまんがためにかうしてゐるのである。明日のことを思ふまいとも考へました。

　五六間隔てた處にシグナルの青と、赤の、二つの火が魔物の眼球のやうに闇の裡から此方を見詰てゐます。私は、また其の火を見詰てゐました。下の線路の一部分が、血に染んだやうに赤く彩られてゐます。私は其處に眼を移しました。而して心て、かういふ狂的な自然を見ることを喜びました。私は必ずしも孤獨を悲しまない。而して、美といふものは、どんな處にも伏在するものだと思ひました。容易に時が經ちました。やがて電車が走しつて來て、眼の前に止りました。

四

　私は硝子窓を開けて、其處から外の方を覗きました。闇を四角に切り拔いたやうに窓が見えました。外には寒い風が吹いてゐます。電車は走りました。賑かな明るい祭りのある町の火が次第に遠ざかりました。大空に閃々として星の光りが震へてゐます。黑い雲が半分空を隱して、夜の中(うち)にも天氣が變りさうに氣遣はれました。線路の通つてゐる兩方の草むらの中から、虫の聲が亂れて來ます。もう霜に痛んで、

何となく、其の虫の聲が哀れに弱つて聞えて來ました。

此時、私はまた故郷の夜を思ひ、淋しい山の麓の家に獨り住んでゐる年老つた母のことを思ひました。而して、もう其れについて深く考へ、いろ／＼の妄想をめぐらすことに堪へられなくなりました。すべての者の死を思ふ時、私の頭は混亂し、眼が暗くなるからであります。

私は懷の中にあつた新聞を取り出しました。而して、其れを開いて讀む前に、一應車室の中を何の氣なしに見まわしました。夜のこの電車は空いてゐました。前側に十八九の女が腰をかけて茫然とした顏付きをしてゐました。其の女の穿いてゐる白い足袋がくつきりと浮き出てゐるやうに、私の眼に止りました。けれど、其れ以上のことを考へませんでした。また、彼方の隅の方に、制服と制帽を付けた二十前後の學生が居眠りをしてゐました。晝間の運動に疲れてゐると見えます。私は其活々とした血液の通つてゐる頰の邊りを見て、何となく未來に青春の長きこの學生を羨まずにはゐられませんでした。あゝ、自分もあの年であつたなら、愉快で、大膽で、自由であらうのにと思ひました。而して、まだ漸く三十を越へたばかりであるのに、既に何となく彼等とは異つた世界に葬られて行くやうな氣持すらせられたのであります。かういふ悲觀に趣くのも、全く私の體が健康でないからのことでありませう。しかし、果して私の宿痾といふやうなものが、癒るものでありませうか。人間は一度體の何處かを害ねたなら、終生癒らないものゝやうに思つてゐます。

私は、漸く新聞に眼を落しました。戰爭は益々悲慘に、益々深刻になつて行く樣子であります。私は熱心に電報欄に眼を晒らしました。背後の開いた窓から、頻りに寒い夜風が吹き込んで來ます。私は變

たびか身を起して窓を閉めやうかと心に思ひましたが、其れをするのが物憂くもあつて、其儘、寒さを堪へて新聞を見てゐました。

あ！ と私は驚きました。而して、新聞を下に置きました。

なつかしい私の姉とも思ふあなたよ！ たとへ日頃、私はあなたのことを思つてゐましても、もしこの新聞の記事を讀まなかつたなら、やはり、あなたに手紙を書くといふ氣持にはなれなかつたであらうと思ひます。何となれば、別に言ふこともなかつたから。しかし、この一事は遂にあなたに手紙を書く氣持にさせました。

しばらく、あの當時のことに思ひを返へして下さい。

私供は二軒つゞきの小さな長屋に住んでゐました。家賃も極めて安かつたやうに覺えてゐます。そんなやうな長屋が裏にも一棟ありました。其の方の長屋の片方に私供の家主が住んでゐました。あなたは其の家主をお覺えになつてゐますでせう。あの時分私はある新聞の夜勤記者をしてゐまして、幾何も月給を取つてゐませんでした。妻はまだ世帶になづまないで、何かに付けて家の内は面白くありませんでした。たゞ、あなたが毎日のやうに來て、いろ〳〵と世話をして下されたので、どれだけ心を休め、助かつたか分りません。今でも、あの新開地の景色が眼に浮んで來ます。殊に一本の大きな欅の木がありました。夜になると北風が當つて、さわ〳〵と鳴音を立てます。戸口に出て見ると、木影が黒く浮き出て、黒い天蓋を吊したやうに見えました。青黒い空の肌が、裸にしたやうに露はれて、美しく無數

の星が輝いてゐます。其の時分、彼方の馬丁の家の障子窓が明るく見えて、若い女房の頭髪(かみ)がほんのりと映つてゐたこともありました。――これは、こゝでは餘計な話です。

あなたは、私供の家主のことをお忘れになりはしないと思ひます。あの毎朝早く、兵隊帽を被つて、辨當箱を下げて、砲兵工廠に通つた男を覺えてゐなさいませう。何んでも、戰爭に行つて來たので、其の賜金を本にして是等の家作を建てたと聞いたと思ひます。兎に角在郷軍人であつたらしい。女房といふのは、青い顔をした肥つた女でした。而して、乳飲兒が一人あつたと思ひます。いつも私供の起きる時分には、もうとつくに起きてゐて、朝飯も濟んだらしく、雨戶を開ける時分には、垣根の外を通つて、男が例の兵隊帽を被つて、脊を少し前に曲(かゞ)めて出て行く影を見たので、私供は實に彼等のきまりのいゝ生活を思はずにはゐられませんでした。

「金を溜める者は違ひます。あゝして勤めてゐて、また毎月幾何づゝかの家賃が入るのだから生活は樂に違ひない。あゝいふ人がしまひに金を遺すのですよ」とあなたが言はれたことがありました。

私供も、またさう思つてゐました。私の記憶には、あり〳〵と其の夫婦の者の姿が殘つてゐます。私が其の男を始めて、しみ〴〵と見、また話をしましたのは、男が休みの日に私供の庭に二三本の植木を移してくれた日でありました。極く無口な、人の好い人間のやうに思ひました。其れがまた私がこの男と話をした最後の日でありました。

五

私は下に置いた新聞を取り上げました。眼は二たび社會欄の二號見出しの黑い活字の上に落ちまし

た。其れには、「哀れなる生活難の犠牲」と書いてありました。而して、小見出しに四號活字で、「女房を見殺しにするが辛さに轢死」と書いてありました。言ふまでもなく、これが當時の私供の家主——あの男——のことでありました。私は間違ひてはないかと思つて、再三其の記事を讀んで見ましたが、番地も同じければ、姓名も全く同じでご座いました。記事にはかう書いてあります。

「……驛員は警官と共にカンテラに點々たる肉片を辿りて現場を臨檢せるに線路傍(せんろわき)の草露に涙が濕れし砲兵工廠職工手帳を發見し轢死者は——と判明せるが働き盛りの身を以て何故の自殺ぞと其家を訪へば、曉の風うす寒きに薄布團に病弱の身を横へし妻はそれとも知らで待明したる哀れさ、聞けば妻は兼て不治の業病に惱まされ其日々々の藥の料にも差支へ居る矢先き亭主は先頃砲兵工廠を罷められ厘毛の收入もなく、このたびの戰爭にてある者は復職の沙汰ありたれど、其の中にも洩れ全く生活難の極致てこの無慘の自殺を遂げたる次第なりと」

これが、S新聞の記事であります。昨夜、即ち十月六日の夕刊、S新聞をご覽下されば分ります。あなたは格別これに對してお心を驚かしなさりはなされませんか。

最も、私は何となく心持が沈んでゐました時であり、其れに生其の者の賴み難さことを考へてゐました際でありましたから、人一倍心を動かしました。而して、もうあの頃私供の住んでゐた長屋は壞れかけて、もつと安い家賃でゞもなければ借りる人がなからうといふことも思ひました。

かやうに自分を離れた他人の生活は知ることが出來ない。今頃、あなたは何處にどうしておゐでになりませうか。私は其れを知りたいと希つてゐます。ついてながら、其の日のことを書きませう。而して、

目下私がどんな生活をしてゐるかお知らせいたしませう。

電車が某停車場に着いた時、私は下車いたしました。其の停車場のあるところは郊外の淋しい處でした。たゞ獨り寒いガランとした敷石の上を歩いて、出口の方に向ひました。線の古くなつた、赤味がゝた電燈の光りが悄然とした私の影を敷石の上に落しました。私はこれから行かうとする知人の顔を眼に描きました。

この停車場に下りたものは、私一人ぎりでご座います。驛夫が物憂さうに私の手から切符を受取りました。一歩暗い裡に出ると、線路の傍で燃やしてゐる篝火が、赤黑い焔を上げてゐました。其の周圍に三四人の土方が蹲踞つて、話をしてゐます。彼等の顔の上に、汚れた着物の上に焔の光りは彩つて、さながら野蠻人が其處にゐる如く見えました。私は太古の生活を思ひ、未開時代のこの地球の上の光景を想像いたしました。仰ぐと大空には降るやうに星影が燦爛と輝いてゐました。而して、木枯が身を切るやうに寒く吹いてゐました。

『もう、冬だ』と私は身を竦めて、獨りつぶやきました。而して、暗い、寂然とした淋しい町の方へ歩いて行きました。後には彼の篝火がちら〳〵と闇を照らしてゐます。私は其れを振り返つて思ひました。いつかKを訪ねた時も、寒い日であつた。而してあのやうに土方が篝火を焚いてゐた。其間に幾多の月日が流れた。春が行き、夏も去つた。また其の頃の時節が來たのである。自分には、あまり變化もなかつたやうであるが、Kは新しく妻を迎へた。彼はよく私に同情をしてくれた、生活について打明けたたゞ一人の友であつたが、其後は、あまり往來をしなくなつた。其れは何人にも打解けない私の性質

が、自然Kの妻君にも氣乗を感じて、行かなくなつたのであると思ひました。

私は、まだ宵の口から、さながら死んだやうに默つた、暗い、あまり人通りのないこの郊外の町を歩きました。既に戸を閉してしまつた家もあります。また暗いランプを下げた店もあります。其の中でやゝ明るい火を道の上に送つてゐるのは、酒と薪炭などを賣つてゐる店でありました。

私は曾て行き慣れた道でありながら、たび／＼闇のために路を迷ふといたしました。而して漸くKの家へ着きました。家の中は温かさうに明るうご座いました。皆んな起きてゐる様子でご座いました。私は玄關に立ちました時に、今日は平常と異つて頼みがあるのだと思ひますと何となく氣が臆して、大きな聲で訪ねることも出來ないやうな氣持がいたしました。私は嚴肅にしかしおとなしく案内を頼みました。Kは直に私の聲を聞き分けて、内から、

『よく來たね。さあ上りたまへ』とさも懷かしげに言つて、直に共處へ現はれました。

彼に導かれて、書齋に通つて、彼と對ひ合つて坐りましたが、互にしばらく過はなかつたのと、其れに彼が妻を迎へてから家の様子が大分變つたのとで、自然、昔のやうな打解けた態度にもなれず、改たまつて言葉を交へるやうな様子でありました。同じいやうな心持は彼の心にもあつたやうに思はれました。私は直にやつて來た理由について、友に打ち明けてしまふかとも努力いたしましたが、どうも其れが口に出し難く、もぢ／＼といたしてゐました。私は先づ、目下頭の具合が惡くて筆の取れぬことや、鼻が惡くて醫者にかゝつてゐることや、來る時でも電車の中で眼が暈つたことなどを幾分か誇張してゐると自からも後めたく感じながら、彼に訴へるやうに話しました。而して、尚ほ、故郷にゐる母のこと

について言ひ出さうとする前に、私は鋭く彼の顏色を見ました。

Kは、大抵私の今夜こゝにやつて來たことについて悟つた樣子に見えましたが、强いて、知らぬ風を裝つてゐるといふ風にも見えました。而して、よく世間の交際家が通り一遍の同情をして見せる樣に、「成程」とか、「其れは、」とかきまりきつた返答に妙なアクセントを付けて聞いてゐるのであります。

私は、彼の他しい顏を睨んで、何となく傲慢氣に見える横面を「この馬鹿野郞」と言つて、擲り付けてやりたいやうに思ひました。同時にこんな奴の前で、母のことなどを言つてなるものか。――私は母のことは餘程の嚴肅な心にならなければ口に出したことがない――なんて、己は此男に向つて、少しでも賴むやうなことを言はうとしたらうと思つて、話を止めてしまひました。

『苦しいのはお互ひだよ。まあ久しぶりに遇つたんだ。一杯飮まう。』と友は言ひました。

私はこれが昔の眞實のあつた友であるかと疑ひました。人間は結婚すると、かうも墮落するものかと思ひました。其時、其處へKの妻君が着飾つて、澄して入つて來ました。私はこの女に頭を下げてゐる間も、卑下せられてゐるやうな不快な感じを經驗いたしました。妻君は其處へ果物の載せてある盆を持つて來ました。而して、Kと私の間に坐つて、ナイフを取り上げて皮を剝きかけました。其時、『オイ、酒を持つて來んか。而して、何か出來ないか』とKは何となく妻に氣兼ねするやうな眼付きをして、相談するやうな調子で言ひました。

彼女の顏には、たしかに迷惑さうな、不快氣な色が動いたのを神經質な私はなんて見脫すやうなことをいたしませう。而して、心の中で、あゝ友もやはり世間なみの亭主の一人になつてしまつたと思ひました。而して、たゞ何となくこれを悲しむと共に自分の孤獨が益々感じられました。彼は多額の月給を

取つて、常に餘裕がある筈てあつたのてす。

私は直にも歸らうかと思ひましたが、久しぶりに來た舊友の處てはあり、其の中に酒も出ましたのて、つい面白くなくも夜を更してしまひました。

あなたは女てす。其のあなたに對して、女といふもの丶不平を洩らしますのもおかしいことてすけれど、眞にあなたゞけは別にして下さい。私は常に獨りKのみに限らず、友人の家へ行きまして、友が妻に氣兼ねをしたり、怖れてゐたりする風の見えますのを非常に痛ましく感じます。時には非常に不快に思ひます。中には、眞に自分の女房に惚れ、いゝ氣になつて、其れを一種の見えにしてゐるやうな者もゐますけれど、其れは例外として、家庭の中心てある女が、眞に趣味を解せざるために、靈を感ぜざるために、無智なるがために、階級的思想があつて、虚榮を喜ぶがために、無形の事實は分らず、たゞ物質的てあるがために、いつしか男を壓伏して、表向きは柔さしさうな顏をして白粉を塗つてゐるけれど、陰には傲然として構へてゐる風が、事毎に覗はれるのを見て、私はかゝる友に同情して女を惡まずにはゐられません。由來女といふものは、遂に精神的たること能はずとまてに考へることもあります。其れてすから、私は友は好きてあつても、妻君を好かないために行かない家もあります。先づ十中九まて友の妻君に好きな人間がありません。けれどこれは、私の直覺に過ぎなく、癖見に過ぎなくして、此方から打解けて話をしたら、互の感情も通じて好きになるかも知れないが、私には其の雅量のないのを遺憾に思ひます。

夜遲く、遂に私は要件を言はずにKの家を出ました。途中、闇の中をさ迷ひ歩きながら、Kは好きだが、妻君は嫌ひだと思ひました。いくら彼が俗化しても、舊友は舊友て、矢張彼を憎むことが出來ません。

外の寒さで、醉うた程でもなかつた酒の氣が全く醒めてしまひました。行手にぼんやりと明るく停車場の火影が見えます。私は鐵橋の下まで來ました。而して、ふと歩みを止めた程頭に暗い思ひが浮びました。同時に今迄忘れてゐた懷の新聞を探りました。先刻見た轢死の記事が目に浮んで來ました。

私は、今私自身のことしか考へてゐません。今頃、あなたは何處にどうしてゐられるか知らない。また男の死んだ後、女はどうして此の寒い夜を病床で思ひ暮らしてゐるかも知ない。しかしいろ〳〵の人々が、異つた思ひ、苦しみに一日、一日を送つてゐるのが、この人生であります。私は、今夜友の處を出て、不快な思ひをして來ました。而して、もう決して苦しい時でも、救ひを他に頼むものでないと思ひました。自分は自分で生き、而して死ぬのだと思ひました。覺えず冷たい石の壁に脊を凭せて、男が轢死を企てた時分の心理を探らうと試みました。而して、暫く瞑想に耽つた後で、自分でから叫びました。

『己は、いくら困つたつて自殺をしない。』と眼を見張りました。また、太陽が明日の朝上る時には、この死んだやうに寂然とした頭の上の鐵橋をごろ〳〵と荷馬車が幾臺となくつゞいて通り、黄色な埃が道の上に起つて、其處に喜びも、悲しみもある世界の活動が新たに始まるのだらうと思ひました。

私は、僅かにかう考へて、新たな戰鬪といふことに力を得ました。而して、今夜はこの疲れた體を一刻も早く家に歸つて休ませたいと思ひました。

停車場の中は、墓場のやうに靜かであつた。私は急いで、出札口に行つて、切符を買はうとしますと、

『何方へです』と其處にゐた驛員が問うた。

『G驛まで』と私は答へました。

『其の方へ行く電車はもう止まりました』と驛員は、さも全く利害について無關係な言葉付きで言つた。

私は、茫然として、暗い外を眺めました。——一九一四、十作——

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
仝　神田區裏神保町　上田屋
仝　京橋區尾張町　東海堂
仝　京橋區元數寄屋町　北隆館
仝　京橋區西紺屋町　良明堂
仝　日本橋區本石町　至誠堂
大阪市北區梅田町　盛文館
仝　東區京町堀　太華堂
仝　東區瓦町　東枝支店
京都市七條停車場前　三共社

○定價　金貳拾五錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數／區別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號（本年度に限り三倍）春秋二期附錄號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十五冊（本年度十六冊）分の割合なれば一ケ年分御註文の方は內國は金參圓七拾五錢（本年度金四圓）外國は金五圓貳拾五錢（本年度金五圓六十錢）拂込まるべし

送金注意

一誌代郵稅　は一切前金とす、金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替　にて御送金の場合は本郷西片町十番地中央公論社と指定し拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取の虞なし
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵券代用　必ず一割增の事
一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄　金五錢
　一金三圓迄　金六錢
　一金五圓迄　金七錢
　（集金委託料及送達料共）
一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正三年十月廿九日印刷納本
大正三年十一月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本鄉區駒込西片町十番地
中央公論社
電話下谷九一九九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.

Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可
大正三年十月廿九日印刷納本

中央公論十一月號（第二十九年第十二號）

MADE IN JAPAN